

大宰府史跡発掘調査報告書 II

平成13・14年度



2003

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書 II

平成13・14年度

2003

九州歴史資料館



第187次出土遺物

- (1) ガラス容器
- (2) 長沙窯黄釉褐彩水注
- (3) 緑釉香爐蓋
- (4) 越州窯系龍文青磁奩



1



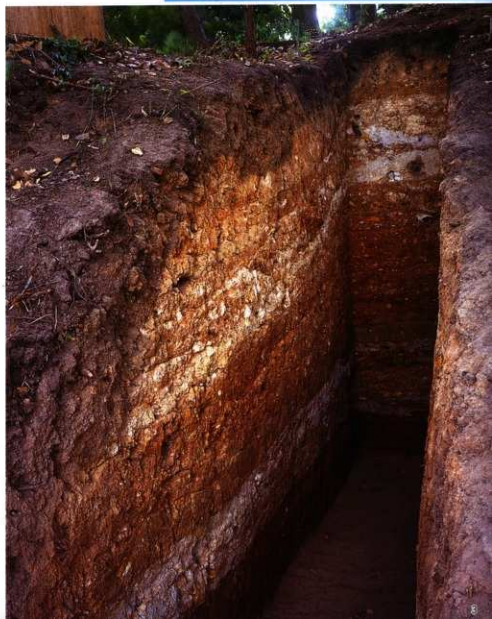
2



3

第187次出土遺物

- (1) 長沙窯黃釉褐彩水注①
- (2) 綠釉香爐蓋
- (3) 綠釉蓋



- (1) 長沙窯黄釉褐彩水注②
- (2) 第187次調査区全景
(空中写真) (南から)
- (3) 水城跡第33次調査
土層断面 (南東から)



- (1) 水城跡第35次調査区
全景（空中写真）（北東から）
- (2) 水城跡第35次調査
A区北壁土層・敷粗朶



序

本書は平成13・14年度に実施した大宰府史跡及び水城跡の発掘調査について報告するものであります。その内容は、大宰府政庁前面の官衙地区の調査2件、水城跡西門南東側、同じく水城跡東門寄りのいずれも水城土塁南側テラス面の発掘調査の成果であります。これらは第6次5カ年計画の第5年次、及び第7次5カ年計画の第1年次の計画に基づく調査であります。

これらの調査内容のうち、特筆すべきは、大宰府政庁前面の不丁官衙域が従来の知見より更に南側へ拡がること確認され、出土遺物も輸入陶磁器の優品や西アジア産のガラス容器片など重要な官衙域にふさわしい様相が認められたこと、水城西門跡寄り新たな木礎埋設部位が推定できたことであります。また、水城瓦窯群の上の段に瓦製作にあたったと考えられる作業工房跡が見つかったことも大きな成果です。

本書が大宰府史跡研究の一層の進展のために少しでも寄与でき得れば幸いです。

最後に、発掘調査にあたっては大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁、太宰府市教育委員会、大野城市教育委員会、さらに地元の関係者各位に多大なる御指導と御協力を頂きました。記して謝意を表します。

平成15年3月31日

九州歴史資料館長 森山 良一

例 言

- 1 本書は、平成13・14年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館にて実施した大宰府史跡発掘調査の記録であり、大宰府史跡発掘調査報告書の第2集にあたる。
- 2 本書には、第6次5カ年計画に基づき実施した第186次調査、水城跡第33・35次調査、第7次5カ年計画に基づく第187次調査、さらに安養寺地区の災害復旧に立会した第185次調査、平成10年度の観世音寺駐車場横の側溝工事立会調査の各成果について収録している。なお、本年度計画の第188次調査(観世音寺金堂)の報告については、次年度に譲る。
- 3 発掘調査については、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 4 本書に掲載した遺構図は、国土調査法第II座標系に基づいて作成した。
- 5 本書に掲載した遺構実測図は、調査課高橋章・中間研志・小田和利・杉原敏之・岡寺良と、県文化財保護指導員高橋慎二氏が作成した。
- 6 出土遺物の実測・本書掲載図の製図作業は上記調査課員のほか、横田賢次郎・齋部麻矢・高橋佑佳・高田いく子が担当した。出土遺物の整理・復元作業は、発掘調査事務所において栗原和彦・大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝・高田雅子・井上弘子が行った。
- 7 本書に掲載した写真は、空中写真が(右)空中写真企画、その他の遺構・遺物は石丸洋及び各調査担当者による。
- 8 第187次調査出土ガラス容器片については福岡市埋蔵文化財調査センター比佐陽一郎氏に成分分析をお願いし、結果報告を頂いた。また、水城第35次調査出土敷粗朶については、葉の樹種鑑定を九州大学井上晋助教授にお願いし、枝の樹種鑑定及びC¹⁴年代測定を(株)バリノサーベイに依頼し、結果を掲載した。さらに当発掘調査現地において、九州大学牛島惠輔教授により電気探査が行われ、玉稿を頂いた。各先生方には心から御礼申し上げたい。
- 9 本書にて使用した瓦類の型式番号は「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」(九歴・2000)による。
- 10 掲載図面中、土器の断面を黒塗りしたものは須志壺であることを示す。
- 11 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I	1・2	横田賢次郎・高橋章
II	1	第185次調査 中間研志
	2	第186次調査 中間、高橋慎二(石鏝)
	3	第187次調査 #, 小田和利(土器)・高橋慎二(石鏝)
	4	第187次調査出土ガラス 比佐陽一郎
	5	側溝工事立会 横田(概要)・中間(遺物)
	6	水城第33次調査 中間、杉原敏之(縄文・旧石器)
	7	水城第35次調査 小田
	8	水城第35次樹種鑑定 井上晋
	9	水城第35次年代測定 (株)バリノサーベイ
	10	水城第35次電気探査 牛島惠輔・水永秀樹
- 12 本書の編集は、中間・小田が担当した。

本文目次

	頁
I 緒 言	1
1 調査計画と組織	1
(1) 調査計画	1
(2) 調査組織	1
2 調査経過	3
(1) 平成13年度の調査経過	3
(2) 平成14年度の調査経過	4
II 調査の内容	6
1 第185次調査 (安養寺地区の災害復旧)	6
(1) 概 要	6
(2) 出土遺物	7
(3) 小 結	9
2 第186次調査 (広丸地区の調査)	10
(1) 概 要	10
(2) 基本層序	11
(3) 遺構と遺物	11
(4) 小 結	24
3 第187次調査 (不丁地区の調査)	27
(1) 概 要	27
(2) 基本層序	27
(3) 遺構と遺物	29
(4) 小 結	76
4 大宰府史跡第187次調査及び鴻臚館跡から出土したガラス製品の材質調査	80
5 側溝工事立会調査 (観世音寺駐車場横)	83
(1) 概 要	83
(2) 出土遺物	83
6 水城跡第33次調査 (西門南東側の調査)	87
(1) 概 要	87
(2) 基本層序	87
(3) 遺構と遺物	93
(4) 小 結	125
7 水城跡第35次調査 (東土塁基底面の調査)	129
(1) 概 要	129
(2) 基本層序	129

(3) 遺構と遺物	130
(4) 小 結	134
8 水城跡第35次調査 (特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体)	136
9 水城跡第35次調査 (出土燧粗朶 年代測定)	139
10 水城跡第35次調査 (電気探査)	148

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図(1/5,000)	折込
Fig. 2 第185次調査区位置図(1/1,500)	6
Fig. 3 第185次出土遺物実測図(その1)(1・2:1/3, 他:1/4)	7
Fig. 4 第185次出土遺物実測図(その2)(1/4)	8
Fig. 5 第186次調査遺構全体図(1/200)	10
Fig. 6 SB4550~4552実測図(1/60)	12
Fig. 7 SB4550・SB4551柱穴断面実測図(1/60)	13
Fig. 8 建物・土壇・溝出土土器実測図(1/3)	14
Fig. 9 SB4555, SA4557・4558実測図(1/60)	15
Fig. 10 SB4553・4554実測図(1/60)	16
Fig. 11 SB4556・土壇等実測図(SB4556のみ1/60, 他:1/40)	18
Fig. 12 SD4542土層実測図(1/40)	19
Fig. 13 溝・その他のピット・包含層出土土器実測図(1/3)	20
Fig. 14 各遺構出土瓦実測図(1/4)	21
Fig. 15 各遺構出土瓦等実測図(瓦:1/4, 土製品:1/3, 石鉄:2/3)	23
Fig. 16 第186次周辺広丸地区「官人居住域」(1/400)	25
Fig. 17 広丸地区主要遺構配置図(1/1,000)	折込
Fig. 18 第187次調査遺構全体図(1/200)	28
Fig. 19 SB4560・4562実測図(1/60)	30
Fig. 20 SB4561実測図(1/60)	31
Fig. 21 SB3815・4563実測図(1/60)	32
Fig. 22 SD4566・4569土層断面実測図(1/60)	33
Fig. 23 SD4570~4572東半実測図(1/60)	35
Fig. 24 SK4573・4574実測図(1/60)	37
Fig. 25 SK4575・4576実測図(1/40)	39
Fig. 26 SX4565実測図(1/80)	39
Fig. 27 ガラス・銅製品・鈎帯実測図(1/2)	40
Fig. 28 鉄器・鋳型等実測図(1/2)	41

Fig. 29	土馬・磁石・石蔵実測図(1/2, 15~18:実大)	43
Fig. 30	第187次調査出土軒瓦拓影(1/4)	45
Fig. 31	第187次調査出土丸・平瓦拓影(1/4)	46
Fig. 32	第187次調査出土平瓦拓影(その1)(1/4)	48
Fig. 33	第187次調査出土平瓦拓影(その2)(1/4)	49
Fig. 34	第187次調査出土平瓦拓影(その3)(1/4)	50
Fig. 35	第187次出土斜格子叩き瓦(その1)(1/3)	53
Fig. 36	第187次出土斜格子叩き瓦(その2)(1/3)	54
Fig. 37	SB3815・4560出土土器実測図(1/3)	56
Fig. 38	SB4561~4564出土土器実測図(1/3)	57
Fig. 39	SK4573略褐層・黒色土出土土器実測図(1/3)	58
Fig. 40	SK4573黒色土出土土器実測図(1/3, 16:1/6)	59
Fig. 41	SK4573出土土器実測図(1/3)	60
Fig. 42	SK4574出土土器実測図(1/3)	61
Fig. 43	SK4576出土土器実測図(1/3)	62
Fig. 44	SD4566出土土器実測図(1/3)	63
Fig. 45	SD4567~4569出土土器実測図(1/3)	64
Fig. 46	SD4570A下層出土土器実測図(1/3)	65
Fig. 47	SD4570B下層出土土器実測図(1/3)	67
Fig. 48	SD4570B下層, SD4570A・B上層出土土器実測図(1/3, 44:1/6)	68
Fig. 49	SD4571・4572・3825出土土器実測図(1/3)	69
Fig. 50	その他の遺構・包含層出土土器実測図(1/3)	71
Fig. 51	黄灰色土出土土器実測図(1/3)	72
Fig. 52	墨書土器・硯等実測図(1/3)	73
Fig. 53	漆付着土器・製塩土器実測図(1/3)	75
Fig. 54	不丁官衙主要遺構配置図(1/600)	折込
Fig. 55	大宰府出土ガラスD-1の分析結果	82
Fig. 56	鴻臚館出土ガラス(緑色)K-1の分析結果	82
Fig. 57	鴻臚館出土ガラス(透明)K-2の分析結果	82
Fig. 58	観世音寺側溝工事立会い位置図(1/2,000)	83
Fig. 59	観世音寺側溝立会い出土遺物実測図(その1)(土器:1/3, 瓦:1/4)	84
Fig. 60	観世音寺側溝立会い出土遺物実測図(その2)(1/4)	85
Fig. 61	水城跡発掘調査地域図(1/5,000)	折込
Fig. 62	水城西門付近地形図(1/300)	折込
Fig. 63	水城第33次調査主要部遺構全体図(1/200)	88
Fig. 64	P-1区(上段テラス)南北方向土層実測図(1/80)	89
Fig. 65	P-2区調査区東・北壁上層実測図(1/80)	90
Fig. 66	P-3区調査区各壁土層実測図(1/80)	91

Fig. 67	SB141実測図(1/60)	93
Fig. 68	SB142実測図(1/60)	94
Fig. 69	SB143実測図(1/60)	95
Fig. 70	建物等出土遺物実測図(1/3)	95
Fig. 71	SB144実測図(1/60)	96
Fig. 72	SB145実測図(1/60)	97
Fig. 73	SB146実測図(1/60)	98
Fig. 74	SB141とSA147との関係実測図(1/80)	99
Fig. 75	SK151~158, SX148・149実測図(1/30)	100
Fig. 76	SK151・153出土遺物実測図(1/3, 瓦:1/4)	101
Fig. 77	並列土壌群(SK152~158)実測図(1/80)	102
Fig. 78	SX148・150出土遺物実測図(釘:1/2, 他:1/3)	103
Fig. 79	SD161・162土層断面実測図(1/40)	104
Fig. 80	SD160~168出土遺物実測図(30・31:1/4, 他:1/3)	105
Fig. 81	SD169・170出土遺物実測図(1/3)	106
Fig. 82	土壘南半(トレンチ10)積土状況実測図(1/60)	107
Fig. 83	木樋推定部(SX150)土層実測図(1/80)	110
Fig. 84	各整地層出土土器実測図(1/3)	111
Fig. 85	表土等出土遺物実測図(1/3, 鉄壘:1/2)	112
Fig. 86	水城第33次出土軒丸・丸瓦実測図(1/4)	113
Fig. 87	水城第33次出土平瓦実測図(1/4)	114
Fig. 88	深掘り部土層実測図(1/40)	114
Fig. 89	石器分布図(1/200)	115
Fig. 90	旧石器時代の石器実測図(その1)(2/3)	117
Fig. 91	旧石器時代の石器実測図(その2)(2/3)	118
Fig. 92	縄文期竪穴住居跡(SI159)実測図(1/40)	120
Fig. 93	縄文土器実測図(1/3)	122
Fig. 94	縄文時代以降の石器実測図(2/3)	123
Fig. 95	水城土壘における地山と積土の関係(西門跡東側の場合)(1/400)	127
Fig. 96	水城全体図概念図(1/10,000)	128
Fig. 97	水城跡第35次調査区地形図(1/200)	折込
Fig. 98	A区遺構配置図(1/150)	130
Fig. 99	A区北壁土層図・数粗出土状況実測図(1/60)	折込
Fig. 100	B区遺構配置図(1/150)	131
Fig. 101	B区土層図(1/60)	132
Fig. 102	SB173実測図(1/80)	折込
Fig. 103	水城跡第35次調査出土土器他実測図(1~6・17は1/4, 他は1/3)	134
Fig. 104	木材(1)	144

Fig.105	木材 (2)	145
Fig.106	木材 (3)	146
Fig.107	木材 (4)	147
Fig.108	水城跡の平面図(上図)及び推定断面図(下図).....	148
Fig.109	水城跡の調査地域	149
Fig.110	東門付近の水平探査曲線(ウェンナー法: a = 2m).....	149
Fig.111	地中レーダーの測定装置	150
Fig.112	地中レーダー探査の測定風景	150
Fig.113	C1異常部の地中レーダープロファイル	150
Fig.114	C2異常部の地中レーダープロファイル	151
Fig.115	C1異常部付近のウェンナー法による見掛け抵抗曲線(上図)と二次元インバーションにより計算した比抵抗断面図(下図)	151
Fig.116	敷粗築工法跡(粗梁の一部が炭化)	152
Fig.117	瓦工房跡の発掘現場	152

表 目 次

	頁	
Tab. 1	調査計画表 (13年度)	1
Tab. 2	調査計画表 (14年度)	1
Tab. 3	大宰府史跡調査研究指導委員名簿 (13・14年度)	2
Tab. 4	発掘調査実施表 (13・14年度)	5
Tab. 5	平成13・14年度史跡地内現状変更申請等対応状況表	5
Tab. 6	第186次調査出土鉄滓・矽羽口一覽	22
Tab. 7	第186次調査出土瓦一覽	24
Tab. 8	第187次調査出土鉄滓・銅滓一覽	42
Tab. 9	第187次調査出土軒瓦一覽	44
Tab.10	第187次調査出土叩打痕文字瓦一覽	51
Tab.11	第187次遺構別瓦埴類出土点数一覽	折込
Tab.12	第187次各遺構存続年代概略表	77
Tab.13	水城第33次調査出土瓦一覽	113
Tab.14	旧石器時代の石器観察表	124
Tab.15	縄文時代以降の石器観察表	124
Tab.16	放射性炭素年代測定および樹種同定表	141

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) ガラス容器
(2) 長沙窯黄釉褐彩水注
(3) 緑釉香爐蓋
(4) 越州窯系龍文青磁碗
- 2 (1) 長沙窯黄釉褐彩水注①
(2) 緑釉香爐蓋
(3) 緑釉蓋
- 3 (1) 長沙窯黄釉褐彩水注②
(2) 第187次調査区全景(空中写真)(南から)
(3) 水城跡第33次調査区土壘断面(南東から)
- 4 (1) 水城跡第35次調査区全景(空中写真)(北東から)
(2) 水城跡第35次調査区A区北壁土層・敷粗朶
- PL. 1 (1) 第186次調査区北半全景(東から)
(2) 第186次調査区北半全景(南から)
(3) 第186次調査区南半全景(東から)
- PL. 2 (1) 第186次調査区南半全景(北から)
(2) SB4550～4552(南から)
(3) SB4550～4552断層後(南から)
- PL. 3 (1) SB4550A・B柱穴切合状況(南東から)
(2) SB4550B柱根(北西から)
(3) SB4550B柱根(西から)
- PL. 4 (1) SB4551柱穴(北東から)
(2) SB4551・4552切合状況(北東から)
(3) SB4551・4552切合状況(東から)
- PL. 5 (1) SB4555柱穴(西から)
(2) SB4553・SK4547付近(北から)
(3) SB4553・SD4542付近(西から)
- PL. 6 (1) SK4545(西南から)
(2) SK4545完掘後(南から)
(3) SK4546(南から)
- PL. 7 (1) SK4546完掘後(東から)
(2) SX4548(西から)
(3) SX4549(西から)
- PL. 8 (1) SD4542(東から)
(2) SD4542東端断面(西から)
(3) SD4542中央断面(西から)

- PL.9 (1) 第187次調査区全景(南上空から)
(2) 第187次東半部全景(空中写真)
- PL.10 (1) 第187次西半部全景(東から)
(2) 第187次東半部全景(西から)
(3) SB4560(西から)
- PL.11 (1) SB4561柱穴(北から)
(2) SB4561柱穴(北から)
(3) SB4561柱穴(北から)
- PL.12 (1) SB4560柱穴上師墨杯出土状況(南から)
(2) 同上完掘後(南から)
(3) SB4560柱穴(南から)
- PL.13 (1) SB4560柱穴(南から)
(2) SB4560・4562切台状況(北から)
(3) SB3815・4563(東から)
- PL.14 (1) SB3815(南から)
(2) SB3815柱穴(東から)
(3) SB3815柱穴(東から)
- PL.15 (1) SB3815柱根検出状況(東から)
(2) SB3815柱穴(東から)
(3) SB4561柱穴(北から)
- PL.16 (1) SB4563柱穴(東から)
(2) SB4563柱穴(東から)
(3) SK4573・4574(東から)
- PL.17 (1) SK4573(南西から)
(2) SD4570・4571, SB4564(南から)
(3) SD4570東半部(西から)
- PL.18 (1) SD4570南岸石積(北から)
(2) SD4570北岸石積(南から)
(3) SD4570東端断面(西から)
- PL.19 (1) SD4571・4572(南から)
(2) SD4571・4572(東から)
(3) SD4566西端(東から)
- PL.20 (1) SD4566中央部断面(西から)
(2) SD4569南半断面(南から)
(3) SD4569北半断面(北から)
- PL.21 (1) SD4566西端部(南から)
(2) SX4565(南から)
(3) 第187次調査区全景(空中写真)

- PL.22 (1) 水城第33次調査区全景(東から)
 (2) 水城第33次P-1区西端部(西から)
 (3) 水城第33次P-1区西端部(南西から)
- PL.23 (1) 水城第33次P-1区中央部(北から)
 (2) 水城第33次P-1区東端部(北から)
 (3) 水城第33次P-2区(西から)
- PL.24 (1) 水城第33次P-2区(東から)
 (2) 水城第33次P-3区(北から)
 (3) 水城第33次P-3区(南から)
- PL.25 (1) SB141(北から)
 (2) SB141(西から)
 (3) SK153(南から)
- PL.26 (1) SK151(東から)
 (2) SX148(西から)
 (3) SX149(北から)
- PL.27 (1) SD161・162切台状況(東から)
 (2) SD170(南から)
 (3) SD168・169P-2区東端(西から)
- PL.28 (1) SD168・169P-3区西端(東から)
 (2) SD169断面(東から)
 (3) SX164段落P-1区西南隅(東から)
- PL.29 (1) SD160断面(西から)
 (2) Tr.12東壁段落状況(北西から)
 (3) 木樋掘方Tr.13(西から)
- PL.30 (1) 木樋掘方Tr.13(北から)
 (2) 木樋掘方Tr.8南壁(北から)
 (3) 木樋掘方Tr.8西壁(東から)
- PL.31 (1) 木樋掘方Tr.8西壁埋土(東から)
 (2) 木樋掘方Tr.8西壁埋土(東から)
 (3) 木樋掘方Tr.14南壁(北から)
- PL.32 (1) 木樋掘方Tr.14(西から)
 (2) 木樋掘方Tr.15(白線間が堀方埋土)(北東から)
- PL.33 (1) 土塁南半断面Tr.10(南東から)
 (2) 土塁盛土Tr.10西壁(東から)
 (3) 土塁盛土Tr.10東壁(南東から)
- PL.34 (1) 石器・縄文土器出土状況(SI159上面)(南から)
 (2) 縄文竪穴住居跡(SI159)(南から)
 (3) ローム層深掘り状況(西から)

- PL.35 (1) 水城跡第35次調査区全景(空中写真)(北東から)
(2) 同 上(空中写真)(南から)
- PL.36 (1) A区全景(北東上空から)
(2) A区全景(北東から)
(3) A区全景(南西から)
- PL.37 (1) A区掘下げ状況(南西から)
(2) 敷粗朶検出状況(北東から)
- PL.38 (1) 敷粗朶検出状況近景(南東から)
(2) 同 上
(3) 同 上
- PL.39 (1) B区全景(空中写真)(北東上空から)
(2) B区全景(南東から)
- PL.40 (1) SB173全景(空中写真)(北東から)
(2) SB173全景(南西から)
- PL.41 (1) SB173全景(南西から)
(2) B区北壁土層(南西から)
(3) B区北壁土層細部(南西から)
- PL.42 (1) B区北壁土層(南東から)
(2) B区拡張トレンチ上層(北から)
(3) B区拡張トレンチ土層(北東から)
- PL.43 第185・186次調査出土瓦・土器
- PL.44 第186次調査出土土器・瓦・石鏡
- PL.45 第187次調査出土ガラス・石帯・鉄釘・鍔型・土馬
- PL.46 第187次調査出土瓦埴類
- PL.47 第187次調査SB3815・4560・4563, SK4573出土土器・緑釉香爐蓋
- PL.48 第187次調査SK4573・4574・4576出土土器・緑釉・黄釉褐彩水注
- PL.49 第187次調査SK4573・4574, SD4566出土土器・白磁・長沙窯黄釉褐彩水注
- PL.50 第187次調査SD4566・4567・4569・4570出土土器・灰釉・白磁
- PL.51 第187次調査SD4570~4572・3825出土土器・青磁・白磁・緑釉香爐蓋
- PL.52 第187次調査SD3825・その他の遺構・包含層出土土器・青磁・緑釉・灰釉
- PL.53 第187次調査出土墨書土器・刻字土器・円面硯・風字硯・漆付着土器
- PL.54 観世音寺駐車場側溝工事立会出土滑石製品・瓦
- PL.55 水城跡第33次調査出土土器・瓦・鉄釘・礪羽口
- PL.56 水城跡第33次調査出土ナイフ形石器・台形石器等の旧石器
- PL.57 水城跡第33次調査出土旧石器・縄文土器
- PL.58 (1) 水城跡第33次調査出土縄文時代以降石器
(2) 水城跡第35次調査出土遺物

I 緒 言

1 調査計画と組織

(1) 調査計画

平成13年度は、第6次5ヶ年計画の最終年次（第5年次）にあたる。第5年次の調査計画は特別史跡水城跡の諸施設の解明を目標とし、水城瓦窯跡と木樋埋設推定箇所への調査にその主眼をおいた。また、ここ数年米調査計画に組み入れてきた政庁前面官衙地区の調査にも対処することで本年度の実施計画を策定した。さらに平成14年度から新たに始まる第7次5ヶ年計画案については、5月24日・25日の両日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会（以下、指導委員会と記す）に審議をお願いした。会議では、平成12年度の調査成果と平成13年度の調査計画・第7次5ヶ年計画案及び長年の懸案事項であった「大宰府政庁跡」の正式報告書の進捗状況などを報告した。審議の結果、平成13年度の調査計画・報告書刊行・第7次5ヶ年計画案について概ね了承を得た。

第6次5ヶ年計画

平成13年度の発掘調査計画は、下表のとおりである。

区 分	場 所	所 在 地	面 積	備 考
水城跡	瓦窯及び木樋埋設推定箇所	太宰府市国分1丁目23番	300㎡	現状変更
広丸地区官衙	政庁前面官衙地区	太宰府市観世音寺字広丸375	400㎡	緊急調査
不丁地区官衙	政庁前面官衙地区		100㎡	緊急調査

Tab.1 調査計画表（13年度）

平成14年度は第7次5ヶ年計画の第1年次にあたる。第7次5ヶ年計画は第6次5ヶ年計画の目標であった水城跡諸施設の解明を継続していくことで平成13年度の指導委員会に諮り了承を得ていたが、第1年次である平成14年度は、未調査であった金堂跡の調査を実施し、その成果を含めた「観世音寺」の正式報告書を平成15年度に刊行するため水城跡の調査に先だって行った。平成14年度の指導委員会は、10月31日・11月1日の両日に予定し、金堂跡の調査状況と昨年度の指導委員会以降の発掘調査報告等を審議することにした。

第7次5ヶ年計画

なお、平成14年度の発掘調査計画は、下表のとおりである。

区 分	場 所	所 在 地	面 積	備 考
観世音寺	金堂跡	太宰府市観世音寺5-6-1	200㎡	現状変更
不丁地区官衙	政庁前面官衙地区	太宰府市観世音寺2丁目7番	1,000㎡	緊急調査

Tab.2 調査計画表（14年度）

(2) 調査組織

調査主体は九州歴史資料館であり、発掘調査は調査課が担当した。その組織は、以下のとおりである。

	平成13年度	平成14年度
総 括	館 長 光安 常喜	森山 良一
	副館長 柳田 康雄	柳田 康雄
	参 事 石山 勲	石山 勲
	石丸 洋	石丸 洋

1 結 言

参 事	横田賢次郎	横田賢次郎
		木下 修
		高橋 章

庶務・会計

(総務課)	課 長	丸山 弘子	権藤 繁利
	副 長	坂梨 友春	
	事務主査		井上 雅之
	主任主事	田嶋 朋子	田嶋 朋子
	技 師	井上美智子	井上美智子
	同	松本 優	松本 優

調 査

(学芸第一課)	課 長	石山 勲 (兼務)	石山 勲 (兼務)
	主任技師	井形 進	井形 進
	技 師	酒井 芳司	酒井 芳司
(学芸第二課)	課 長	木下 修 (兼務)	木下 修 (兼務)
	参事補佐	馬田 弘稔	馬田 弘稔
	技 師	加藤 和歳	加藤 和歳
(調査課)	課 長	横田賢次郎 (兼務)	高橋 章 (兼務)
	参事補佐	中間 研志	中間 研志
	技術主査	小田 和利	小田 和利
	技 師	岡寺 良	

なお、大宰府史跡については、調査研究を推進するにあたって遺跡の性格上あらゆる分野から総合的に取り組む必要があるため歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学などの専門家で構成する「大宰府史跡調査研究指導委員会」を引き続き設置し、同委員会の指導のもとに5ヶ年計画を策定し、その計画に従い調査を進めている。委員は下記のとおりである。

	氏 名	職 業	専 門
委員長	笠 山 晴 生	学習院大学教授	歴 史 学
副委員長	小 田 富士雄	福岡大学教授	考 古 学
委 員	八 木 充	京都学園大学教授	歴 史 学
	川 添 昭 二	九州大学名誉教授	歴 史 学
	狩 野 久	京都女子大学教授	歴 史 学
	佐 藤 信	東京大学大学院教授	歴 史 学
	坂 上 康 俊	九州大学大学院教授	歴 史 学
	西 谷 正	九州大学名誉教授	考 古 学
	町 田 章	奈良文化財研究所長	考 古 学
	山 中 章	三重大学教授	考 古 学
	鈴 木 嘉 吉	元奈良国立文化財研究所長	建 築 史 学
	澤 村 仁	九州芸術工科大学名誉教授	建 築 史 学
	中 村 一	京都大学名誉教授	造 園 学
	杉 本 正 美	神戸芸術工科大学教授	造 園 学
	渡 辺 定 夫	工学院大学教授	都 市 工 学

Tab.3 大宰府史跡調査研究指導委員名簿 (13・14年度)



Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図(1/5,000)

2 調査経過

(1) 平成13年度の調査経過

平成13年度の計画調査は、水城東門跡西部の内側（大宰府側）基底部にある瓦窯跡と木榿埋設推定地の解明に主眼をおいた。調査は年度当初の4月から着手する予定であったが、水城西門跡東部の内側基底部の調査（水城跡第33次調査）が遺構密度が高かったため遅延し、また6月の降雨による安養寺地区の災害復旧工事に伴う調査（第185次調査）が緊急的に生じたため、水城跡第35次調査に着手したのは7月中旬であった。

当該地では、平成11年度に大宰府市教育委員会により瓦窯3基が確認されている。その内の1基はかなり以前からその存在が知られていたもので、新たに2基が確認された。今回の調査の目的の一つは、瓦窯の有無の確認とその周辺部の状況について知見を得ることであった。しかし、今回設定した調査区の中では瓦窯は確認できなかったが、瓦工房跡と考えられる総柱の掘立柱建物1棟を検出した。瓦工房跡の検出例は稀少（九州では2例目）で、工房と瓦窯との在り方を知る貴重な成果となった。

瓦工房跡

また、この調査区の西方約50mの場所にトレンチを設定した。この場所は、平成6年に九州大学工学部の牛島恵輔教授等の電気探査により木榿埋設の可能性が指摘されていた場所である。トレンチを掘り下げて木榿の有無を確認したが、木榿は埋設されていなかった。しかし、地表下約2.0～3.4m下位の積み土中において、11面に及ぶ敷粗染層を確認した。敷粗染については、今回の調査地の東方で実施した水城跡第24次調査で既に確認していた。

検出した敷粗染について述べると、前回検出した敷粗染は水城土塁本体と平行するように敷かれていたが、今回は土塁と直交する形で敷かれている点である。もう一点は第24次調査例が数層の敷粗染であったのに対し、今回は11層にわたって敷き並べていたことである。前者については土塁本体との関係、後者は軟弱地盤に対する改良策であることが考えられ、今回の調査は水城の築堤技術・構造解明に貴重な資料を提供することとなった。

敷粗染

水城跡の調査終了後、政庁前面官衙域（広丸地区）の調査（第186次調査）に着手した。この調査地の東側は平成7年度に第167次調査として実施しており、竪穴住居とそれを取り囲む欄干が検出されている。これらの遺構は、周辺地域が官衙的な掘立柱建物群であるのに対して極めて特異な存在で、大変注目していた地域であり、何らかの関連遺構の検出が期待された。調査の結果、竪穴住居と関連する遺構は確認できず、調査区西側地域で検出された掘立柱建物と同じ性格と考えられる建物6棟が検出された。この掘立柱建物のうち、当初のものも奈良期まで遡る可能性が考えられ、南半部で検出されたものは中・小規模の官人居住等に関連する建物群とみられる。今回の調査地と東側の第167次調査地の間には道路があり、未発掘地となっているが、この部分の調査の結果によっては、遺構の性格もより鮮明になるであろう。

広丸地区

また、水城跡第33次調査（水城西門跡東南側テラス）は平成12年度事業であるが、今回の報告にからみ、若干ふれておきたい。平成11年度事業の水城跡第32次調査が延長したことにより、水城跡第33次調査に着手したのは平成12年11月末であった。平成13年5月24・25日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会の現地指導により、補足調査を行うこととなり、調査が終了したのは6月下旬であった。今回の調査成果については、土塁内側のテラスの使用状

1 緒言

木樋埋設跡
況が明らかになった点である。8世紀以降は小規模ながら複数の建物が建ち、一定の人員が常駐していたことが窺え、建物の性格としては西門の修築等に関わった人物の宿舍の可能性が考えられた。さらに、木樋埋設の掘形と思われる落ち込みを検出しており、木樋が確認できれば木樋埋設箇所としては4例目となり、水城の構造解明にとって大きな意味を持つであろう。

なお、今回の報告書では、平成10年度に行った観世音寺参道東側側溝の改修工事に伴う立会調査結果も掲載した。

(2) 平成14年度の調査経過

本年度は第7次5ヶ年計画の初年度にあたり、政庁前面官衙跡と観世音寺金堂跡の発掘調査が計画された。

政庁前面官衙跡の調査は大宰府史跡第187次調査として実施した。この地周辺部は、通称「不丁官衙跡」として発掘調査が進められ、地番は太宰府市大字観世音寺2丁目7番である。この不丁官衙域の南限は、従来第147次調査で検出した東西溝SD2015と考えられてきたが、SD2015と御笠川までの距離が若干あり、希薄とされてきた遺構の有無を確認する必要性が生じたため、土地所有者の快諾を得て今回の調査となった。

調査対象地の面積は約1,000㎡であったが、その南西側半分は御笠川の方に落ち込んでおり、実際の調査面積はその1/2程度になった。調査地は土器や瓦を多く含んだ層が厚く堆積しており、南側は特に厚く現地表面から約180cm程で遺構面に達した。調査の結果、奈良時代から平安時代の掘立柱建物6棟とそれに関連する溝等を検出し、不丁官衙域は東西溝SD2015のさらに南側まで及んでいることが判明した。

不丁官衙域
の拡大

観世音寺は太宰府市観世音寺5-6-1に所在する。九州歴史資料館が行った従来の観世音寺調査は、塔・講堂・中門・僧坊・回廊等と伽藍想定周辺部があり、金堂のみが残されていた。当館が調査を担当する以前は、昭和27年(1952)に九州文化総合研究所と昭和32年(1957)に福山敏男等によって講堂・金堂・回廊・中門等が調査されており、昭和27年の金堂跡調査では「…二重の基壇が残っており、それは平安時代2度の火災にあつて再建の時に築かれたもの…」とあり、押図には2時期の平面規模が記されている。

以上のことを勘案し、現金堂の西端部を中心に計5ヶ所の発掘区を設定し、10月1日から調査を開始した。調査を開始してからまもなく、大宰府史跡発掘調査研究指導委員会を10月31日と11月1日の両日開催し、各委員に指導を賜った。調査の結果、創建時と考えられる瓦積基壇と康治二年(1143)の焼亡記事と符合する焼土層及びそれ以前に構築した石積基壇。さらに、12世紀中頃に以降に構築された基壇外装を検出した。1月に入って降雪や雨にたたられたが、2月10日に埋戻し等全てを終了した。

創建時基壇

また、上記の調査期間中に第189次調査として太宰府市観世音寺宇安養寺4-808・809の擁壁の調査と大宰府政庁跡トイレ改修工事に伴う調査(第190次調査)を実施した。いずれも土層等の確認調査を行い終了した。

さらに、15年3月には広丸地区における市道開設に伴って、第186次と第167次調査に挟まれた部分を、第186次補足として発掘調査をした。

年度	調査区	調査地区	調査組織(市)	調査者	担当
平成13年度	水原第33次	6AMC-C	775 001128~010625	西門南内閣	中国・杉屋・岡寺
	水原第34次	6AMK	320 016730~020205	五上事務所	中国・岡寺
	水原第35次	6AMK	400 020205~020330	五上事務所	中国・岡寺
	水原第36次	6AYV-D	400 020330~020330	五上事務所	中国・岡寺
	水原第37次	6AYV-D	400 020330~020330	五上事務所	中国・岡寺
	水原第38次	6AYH-B	520 020520~020930	五上事務所	中国・高橋
	水原第39次	6AZZ-L	180 021001~030210	五上事務所	中国・高橋
	水原第40次	6AYT-B	44 020911~020530	五上事務所	中国・高橋
	水原第41次	6AYT-B	25 030114	五上事務所	中国・高橋
	水原第42次	6AYV-D	030114~030330	五上事務所	中国・高橋
	水原第43次	6AON	030114~030330	五上事務所	中国・高橋
	水原第44次	6AON	030114~030330	五上事務所	中国・高橋

Tab.4 発掘調査実施表

平成13年度

発出日	申請者	目的・用途	地 址 (市 番)	申請面積	指定区分	九區等の対応	文化庁等指示
5月10日	九州電力株式会社	配電用掘工事	太宰府市鶴世番寺4丁目16番地、1105-1(東通)		史跡寺院	市教委立会	無教委指示
5月18日	太宰府市職員会	敷地調査	太宰府市南分1丁目7番地	600㎡	特別史跡大野城跡	九區特別調査	文化庁許可
5月30日	筑紫かた様会社	ガク管理施設	太宰府市鶴世番寺496-129、鶴世番寺6丁目7153地	953.5㎡	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
6月8日	太宰府市教育委員会	調査員 調査員	太宰府市南分3丁目10番地	28.04㎡	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
6月9日	太宰府市教育委員会	調査員 調査員	太宰府市鶴世番寺4丁目806番地5、3	311㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	本宰府市教委立会	無教委指示
6月13日	個人	住宅解体工事	鶴世番寺町大字四上寺町前田106、104、101の一部		特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	無教委指示
8月16日	個人	敷地調査	太宰府市南分5丁目11117番地、52番地	556㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	九州府庁教委立会	無教委指示
10月15日	個人	住宅解体	太宰府市南分3丁目19、14、2、20番地	507.81㎡	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
11月7日	太宰府市教育委員会	調査員 調査員	鶴世番寺町大字四上寺町前田311-1		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
11月9日	福岡県教育委員会	調査員 調査員	鶴世番寺町大字四上寺町前田311-1		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
11月11日	個人	法政保全工事	太宰府市鶴世番寺4丁目808-809	785㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	太宰府市教委立会	無教委指示
1月25日	福岡県教育委員会	調査員 調査員	鶴世番寺町大字四上寺町前田311-1		特別史跡大野城跡	無教委指示	無教委指示

平成14年度

4月11日	福岡県教育委員会	プレハブ建て替え	太宰府市坂本3丁目16番地1号、275番4号	1,854㎡	特別史跡大野城跡	無教委立会	無教委指示
6月12日	個人	住宅改築	太宰府市鶴世番寺4丁目498番地	200㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	太宰府市教委立会	無教委指示
7月1日	個人	築地調査	太宰府市鶴世番寺6丁目806番地32	200㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	太宰府市教委立会	無教委指示
7月10日	個人	住宅解体	太宰府市鶴世番寺5丁目6番1号	80㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	太宰府市教委立会	無教委指示
7月10日	個人	住宅解体	太宰府市鶴世番寺5丁目16番地0、3	273㎡	史跡鶴世寺寺域内および子院跡	太宰府市教委立会	無教委指示
8月1日	個人	住宅解体	太宰府市坂本3丁目3番3~4、4番	876㎡	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
8月5日	個人	住宅改築	太宰府市鶴世番寺4丁目8591	83㎡	特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
9月19日	太宰府市長	光ケーブル埋設	太宰府市坂本1063、鶴世番寺1159		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
9月27日	太宰府市教育委員会	調査員 調査員	太宰府市鶴世番寺4丁目408、水原1番1地		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
9月30日	福岡県教育委員会	調査員 調査員	鶴世番寺町大字四上寺町前田内野野台5号外1番		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
10月7日	福岡県教育委員会	調査員 調査員	鶴世番寺町大字四上寺町前田大石面311-1		特別史跡大野城跡	太宰府市教委立会	無教委指示
11月27日	太宰府市長	トイレ改修	鶴世番寺町大字四上寺町前田311-1	1,005㎡	特別史跡大野城跡	無教委立会	無教委指示
11月27日	太宰府市長	道路改修	鶴世番寺町大字四上寺町前田312番地		特別史跡大野城跡	無教委立会	無教委指示
12月2日	宇美町長	安用寺	鶴世番寺町大字四上寺町前田312番地	269㎡	特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	無教委指示
12月2日	宇美町長	安用寺	鶴世番寺町大字四上寺町前田312番地		特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	無教委指示
12月18日	宗義道人	仏心寺	太宰府市鶴世番寺4丁目229番地	591㎡	特別史跡大野城跡	無教委立会	無教委指示
12月27日	高僧法人	仏心寺	太宰府市鶴世番寺4丁目559番地2		特別史跡大野城跡	無教委立会	無教委指示

Tab.5 平成13・14年度史跡海内現況変更申請等対応状況表

II 調査の内容

1 第185次調査 (安養寺地区の災害復旧)

(1) 概要

法面崩壊防
止工事

経過 平成13年6月19日から6月20日未明にかけての大雨で、史跡観世音寺境内および寺院跡内の安養寺地区の尾根先端が崩壊した。幅約5m、高さ6m程が土砂崩れを起こし、下の民家の物置に被害をもたらしていたため、太宰府市教育委員会により、災害時の緊急策として即日工事を実施した。工事の概要は、尾根南端の上端縁付近にも亀裂が長く崖に沿って走っていて、この地盤自体が極めて軟弱であると判断されたため、崩壊部分を含めた東西20m程の崖上端部の土砂を上端から3m下程まで削除して傾斜勾配をゆるくし、法面保護工事を施すというものである。

工事への立会は6月20日と7月3日の2日間である。現耕作土の厚さ30cmの下には、東半部では尾根先端の位置を示す地山の花崗岩風化土がみられ、西半部では暗黄褐色土が厚く認められ、その南縁部には近年のものと思われる簡単な石垣状の花崗岩自然石が並んでいた。この暗黄褐色土には上から大きなごみ穴が掘り込まれ、攪乱が著しい。出土遺物は室町期の瓦類を主として耕作土から暗黄褐色土まで攪乱的に近代陶器までが出土した。これらの状況からみて、

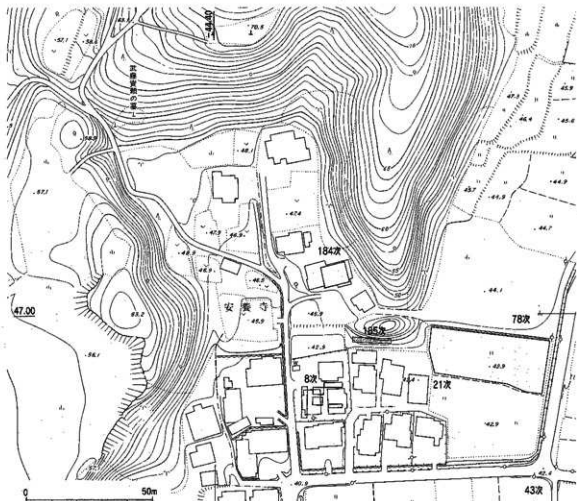


Fig.2 第185次調査区位置図 (1/1,500)

この最南端部分は近世以降に上段の畑の造成拡張等に伴って先端側へ押し出された土であることが推定された。立会の結果、室町期及びそれ以前の明確な遺構は確認されなかった。よって、ここでは出土遺物のみを紹介しておきたい。

(2) 出土遺物 (Fig.3・4, PL.43)

須恵器 (1) 1.8cmと部厚い大甕片。外面は小さめの正格子。内面は細身のあて具の上に太いあて具痕が重なる。7世紀後半～8世紀前半代。

砥石 (2) 砂岩製粗砥。全側面が使用磨面。

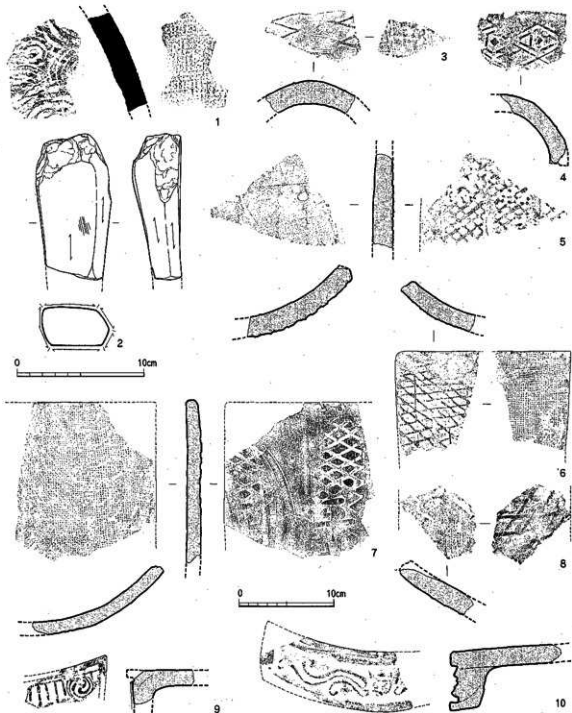


Fig.3 第185次出土遺物実測図 (その1) (1・2: 1/3, 他: 1/4)

II 調査の内容

瓦類(3~15)5は模骨・粘土紐作りで、軒平560Aa類の曲線頸類に用いられた格子目叩きに近似する。7は粘土板・円筒桶作りで、印打痕文字瓦901Fa類「平井」。6は円筒桶作りで、側面に破面・載面、分割界線痕を残す。4は軒平562, 軒丸048Aに用いられる観世音寺再建所用瓦で、中山平次郎氏の「家紋様型押」瓦にあたる。8は粘土板・円筒桶製で、大きい平行四辺形叩きで、軒平584A・Bに施される例があり、学校院・観世音寺再建所用瓦。4とともに円筒桶製平瓦の最終段階に近い類。3は粗大な斜格子類で、凹面はわりと細かい布目で、1cmの間隔を置いて縦方向に刺子状の縫い目が走る。9は三ツ巴を剣頭文地に配し、平瓦先端折り曲げの可能性がある。10は三段宝珠を中心飾とし、3本の唐草が左右へ延びる均

観世音寺再
建所用瓦

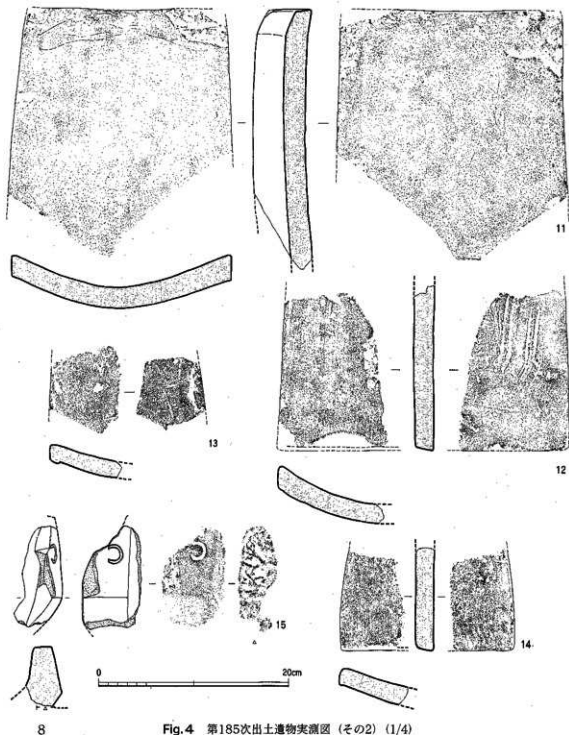


Fig.4 第185次出土遺物実測図(その2)(1/4)

正類。上外区中途に瓦範のアタリが認められ、平瓦は凸型一枚作りであろう。同範例としてSX1200（第45次調査、観世音寺東辺）、SB800礎石建物（第38次調査、学校院東南部）出土品があり、いずれも14世紀前半を下限とする。11・12は凸面に細砂粒が付着し、凹面は縦ナデ仕上げで、離れ砂使用の凹型一枚作り類。13・14は凹・凸両面ともに細砂粒が多く付着し、凸型で成形した後に凹型で側縁の切り取りと仕上げを施した類で、近世・近代の技法へと継がるもの。15は接合面に交叉した沈線を刻み本体に接合した立体的な突出部分片で、外側面に半截竹管文を施す。手作り鬼瓦の扉の外側に付けられた突出部（大分市善光寺出土例）、或いは層（太宰府市崇福寺出土例）かと推定される。

凹型一枚作り

(3) 小 結

出土遺物は奈良前半期から室町後期の各時期に及んでいるが、うち5の老司I式軒瓦期のもは観世音寺創建に因むもので、6・7は純友の乱（941年）以前の学校院または観世音寺の修復に由来するもの、4・8は既述のとおり12世紀前半を下限とする観世音寺再建瓦と考えられる。なお、この種の叩きを持つ瓦については、現在進行中の観世音寺金堂の発掘調査によって年代的にもある程度の成果が示し得ると考えているので、詳細はその報告に譲りたい。

3・9～15の瓦類は安養寺地区第184次発掘調査（九歴「大宰府史跡発掘調査報告書I」2001）の成果の主体をなす時期のもので、9はSD4541の13世紀前半の安養寺地区当初期に符合する。建久年間（1190～1199年）に筑前・豊前・肥前三ヵ国の守護となり、嘉禄2年（1226年）に大宰少貳を兼ねた少貳資頼が「安養院」を号していたことが知られており、観世音寺49子院のひとつである安養寺と継ながるのかもしれない。以下の10～15はその後の14世紀から室町後期、及びそれ以降の所産で、争乱に明け暮れた時期の推定安養寺の存在を推測させてくれる。

推定安養寺

II 調査の内容

2 第186次調査（広丸地区の調査）

(1) 概要

経過 太宰府市が実施した都市区画整理事業により生じた保留地について、九州歴史資料館では数年来第6次5ヵ年計画の中に組み込んで発掘調査を計画していたが、今回当該地を太宰府市が売り出すということで調査の機会を得た。平成14年2月5日～3月26日の冬の雨に悩まされた発掘調査であったが、新たな掘立柱建物群を確認する等、多大な成果を得ることが出来た。なお、調査は南半部を3月6日まで行い、廃土を反転してその後北半部に取り掛かった。

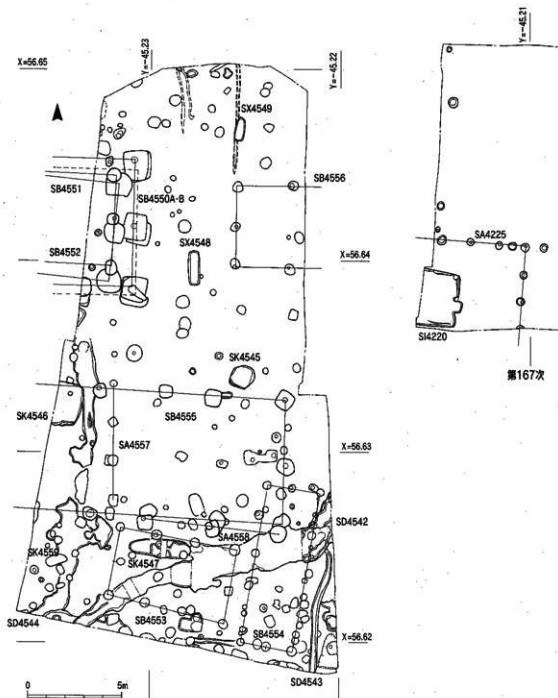


Fig.5 第186次調査遺構全体図 (1/200)

調査面積は400㎡。

位置 政庁前面域のうち西方の、これまで広丸地区官人居住域と称してきた位置にあたる。太宰府市観世音寺2丁目216・217番で、県道太宰府筑紫野線の南側に接している。政庁中軸線から西へ400m隔った地点で、東隣が奈良期の堅穴住居を検出した第167次、西へ15m離れた第96次・96次補足調査区となる。

(2) 基本層序

当該地は現状では平坦地であるが、広く周辺の地形から見ると、北側の四王寺山塊から派生する米木丘陵の先端の延長線上にあたり、本来東西に谷を持った一段高い部位であったと想定される。弥生時代には両側の谷の痕跡が自然流跡として残っており、少なくとも歴史時代にはそれも埋没し、当遺跡も含めて周辺全体が北高南低の緩やかな傾斜をもって真砂土の二次堆積土で覆われる。これが政庁前面全体での歴史時代遺構の基盤層（地山）となる。

地山は真砂土二次堆積土

当遺跡においては、この地山の上に明瞭な整地層は殆ど検出されない。南端辺で黄灰色土の硬い部分が認められ、ある時期の整地層的に観察されたが、13世紀の遺物も含み、当遺跡の主体となる8世紀のものとは見出し難い。次に、地山の上には厚さ5～17cmの黄灰色土の旧水田床土が載り、7世紀～近世までの遺物を含む。その上には区画整理事業以前の水田耕作土が15～30cm、更にその上には区画整理事業による真砂土盛土が50～70cmと厚く客土・整地され、最上層は現在の表土となる。以上をまとめると、現状地表面の標高が31.2～31.4mで、旧水田上面が30.4～30.5m、遺構面が30.1～30.5mと南へ傾斜をみせる。

以上の土層観察から、今回の発掘区内においては整地層・包含層が基本的に認められず後述するSB4555の掘方が極めて浅い等の特異な状況から見て、旧水田段階での開削や耕地整理等により、最低30～50cmは本来の遺構面から削平されて低くなっていることが考えられる。

(3) 遺構と遺物

SB4550A・B・4551・4552 (Fig.6・7, PL.2～4)

SB4550A・Bはほぼ同位置にて建て替えが行われた2×1+α間の恐らく東西棟となると推定される。掘方の重複で古い段階のものとしたAは正確な規模を知り得る柱痕等の手掛かりが得られなかったが、Bの柱穴掘方とはほぼ同形状・同規模乍ら、東側と南側にずれていることから、Bよりも僅かに規模が大きかった可能性だけを指摘しておきたい。SB4550Bは直径30cmの柱根部分が遺存しており、その心々距離から、1尺=29.74cmとして11.5尺、1尺=31.09cmとして11尺等間の規模で、N0°30'Eの南北軸方位が得られる。各柱穴は1辺が160～140cm大の方形大型掘方を持ち、柱根底部は石で脇を固め、埋土は薄い版築法ではなく、厚さ10cm程の単位乍ら、地山の明褐色・黄灰色・灰色粘土を効率的に多用した極めて堅固な、発掘作業に支障をきたす程の突き固めが施されている。この建物は、大宰府最大級の掘方や柱間規模の大きさ、丁寧な作り等からみて、この地点での中核建物と言える。SB4551とSB4552もSB4550の建て替えであるが、建物規模が小さく、掘方も明瞭に小さく変化してゆく。SB4551は柱間が8.5尺（1尺=30cm）等間でN5°30'Eと東に振る。柱は抜かれており、中央の柱穴は下層に花崗岩小礫を敷き詰めている。最新期のSB4552は、掘方も円形に変わり、

発掘に苦勞する柱穴

II 調査の内容

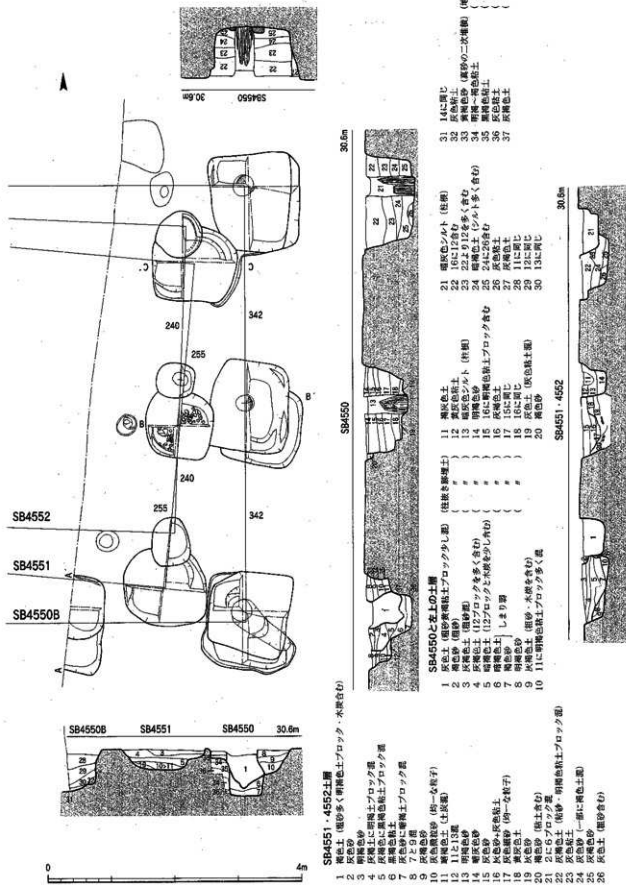


Fig. 6 SB4550~4552実測図 (1/60)

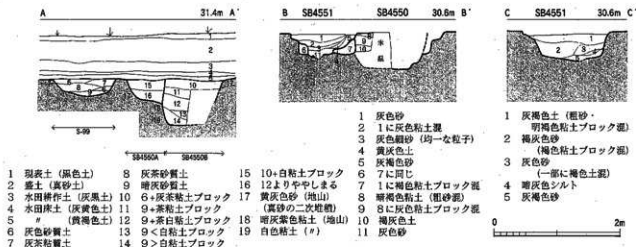


Fig. 7 SB4550・4551柱穴断面実測図 (1/60)

直径80~60cmと更に小さくなる。8尺(1尺=30cm)等間で、南北軸はN3°E。これらの建物柱穴出土土器 (Fig. 8-1~7) から見て、SB4550Bは8世紀第4四半期までは下がりそう、これを切るSB4551・4552はより新しくなるということになる。なおFig. 8-4は須恵器皿の転、3期が重複用瓦で墨痕が残る。

SB4553 (Fig. 10, PL.5)

2×3間の東西棟で、N11°30'Eとかなり東に振る。直径60~40cmの円形掘方の柱穴で、柱間心々距離は7尺(1尺=30.2~30.3cm)を基本とするが、北辺と南辺の西端は6.5尺、西辺梁行は6尺等間となる等、不揃いである。SD4542とSK4547を切る。建物の四隅はいずれも直角にならず、全体に平行四辺形の平面形となる。出土土器 (Fig. 8-8) は8世紀後半だが、8世紀後半に埋没したSD4542を切り、主軸を大きく東に振る小規模建物である事から、少なくとも9世紀以降になると推定される。

SB4554 (Fig. 10, PL.2・5)

上述のSB4553の東隣に主軸をN10°Eとほぼ揃えて並ぶ南北棟である。2×5間で桁行840cm(28尺)、梁行285cm(9.5尺)の規模となるが、柱間心々距離は4.5・5・5.5・6・7尺(1尺=30cm)と極めてばらつきがあるが、それでも各辺の相対する辺側の柱間距離とは各々近似する間隔とした意図が汲み取られる。柱穴は直径50~30cmと極めて小ぶりの円形をなし、SD4542や小ピット等をすべて切っており、本遺跡での最新段階の遺構であることを推察させる。図示に耐え得る出土土器が無いが、上述の切り合いや西隣のSB4553との関係から見て、やはり9世紀以降の、SB4553の付属的な建物ではないかと考えられる。

SB4555 (Fig. 9, PL.1・2・5)

2×4間以上の大型東西棟で、主軸をN3°30'Eにとる。各柱間は11尺(1尺=29.73cm)を基本とするが、8.5尺~13尺までかなりのばらつきが認められる。直径100~70cmの方形柱穴で、柱痕(直径27~20cm)は3柱穴で確認された。ただ、断ち割った2つの柱穴の深さが28cm程と意外と浅く、明らかに上半を削平されているものと推定できる。この掘立柱建物を西へ延長してゆくと、第96次・第96次補の調査で検出されたSB2825と線ながる。(Fig. 16・17参照) 両者は柱穴の形状・規模、柱間距離、主軸方位等が極めて近似しており、強い関連

II 調査の内容

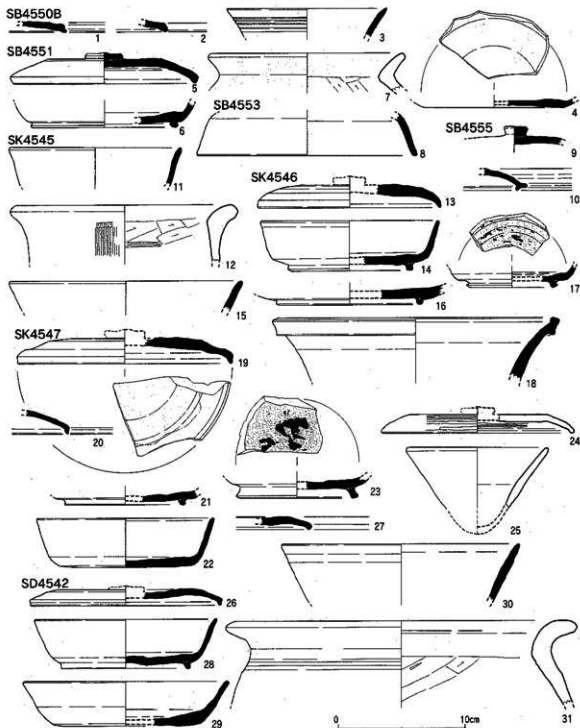


Fig.8 建物・土壌・溝出土土器実測図 (1/3)

があることは疑いない。ただ両者の東西端間の距離は100m程となるため、同一の建物とは考え難く、東西に並ぶ縦列の対をなす別々の、東西桁行が7~8間となる建物と考えられる。なお、このSB4555の時期であるが、南辺でSA4558とSD4542に切られ、8世紀後半を下限とできる。これは第96次調査でのSB2825の年代概と一致し、更に出土土器 (Fig.8-9・10) は7世紀後半代を示すことから、未だ断定はできないがそれに近い年代の可能性を提起しておこう。

SB4556 (Fig.11, PL.1)

南北に2間、東西に1間以上となる小規模掘立柱建物で、東側へは第167次調査で見られな

SB2825と
並列

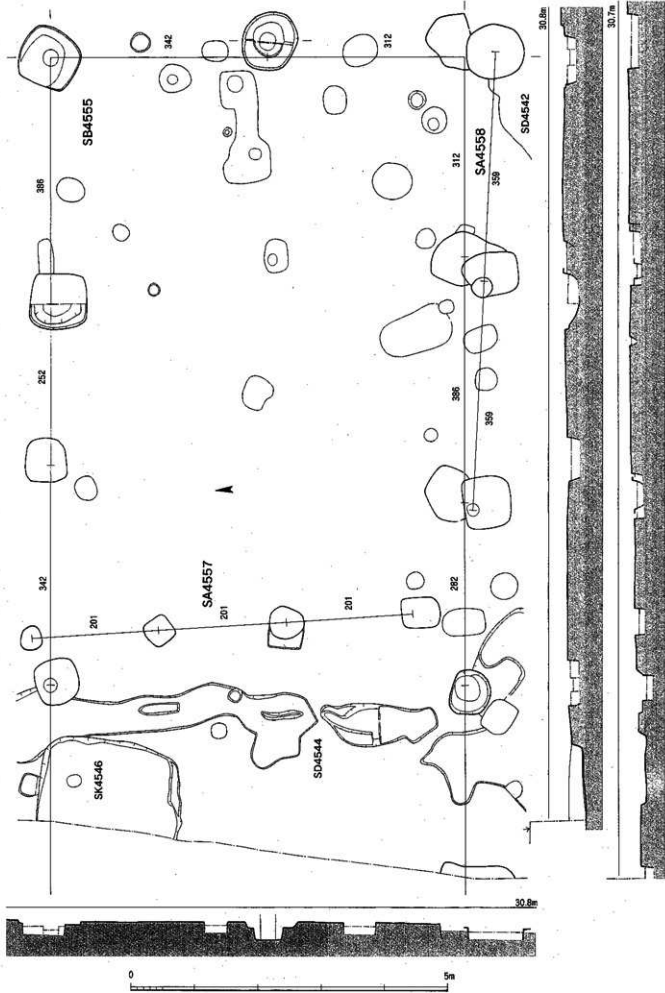
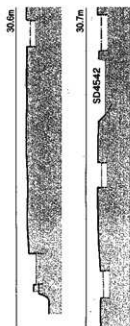
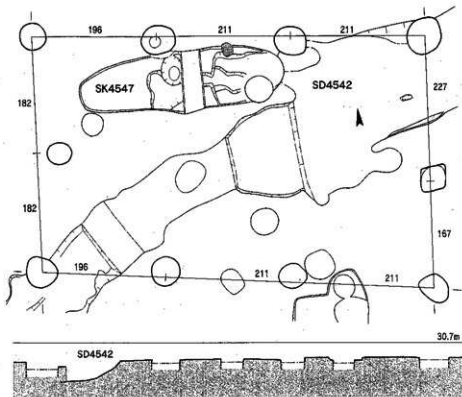
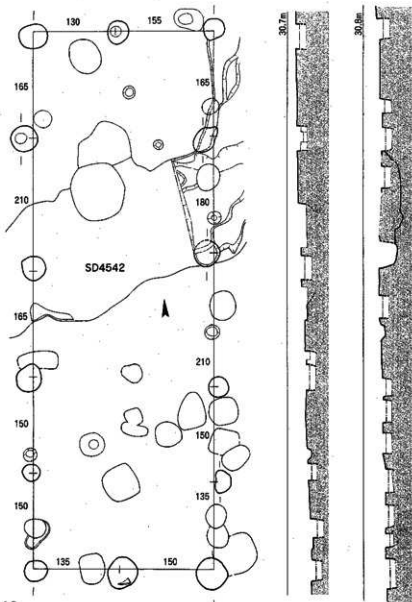


Fig. 9 SB4555, SA4557, SA4558, SK4546, SD4544 (1/60)



SB4553



SB4554

いことから3間の桁行をもつ東西棟と推定できる。梁行柱間心々距離は7尺(1尺=30cm)等間、桁行は9.5尺、主軸方位はN1°Eと真北に近い。柱穴は直径60~40cmの円形で、柱痕は直径26~15cmとばらつきが大きい。図示に耐え得る出土土器が無く時期を確定し難いが、小規模乍ら整然とした建物であり、主軸方位と位置関係から、西隣のSB4550を基準に配置された状況の如きでもあり、年代もそれと近い類かと考えられる。

SA4557 (Fig.9, PL.2・5)

調査区南半の西寄りに、真南北に並ぶ柱穴列で、201cm等間の3間分が確認された。柱間距離を無視すると、更に北へ5尺等間で2間分が延長できる。ただこの北側の2柱穴は小さく、ここでは取り敢えず除外しておく。直径60~40cmの方形・円形の掘方をなす。図示できる遺物が無く、時期を確定できないが、位置的にSB4555と重複しており、同時存在はあり得ず、主軸方位の近似性から、北側のSB4550~4552と関連をもつと考えておきたい。

SA4558 (Fig.9, PL.1・2・5)

SB4555の南辺の柱穴を各々切つて東西に並ぶ3柱穴を取り敢えず欄列として記録しておくことにしたが、実際には東と南へ延びる大型建物の可能性もある。柱間は12尺(1尺=29.96cm)等間で、N6°30'Eの方位となる。8世紀後半に埋没したSD4542をも切っており、それよりは新しくなるが、掘方が直径90cmで方形乃至隅丸方形で、柱間も広いことから、それ程年代的に下降するものとは考え難い。

SK4545 (Fig.11, PL.6)

直径120cm、深さ20cm程の浅い土壌で、隅丸方形に近い、わりと整った平面形をなす。瓦片がへりに沿って、一部では立った状態で出土したが意味は不明。出土土器(Fig.8-11・12)は8世紀前半~中頃を示し、瓦(Fig.14-5・6)は縄目模骨平瓦と縄目粘土板一枚作り平瓦である。全体に8世紀を降るものではなく、瓦片が多いことから建物整地に伴う廃棄土壌か。

SK4546 (Fig.11, PL.6・7)

西半は調査区外となるが、南北辺が220cm、深さ30cmの整った方形土壌。ただ、底面は凹凸が激しく、西北端底面では火を燃やしており、幾度かの掘り直しも土層図で認められる。出土土器(Fig.8-13~18)のうち17は内面に赤漆が附着しており、全体に8世紀前半~中頃。瓦(Fig.15-1~3)はいずれも縄目模骨平瓦で、1は粘土板、2は粘土紐製で、3は凹面の布目を丁寧にナテ消し、狭端部角の凹面側を斜めに隅切りする。他に小鍛冶関連の鉄滓・炉壁片・鞆羽口片も出土している(Tab.6参照)が、鍛冶遺構そのものと断定できる程の量ではない。やはり、乱れた土層の状況等からみて、一定の期間定まったこみ捨て場として機能した廃棄土壌と考えられる。

SK4547 (Fig.11, PL.5・8)

長さ323cm、幅95cmの東西に長いプランで、底面は西半が5cm程と浅く、中央から東側は凹凸が著しい。土壌の中では最も鉄滓の量が多く、鞆羽口片も出土しており(Tab.6参照)、当初から鍛冶関連遺構と考えて精査したが、明確に構造・性格を知り得なかった。北東壁側の一部が焼けており、東側に主体を持つ鍛冶遺構かと考えたが確定は困難である。出土土器(Fig.8-19~25, Fig.15-10)は7世紀後半~8世紀後半までの時期を示す。うち19は転用瓦、23は酸化して黒変した赤漆が附着する。SB4553に切られ、SD4542を切ることから、当遺

縄目模骨平瓦

鉄滓が多量出土

II 調査の内容

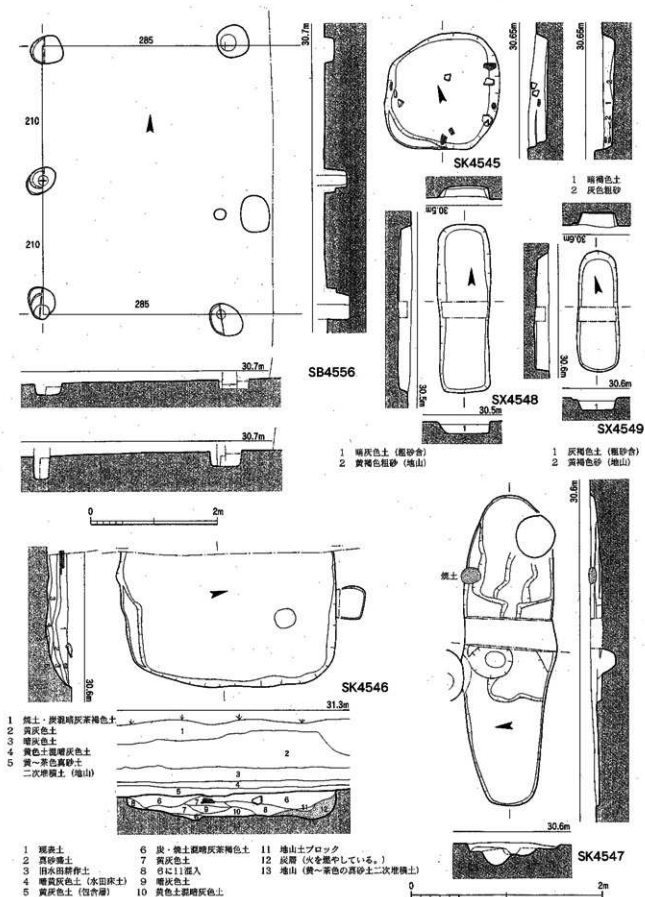


Fig.11 SB4556・土壙等実測図 (SB4556のみ1/60, 他は1/40)

溝の時期は8世紀後葉及びそれを若干降る時期の間と考えられる。

SK4559 (Fig.5, PL.8)

調査区の南西隅近くに位置する小土塚で、上半を一段下げただけで完掘はしていない。110×52cmの楕円形プランで、椀形洋3点を含む鉄洋多量と彌羽口片等が出土(Tab.6)しており、小鍛冶関連遺構と考えられる。8世紀後半埋没のSD4542に切られるSD4544を切ることや鍛冶関連と考えられるSK4547に近いこと等から、時期はSK4547に近いものと推定される。

SX4548 (Fig.11, PL.7)

調査区北半中央に位置し、N1°Eに主軸をとる土壇墓である。長さ175cm、幅55cm、深さ15cmで、副葬品等はない。大ききから成人用と見られ、北頭位を示す事や8世紀代とすると屋敷内埋葬となる事等から、平安中期以降の所産と推定される。

土壇墓

SX4549 (Fig.11, PL.7)

調査区北端近くに位置し、主軸をN11°Eにとる土壇墓である。長さ125cm、幅45cm、深さ15cmで、副葬品等はない。大ききから見て未成年用であり、SX4548と状況が類似することから、時期も同様かと考えられる。

SD4542 (Fig.12, PL.1・2・5・8)

南端を東北東から西南西へ流れる溝で、幅は東端で270cm、西端で80cm、深さは35cm程。全体に蛇行気味で、埋土は砂質・砂層で、壁が挟れている部分もあり、流水が激しかった自然流路的性格もみられる。出土土器 (Fig.8-26~31) は8世紀中～後半の時期を示し、瓦 (Fig.15-4) は、縄目擦り消しで粘土板模骨の可能性がある。他に椀形洋2点を含む鉄洋多量と彌羽口 (Fig.15-8・9) 類が出土しており、この周辺に鍛冶関連遺構があり、この溝の埋没過程で投棄されたものであろう。この溝は8世紀後半代に埋没した溝としては、この政庁前面域では珍しく斜めに蛇行する類で、その性格について今後とも注意が必要であらう。

斜めに蛇行する溝

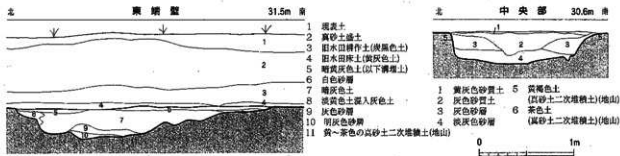


Fig.12 SD4542土層断面図 (1/40)

SD4543 (Fig.5, PL.2・5)

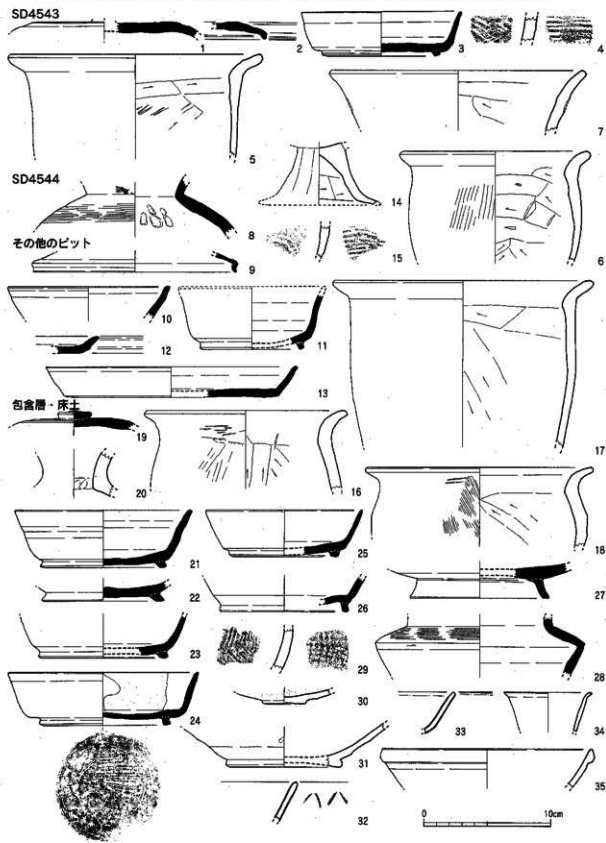
調査区の南東端にて検出した、南北に走る細い溝である。幅20~35cm、深さ6~15cmで、壁は直に掘り込まれた、小さいながらしっかりした溝で、埋土は暗黄褐~暗褐色土。北端でSD4542に切られ、底面は南へ傾斜する。出土土器 (Fig.13-1~7) は8世紀前葉を示し、北西側のSK4545・4546、SB4555等と関連する時期と考えられるが、性格は不明。或いはより東側に拡がる遺構に伴うものとなるか。

SD4544 (Fig.5, PL.2)

調査区南半の西縁に沿って南北に走る砂溝である。深さ5~15cmと極めて浅く、北半では

II 調査の内容

消滅しているが、本来は南北に走り、或いは南方の第95次調査で確認したSD2785と繋が
るものかもしれない。SK4546を切り、SK4559とSD4542に切られる。出土遺物 (Fig.13-8)
は7世紀代のものだが、切り合い等からみて、8世紀前葉～後葉のものとも判断できる。



その他の出土遺物

その他のビット出土土器 (Fig.13-9~18, PL.44) 南半を中心に今回建物に復原し得なかった多くの柱穴や小土壇から出土した土器類で、7世紀末~8世紀前半~中頃を示す。柱穴の中には明瞭な柱痕が確認できるものも多かったが、復元できた掘立柱建物群とほぼ同時期の建物がそれ以上に存在した可能性を示す遺物である。

包含層・床土等出土土器・瓦 (Fig.13-19~35, Fig.15-5~7, PL.44) 8世紀前半~後半を中心とした須恵器の他に、緑釉(30)、越州窯系青磁(31)、龍泉窯系青磁(32)、口兀げの白磁皿(33)、玉緑白磁碗(35)等9~12世紀のものがある。なお、24の内面には墨痕がみられるが線軸陶器の内底面は磨られていない。底外面は細かい板目。29の内面は粗いハケ。瓦は平安期の円筒桶粘土板製斜格子叩き平瓦片と、斜縁上外端に瓦范のあたり(星野a'類)がみられ、大粒楕円形珠文の古式巴文軒丸瓦片。

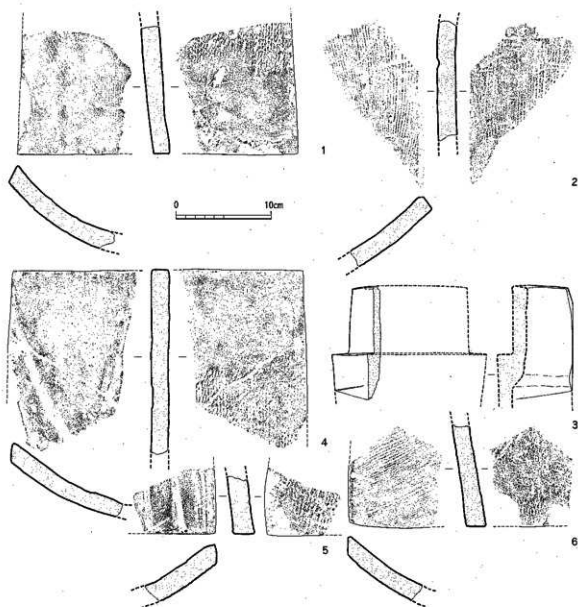


Fig.14 各遺構出土瓦実測図 (1/4)

II 調査の内容

打製石鏃 (Fig.15-11・12, PL.44) 11はSD4544混入品で、肉眼観察では巖岳産黒曜石を素材とし、剥片は主要剥離面及び裏面ともに同一方向からの加撃で剥取りされた後、調整剥離が両側縁より施されている。主要剥離面及び裏面に一次剥離が観察できる剥片燬である。現存幅14mm、厚さ3mm、現存長20mm、重さ0.9g。12はSK4545南方の黄褐色土（所謂地山）出土品で、肉眼観察では針尾島産黒曜石を素材とし、全体の形状は扁平。調整剥離は両側縁から施されている。幅17mm、厚さ3mm、現存長23mm、重さ1.1g。以上の他に今回調査では黒曜石5点（巖岳産3点、針尾島系2点）、サヌカイト2点等の剥片が出土した。

鉄滓等 (Tab.6) 遺構別の出土状況を一覧表にした。出土分布は著しく南半に偏る。中でもSK4547・4559は明らかな鍛冶関連遺構と判断できる。また各出土遺構の時期を見てみると、当遺跡のほぼすべての時期の遺構から出土しているが、鍛冶関連採集が実際に行われた年代は、SB4555の当初期～8世紀後半までの間であり、以降のより新しい遺構からの出土は、出土量の少なさ等からみても、古い時期のものの混入品と考えることができる。以上の他にも、鋳鋼関係資料として鋼滓1点(4g)、鋼小片(1g)も出土しており、金属関係採集が各種行われていたことが判る。

鍛冶操業

出土遺構	鉄 滓			鑄 羽 口		
	点数	小計重量(g)	備 考	破片点数	小計重量(g)	備 考
SB4550B	1	53				
SB4551	1	4				
SB4552	1	10				
SB4553	10	118		5	29	
SB4554	3	47				
SB4555	14	212	橢形滓 1			
SA4557	1	18				
SA4558	4	38				
SK4545	7	151				
SK4546	4	159	炉壁片 1 橢形滓 1	12	235	
SK4547	47	724	炉壁片 1	11	104	
SK4559	13	690	橢形滓 3	1	31	
SD4542	64	2,074	橢形滓 2	42	1,636	孔径2.8cm Fig.15-8・9
SD4543	7	279				
SD4544	10	44		4	109	
SX4548	5	7				
その他のピット (すべて南半、計7基)	21	237	橢形滓 1	1	173	孔径約3.5cm
床土・黄灰色土	79	2,267	橢形滓 2	27	683	
計	292点	7,132g	橢形滓 10点	103点	3,000g	

Tab.6 第186次調査出土鉄滓・鑄羽口一覧

瓦埴類 (Tab.7) 個々の代表的なものは図示したが、出土総量としては610片と極めて少なく、調査区内の建物に総瓦葺のものがあったとは考え難い。平安期の斜格子目印きの瓦類は遺構出土のものは全く無く、すべて旧水田床土及びそれ以上の表土・攪乱土出土品であり、当遺跡の遺構に伴う瓦はすべて横骨(綱目・正格子目)と綱目一枚作り段階のものと考えてよい。このことから、近隣に瓦葺建物があったとしたら、8世紀前半～後半代の政庁Ⅱ期開始段階からの古い建物があり、平安初以降には既に廃絶していたものと想定される。

政庁Ⅱ期の
建物

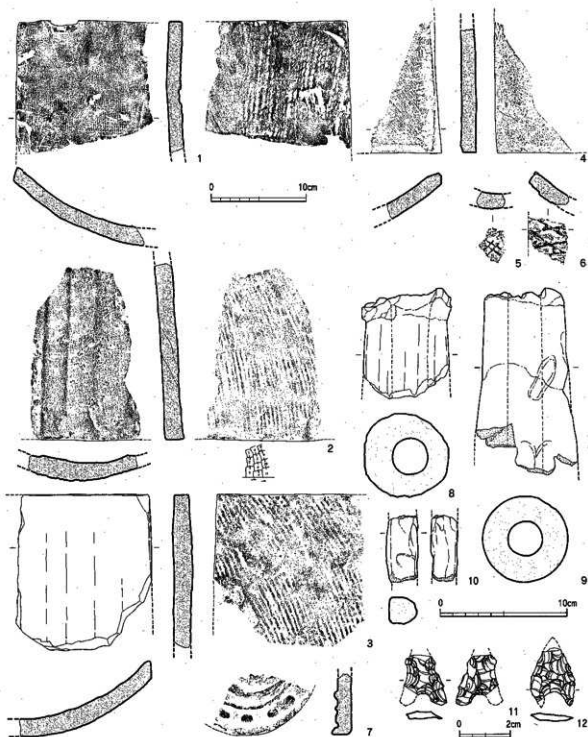


Fig.15 各遺構出土瓦等実測図 (瓦:1/4, 土製品:1/3, 石蔵:2/3)

II 調査の内容

		掘目	正格子目	斜格子目	擦消し	その他(不明)	計
丸瓦	軒丸					1 (巴文)	1
	玉縁	7		2	15	58	82
	行蒸						0
平瓦	軒平						0
	平瓦	120 (うち模骨12)	8	16 (うち文字瓦1)	15 (うち模骨1)	368 (うち模骨2)	527
計		127	8	18	30	427	610片

Tab.7 第186次調査出土瓦一覧

(4) 小 結

今回の第186次調査の各主要遺構についてまとめておきたい。まずSB4550A・B, 4551, 4552の一連の建て替えの一群は、建物規模の縮小や柱穴の倭小化を繰り返しており、8世紀後半代からかなりの期間存続していたと考えられる。SB4550Bの柱根を残したまますぐ横に新しい柱穴を掘って、建て替えを行う事等は、火災等による原因を想像させる。いずれにせよ、この建物はこの近辺での中心位置的な、継続させなければならなかった中核建物と考えられよう。これに伴う建物は東隣のSB4556であろう。柱穴は小さいがSB4550と計画的に配置された付属建物と考えられる。南半の大型建物SB4555は、本文中でも詳述したとおり、柱間心々距離にばらつきが大きく、主軸方位の東偏性、他遺構との切り合い等から考えて、出土遺物の示す7世紀後半代まで遡る可能性がある。次に、溝SD4543、廃棄土壌SK4545・4546等は、8世紀前半～中頃の埋没と考えるが、これに伴う建物は時期的に合致するものは無い。これ以降、8C後半に埋没してしまう斜め溝のSD4542は自然流路的なやや蛇行する砂溝であり、蔵司西側谷の第4次調査木簡出土谷と関係するものとならうか。

以上の年代観と遺構の配置から、西方の第96・96補・142次調査結果とつき合わせてみよう。(Fig.16・17)本文中で詳述したように、第186次調査のSB4555は西方へ桁行線を延ばすと、SB2825のラインと一致してくる。このことから、同建物は東西に縦列で並ぶ一対の東西棟となると考えられる。第96次調査で明らかになったようにSB2825の西の飛行ラインは、北側のSB2830の西の桁行ラインと一致し、企画配置されており、更に西方の第142次調査でのSB4000や、今回のSB4555を加えて考えてみると、8世紀後半以前のこの丸瓦地区に、未だ全体像は明確ではないが、官衙相当の規模を持った建物が一群をなし、企画性をもって配置されたことは明らかである。これらのことから、まずは上記の建物群をもって「丸瓦地区官衙」と呼称することを提議したい。更に、今回調査のSB4550～4552や西のSA2833、東方の第137次調査時のSB3940・3945・3950の南北棟の一群等の、8世紀後半代を中心とするような「官人居住」建物には相応しくない類までも含めて、この地区の政庁Ⅱ期前半代までの官衙域として「丸瓦地区官衙域」と呼称したい。ただしこの地域では遅くとも9世紀後半代には、第142次調査区で井戸とともに居宅の建物がみられる如く、丸瓦地区「官人居住域」となるのは確実であろう。そしてその規模も東側の大桶地区「官人居住域」に比べれば小規模なものである。丸瓦地区の「官衙域」から「官人居住域」への以上のような変遷の様相も、他の不丁・日吉等の政庁前面域の様相とは自ずから異なるのは立地から見ても当然であろう。次に「丸瓦

SB4550は
中核的建物

「丸瓦地区
官衙」の提
称

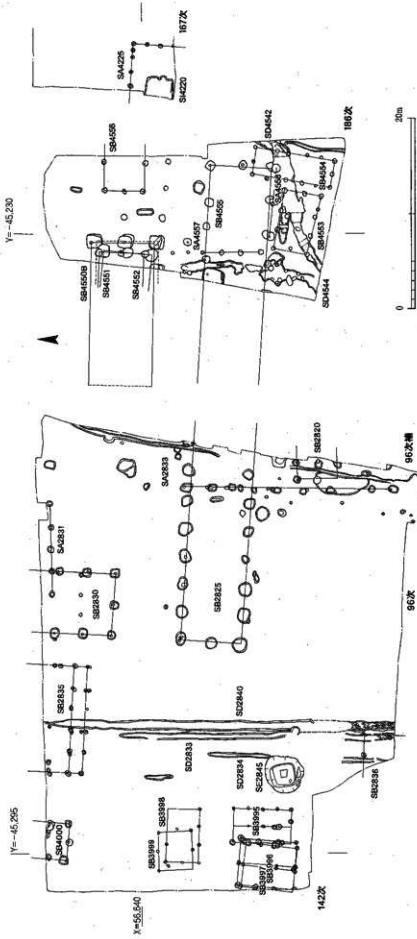


Fig.16 第186次開掘瓦丸地区「客人居住域」(1/400)

II 調査の内容

地区官衝域」の範囲についてみると、南は第96次調査のSD2810東西溝を東西に延長したラインで止まりそうで、北は、第96・142次調査の結果言及されている如く、SB2830・4000が北側へ延びそうな事から、条坊の整備以前の建物群となり、旧地形からみて第4次調査で確認された蔵司南辺築地ラインを西へ延長した、現学院中学校校庭南半ほどまでとなろうか。東は、大楠地区「官人居住域」の西端から第137次調査区までの間が未調査であり、未だ明確にできない。

最後に、この「広丸地区官衝域」の性格については、今回の第186次調査でも金属工房を想定させる小鍛冶滓等が多く出土したことや、北側の米木の丘陵が金属・瓦等の工房が集中した地区であることから見て、今後の分析如何によってはこれらの工房を統括し、生産品を管理するような司の想定も可能となって来るだろう。

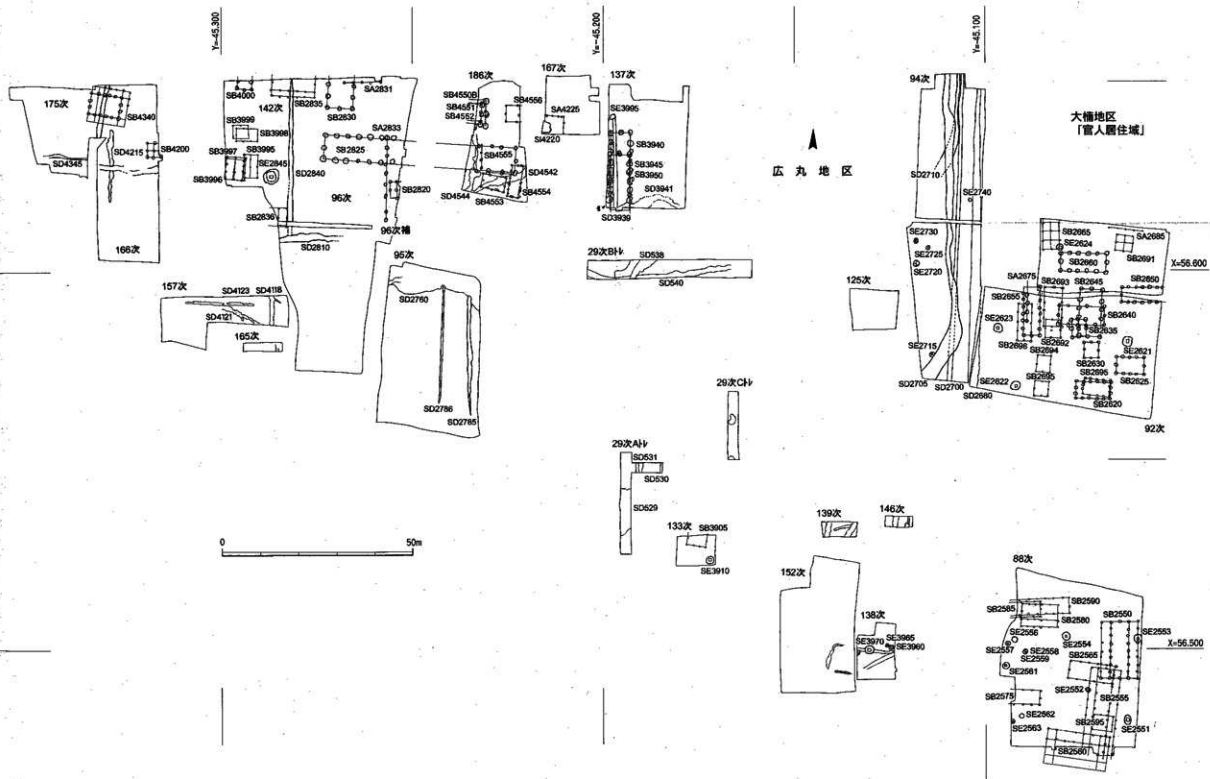


Fig. 17 広丸地区主要遺構配置図 (1/1,000)

3 第187次調査 (不丁地区の調査)

(1) 概要

調査地は政庁の前面に広がる官衙域のうち、西側に設けられた不丁官衙地区の南端にあたり、政庁南門から南西に220m隔たった位置となる。当該地は太宰府市による都市区画整理事業後も水田として耕作されていたが、今回計画調査として、土地所有者の快諾を賜り、発掘調査の機会を得た。

調査の結果、予定対象地のうち南西側半分は旧御笠川によって大きく挟まれて、遺構が全く残っていない落ち込みとなっている事が判明した為、面的な調査面積は520㎡に止った。調査は、厚く、瓦・土器を極めて多量に含んだ包含層を手掘りした事もあって、平成14年5月20日～9月30日に及んだ。現在の住居標示では太宰府市観世音寺2丁目7番にあたる。

この地点は、不丁官衙の南端にあたるが、実は不丁官衙域はSD2015東西溝を南限とするというのが従来の見解であった。今回の第187次調査区は更にその南方に在り、これまでの第129次調査を始めとする周辺の調査で遺構の希薄な地であるとされてきた位置に該当する。然るに、調査の結果、8世紀を中心として10世紀に及ぶ掘立柱建物6棟や区画溝等が検出され、従来の不丁官衙域の南方への拡張を検討せざるを得ない程の多大の成果を得ることが出来た。

(2) 基本層序 (Fig.23・26, PL.17・18・21)

上位層 以下, Fig.23のSD4570東端壁土層図に従って概説したい。現水田耕作土が40～50cmと厚く最上部に被り、その下に区画整理時の真砂土の客土が70cmみられ、その下に旧水田耕作土と床土がみられるが、耕作土は大部分除かれている。人為的な床土形成層を挟んで更に下にもう一枚水田耕作層があり、区画整理以前にも耕地整理等が行われたことが知られる。その下の床土と連続して黄灰色土の溜まり状の落ち込みが調査区各所に認められる。これまでは本遺跡に対する攪乱層であり、その深さは現地表面から150～180cm以上となる。

旧水田面が
2枚

包含層 発掘区の北東隅付近のみは旧水田床土下がすぐ地山(遺構面)になっているが、それ以外は遺構面が全体的に南へ傾斜している関係もあって、暗褐色～黒褐色土の包含層が、南端に厚く、30cm程堆積している。多量の土器・瓦等の遺物を包含しており、この一体の遺跡としての濃密さを示している。南～西端の段落ちは平安期以降の川の蛇行による挟れであるが、この段落ちに至る斜面の凹部には黄灰色土が厚く堆積し遺物を多量に含むが、上記の如く暗褐色包含層を切る事から、川が挟った後の攪乱的性格の土層と考えられる。

部厚い包含
層

整地層 本調査区検出遺構の中ではSB4561・4562・4560, SD4566・4567, SK4573・4574等が8世紀代を中心とした古段階のものであるが、これらの遺構の為の整地層は認められない。沖積層そのものが遺構面となっている。ただ、北東半のSK4574やSD4566, SB4560, SD4567西半部の上面には黄茶色の整地層が薄く各所に被っており、遺構検出の際にこの整地層を2～3cm剥がないとできない事も多かった。また、SD4569の南半部の両岸部分では黄色粘質土が敷かれており硬化面を形成していた。これら2種類の整地層は、各遺構との切合い状況や範囲等から見て、SB3815・4563, SD4569等の平安期以降に下る時期の遺構の造営に伴って施された整地と考えられる。

平安期の整
地層

II 調査の内容

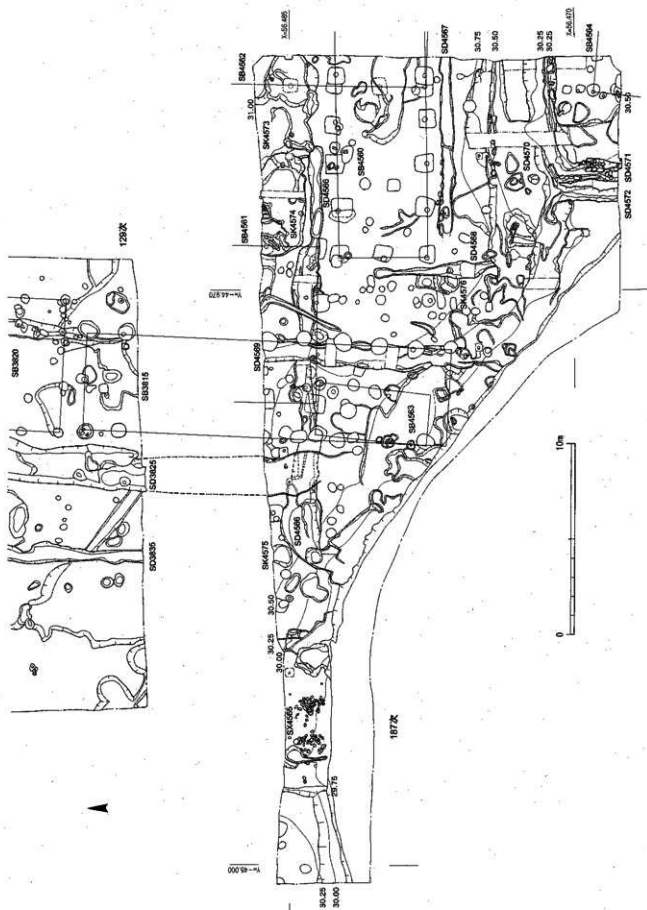


Fig. 18 第187次調査箇所全体図 (1/2000)

地山遺構面は上記の如く、西半の遺構に伴って被る整地層部分以外は、大半が自然堆積の沖積層である。上から順に、黄～灰色粘土、花崗岩風化土の二次堆積土(砂質)、粗砂層、灰褐色粘土、黒色粘土(泥炭炭層)、淡灰色粘土となる。部位によってはこれらのうち幾つかが無い場合が多いが、基本的には花崗岩風化土の二次堆積土と黒色粘土は、発掘区内の何処でも認められる。これらの土質は、上半が砂質で水はけが良く、下半が良質の各種粘土層で安定した地盤となっており、官衙地区遺構に良好な条件を持った土地と言えよう。

下部に安定した粘土層

(3) 遺構と遺物

SB4560 (Fig.19, PL.9・10・12・13)

南北2間、東西4間以上の東西棟獨立柱建物で、南側にSD4567、北側にSD4566、西側にSD4568の雨落溝を伴う。また、南側のSD4567雨落溝の北縁には、基礎化礫石の性格と思われる花崗岩石列が残る。主軸をN0°30'Wとほぼ真北にとり、各柱間心々距離は230～250cmとばらつきがあるが8尺等間(1尺=29.6～29.8cm)に復元できる。柱穴は一辺1mの方形で、柱根が残っているものが多く、底部で直径22cmであるが、柱痕の検出上面では直径28cmの円柱となる。柱穴内埋土はわりと粗い単位で埋め込まれているが、かなり締まっている。柱基底部分を長方形無文で押さえたり、柱に接して瓦を立てたりする丁寧な施工も見られる。また、埋土中に土師器皿が水平に埋納されている例もある。なお、西辺架行の中央の柱穴のみ浅い。また、東側でSB4562の柱穴を2箇所で切る。出土遺物(Fig.37-4～24)は8世紀前半～9世紀前半までの時期を示すが、うち8・11・12・24は柱穴上面で浅い新期遺構と重複した部分からの出土品で、また、18・21・23は柱穴最上面出土品である。19は柱穴掘方内の中位に水平に供献された状態で出土した完形品(PL.12-1)で、当建物の年代を示す良好な資料である。ただ、4～7の口縁や、14の磨きを施さない点などは新しい様相が認められる。以上の検討から、8世紀第4四半期がSB4560の年代とされる。

基礎化礫石列と雨落溝

梁中央の柱穴は浅い

SB4561 (Fig.20, PL.10・11・13・15)

調査区の中央北端に位置し、東西3間、南北に1間以上となる獨立柱建物で、北側の第129次調査区でこれに対応する柱穴が見られない事から、南北棟だとすると南北に最大4間となる可能性がある。南北軸をN1°15'Eにとり、柱間心々距離は9尺等間(1尺=30cm)だが、8.5尺、9.5尺の所も在る。柱穴は一辺1mの方形で、埋土は黄・灰色系粘土を多用して極めて堅固に突き固めており特徴的で、周囲の地山が砂質土の為、逆に地山と見間違えう程である。柱痕径は23cm程で、柱は抜かれていない。各柱穴はSD4566・4569、SK4574や他の小ピット等すべてから切られており、この地区での最古段階の遺構であることを示している。出土遺物(Fig.38-1・2)は8世紀末～9世紀初を示すが、2点ともSD4569溝に切られて僅かに残った柱穴内出土品であり、検討を要する。遺構の切合い上から、8世紀後半のSD4566より古段階となることから、当建物の時期はそれ以前と考えざるを得ない。

黄色粘土の柱穴埋土

SB4562 (Fig.19, PL.9・13)

東端にて南北に並ぶ4柱穴である。南・西方には延びないことから、南北3間以上、東西1間以上の獨立柱建物となろう。SB4560の柱穴に2箇所で切れ、SK4573や他の小遺構からも切られている事から、本調査区内では主軸を同じくするSB4561とともに、最古段階の建物

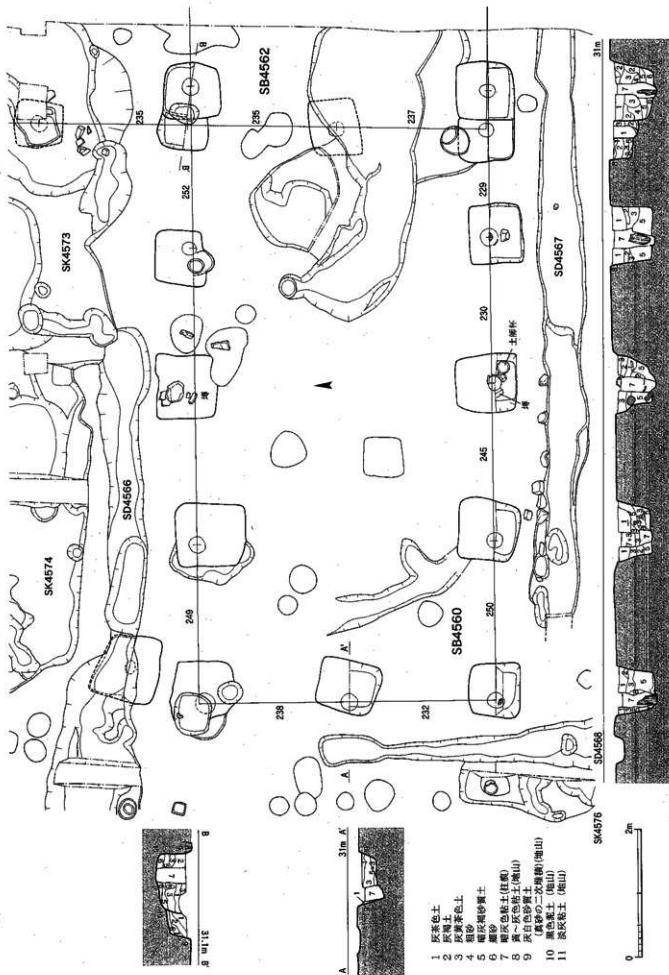


Fig. 19 SB-4560・4562発掘図 (1/60)

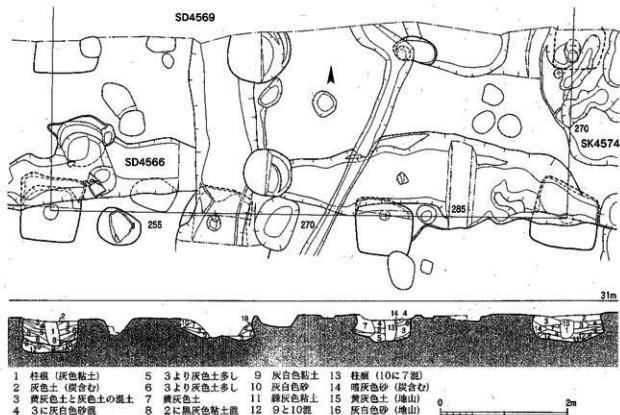


Fig.20 SB4561実測図 (1/60)

となろう。各柱間は8尺等間(1尺=29.4~29.6cm)で主軸方位はN1°Eとなる。柱穴はSB4560とほぼ同じかやや小さめの一辺90~80cmの方形プランをなし、柱痕は直径25~22cm。柱穴埋土はSB4560のそれよりも黄茶色系の粘質土を多用し、SB4561同様に固く締まっている。出土遺物(Fig.38-3)は8世紀第3四半期で、切台いから考えてもこれより新しくはなり得ず、当建物の時期を示すものであろう。

SB4563 (Fig.21, PL.10・13・14・16)

調査区中央に位置し、SB3815と重複するように復元される1×3間の南北棟掘立柱建物である。主軸をN5°30'Eにとり、梁行柱間は9尺、桁行各柱間は6.5尺(1尺=30cm)と小規模である。直径90~60cmの円形柱穴で、柱痕が明瞭でない柱穴が多く、柱は抜かれているようだ。SD4566を切り、埋土や主軸が大きく東へ振っている事等から、本調査区内で最新段階の建物と推定される。なお、北東隅の柱穴上面に50cm大の花崗岩が上面を水平に保って検出され、礎石かと考えたが、下の柱穴が柱痕を残す明確な掘立柱であることを認めたため、柱を抜き取った後のものであることが判かった。出土遺物 (Fig.38-4~8)は8世紀後半から9世紀前半を下限とする時期幅を示す。SD4566を切ることから、この建物自体は9世紀を上限とするものとなるが、東側の南北溝SD4569と平行となる事を併考すると、10世紀代まで降る可能性も捨てがたい。

SB4564 (Fig.18, PL.9・17)

調査区東南隅にて、その北東隅と思われる3柱穴だけが検出された掘立柱建物である。規模

小規模建物

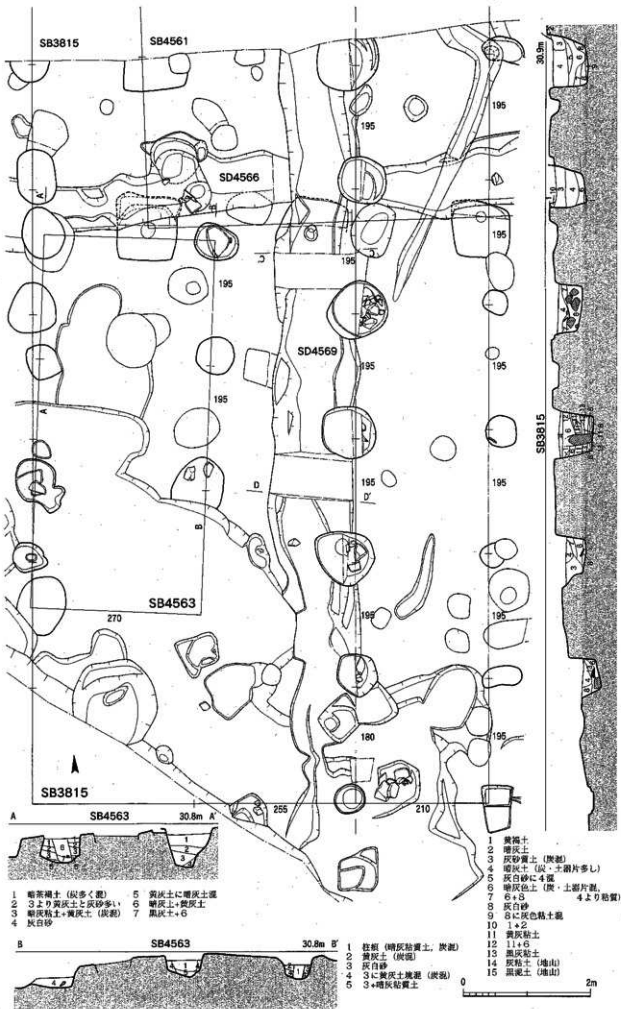


Fig.21 SB3815・4563実測図 (1/60)

や正確な主軸方位は不明だが、柱間6.5尺前後で主軸は東にかなり振りそうで、本調査区内ではSB3815やSB4563に類似したものとなろう。この位置は、幅5m弱の東西溝SD4570の南側が再び高まりとなった部分で、これまで調査された不丁地区官衝域の最南端にあたり、この部分よりも更に南側へも建物が存在するという事となった訳である。官衝域への推定門跡（通称「朱雀門」、現在の朱雀通りと御笠川の交わる北岸）を西へ延ばしたライン近くまで官衝域が広がっていた可能性を示す建物である。出土遺物（Fig.38-9）は7世紀後半を示すが、取りあえず、ここでは単に上限を示すだけ考えておこう。

SB3815 (Fig.21, PL.9・13~15)

北隣で検出されていた第129次調査での掘立柱建物が南に長く伸びた同一建物と判断した。東西2間、南北11間の南北棟に、東側に1間分の縁の付いた建物で、主軸をN3°Eにとる。梁行柱間々距離は8.5尺、桁行6.5尺（1尺=30cm）等間となる。東側縁部分への張り出しは7尺で、南北は各6.5尺で身舎部と一致する。建物南端付近は後世の川の侵蝕によって遺構残存状態が良くない為建物の復元に若干の不安があり、南北10間の建物に南辺にも縁または甍が付く可能性も捨て切れず、また、南方へ建物自体が更に延びることも否定はできない。柱穴は直径100~75cmの円形で大きい。埋土は暗灰色系の軟質で、SB4560~4562のものと同様であった差異を見せる。底面や下半で石や瓦を用いて根固めしているものが多く、柱は抜かれている。一つだけ柱根部が斜めになって残っている木柱があり、下端に筏穴を持つが、抜く途中で折れて放棄されたものか。建物の東側に並ぶ柱穴は、直径50~30cmと身舎の柱穴と比較して格段に小さく、柱穴も認められない事から、縁の束柱と考えられよう。SD4566・4569を切り、それらの上面と東側周辺にまで黄灰色系の整地層が被るが、この建物造営に関する敷地と考えられる。出土遺物（Fig.37-1~3）は1が10世紀後半~11世紀前半代、3が11世紀以降のより新しい様相を示す。よって切合いから考えても、当建物は11世紀前半を前後する時期のものと推定しておきたい。

SD4566 (Fig.18・22, PL.9・10・13・19~21)

SB4560の北側から始まって、西へ長く延びて南へ直角に曲がる溝で、下半には砂質土が入り、西へ流れる排水の役目もあったと考えられる。現存しないが、本来もつと東から続いていてSB4560北辺では雨落溝となっていた可能性が強い。幅200~80cm、深さは中央付近で40cm程である。SB4561を切るが、SK4573, SB3815・4563, SD4569・3825に切られ、本調査区では最も古い溝となる。埋土は全体に炭片を多く含む、土器・瓦類の出土も平均して多い。出土遺物（Fig.44）のうち下層（1~11）は8世紀後半代が大部分で、図示できなかった

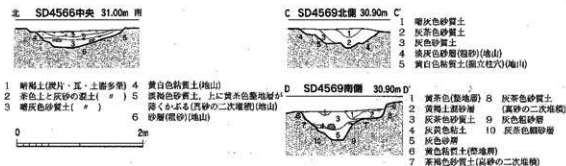


Fig.22 SD4566・4569土層断面実測図 (1/60)

更に南へ延びる建物

長大な南北棟建物

筏穴を持った柱頭

II 調査の内容

大量の土器もこの時期に集中するものであるが、9は9世紀初以降、10は10世紀中～11世紀前半の幅の中のもので、12も9世紀以降となろう。これらの新期のものは遺構の切合いから見ても明らかに異質なもので、新しいピット等が存在していたと解釈せざるを得ない。上層(13～21)は7世紀第3四半期～8世紀末(～9世紀初)のもの。出土層位が不明瞭なものの(22～40)は8世紀後半～9世紀初が大部分であるが、36は10世紀前半を最下限とするもので、26・33・37・38・40も9世紀後半代以降に降る可能性がある。以上のことから、この溝は8世紀後半代(第4四半期)に掘削され、9世紀後半代にはほぼ埋没したものと考えられる。

SD4567 (Fig.18・19, PL.9)

SB4560の南辺に沿って東西に走る雨落溝で、幅80～50cm、深さ10cm強となる。この溝の西半部では上面に黄茶色系の整地層が2cm程と薄くかぶっており、これを削いで検出したが、西端部ではこの整地層を残したので、溝の西端の状況は把握していない。この整地層は当然、すぐ北側のSB4560の柱穴をも覆っていた。また、この溝の北縁には花崗岩の25～20cm大の塊石が点々と残っており、その抜き跡も部分的に検出することができ、SB4560の基礎化粧の緑石と考えたい。溝底は全体としては西へ傾斜している。出土遺物(Fig.45-1～11)は8世紀中頃～8世紀末(～9世紀初)を示すが、この溝の掘削自体はSB4560と同じ8世紀第4四半期頃と考えておきたい。

基礎化粧の
緑石

SD4568 (Fig.18・19, PL.9・13)

SB4560の西側に沿って南北に走る浅い雨落溝である。その北半は削平されて残らないものか、或いはSB4560建物の出入口として当初から無かった可能性も強い。幅90～20cm、溝底は南へ傾斜しており南端の最深部で15cmだが、殆どは5cm程と浅い。南端はSD4570の最上層埋没土に切られているが、SD4570掘削当初期は連続していたものと推定される。SK4576を切る。出土遺物(Fig.45-12～20)は8世紀中～9世紀中(～後半)を示すが、やはり掘削時期はSB4560と同じ8世紀後半で、9世紀後半までには埋没したものと考えられる。

SD4569 (Fig.18・21・22, PL.9・10・13・14・20)

調査区中央に南北に走る灰色系の砂質の強い埋土の溝である。幅150～110cm、深さ60cm程としっかりした溝であるにも拘わらず、北側の第129次調査区では検出されておらず、その間で切れるのか、直角に曲がって他の溝とつながるものなのかであろう。溝底は南北両端での高低差が50cmもあり、常に水が流れる状態で砂が溜まったものと考えられる。上面には黄茶色の整地層が薄く認められ、SB3815造営に伴う整地と推定される。SD4566、SB4561を切り、SB3815に切られる。出土遺物のうち下層のもの(Fig.45-21～24)は8世紀中頃～後半を示すが、24は9世紀後半前後かと思われる。上層(25～31)は8世紀中～10世紀前半を示す。出土層位の不明な32・33のうち、33は10世紀中頃となる。遺構の切合いも併考すると、当溝の掘削は9世紀後半或いはそれを若干降る時期で、10世紀中頃には埋没したものと考えられる。

砂で埋まっ
た南北溝

SD4570A・B (Fig.18・23, PL.9・10・17・18)

東西に走る大溝で、溝底が2条になり、北をA・南をBと仮に区別したが切り合いは無い。ただ、最終埋没土(図中の12層)で見ると、Aの方が最後まで溝形状をなしており、Bの方は22層や20層が酸化鉄によって茶色をなし、何段階かにわたってゆっくりと埋没した状況を示す。また、ベルトを残した中央部分ではAは炭の多い粘質土、Bは砂質の埋土で、明らかな

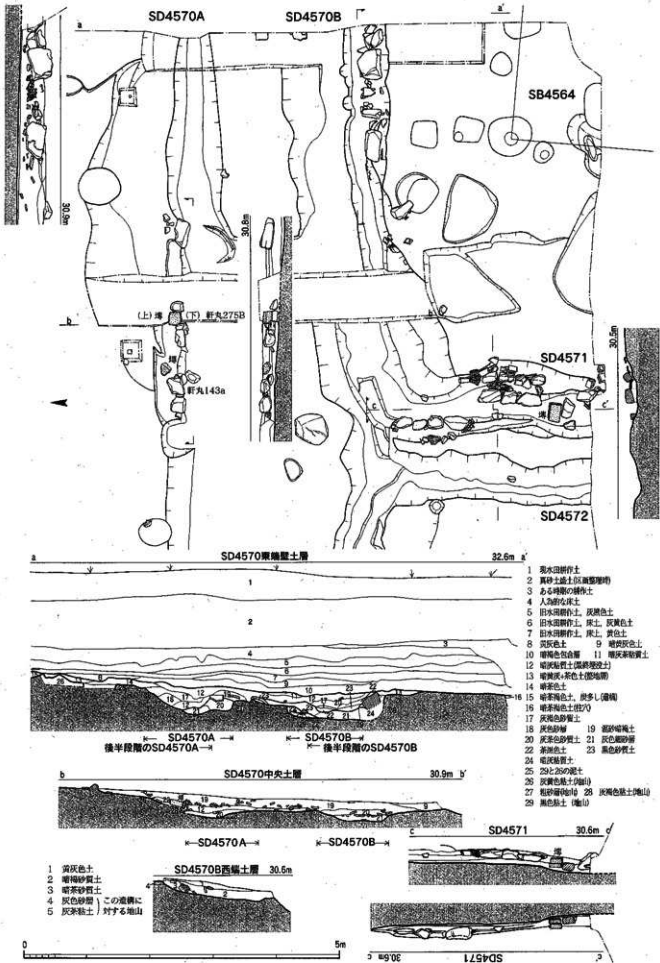


Fig.23 溝SD4570~4572東半実測図 (1/60)

II 調査の内容

堆積土質の違いがあり、この溝の北側の方向がより生活活動性の強い空間であったことを示すものか。全体の溝幅は東端で380cm、中央で480cm、最大深さは55cm。Bは中央付近で南へ直角に折れてSD4571・4572へとつながり、切り合いが認められなかったことから、これらは本来同一の連続した溝と考えられる。Aの北岸には長さ315cmにわたって護岸の積石が残り、花崗岩の大小の塊石を据えている。注目すべきは、ベルトにかかった部位には基底部に軒丸瓦(275B型式 老司II式)を瓦当面上に水平に据え、その上に長方形無文塼を横んでいることである。更にもっと西寄り部の積石でも最下位に軒丸瓦(143a型式)や縄目擦り消し玉縁丸瓦大片を用い、縄目平瓦片も充填材として各所に多用されている。次にBの南岸では、長さ60cm、高さ40cmの大石を護岸に用い、縄目瓦片をも多用している。ただ、ここで明らかになったのは、石積基底面が溝B底よりも15cm程浮いており、その間にも瓦片がかなり混入していることから、石積護岸自体が明らかに溝掘削当初のものではなく、掘り直した後の修築による事が明らかになった。溝全体の溝底レベルを見てみると、東端から中央へ下がり、南へ直交するSD4571・4572北端部分で最も低くなり、西半もSD4568の南方あたりが最も高くなり中央方向へ下がっている。この事からこのSD4570のこのあたりの水はSD4571・4572によって南方へ排水されていたものと考えられる。ただし、この溝の西端付近は明らかに西の方へ傾斜していることから、このあたりだけの排水溝と考えられる。そういう意味から考えると、SD4570全体の最大の役割は東西方向の区画に在ったと性格付けられよう。礎石風の花崗岩(55×50cm大)が溝中央にて検出されたが、これは暗褐色包合層の上に乗っており、掘方等も見出されなかったことから、少なくとも平安中～後期以降にこの位置に置かれたものと考えられる。出土遺物(Fig.46～48)のうち、北岸石積裏込めに混入したもの(Fig.46-1・2)は8世紀後半代、SD4570A下層(3～33)は8世紀中頃～10世紀中頃、SD4570B下層(Fig.47, Fig.48-1・2)は8世紀前半～10世紀前半、SD4570A上層(Fig.48-3～9)は8世紀後半～9世紀代、SD4570B上層(10～33)は8世紀前半～10世紀前半。A・Bの区別がつかない上層部出土の34～44は8世紀後半～10世紀中頃の時期を示す。以上の事から溝の掘削は8世紀後半代で、何度も改修を経て10世紀前半～中頃までは機能していたと考えられる。

SD4571 (Fig.23, PL.19)

既述の如く、東西区画溝であるSD4570の排水溝で、長さ3m強分を検出したが、まだ南方へ延びている。東西両岸側の石組が残っており、東側の石組の裏側には縄目平瓦、縄目擦り消し丸瓦片を密に敷いている。一部が石組の下にもぐっており、何度かの改修の後の最終段階に近いものが石組と推定される。溝埋土は土師器細片を多く含む砂質層で、底部では粗砂層となり、流水による埋没が明らかである。石組間の溝幅は20cm弱に復元でき、その規模から見て、実際は暗渠であった可能性が高い。なお、注目すべきは、南半の中央に完形の長方形無文塼2枚がびつたり重ねられて検出された事である。その位置が溝中央、流水を完全に巡る部位であり、そこに置かれた理由は理解出来ない。出土遺物(Fig.49-1～14)は8世紀第4四半期～10世紀前半を下限とする層が見られ、SD4570と連続することから、やはり上記年代の中で掘削・埋没したものと考えられる。

SD4572 (Fig.23, PL.9・19)

SD4571の西側に平行して走る灰色砂質土埋土の小溝で、SD4570Bと連結している。溝底

護岸に縄目瓦片や軒丸瓦転用

東西方向区画溝

長方形無文塼が2枚

の微地形とレベルからたどると、SD4570Bの西半のSD4568南方あたりから東へ溝底が下がって行き、このSD4572へ直角に曲がって、南へ排水された状況が認められる。東隣のSD4571がSD4570Bの東半からの排水暗渠であることと対になっている事がわかる。底は極めて凹凸著しいが、石組や瓦使用等は全く認められず、SD4571と対照的である。このことから、層位的には確認出来なかったが、SD4571・4572間には掘削時期、或いは最終改修等に時期差があるのかもしれない。出土遺物 (Fig.49-15~18) は8世紀後半~10世紀前半代を下限とするもので、SD4570と連続することから、この年代の中で、掘削・埋没があったと考えられる。

SD3825

(Fig.18, PL.9・13・14)

調査区中央に南北に走る浅い暗褐色土埋土の溝で、幅2m前後、深さ20cm弱で、南方で消滅する。北側の第129次調査での溝と連続する同一溝と考えられる。東西溝SD4566を切り、SB3815と並行することから、関連が深いと推定される。出土遺物 (Fig.49-19~25) は8世紀末~9世紀代と思われるが、24の年代が確定できない。切合いからみて9世紀後半或いはそれ以降に掘削されたものと考えられる。

SK4573 (Fig.24, PL.16・17)

北東隅に位置する浅く大きな廃棄土場で、何回もの掘り直しが行なわれ、最終的には西側のSK4574を切って、埋没時点で上層埋土である黒色土がぶついている。長さ640cm以上、幅330cm以上、深さ35cmで、東半が深くなっている。層位的には東半部に下層の暗褐色粘質土が厚く堆積し、西半部には上層である黒色土の方がより厚く堆積している。全体に極めて多量の出土遺物が得られたが、特に西半部は

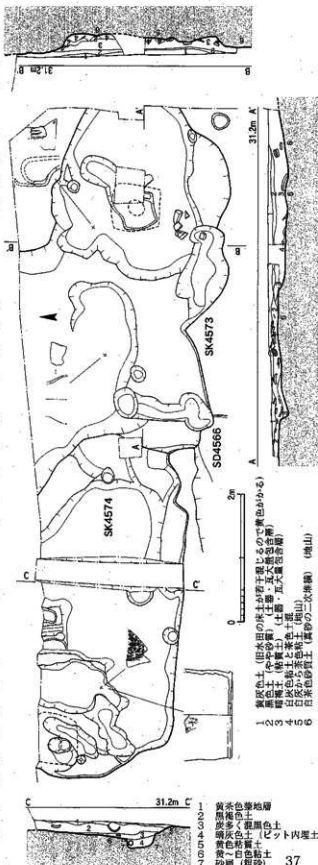


Fig.24 SK4573・4574築造図 (1/80)

II 調査の内容

淡青色ガラス器片

土師器杯類と瓦を始めとする遺物が土の量よりも多い程、びっしりと填まった状況であった。特筆すべきは、図示した位置のそれぞれの底面近くから、淡青色ガラス容器片 (Fig.27-1)、長沙窯黄釉褐彩水注の把手部分 (Fig.40-17)片、銅製鈿帯 (Fig.27-2)、縄目一枚作り平瓦完形品等が出土したことである。遺構の切り合いとしては、SK4574、SD4566、SB4562よりも新しい。下層の暗褐色層出土遺物 (Fig.39-1・2) は8世紀中頃を示す。上層の厚い黒色土出土遺物 (Fig.39-3~50, Fig.40) は8世紀中~9世紀後半の幅があるが、その大半は8世紀末~9世紀初のものである。また、層位の不明なFig.41は8世紀末~9世紀初を中心とするが、10のようにSB3815造営に伴う整地によるものかと思われる10世紀後半~11世紀前半代のももの見られる。この土壌の位置は調査区内で最も高く、遺構面の上に包含層が残っており、すぐ上が水田の床土になっており、新しい遺物が混入する可能性は高い。以上の諸状況から見て、当土壌の当初掘削はSB4560と軌を一にする8世紀後半の末に近い頃で、9世紀初頃まで大量の廃棄が行われ、9世紀後半代に最終埋没したものと考えられる。

SK4574 (Fig.24, PL.9・16・17)

SK4573の西側に連続して検出された大きく浅い廃棄土壌である。既述のとおり東端でSK4573の黒色土が被り、最終埋没はこちらが古い。最上層には薄く黄茶色の整地層が見られ、SB3815段階のものと考えられる。東西長540cm、南北幅は230cm以上、深さ40cmで、底面は凹凸が顕著で何回もの掘り直しがあつたものと思われる。西端でSB4561の柱穴を切る。出土遺物は多量であったが、SK4573の西半部程ではない。特筆すべきは、西よりの最上層から出土した長沙窯黄釉褐彩水注の下半部と貼花印文部である。特に後者の精緻な草花文メダイオンは第98次調査 (不丁官衛地区中央部で100m北方) 出土の上半部と19年ぶりに接合した逸品である。また、中央の土層ベルトにかかった柱穴からは、須恵器長頸壺頸部と土師器高杯が出土し、柱穴廃棄祭祀を想起させる。出土遺物 (Fig.42) のうち1~4は上記中央柱穴出土品で8世紀後半~末の様相を示す。5~7の底部・下層出土品は8世紀末~9世紀初頭、8~31の上層出土品は8世紀前半~9世紀後半を示す。最上面出土の27や31は10世紀以降の可能性がある。以上の検討から、当土壌は8世紀後半に掘削され、9世紀後半にはほぼ埋没していたものと考えられる。

草花文メダイオン

SK4575 (Fig.25, PL.10・19)

西半北端部に位置する黒褐色理土の小土壌で、東西120cm、南北100cm以上、深さ45cmとなる。北側の第129次調査のSD3835の延長線上にあるが、溝ではなく単独の廃棄土壌と考えられる。他に比べて瓦の出土量が著しく、瓦を片付ける為に掘られた所謂瓦溜の一種であろう。出土遺物のうち実測に供し得る土器は無く、縄目一枚作り段階の丸・平瓦が大半を占める (Tab.11)。ただ、斜格子叩きの平瓦片2点が含まれており、これは叩打痕文字瓦901B (平井凹字) と901Hc (平井) の格子目に各々酷似した叩きを持つもので、共存状況が縄目一枚作り平瓦段階の後半と重複するか、それに連続する時期を示すと思われることにより、この土壌の下限を9世紀後半前後と考えておきたい。

瓦溜状小型土壌

SK4576 (Fig.25, PL.9・10・13)

SB3815とSB4560に挟まれた間で、SD4568に東半を切られて位置する。南北220cm、東西90cm以上、深さは南半が19cm、北側には土師器小甕が入った深さ52cmの穴がある。南

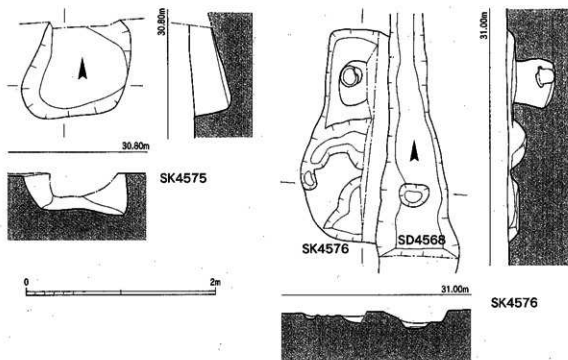


Fig.25 SK4575・4576実測図 (1/40)

半の底面は凹凸著しい。黒色土埋土で、炭・灰・焼土が入るが、土壌の性格は明らかでない。出土遺物 (Fig.43-1~10) は7世紀後半~8世紀末(~9世紀初)を示すが、8~10は8世紀中頃の古い様相を示す。よって、8世紀中頃に北半が掘削され、8世紀末~9世紀初頭に埋没整地されたと推定される。

SX4565 (Fig.18・26, PL.10・21)

調査区西半側は、南半が旧河川の蛇行により大きくくぐれており、遺構の残存は北辺際にしか認められなかった。西端付近では不丁官衙地区の西を区切る南北大溝SD320の検出を期待したが、今回の調査区内では確認できなかった。このSX4565は幅9.7~7.3m、深さ0.7mの暗灰色砂の落込みである。北側の第76・129次調査区でこれと継がるような溝が見当たらないので、この部分だけの小さな谷状の落込みと考えられる。底面には東西2箇所集石が検出

谷状落込み

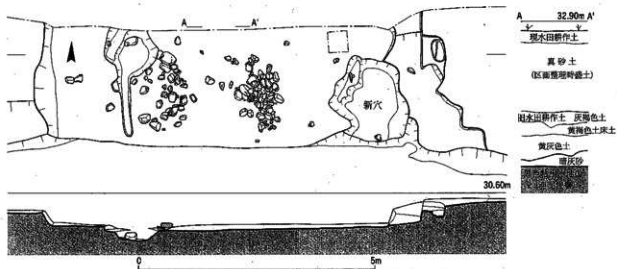


Fig.26 SX4565実測図 (1/80)

II 調査の内容

され、その間に瓦片等が詰まっていたが、人工的な築石とは考えられない。東寄りで近代の農業用水路に関する大きな掘り込みに切られ、出土陶器片から見て、このSX4565は近世の、脱落の際の崩壊部分に砂が溜まった自然落込みであろう。

出土遺物 (Fig.27~53, PL.45~53)

西アジア系 ガラス

ガラス (Fig.27-1) SK4573出土品で、共伴土器の年代から、8世紀末~9世紀初頭にしばらくられるものである。26×19mmの小破片だが、なで肩の胴部径55mm弱に復元できる小壺形の容器である。気泡を多く含む緑色透明ガラスで、厚さは中央上端が2.8mm、上端左右角が1.6mm、下端が0.8~1.1mmと胴部へ薄くなる。比佐陽一郎氏による成分分析の結果、西アジア系のソーダ石灰ガラスで、鴻臚館出土品に酷似することが判明した。(本書80頁参照)

銅製銚帯 (Fig.27-2) SK4573下層出土品で錆化著しいが、幅27mmで四隅に留紙を持つ長方形形で、佐賀県大黒町遺跡出土品と同類か。長方形孔の有無は不明。

石帯 (Fig.27-4・5) いずれも黄灰色土出土品で、4の丸轆は黒色良質の安山岩製で14.4g。5の巡方は長石・黒雲母・角閃石を含む火成岩製で28g。白色に黒灰色斑が多く入った色調で白色部は風化している。

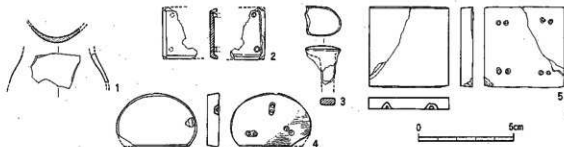


Fig.27 ガラス・銅製品・銚帯実測図 (1/2)

銅製品 (Fig.27-3) SD4570B西端中層出土品で、緑錆に覆われている。釘か針と思われるが、下方が断面長方形になっており、何なのか明確にできない。

鉄器 (Fig.28-1~13) 角釘類は頭部が丸い類 (10・11) と片方へ折り曲げた通常類がある。SD4566やSK4573, SD4568等, SB4560近辺から多く出土しており、この建物に使用されたものか。12は厚手(4.5mm)の鉄板使用製品。13は湾曲しており、下辺は刃部で、いずれもSK4573出土。

8c後半に 銅鑄埋藏

鑄造関連遺物 (Fig.28-14~21) 土製銚型5点、取瓶3点、銅片10点、銅滓4点 (Tab.8)等が出土しており、これらの出土部位はSD4566の中央付近と、その北側のSB4561の柱穴を切る小ピットに最も集中し、8世紀後半に調査区中央北辺で銅の鑄造が行われた事を知り得る。14は内面に明確な真土は認められないが、本体の土自体が極めてきめの細かい土で、内面に薄く数層貼り付けた痕跡も見られる。天井中央付近に湯口らしき痕跡があるが不明瞭。15も内側に真土は残っていないが、断面正円形の湯口部の内側に厚く微細砂の真土が残っており、本体部内面の真土は剥げ落ちたものであろう。湯口部が円筒状に長く、真土を貼っている事から、半球形に棒状の軸が付くもの (例えば眉底付背の伏鉢のような) なのかもしれない。16は口径19cmに復元できる口の開いた小型銅状の器の銚型で、内面に細かい砂質の真土を1.5mm厚さに貼っている。製品としてはこの真土の下端までで、それ以下は中型基部と密着する部分となろう。17は胎土自体がきめ細かく真土そのものという感じで、製品は直径5.2cmの小型釘隠し

状となろう。18は、鋳型と思われるが、真土も認められず、図中点線から内側が灰色変部で、下方に熱変部が広がっていることから、湯口部の可能性も残しておきたい。19～21は取瓶で、19の内面には暗赤色付着物が全面にみられ、鋳鋼用と考えられる。20は内面に黒～暗赤色付着物がこびり付き、一部に黄茶色の錆もみられ、鋳鉄用であろう。以上のうち14・16・17・19がSD4566, 18がSD4570B, 21がSD4569出土品で、他は包含層等からのものである。

銅冶関連遺物 (Fig.28-22, Tab.8) 22はSK4573出土品で、孔径2.4cmの面取り類。また、

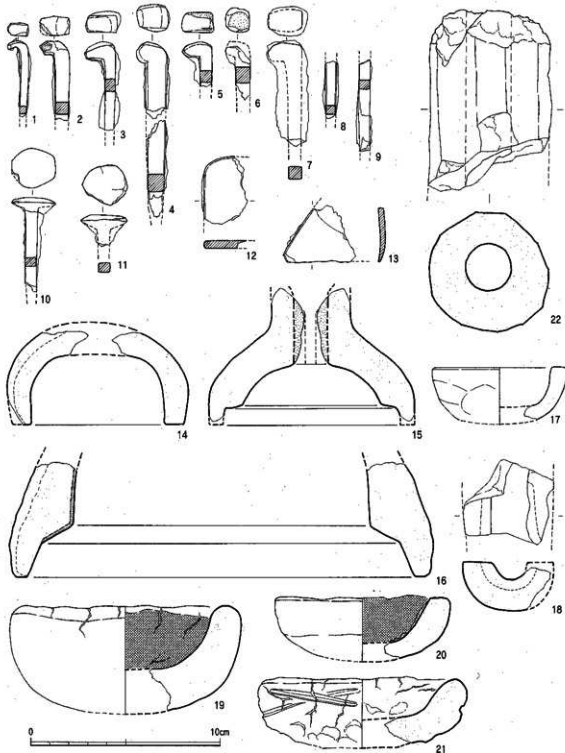


Fig.28 鉄器・鋳型等実測図 (1/2)

II 調査の内容

表に示すとおり、当調査区からは66点(2,212.7g)の鉄滓が出土し、椀形滓、流出滓、鉄塊系滓も各々含まれる。これらのことから、小鍛冶・大鍛冶各段階での操業がこの近辺に想定される。ただし、政庁前面官衙域の中で出土量がここだけ多いという訳では決してなくて、例えば本書掲載の第186次調査区の狭い範囲からでも7kg以上の鉄滓出土量があり、この第187次調査区においてはこの近辺において副次的、或いは臨時的操業としての鍛冶が行われたに過ぎないと推定される。出土位置としては、8世紀後葉段階のSD4566やSB4560近辺でも幾らか出土するが、SD4570の上・下層と9世紀後半～10世紀中頃段階のSD4569から最も多く、盛期を示す。前者は官衙造営に伴う臨時的な性格が考えられる。

臨時的鍛冶
操業

種別	出土地点	点数	計重量(g)	備考
鉄滓	SB3815	1	3.2	
#	SK4573	2	221.1	うち流出滓1・椀形滓1
#	SK4574	1	16.3	鉄塊系滓
#	SK4575	1	47.6	鉄塊系滓
#	SD4566	4	347.0	うち椀形滓1・鉄塊系滓1
#	SD4567	4	46.8	うち炉壁1・炉壁付着1
#	SD4569	12	177.4	うち鉄塊系滓1・炉壁2・流出滓1・炉壁付着1
#	SD4570	8	333.7	うち椀形滓2・鉄塊系滓2
#	SD4571	2	107.3	
#	その他のビット	6	224.0	うち炉底滓2・炉壁付着1・鉄塊系滓1
#	暗褐色包含層	10	363.7	うち鉄塊系滓1・椀形滓2・炉壁部付着1
#	黄灰色包含層	11	193.3	うち鉄塊系滓3
#	砂層・攪乱土	4	131.3	
計		66点	2,212.7g	うち椀形滓9・流出滓2・鉄塊滓11
銅片	SB3815	1	3.0	直角に曲がった製品か?
銅滓?	SK4573	1	3.0	青緑色のガラス胎状の滓
銅片	SD4566	3	10.0	うち2点は銅滓
#	SD4570	2	7.1	釘か(Fig.27-3),1点は銅滓
銅滓	その他のビット	3	3.7	
銅片	暗褐色包含層	1	5.1	
#	黄灰色包含層	2	0.9	
#	砂層	1	3.0	
計		14点	35.8g	

Tab.8 第187次調査出土鉄滓・銅滓一覧

土馬・土製模造品 (Fig.29-1~8) 1は直径5mmの竹管文で目を表現し、頭部を頸部に巻き付けるようにして接合した類で、三日月形の側面観からも、典型的大和形土馬と言える。2は頸～肩～胴部前半のみが残るもので、頸の上縁は立て鬚の表現で断面鋭角三角形につまみ出されている。3は胴部後半～後肢～尾のみが残るもので、太めの後方へ延びる尾部は大和形土馬の特徴である。肢は四方へ踏ん張っているが、鞍の表現は無い。5は縄目瓦打ち欠き、6・7は土玉。8は土師器高坏中心部片の周辺を雑に研磨した円盤状品。図は脚部側が上。1・2はSD4566西端部上層出土、5はSD4570下層、他は包含層他からの出土品。

石製品 (Fig.29-9~14) 9は濃灰色の片岩系石材で、形状は石筥丁のだが、横方向に研磨溝を持った有溝砥石。裏面は剥げ面のままで使用し、表面と側面は研磨されている。10は6面す



Fig.29 土馬・磁石・石鏃実測図 (1/2, 15~18: 実大)

II 調査の内容

べて使用面の乳白色シルト岩製仕上げ砥石。右側面には擦り切り溝、前面には刃物先端による刺突痕が多く残る。11は砂岩製粗砥で、10と同様に上面には小さい刺突による凹部痕が多数見られ、砥石以外の作業に用いられている。12は濃紫灰色の輝緑凝灰岩製石庖丁。13は滑石製石錆銹部片の再加工作品で、左側面は切り取り面で下端は割り取っている。全体が三角柱形で沈鉢2本が施される。14は、直径25cm強の滑石製石錆の破片再加工作品で、周縁を縁に削り取って温本に利用したもの。13・14は黄灰色土から、他は包含層等からの出土品。

打製石器 (Fig.29-15~18) 15の石鏃は姫島産黒曜石を素材とし、調整刻離は両側縁から丁寧に施されている。長さ23mm、幅16mm、厚さ4mm、重さ1.1g。16・17の石鏃は腰岳産黒曜石を素材とし、調整刻離は共に両側縁から施される。16は現存長22mm、幅23mm、厚さ4mm、重さ1.7g。17は現存長13mm、現存幅12mm、厚さ4mm、重さ0.7gである。18の基部加工ナイフ的な二次加工のある製片は、針尾島産黒曜石製で、加工部位はa面左側縁下位とb面左側縁中~下位と、使用痕と思われる刻離が中~上位に各々観察できる。長さ36mm、幅14mm、厚さ8mm、重さ2.9g。他に腰岳産黒曜石・安山岩の製片が各々1点ずつ出土している。

瓦埴類 (Fig.30~36, Tab.9~11)

軒瓦 (Fig.30, PL.46) 1はSD4570北岸石積に転用され、この直上に長方形無文埴が重ねられていたものである。瓦当裏面・側面にハケを施す軒丸275B類。樹型痕明瞭で白褐色をなす。2は軒丸143a類で、1と同様にSD4570北岸石積基底部に使用されたもの。星野a形式範囲と樹型痕両方がみられ、その間隙が細突縁となって瓦当側面に半周分巡る。焼成軟質で淡褐~灰褐色をなす。3はSD4569上層出土品とSD4570上層出土品が接合したもので、須恵質焼成の軒丸058a類。10は下外区が線鋸歯文となる軒平657a類で、顎下面と凹面は横へう雨り。灰色須恵質で黄灰色土出土。13は直線顎となる軒平561類で、平瓦部凸面に縄目が見られる。不丁官衙域所用軒平瓦と見られる。以上の軒瓦を概観してみると、総出土点数32点で、老司II式系、鴻臚館式が多数を占める。とは言い、数から見てこの調査区内に軒瓦を用いた建物が在ったとは考え難い。溝の石積に転用されているところを見ると、いずれも政庁や不丁地区の重要な建物等に由来するものと考えられる。

范型端と樹型痕両方が残る軒丸瓦

遺構名	軒丸瓦 (型式番号)	小計	軒平瓦 (型式番号)	小計
SB3815	(223a) 1	1		
SB4560	(223) 1	1		
SK4574下層			(560B) 1	1
SD4566上層	(223) 1	1	(560) 1	1
SD4566下層	(285A) 1, (290B?) 1	2		
SD4569下層	(不明) 1	1		
SD4570A上層	(058a) 1	1	(560B) 1	1
SD4570A下層	(143a) 1	1		
SD4570北岸石積	(143a) 1	2		
SD4570B上層	(不明) 1	1	(560A) 1	1
SD4570B下層	(290B) 1	1		
その他のピット	(291) 1	1	(561) 1	1
暗褐色包舎	(223) 1, (275) 1	2	(560A) 1, (不明) 1	2
覆瓦土	(077A) 1, (275B) 1, (223a) 2, (291) 1	5	(560B) 2, (657a) 1, (不明) 2	5
計	(275) 1, (077A) 1, (058a) 1, (143a) 2, (223) 3, (223a) 3, (275B) 2, (285A) 1, (290B) 2, (291) 2, (不明) 2	20点	(560) 1, (560B) 4, (561) 1, (657a) 1, (560A) 2, (不明) 3	12点

Tab.9 第187次調査出土軒瓦一覧

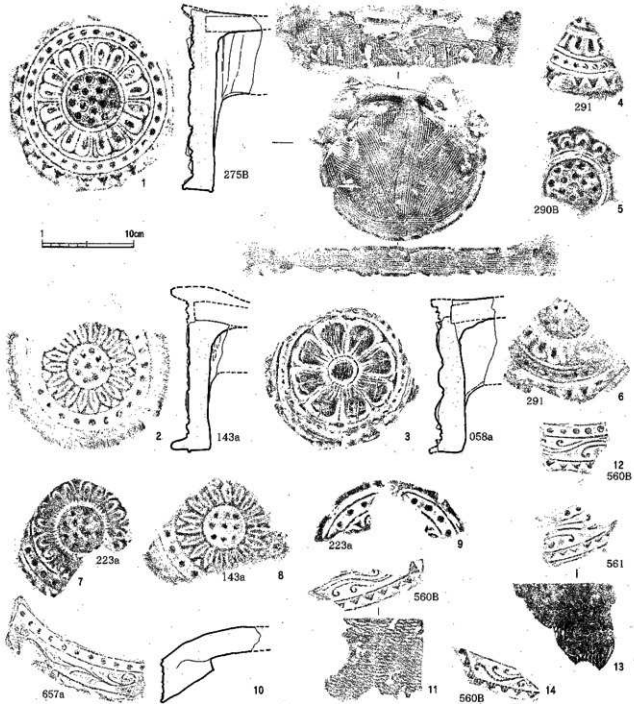


Fig.30 第187次調査出土軒瓦拓影 (1/4)

丸瓦 (Fig.31-1~3, PL.46) 調査区全体では3,243点(破片数)の丸瓦が出土しており、うち84%を凸面縄目擦消し類が占めている。また、無文・縄目・縄目擦消しを合わせた、平瓦の場台の横骨・縄目一枚作り段階に対応する丸瓦は、丸瓦全体の88%を占め、この調査区の主体となる時期を如実に示している。これに対して円筒桶段階の斜格子叩き類は11%に過ぎない。また、丸瓦と平瓦の総出土量での比率は、丁度1:3となる。ここでは、特に目に付いた3例のみを図示するに止めた。1は玉縁部が7.4cmと長く、凸面は横ナデで玉縁部はハケ状となる。精選された粘土を用い、全体に細身で極めて丁寧な作り。側面には破面を残さず、凹

縄目擦消し
丸瓦が大半

II 調査の内容

凸両面側の角に小さな面取りを施し、玉縁部先端の凹面側の角も小さく三角形に面取りしている。焼成軟質で淡褐色。2も玉縁部凸面に横ハケ状擦痕がみられ、直径17cm強の太い類である。凸面中央付近に鋼目擦り消しがみられるが、玉縁部から3cm強下から深めの縦ヘラ削りを施す特徴を示す。凹面には分割界線痕がみられ、両側縁がまつり縫いと思われる布重ね部も認められる。

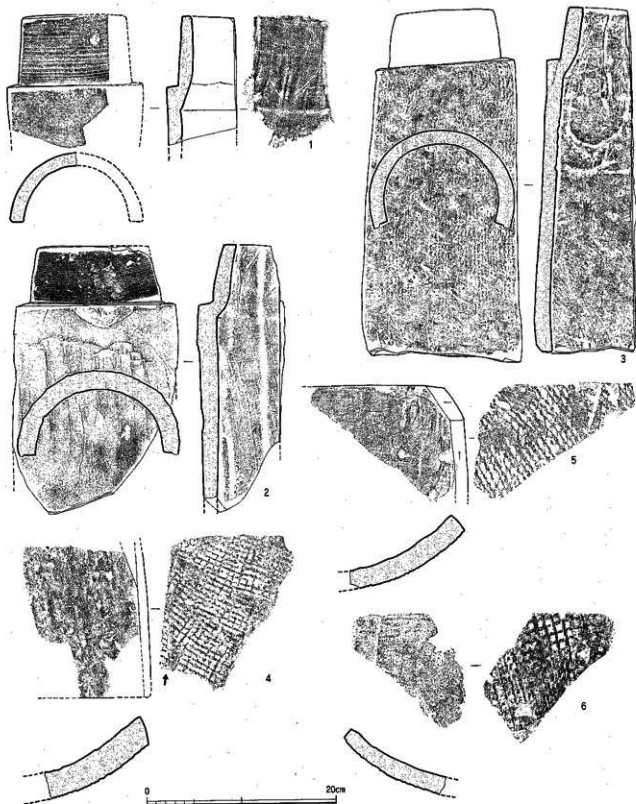


Fig.31 第187次調査出土丸・平瓦拓影 (1/4)

両側面には版面・破面を残す。全体に作りが丁寧で、やや須恵質に近く、灰色をなす。3は凸面全体に縦位縄目を残したままの類。両側面ともに破面・版面を残す。成形後半截する際に、半分よりかなり大きめに切っている。SK4574底面出土の完形品で、粗砂粒をかなり含み、焼成軟質で淡褐色をなす。

平瓦 (Fig.31-4~6, Fig.32~34, PL.46) 調査区全体で10,115点(破片数)の平瓦と判別できるものが出土しており、うち縄目一枚作りと思われるものが88%、横骨桶作りが3%、円筒桶作り斜格子叩き類が9%となる。これらの比率は上記の丸瓦の場合と同じである。更に、横骨桶作りの中では、凸面縄目が79%、正格子叩きが8%、無文(擦り消しの無文部片も含まれる)が13%となる。ここでは、特に目に付いたものだけを図示するに止めた。Fig.31-4は、凹面にそれらしい凹凸があり横骨桶作りと思われるが、明確ではない。凸面は正格子目の叩き締め円弧がみられる。各所に叩き目が潰れた部分があり、側縁に平行して縦にアタリ部分(図中矢印)が走っており、凹型台仕上げの可能性も考えられる。側面の凹面側の角が途中で斜めに削がれているが、意味不詳。凹面は細かめの布目を縦ナデで大部分消す。5は横骨桶作りの縄目叩き類で、凹面は上端が横ナデ、以下が縦ナデで布目を殆ど消す。縄目は太く、3cm間に5条、縹玉3個となる。狭端角を落としている。6は凸面に縦位縄目の上から正格子を施した類で、横骨桶製。Fig.32-1は、縄目の上に平行線叩きが施される類で、凹面には糸切痕が明確。横骨痕は確認できず、極めて細かい布目である。2は、横骨痕が明確な縦位縄目瓦である。横骨桶種板圧痕幅は3.2~5.7cm。広端辺右角は小さく角落としされ、胎土精良で黒灰色類焼成類である。3~8はいずれも凸面に整然とした縦位縄目叩きを施し、凹面に目のやや粗い布痕と糸切痕を残す。所謂粘土板製縄目一枚作りと思われる類である。また、これらの共通する特徴は、横断面形状が正円弧をなさず、極端に言えば中央付近で折れて両端方向へ直線的に延びるような、ブーメランを想起させるような形状のものが多し。更に、広端面、狭端面ともに凹面側へ強く傾斜するように切られていることも共通する。なお、側面は円の中心を向かない版面のみか、凹面側角の面取りを組み合わせたもので、破面は見られない。以下、個別に補足すると、3はSK4573底面出土の完形品で、長さ36cm、幅は広端で27.3cm、狭端で23cm。凹面の布目は円筒桶斜格子叩き段階のものと同変らない程粗く、3cm間に縦13×横19本。凸面の縄目は細く、3cm間に10条、縹玉は5~6個。粗砂かなり含み、焼成不良で灰白~淡灰褐色をなす。4もSK4573出土品で、長さ36.5cm、幅は中程で27.3cm。凹面の布目はかなり粗く、凸面の縄目は叩き単位幅が5.5cm程である。粗砂かなり含み、焼成やや軟質で白灰色。5はSK4574下層出土品で、長さ34.5cm、広端幅27cm。凹面布目はかなり目が粗く、左下では糸がほつれて穴が空いている。粘土板接合痕(S形)がみられる。凸面の縄目は細く、3cm間に10条、縹玉は5個。凸面にも糸切痕があり、両側面の版面は下から上へ瓦刀が動いている。焼成須恵質で灰色。6はSD4570出土品で、長さ35.5cm、広端幅25.9cm。凹面の布目はかなり粗く、側面の瓦刀方向は、右側面が上から下へ、左側面が下から上へと左右で異なる。側面の凹面側角の面取りが広く、粗砂粒をかなり含む。7は凸面の縄目が太く、3cm間に6~7条、縹玉は4~5個となる。凸面にも糸切り痕がみられ、中央付近2ヶ所には布痕が付いている。長さ36.2cm、中央部幅24.8cm。右側面の版面は上から下へ瓦刀が動き、左側面では逆に下から上へとなっている。胎土に砂粒をかなり含み、焼成軟質で淡褐色をなす。8は長さ36.3cm、広端幅26cm強で、凹面の布目はやや

凹型台仕上げ

粘土板縄目一枚作り

左右側面で瓦刀方向逆

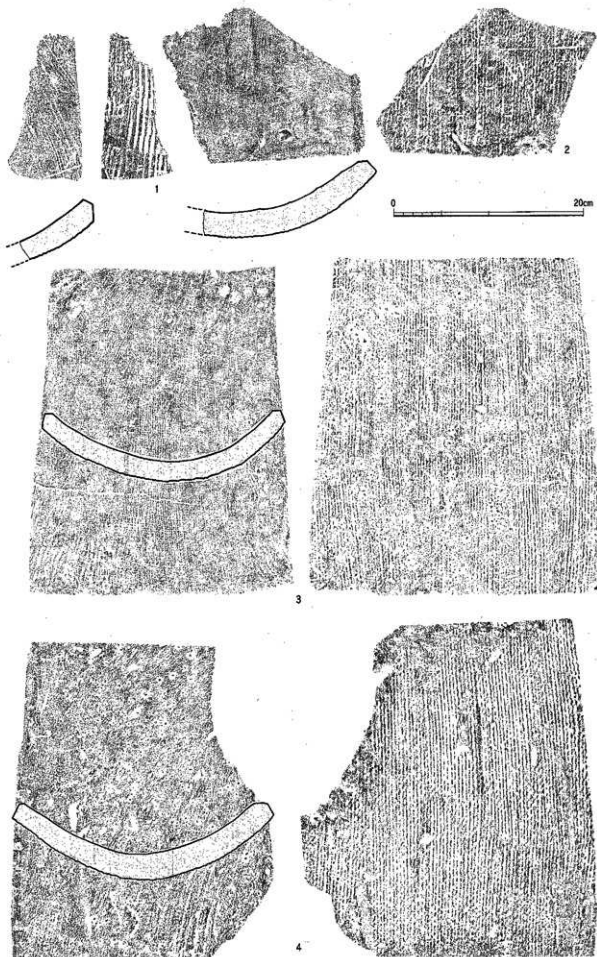


Fig.32 第187次調査出土平瓦拓影 (その1) (1/4)

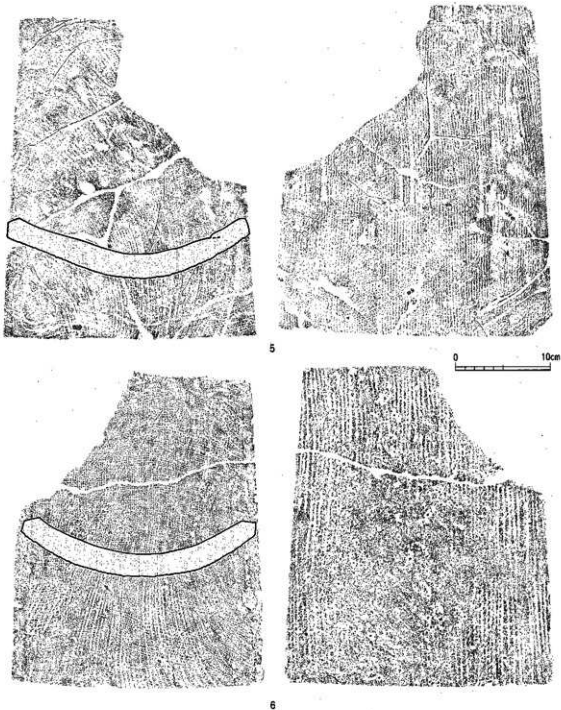


Fig.33 第187次調査出土平瓦拓影(その2)(1/4)

粗い。凸面の縄目は太く、3cm間に7条。右側面は上から下へ、左側面は下から上へ瓦刀が動いている。胎土に砂粒をかなり含み、焼成軟質で灰黒色の燻し焼きである。以上の縄目一枚作り平瓦は、縄目文様による叩き具別識別が極めて困難な状況にあるが、今後、これの分析も更に進めてゆくとともに、側面の処理技術の差異等も併考する必要があるであろう。また、上記のように両側面の断面で瓦刀方向が異なるのは、或いは近世～近代の産して作業の出来る低い回転軸を持った一枚作り台のような、回転凸型台の使用を示すものかもしれない。今後の課題として慎重に事例を追求したい。

回転凸型台

II. 調査の内容

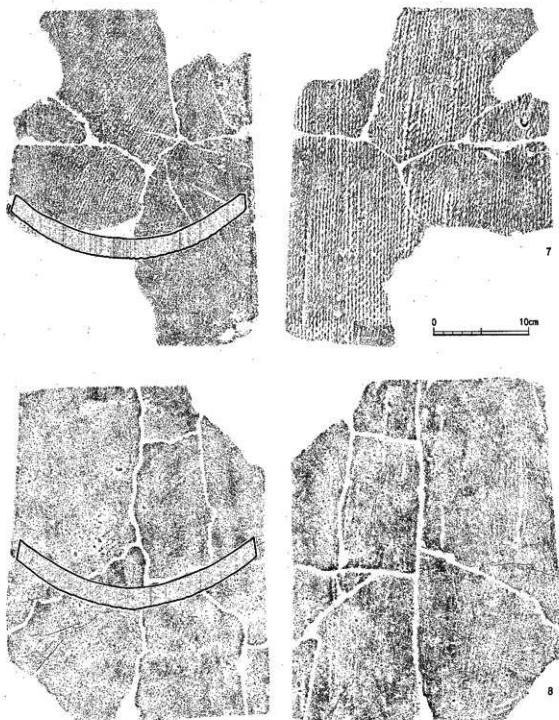


Fig.34 第187次調査出土土平瓦拓影(その3) (1/4)

長方形無文
埴

埴 (PL.46) 破片も含めて25点出土したが、すべて長方形無文埴である。出土状況から見た
 使われ方は、本来の建物の床や基壇・階段等への使用ではなく、堀立柱建物柱穴内の柱脇固め
 (SB4560で2点)、溝の護岸石横に石の代わりに積まれたもの (SD4570A北岸石横で2点)、
 溝の中央に2枚重ねられたもの (用途不明、SD4571で2点) 等のように転用品として使われ
 ている。他はSB3815, SK4573, SD4566・4570, 暗褐色包含層、攪乱土等への混入品で
 ある。SD4571出土の完形品2点の大きさは、長さ26~27.8cm, 幅17.7~18.8cm, 厚さ
 6.5~6.7cmである。全出土品の平均は長さ26.9cm, 幅18.2cm, 厚さ6.4cmだが、計測可能

なものうち、幅は1cm以内の大小誤差内にすべてまとまるのに対して、厚さは4.8~8.2cmまでばらつきが見られる。これを何種類かの規格の差と見るかどうかについては、本調査区出土例の中での判断は困難である。ただ、1例に、側面に押型の上端のアタリ痕が認められるものが在ることから、長方形の枠の中に上から粘土を押し込んで成形したと推定される事から、上下の厚さには差異が生じ易かったことも考えられる。これらの無文埴の時期は、遺構として最古段階のSD4566下層から既に出土していることから、8世紀後半あるいはそれ以前に求めることができる。黒色の焼土類とそれの生焼け的な白褐色を呈するものが9割を占め、正格子模骨平瓦段階〜鴻臚館式を中心とした焼成技術に共通し、年代的にも対応するものであろう。

長方形の枠
で成形

叩打痕文字瓦 (Tab.10) 16種81点が出土している。最も多いのが「大」(915A)(22点)で政庁出土量(15点)よりも多い。(図みに政庁での文字瓦出土総点数は9,590点)「平井瓦」「平井」の類が7種計39点出土して約半数を占めているのも特徴的である。また、この他に政庁における出土比率と比べて、極めて出土率が高いと思われるのが、「平井瓦」(901B)(21点、政庁では52点)、「四王」(918B)(8点、政庁では13点)、「八年」(917)(3点、政庁では30点)、「平井瓦」(左字)(901D)(4点、政庁では31点)等である。これらは斜格子叩きのうちでも目の細かい細斜格子類に属し、平安期以降の平瓦円筒補段階の中でも古式と考えられ、政庁Ⅱ期の中頃段階にあたる。これらのことから、政庁ではⅡ期の修復用瓦であったにすぎないこれらの細斜格子類叩打痕文字瓦が、本調査区の不丁官衙南端の建物では8世紀後半造営建物の補修用、及び9世紀以降の建物の所用瓦として比較的多用されたものと考えられる。ただし、既述の如く、出土した文字瓦の絶対量は出土瓦総量に比べて極めて少ないものであり、過大評価することは出来ない。次にこれら出土叩打痕文字瓦の、遺構から見た年代的関係を記す。各遺構の年代の検討は各遺構の項で行い、その結果、この文字瓦類とからむ年代としては大別して2期に機械的に分けられる。即ち、9世紀後半あるいはそれ以前のもの——「平井瓦」(左字)(901C)、「賀」

政庁の出土
傾向と異る

細斜格子が
大半

遺構名	文字銘 (型式番号)出土点数	計
SB3815	大(915A) 1, 平井瓦(左字)(901C) 1	2
SB4563	大(915A) 1	1
SK4573上層	平井瓦(左字)(901C) 1, 賀(左字)(903) 1	2
SD4569上層	大(915A) 1	1
SD4570A上層	平井瓦(901B) 1, 大(915A) 1	2
SD4570A下層	平井瓦(左字)(901D) 2	2
SD4570B上層	大(915A) 2, 佐(902A) 1, 平井瓦(901B) 1, 安(左字)(904D) 1	5
その他のピット	平井瓦(901B) 1	1
味噌包合層	平井瓦(901B) 11, 大(915A) 6, 平井瓦(左字)(901C) 4, 四王(918B) 3, 平井瓦(左字)(901D) 2, 佐(902A) 2, 佐(左字)(902Bb) 2, 平井(901la) 1, 平井(901M) 1, 八年(左字)(917) 1	33
横乱土	大(915A) 10, 平井瓦(901B) 7, 四王(918B) 5, 平井(901Hc) 3, 平井瓦(左字)(901C) 2, 八年(左字)(917) 2, 平井(901Gb) 1, 佐(902C) 1, 大(916b) 1	32
計	大(915A) 22, 平井瓦(901B) 21, 平井瓦(左字)(901C) 8, 四王(918B) 8, 平井瓦(左字)(901D) 4, 平井(901Hc) 3, 佐(902A) 3, 八年(左字)(917) 3, 佐(左字)(902Bb) 2, 平井(901Cb) 1, 平井(901la) 1, 平井(901M) 1, 佐(902C) 1, 賀(左字)(903) 1, 安(左字)(904D) 1, 大(916b) 1	16種 81点

Tab.10 第187次調査出土叩打痕文字瓦一覧

II 調査の内容

(左字)(903I)と、10世紀中頃或いはそれ以前のもの——「大」(915A)、「平井瓦」(901B)、「平井瓦」(左字)(901D)、「佐」(902A)、「安」(左字)(904D)である。これらのうち、「賀」(左字)(903I)は二重線の大きな斜格子であり、都府樓北瓦窯産品の特徴を示し、一般的により新しいと考えられている事から、取り敢えずSK4573土壌上面の整地層からの混入品と解釈しておく。また、「平井瓦」(左字)(901D)はこの特徴的な縦長の斜格子文部分片(文字の無い部分)が9世紀後半埋没と考えられる遺構から出土していることから、9世紀後半或いはそれ以前の類に上げることができる。これはまた剣塚瓦窯(10世紀初～前半に閉窯)産であることが知られ、年代的にも矛盾は無いが、これよりもっと遡る可能性を示すことができたことになる。さらに「大」(915A)も剣塚瓦窯で1点のみ出土しているがその閉窯時の年代と矛盾するものではない。以上の叩打痕文字瓦の検討を、出土状況による新知見と従来の見解を合わせて整理してみる。「平井瓦」(901B)、「平井瓦」(左字)(901C)、「平井瓦」(左字)(901D)は9世紀後半には成立していたと考えられる。これは筑徳町大分庵寺SK025(9世紀第1四半期)出土品には細かい円筒桶製段階斜格子文が登場しているが、文字瓦は見られないことから、上限は知り得る。次に、「大」(915A)はやはり剣塚瓦窯例から10世紀初～前半代及びそれ以前となるが、やや大きい部類となるこの斜格子に類似する文字の無い部分の斜格子文片が9世紀後半埋没の土壌から出土しており、9世紀後半代まで上る可能性も残しておきたい。「佐」(902A)は松倉瓦窯出土例があり、政庁SK011・012の出土状況から10世紀前半に押さえられる。「安」(左字)(904D)も上記政庁中門地区瓦溜りから出土しており、文字の意味からも年代的に限定されよう。以上、今回の調査分の範囲内で事実関係を整理しただけに過ぎないが、叩打痕文字瓦の型式識別、年代決定は、今後のこの種の瓦の成立問題、文字の示す歴史的情報の解明に極めて具体的な材料となり得る事から、慎重に進めなければならないものと痛感している。

斜格子叩き瓦(Fig.35・36, Tab.11) 今回の調査で出土した円筒桶製平瓦段階の斜格子叩き瓦片は、丸・平瓦合わせて1,320点で、瓦片全体の9.8%に過ぎない。これ以外が椀骨槽・罫目一枚作り平瓦段階のものであるが、その中でも罫目一枚作り平瓦段階のものが9割を占める。この事から、調査当初から斜格子叩き瓦には出土状況に注目していた。ここでは、この罫目一枚作り平瓦段階から円筒桶製斜格子叩き平瓦段階への転換の様相、及び斜格子文の古段階のものの抽出、更に大宰府で特徴的な叩打痕文字瓦の出現の時期究明等の目的のために、斜格子の種類と出土遺構との関係を示す表(Tab.11)を作成した。表中の㊸～㊿の34種の斜格子は今回出土したものであり、Fig.35・36に示した。の中には叩打痕文字瓦の拓影も多く掲載しているが、表中の出土点数の中には文字瓦も含むものの、あくまでも斜格子部分の形態・大きさが合致する程酷似するものを照合するための比較作業に實際用いたものである。従って図示したものは叩打痕文字瓦の拓影ではあっても文字部分は1点も出土していない類もある。あくまでも斜格子の分類である。㊸～㊿は大旨罫目目の小さく整ったものから大きく粗雑なものへ順に並べた。この記号は今回だけの仮の番号で、将来的には、叩き単位の復元を経て、叩き板の番号として登録したいと考え、現在その作業を別途進めている。さて、この表を整理して、㊸～㊿各出土遺構の下限年代の中で、それぞれ最も古い段階の下限の遺構の年代で各斜格子類を機械的に単純に振り分けると以下ようになる。

「平井瓦」は
9c後半に
は成立

斜格子古段階を抽出

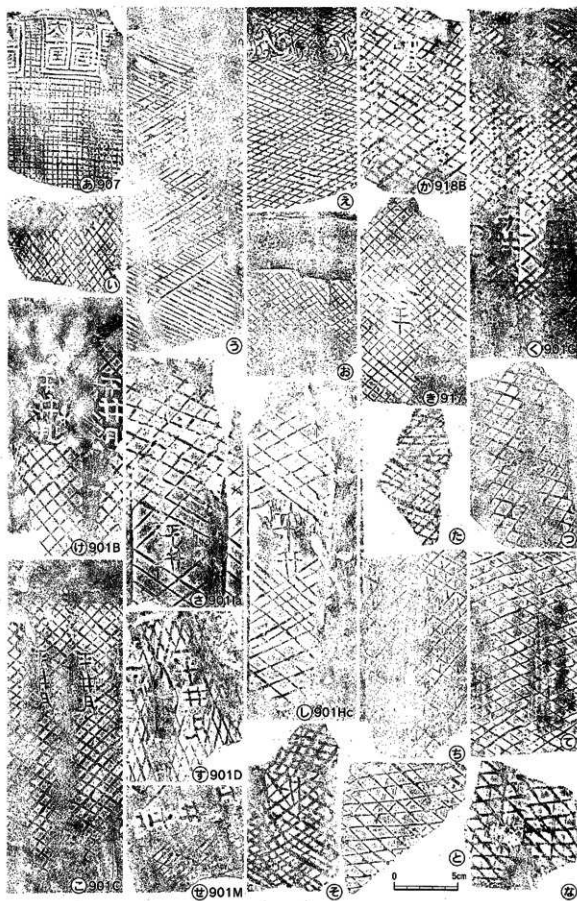


Fig.35 第187次調査出土斜格子叩き瓦 (その1) (1/3)

II 調査の内容

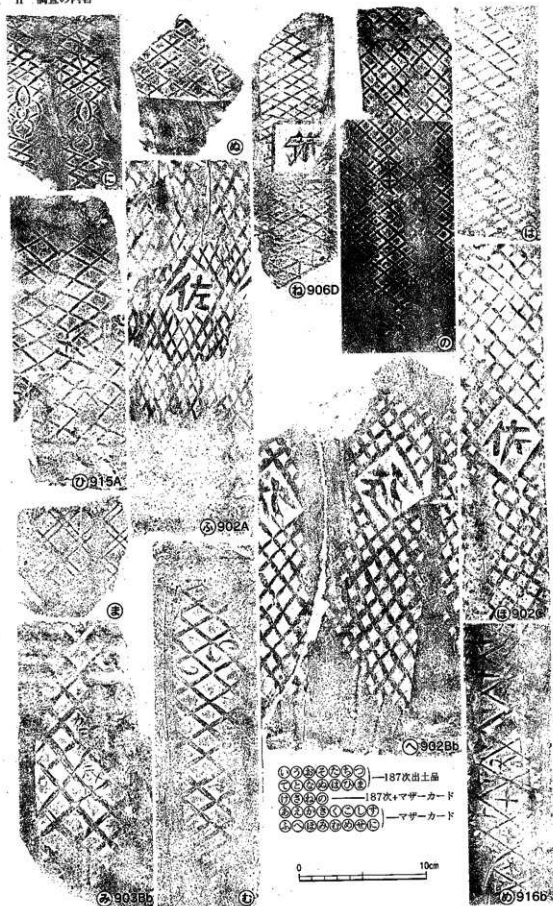


Fig.36 第187次調査出土斜格子叩き瓦 (その2) (1/3)

A段階（8世紀末～9世紀初）： ㊦㊧

B段階（9世紀後半及びそれ以前）： ㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲

C段階（10世紀中頃及びそれ以前）： ㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

上記のB段階としたものの中には㊨の文字互「大」(915A)の斜格子に類似した大きい斜格子がみられ、これについては今後も検討を継続したい。他は細かい斜格子類だけであり、「平井」「平井瓦」銘の文字互に類似する斜格子（㊩～㊱）もすべてこの段階に含まれる。今回の斜格子で目立つのは、この段階の㊨である。斜格子全体の35.2%（464点）の出土量を占め、第2位の㊦が9.3%であることも見ても突出して多いことが判る。この斜格子の特徴は中央部だけが小さな横長斜格子になるが上下端側は右上から左下への斜線が彫り込まれないままになっている。よって上下側のみ見ると平行線印きに見えるということである。軒平瓦662Ba類の平瓦部凸面に、この㊨とは完全に合致はしないが、細格子と平行線印きがみられるものがあり、これに類した叩き板によるものであろう。今後注意が必要であらう。

上下側が
平行線印き状
となる瓦

次にC段階としたものの中には㊳㊴㊵等の極細斜格子類が含まれ、より古段階のものである可能性を考えているが、ここではひとまず土器との共伴関係という事実報告のみで留めておく。より新しい時期のものと考えている、粗大な斜格子である㊶㊷等は偶然にも時期判定のできないピットや攪乱層出土品であり、このA～C段階仕分けに含まれなかった。なお、A段階とした㊦㊧については、今回断定するのは避け、一応この部類が古い段階になる可能性があることを指摘するだけに止めたい。

次に円筒桶製平瓦段階斜格子叩きの当初のものについては、既に9世紀第1四半期のものとして筑穂町大分廃寺SK025出土の細斜格子2種が知られる。このうち平瓦に施された正方形に近い格子目は、叩き板が長くて刻線がやや細めであり完全に円筒桶段階の斜格子に脱却してはいるが、格子そのものの雰囲気は横骨桶段階の正格子叩きをより感じさせる類である。一方、今回調査分の中では、信頼できる遺構として、上下層ともに多量の瓦を出土し、上層の混入がより少ないと考えられるSK4574とSD4566（いずれも9世紀後半までに埋没。下層は斜格子皆無。）の出土品である㊳㊴㊵㊶をより先行する可能性が高いものとして抽出することができる。軒瓦凸面に施された叩きとの関係から見ても、個人的には9世紀前半まで上るものもあると考えている。

次に、縄目一枚作り平瓦段階から円筒桶製平瓦段階への転換点は、今回の遺構での出土状況からは必ずしも明確にできないが、9世紀いっぱいまでを開始されている各遺構（SD4570を除く）で、下層に無かった斜格子が出現してくる上層でも大量の縄目一枚作りが出土していることから、これらは単なる古いものの混入とは考え難く、埋没時期の下限である9世紀後半までは縄目一枚作り生産が円筒桶製斜格子平瓦と平行して存続したものと考える方が妥当であらう。また、大宰府では縄目一枚作り平瓦自体も、8世紀後半には盛期を迎えていることから、少なくとも1世紀近くは続いた訳であり、これの細分編年も急を要する課題である。

9C後半まで
縄目一枚
作り存続

II 調査の内容

土器類 (Fig.37~53, PL.47~53)

第187次調査ではパンケースにして163箱の土器類(須恵器・土師器・黒色土器・陶磁器等)が出土している。遺構的にはSK4573, SD4566・4570からの出土が大半を占める。また、緑釉・灰釉陶器及び越州窯系青磁・邢窯系白磁の出土量は、他の官衙域に比して多い。

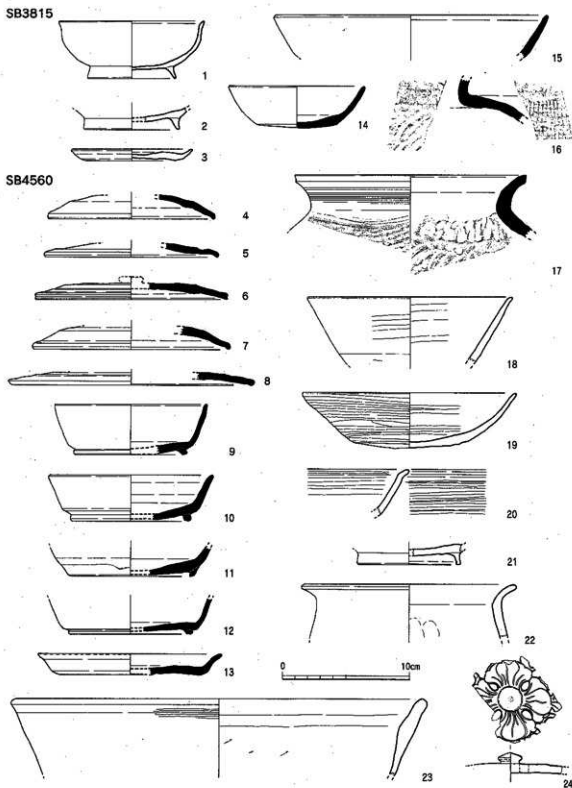


Fig.37 SB3815・4560出土土器類実例図 (1/3)

SB3815出土土器 (Fig.37-1~3) 1・2は土師器碗。1の体部は丸く、口縁端部は小さく外反する。3は土師器小皿で、底部は篋切りによる。

SB4560出土土器 (Fig.37-4~24) 4~17は須恵器。4~8は蓋で、5・6・8の天井部は低平なもの。9~12は有高台の坏で、11の高台は体部端に貼付する。13は皿で、14は坏。15は口径が21.6cmと大きく、大型の坏若しくは盤になるか。16・17は甕で、外面格子目タタキ、内面円当具痕。18~23は土師器。18は底部を欠くが、碗になろう。19・20は坏で、20の口縁端部は小さく外反する。ともに器面は丁寧な篋ミガキによる。21は碗底部片。22は蓋。23の口径は32.6cmと大きく、一見瓶の口縁部のようなのであるが、器壁が薄く、浅い鉢状の器形を呈するか。24は緑釉の香炉蓋。毛彫りで唐草を表現し、中央4方向に透孔を開け、その中央に擬宝珠形描みを貼付する。筑後国府跡第31次調査に類例がある。

緑釉香炉

SB4561出土土器 (Fig.38-1・2) 1は土師器の皿で、底部は篋切り。2は蓋の口縁部小片。

SB4562出土土器 (Fig.38-3) 土師器の坏で、内外面とも丁寧な篋ミガキによる。

SB4563出土土器 (Fig.38-4~8) 4~6が須恵器、7・8は土師器。4は蓋の天井部破片。転用碗
転用碗で、内面はよく擦れているが、墨はそれ程付着していない。5は有高台の坏で、高台は体部端に貼付する。6は蓋の頸部破片で、外面平行タタキ→カキ目、内面同心円当具痕。7は蓋で、内外面ともナア調整による。8は小型の坏で、底部は篋切り。

転用碗

SB4564出土土器 (Fig.38-9) 蓋の口縁部小片で、かえり付近には黒漆が付着している。漆付蓋土器

漆付蓋土器

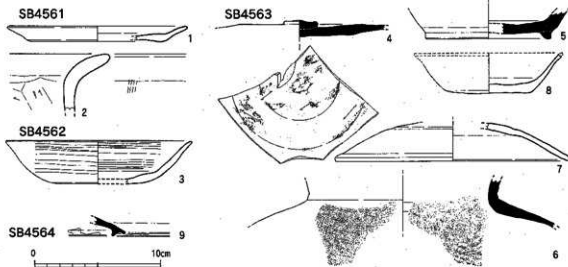


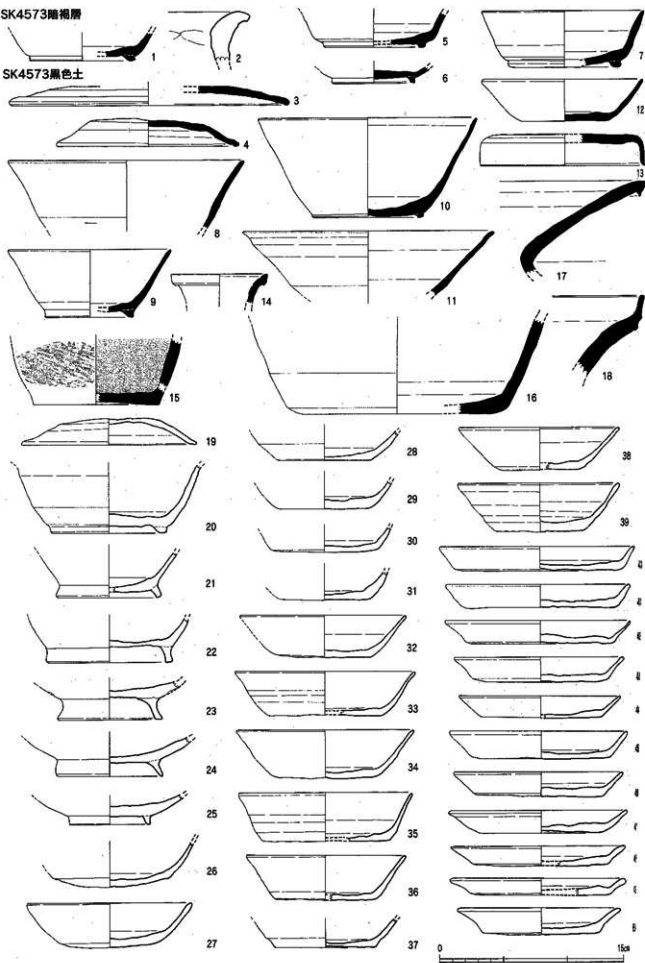
Fig.38 SB4561~4564出土土器実測図 (1/3)

SK4573出土土器 (Fig.39~41) Fig.39-1・2は暗褐色の出土で、1は須恵器坏。2は土師器甕の口縁部小片。Fig.39-3~50・Fig.40は黒色土中の出土。3・4は蓋で、4は描みを付さないもの。5~11は有高台の坏。8~11の体部はシャープな作りで、高台は体部端に貼付している。12は坏で、13は壺蓋。14は瓶の口縁部破片。15は底部と体部が接合しないか同一個体で、体部から底部にかけて黒漆が付着している。16は鉢の底部破片。17・18は蓋の口縁部破片で、18の口縁部は一旦開いてから立ち上がる二重口縁状を呈する。20は須恵器である。

19は土師器蓋。21~25は碗で、24の高台はシャープ。26~39は坏で、26~31の体部は丸みを帯びる。40~50は皿で、44の体部外面は丹塗り。なお、坏・皿の底部は篋切りによる。

SK4573暗褐色

SK4573黑色土



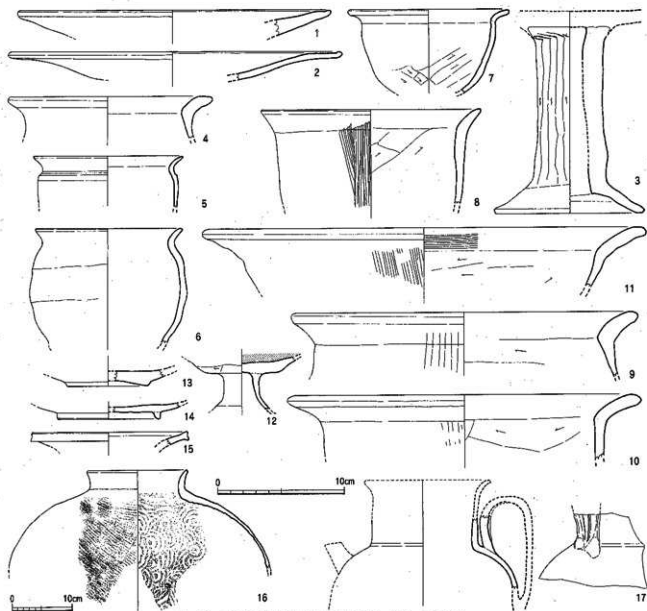


Fig.40 SK4573黒色土出土土器実測図 (1/3, 16:1/6)

Fig.40-1~3は高坏で、1・2が坏部、3は脚部の破片。4~10は甕で、4~8は小型品。5・6の胎土は割に良好。口縁部は9がく字形、10は逆L字形を呈する。11は甕の口頸部破片。12は黒色土器A類の高坏。小型品で、胎土は緻密。13・14は甕で、底部は上げ底風の円盤高台。須恵質焼成で、淡灰色の釉薬が僅かながら全面にみられる。14は体部の立ち上がりか緩やかなことから皿にならう。土師質焼成で、釉薬は淡緑色に発色する。15・16は灰釉で、15は壺の口縁部小破片。内外面とも灰緑色に発色する。16は直口壺で、締まりの良い頸部から球状の胴部に移行する。外面平行タタキ、内面同心円当具痕。口縁部内面から外面にかけて施釉しており、釉は濃緑色に発色している。17は長沙窯黄釉彩水注の取手部破片で、釉は灰褐色に発色する。胎土はきめが細かく、砂粒を殆ど含まない。

長沙窯水注

Fig.41-1~15は土壇埋土中の出土。1・2は須恵器蓋で、1の天上部は低平。2は丸みを帯びる。3は坏で、高台は体部端に貼付する。4・6は土師器蓋。5・7は甕で、7のつくりはシャープ。8・9は坏で、8の口縁部は小さく外反する。10は小皿で、底部は隠切りによる。11~14

II 調査の内容

SK4573

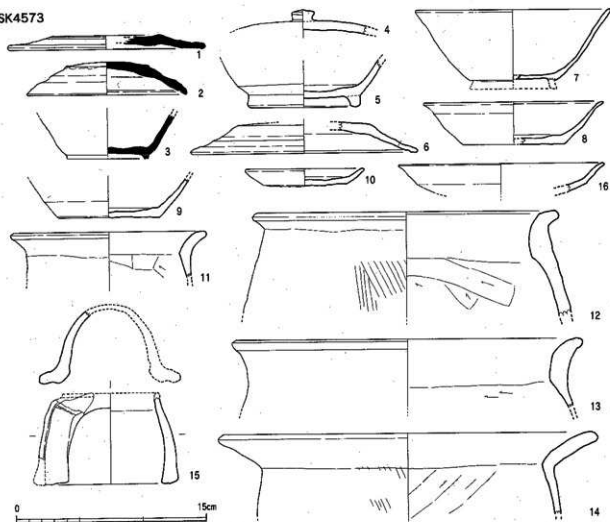


Fig.41 SK4573出土土器実測図 (1/3)

那窯系白磁 は甕。15はミニチュアの甕で、鋳部を欠くが、胎土は精良。16は那窯系白磁の坏で、灰白色の胎に透明釉が掛かる。

SK4574出土土器 (Fig.42) 1~4は中央柱穴、5~7は土壇底部及び下層、8~30は上層の出土。1は土師器蓋で、外天井部はケズリによる。2は須恵器碗で、口縁部を欠く。高台は割としっかりしている。3は須恵器高坏の脚柱部破片。4は土師器高坏で、坏部は内外面とも丁寧な篋ミガキによる。5・6は須恵器蓋で、5の積みは剥落している。7は土師器坏で、外底面に板状圧痕を留める。8・9は須恵器坏。9は転用碗で、内面は擦れており、墨も若干残っている。10は土師器の蓋で、ミガキによる。11~17は坏で、何れも底部は篋切りによる。18~21は碗で、何れも体部端に高台を貼付している。22は高台付皿であるが、高台は低め。23~25は皿で、何れも篋切りによる。26・27は黒色土器A類の碗で、内面篋ミガキ、外面ナアによる。また、27の外底面には線刻による篋記号が付けられている。28は須恵器壺の底部破片で、高台は体部端に貼付する。29・30は土師器甕。30は所謂玄海瀝式製塩土器で、外面縦格子目タタキ、内面平行線当具痕。胎土に砂粒を多く含み、器面がざらつく。31は長沙窯系の黄釉褐彩水注で、取手部は暗褐色包層、底部はSK4574黒色土の出土であるが、釉調・胎土の類似性から同一個体として復元した。なお、胴部の貼花文(メダイオン)は第84次調査出土品と接合した。

転用碗

長沙窯系水注

貼花文

SK4574中央柱穴

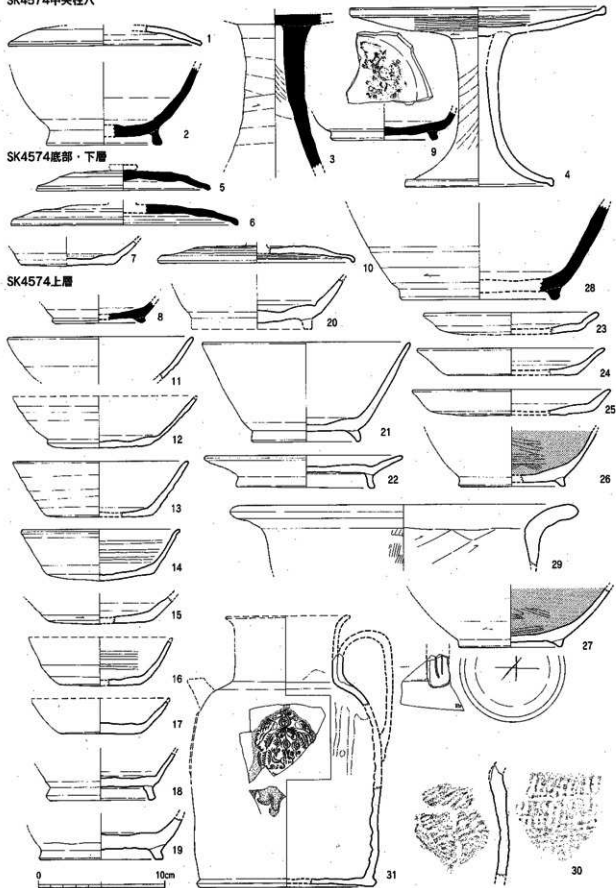


Fig.42 SK4574出土土器実測図 (1/3)

II 調査の内容

SK4576出土土器 (Fig.43) 1・2は須恵器蓋で、ともに低平な器形。3は長頸壺の口縁部破片で、口縁部のやや下位に沈線を2条巡らす。4は底部破片で、鉢になるか。5は土師器蓋で、擬宝珠形の柄みを貼付する。6・7は椀の底部破片。8・9は坏で、体部は丸みを帯びる。内面はミガキによる。10は小型の甕で、ほぼ宍形に近い。頸部の締まりは悪く、胴部は球状を呈する。外面ハケ目、内面篋ケズリによる。また、胴中位から底部にかけて煤が遺存している。

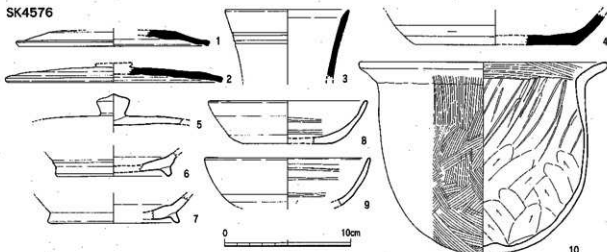


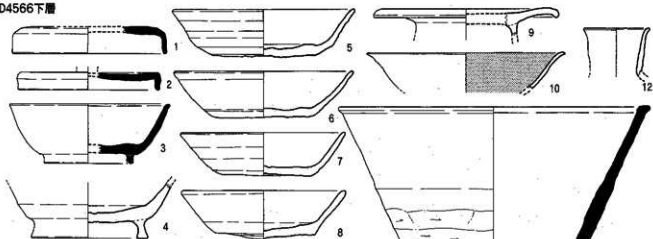
Fig.43 SK4576出土土器実測図 (1/3)

SD4566出土土器 (Fig.44) 1~12は下層, 13~21は上層の出土。1・2は須恵器壺蓋。3は須恵器坏で、4は土師器。4の高台は高めで、しっかりしている。5~8は坏で、底部は何れも篋切りによる。9の口縁部は外方に垂れているが、高台付皿になるか。10は黒色土器A類の椀。11は須恵器の鉢で、体部下半外面は横方向の篋ケズリによる。12は灰軸で、瓶の口縁部破片。軸は赤味がかった緑色に発色する。13は須恵器蓋で、口縁部内面に身受けのかえりを有する。14・15は須恵器坏で、15の内面には工具による沈線状の段が見られる。16は甕の口縁部破片で、古墳時代の混入品。17~19は土師器坏で、17の口縁部はやや外反する。20は土師器皿で、坏・皿の底部は篋切りによる。21は須恵器鉢で、傾きはもう少し寝るか。

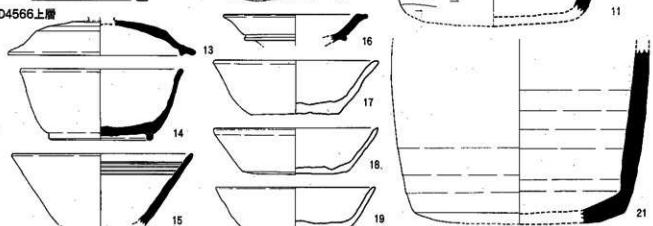
22~40は埋土中の出土品。22は須恵器蓋で、天井部は水平。23・24は坏で、高台は体部端に貼付する。25は須恵器皿。26は須恵器瓶の胴部破片。27は広口の甕で、怒り肩をなす。外面格子タタキ、内面同心円当具痕。28~30は土師器蓋で、29は細かいミガキ調整による。31・32は土師器坏で、32は荒いミガキ調整による。33は高台付皿で、水平に開く。34は皿で、底部は篋切り。35~37は黒色土器A類で、35は坏、36・37は椀。内面は何れも細かい篋ミガキによる。38は土師質の皿で、軸はみられないが高台の形状からして緑線になろう。或いは緑線の素地か。39は邢窯系白磁の椀。口縁部を折り曲げて玉縁としている。高台内は露胎。胎土は緻密で、軸は赤味がかった軸調。40は灰軸の底部破片で、内面に厚く釉薬が付着することから鉢になろう。胎土に黒色粒を含み、軸は淡緑色に発色する。

SD4567出土土器 (Fig.45-1~11) 1・2は須恵器蓋で、1の天井部は丸い。3・4は須恵器の坏で、3は無高台。5は土師器の蓋。6は坏で、底部は篋切りによる。7は椀で、内外面ともミガキによる。8・9は高坏で、8が脚柱部、9は脚座部。10・11は小型の坏。10は深めの器形で、体部外面の中位に篋書き沈線を1条巡らす。

SD4566下層



SD4566上層



SD4566

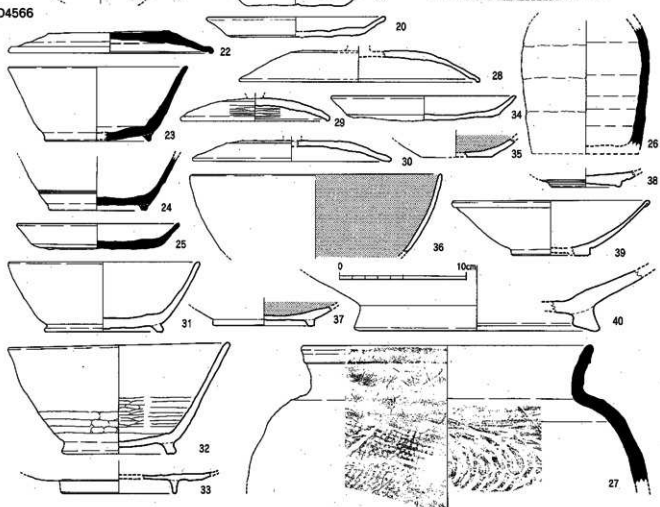
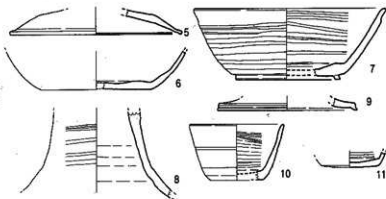
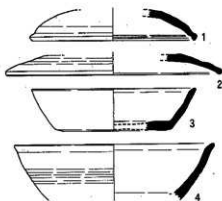


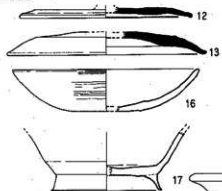
Fig.44 SD4566出土土器実測図 (1/3)

II 兩室の内容

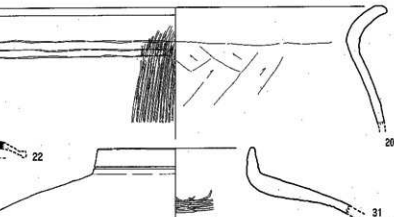
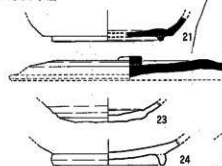
SD4567



SD4568



SD4569下層



SD4569上層

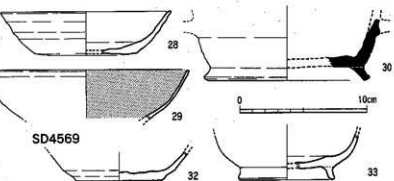
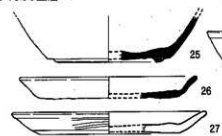


Fig.45 SD4567~4569出土土器実測図 (1/3)

SD4568出土土器 (Fig.45-12~20) 12・13は須恵器蓋で, 12は低平な器形。14・15は高坏で, 口縁端部は上方に立つ。16は土師器坏で, 体部は丸みを帯びる。17は椀で, 高台は高めのシャープなつくり。18は土師器皿。19・20は土師器甕で, 口縁部はく字形屈曲する。

また、20は頸部に寫書き沈線を3条巡らせている。

SD4569出土土器 (Fig.45-21~33) 21~24は下層出土, 25~31は上層出土, 32・33は埋土中の出土。21は須恵器の坏。22は須恵器の蓋で、口縁端部を欠く。23は土師器の坏。24は灰釉椀の底部破片で、低めの輪状高台を貼付する。内面のみ淡緑色の釉を施している。25

SD4570北岸石積

SD4570A下層

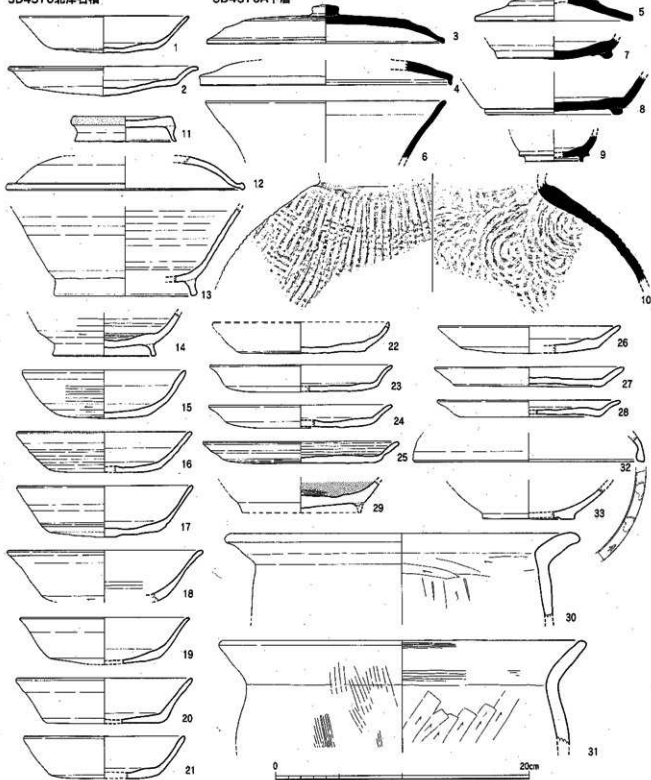


Fig.46 SD4570A下層出土土器実測図 (1/3)

II 調査の内容

は須恵器の坏で、高台は低い。26・27は皿で、26が須恵器、27は土師器。28は坏で、底部は篋切り。29は黒色土器A類の椀で、内面はミガキ調整による。30は体部下の破片であるが、体部中位に取手が剝離した痕跡があり、取手付の坏になろう。高台は体部端に貼付している。31は灰輪の短頸甕で、口縁は直立。32は坏で、33は椀。33の体部下は丸みを帯びる。

SD4570A出土土器 (Fig.46, 48-3~4) Fig.46-1・2は北岸石垣の出土。1は土師器坏で、2は皿で、ともに底部は篋切りによる。3~33は下層の出土。3~5は須恵器の蓋で、3の柄みはボタン状を呈する。4の口縁部はシャープで、小さく立つ。5は柄みを伏さないもの。7~9は須恵器坏で、7の高台は体部端に貼付する。9は小型品で、体部と高台の境に三角凸帯を貼付した珍しい器形を呈する。10は須恵器甕の肩部破片。外面は縦方向の平行タタキの後、タタキ原体を横方向に施し、縦格子目タタキとしている。11は土師器椀を転用した高台付皿で、側縁は奇麗に擦っている。12は蓋で、天井部は丸みを帯びる。13・14は土師器椀で、内外面ともナデによる。15~21は坏で、15~17の体部下は丸みを帯びる。また、15・16の外面はミガキによる。22~28は皿で、23~25・27・28の口縁部は外反している。坏・皿の底部は何れも篋切り。30・31は甕で、口縁部はく字形に屈曲する。32は越州窯系青磁の蓋。胎土は緻密で、釉は灰味のある緑色に発色する。また、口縁部には現状で目跡が3ヶ所見られる。33は邢窯系白磁椀の底部破片で、畳付部のみ露胎。胎土に微砂粒を含み、緑味がかった灰白色を呈する。

Fig.48-3~9は上層の出土で、3は土師器の坏。底部は篋切りによる。4は須恵器坏で、高台は体部端に貼付している。5は甕の口縁部破片で、口唇部は三角形を呈する。なお、接合しないもののSD4570B下層出土の須恵器甕(Fig.47-11)と形態・色調・胎土が類似しており、両者は同一個体になるものと思われる。6は灰釉の口縁部破片で、壺になろう。胎土は堅緻で、釉は緑色を呈する。7は土師器甕で、口縁部はく字形に屈曲する。8は土師器の底部破片であるが、高台が高く、体部と底部の境に三角凸帯を貼付している。なお、高台の残存状況が悪いため図示できなかったが、高台には数ヶ所に方形の切り込みを施している。器形・大きさからして盤になろう。9は高台部の破片で、高台径が18.0cmと大きいことから盤になろう。

SD4570B出土土器 (Fig.47・48-10~33) Fig.47-1~48, Fig.48-1・2は下層の出土。Fig.47-1は須恵器蓋。2~10は坏で、4~9の高台は体部端に貼付している。11は甕で、口唇部は三角形を呈する。外面平行タタキ目、内面ナデによる。12は壺の底部破片で、色調は小豆色を呈する。13は土師器蓋。14~21は土師器椀で、何れも体部端に高台を貼付している。20は胎土が緻密で、内外面ともミガキによる。22~28は坏で、底部は何れも篋切り。29・30は高台付皿で、29の口縁部は立ち上がっている。31~36は皿で、底部は篋切りによる。また、35の体部下は篋ケズリを施している。37~39は高坏で、37が口縁部、38・39が脚柱部。37の胎土は精良で、内面はミガキによる。40・41は甕で、41の口縁部はく字形に屈曲する。42~44は黒色土器A類で、42・43が椀、44は坏の底部破片。45は緑釉の底部破片で、椀になるか。土師質の椀成で、全面に淡緑色の釉を施している。46・47は邢窯系の白磁椀で、46が口縁部、47は底部破片。口縁部を一且折り返して玉縁としている。底部は蛇ノ目高台で、露胎。48は越州窯系青磁椀で、淡緑色の釉を施し、器面はざらついている。全面に施釉しているが、畳付から高台にかけては釉を掻き取っている。また、現状で見込みに5ヶ所、畳付に4ヶ所の目跡が見られる。

Fig.48-1は土師器の小型甕で、外面には煤が付着している。2は土師器の鉢であるが、形

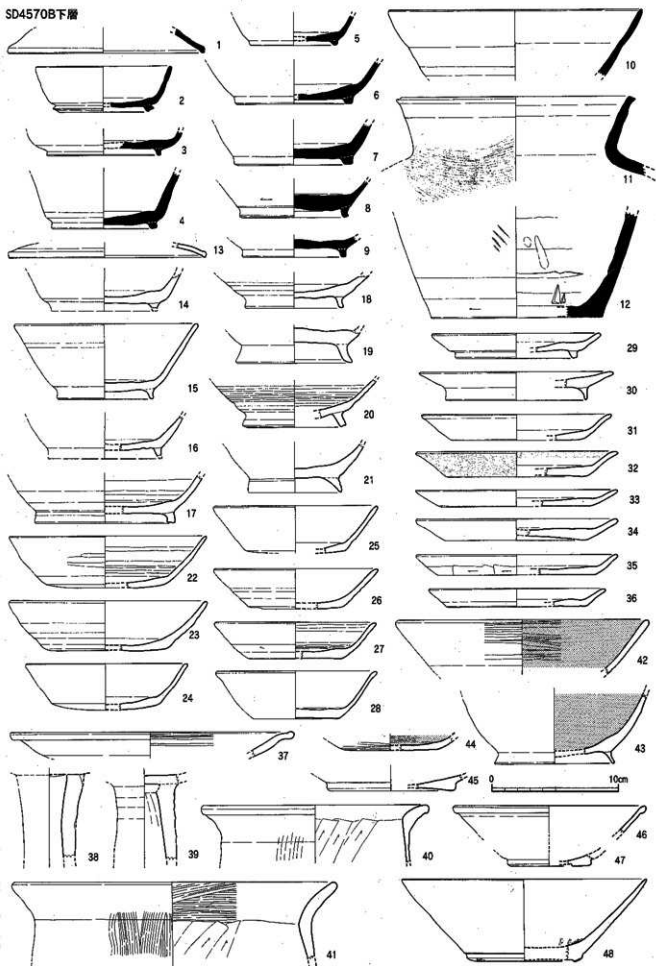
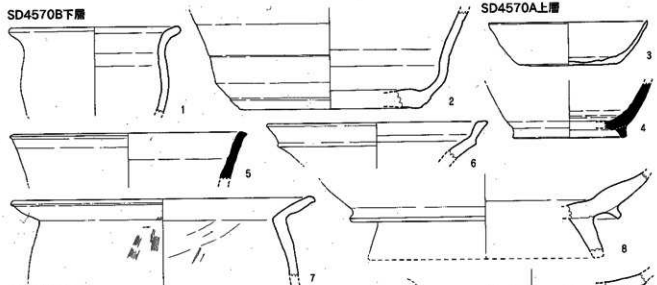


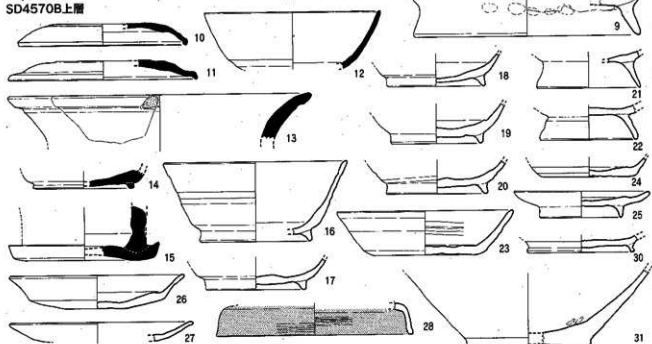
Fig.47 SD4570B下層出土土器実測図 (1/3)

SD4570B下層

SD4570A上層



SD4570B上層



SD4570上層

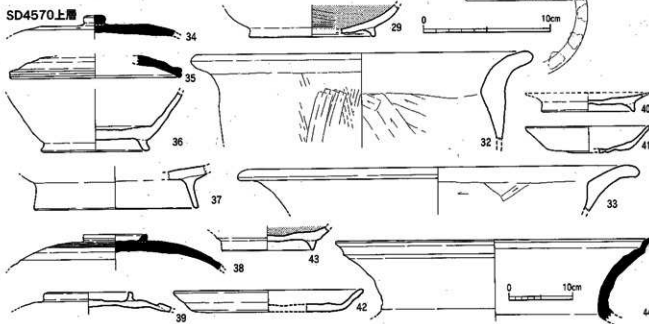


Fig.48 SD4570B下層, SD4570A・B上層出土土器実測図 (1/3, 44:1/6)

態・技法的には須恵器の手法を用いている。

須恵器の模倣形態

Fig.48-10~33は上層の出土。10・11は須恵器蓋で、天井部は丸みを帯びる。12・14は坏で、12が体部、14は底部破片。13は甕の口縁部破片で、口唇部外面には赤漆が一部付着している。15は捏鉢の底部破片。16~22は土師器椀で、21・22の高台は高くシャープなもの。23・24は坏で、底部は窪切り。25は高台付皿で、やや内湾している。26・27は皿で、26の口縁部は底部から細く引き出ししている。28・29は黒色土器。28はB類の蓋で、内外面とも筥ミガキによる。29はA類の椀。30は緑釉椀の底部破片。きめの細かい土師質の胎土に灰味を帯びた淡緑色の釉が掛かる。31は越州窯系青磁椀で、低めの高台を削り出している。釉は濃緑色を呈し、畳付のみ釉を掻き取っている。また、見込みと畳付には重ね焼きの目跡が現状で3ヶ所見られる。32は甕の口縁部破片で、33は鍋の口縁部破片。

越州窯系青磁

Fig.48-34~44はSD4570上層の出土。34・35は須恵器の蓋。36は土師器椀。37の高台は高く、底部が開き気味であることから高台付皿になろう。38は須恵器蓋で、環状柄みを貼付する。39は土師器蓋で、つまみは環状柄み。40は高台付皿で、口縁端部を欠くがシャープ

SD4571石裏込

SD4571溝底

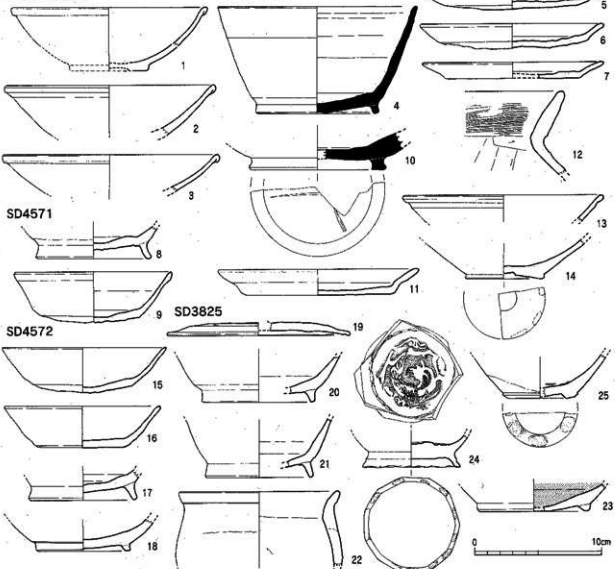


Fig.49 SD4571・4572・3825出土土器実測図 (1/3)

II 調査の内容

なつくり。41・42は皿で、41はやや深めのもの。43は黒色土器A類椀の底部破片。

SD4571出土土器 (Fig.49-1~14) 1~3は石裏込め中出土の邪窯系白磁椀の口縁部破片。

邪窯系白磁

口縁部を一旦折り返して玉縁としている。3点は接合しないので別個体として実測したが、釉調などから1と3は同一個体になる可能性がある。4~7は溝底の出土。4は須恵器環で、高台は体部端に貼付している。5~7は土師器皿で、5・6の底部は丸みを帯びる。8~14は埋土中の出土。8は土師器椀の底部破片。9は土師器環で、口縁端部は若干肥厚する。10は須恵器の底部破片で、外底面には十字形の窠記号を付している。大型の椀若しくは壺の底部になろう。

邪窯系白磁

11は土師器皿で、口縁部は一旦屈曲して立ち上がる。底部は窠切りによる。12は甕の口縁部破片。13は邪窯系白磁椀の口縁部破片で、端部を肥厚させている。14は越州窯系青磁椀の底部破片で、底部は蛇ノ目高台。全面に施釉しており、釉は緑色に発色する。また、高台には重ね焼きの目跡が現状で3ヶ所見られる。

越州窯系青磁

SD4572出土土器 (Fig.49-15~18) 15・16は土師器環で、15は丸底、16は平底を呈する。

墨書土器

17は椀の高台部破片。18は灰胎椀の底部破片で、内面のみ施釉している。胎土に黒色粒を含み、灰緑色の釉が濃く掛かる。また、高台内には僅かながら墨痕がみとめられるも判読不可。

SD3825出土土器 (Fig.49-19~25) 19は土師器蓋で、低平な器形。20・21は土師器椀の

龍文

底部破片。22は甕の口ノ肩部破片で、口縁部外面に面を有する。23は黒色土器A類椀の底部破片。24・25は越州窯系青磁椀の底部破片で、24の見込みには龍と雲を表現したスタンプを押ししている。高台は高く、端部を指で押さえ面取り風になっており、11面を数える。全面に施釉されており、灰緑色に発色する。また、壺付には重ね焼きの目跡が現状で9ヶ所見られる。25の釉は発色が悪く、灰緑色を呈するが、器面がざらつく。下半部外面は露胎で、現状で見込みに4ヶ所、壺付に4ヶ所の目跡が見られる。

その他の遺構出土土器 (Fig.50-1~10) 1~10はピット等からの出土。1・2は須恵器環の底部破片で、高台は体部端に貼付している。3は甕の口縁部破片で、口唇部に窠書き沈線を1条巡らせている。4は土師器で、蓋として実測した。5・7は椀で、5が口縁部、7は底部片。6は環で、底部には焼成後穿孔の小孔があく。8は小型甕の口縁部破片。9・10は緑釉。9は蓋で、口縁端部は鉤形に屈曲する。土師質焼成で、緑色の釉が全面に施されている。10は椀の底部破片で、底部は円盤状をなす。胎土は砂粒を多く含み、土師質に焼成される。釉の大半は剥落し、高台外面に僅かに残る程度。

包含層出土土器 (Fig.50-11~26) 11は土師器椀で、高台は剥落している。12は須恵器椀

越州窯系青磁椀の模倣

で、外面に篋ミガキを施した珍しいもの。13は蛇ノ目高台を呈する土師質焼成の椀で、外底面には黒斑が付く。越州窯系青磁椀を模倣したものであろう。SK4573上層黒色土の出土である。14・15は緑釉で、14は小椀の底部。釉の大半は剥落し、高台付近に緑色の釉を留める程度。胎土は砂粒を殆ど含まず、土師質に焼成される。また、円盤状高台の底部は糸切りによる。

白釉緑彩

15は椀の口縁部破片。須恵質焼成で、釉は淡緑色に発色する。16も椀の口縁部破片であるが、釉調は外面が灰白色、内面は淡緑色の釉の上に濃緑色の斑点がみられることから白釉緑彩になるか。17・18は灰釉で、17は椀の底部破片。内面のみ施釉しており、釉は灰緑色に発色する。18は段皿の口縁部破片で、外面は露胎。釉は灰緑色に発色し、17・18とも焼成は堅緻。19・

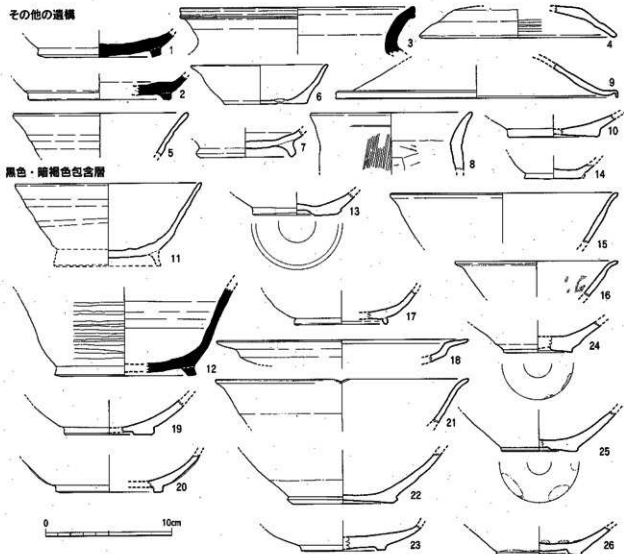


Fig.50 その他の遺構・包含層出土土器実測図 (1/3)

20は邢窯系白磁碗の底部破片で、19が蛇ノ目高台、20は輪状高台を呈する。釉はやや灰味が
 かった白色を呈するが、ともに壺付部の釉を掻き取っている。21～26は越州窯系青磁碗で、
 21が口縁部、他は体部下半の破片。21は口縁端部に切り込みを入れて輪花としている。底部
 形態は22が上底風の円盤状高台、23・26が輪状高台、24・25が蛇ノ目高台を呈する。また、
 22の下半部外面は露胎。釉調は21・23が灰味を帯びた緑色、24・25が緑色、22・26は灰味
 が強い緑色を呈し、22は貫入が著しく、釉の大半が剥落している。

黄灰色土出土器 (Fig.51) 1は須恵器の坏。見込みには墨が付着しているが、全く擦れ
 たらず、転用碗ではなく墨壺として使用したもの。2は須恵器皿で、大きく焼き歪む。3は鉢
 の体部破片。4は土師器小碗。5は須恵器有翼壺を真似た土師器の壺で、取手をソケット式に
 差し込んでいる。体部中位は篋ミガキを施しているが、下半部は篋ケズリによる。6・7は
 Fig.48-8と同じく体部と底部の境に凸帯を貼付したもので、盤になろう。8・9は黒色土器A
 類の碗底部破片。10～12は灰釉で、10は直口壺の口縁～肩部破片で、口縁部は短く直立する。
 外面の格子目タタキはナゲ消しており、内面には車輪状の当具痕がみられる。釉薬は殆ど見ら
 れないが、胎土には黒色粒が含まれる。11は蓋の口縁部破片で、天井部のみ緑灰色の釉が

邢窯系白磁
 越州窯系青
 磁

墨壺か？

車輪状当具
 痕

II 調査の内容

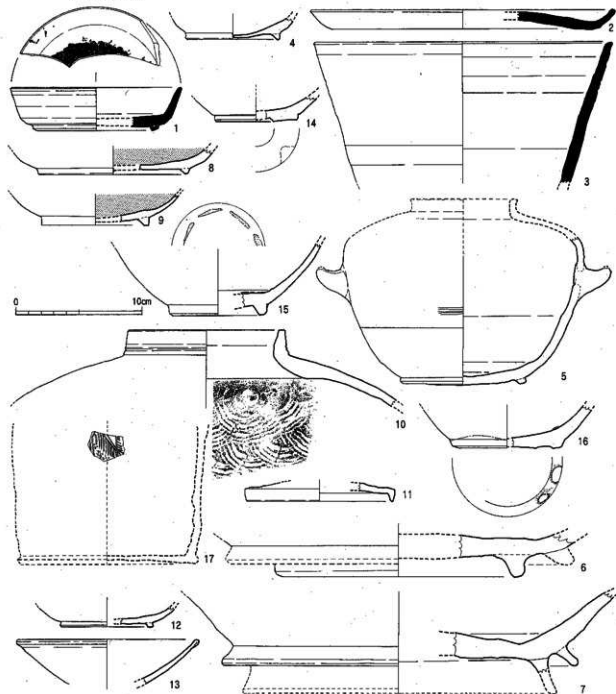


Fig.51 黄灰色土出土土器実測図 (1/3)

形窯系白磁 かる。12は底部破片で、内面には緑灰色の軸が掛かるが外面は露胎。13は形窯系白磁碗の口
 越州窯系青 縁部破片で、口縁端部を折り曲げて玉縁としている。14~16は越州窯系青磁碗の底部破片で、
 磁 14が蛇ノ目高台、15・16が輪状高台で、16の高台部は露胎。17は長沙窯黄釉褐彩で、水注
 長沙窯水注 の貼花文(メダイオン)部分の小破片。

墨書土器 (Fig.52-1~4) 文字に関する資料として墨書土器4点、刻書土器2点が出土している。
 1は須恵器蓋の天井部に1文字書いているが、欠損品でもあり、判読できない。2は須恵器
 皿で、底部に1文字あり、「而」の字に似るが定かではない。3は土師器皿で、口縁部の内外側
 縁と底面に墨書があるが、側縁の文字は記号風であり、判読できない。4も土師器皿で、内外

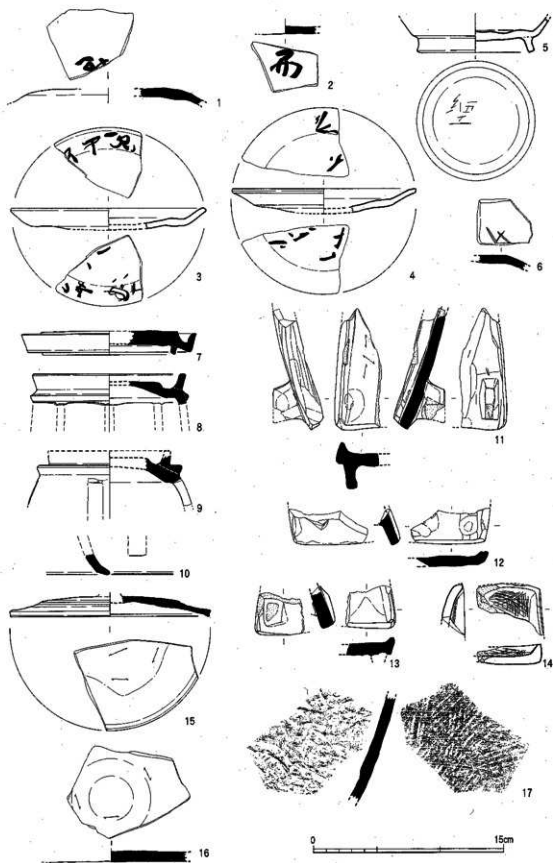


Fig.52 墨書土器・硯等実測図 (1/3)

II 調査の内容

面に墨書があるが、判読できない。1~4はSD4570B下層の出土。

【細工】 刻書土器 (Fig.52-5・6) 5は土師器碗で、高台内に釘状の工具で「細工」と線刻している。細工所は平安時代以降、院や摂関家・国衙などに置かれ、調度類の細工物を製造した所で、職場を表したのか。6は須恵器坏蓋の天井部外面に篋先で1文字分書かれているが、欠損品であるため判読できない。「土」偏のようでもある。5はSD4566、6は灰色土の出土である。

低脚円面硯 (Fig.52-7~17) 7は須恵器の円面硯であるが、脚部は短く高台状を呈する。陸部径10.6cm、外縁径13.8cm、脚部径10.4cmで、1/4程の残存状況。陸部から脚部にかけてナアによる。また、陸部は使用した形跡が無く、墨の付着も見られないことから未使用品。暗褐色

圓足円面硯 舎層の出土。8~10は須恵器の円面硯で、8・9とも脚部を欠く。陸部径は8が7.8cm、9が6.0cmで、外縁径は8が12.2cm、9が9.6cmに復元した。また、脚部には長方形スカー窓の切り込みがあり、8は9個、9は4個のスカー窓が想定される。10は脚部部の小破片で、幅1.4cmの長方形スカー窓の切り込みがある。8は黒色土、9は黄灰色土、10は遺構検出面の出土。

風字硯 11~13は須恵器の風字硯。11は左陸部側縁の破片で、残存長9.6cm、高さ4.0cmを測る。側縁はへらによる面取を施している。硯面はよく使用しており、墨も一部遺存している。12は右陸部端の破片で、脚部の基部が僅かに残存する。側縁はへらによる面取り。13は右陸部端の破片で、脚部は剥落している。11はSD4566の出土、12はSD4570Bの出土、13は黄灰色土の出土。14は黒色土器B類の風字硯で、海部付近の破片。内面は細かいミガキ調整による。胎土に雲母を含むものの精良である。SD4570Aの出土。

転用硯 15~17は土器転用硯で、15は須恵器蓋の転用品。肉眼では墨の付着はみられないが、よく擦っている。16は須恵器皿の転用品で、14同様、肉眼では墨の付着は観察できないが、器面はよく擦っており、平滑になっている。17は須恵器甕の転用品。一部タタキ目が無くなる程使用している。15はSD4568、16・17はSD4570の出土。また、SB4563-4(Fig.38-4)は、須恵器蓋の転用品。今回、8点の定形硯と4点の転用硯を確認したが、一遺跡からの出土としては多い方である。また、年代的には円面硯が8世紀代で、風字硯は9世紀代のもの。

赤 漆 漆付蓋土器 (Fig.53-1~4) 1・2は土師器坏で、内面には赤漆が付着している。漆の付着状況から容器として使用したものと思われる。3は土師器皿で、内面に赤漆が付着している。4は土師器碗の小片で、部分的に赤漆が残る。1はSK4573、2・4はSD4566の出土。

**玄界灘式製
埴土器** 製埴土器 (Fig.53-5~20) 5・6は土師器甕の体部破片で、所謂玄界灘式製埴土器。5は外面格子目タタキ、内面ナアで、6は外面擬格子タタキ、内面弧線状当具痕による。7~10は椀形の製埴土器で、7のみ内面ナア調整であるが、他は布目を留める。11~20は筒形の製埴土器で、11~18が体部小片で、19・20は底部破片。19を除き、内面には布目が残る。これら製埴土器の特徴として胎土に砂粒を多く含み、器面がザラつく。5はSK4573、6は検出面、7はSD4570B、8は壺地層、9はSD4570A、10は黄灰色土、11~13はSB4566類方、14はSD4570、15はSD4571、16はSK4574、17はSK4576、18・20はピット、19はSD4569の出土。なお、図示していないが、この他にもSB4560・4564、SD4568、SK4574・4576、壺地層、検出面から18点が出土している。

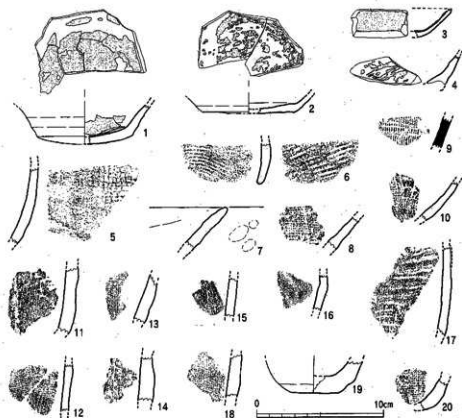


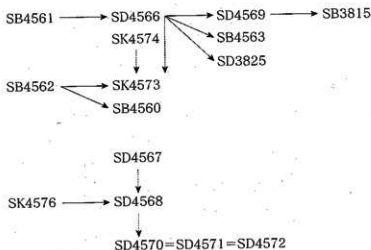
Fig.53 漆付着土器・製塩土器実測図 (1/3)

II 調査の内容

(4) 小 結

遺構の変遷

今回の第187次調査区での各遺構は、官衙的性格を有する掘立柱建物6棟とそれらと平行・直交する企画的な溝状遺構7条、建物近辺に設けられた廃棄土壌4基の3種からなる。これらは直接的・有機的に関連したもので、各遺構の変遷を解明するのに全体の様相をにらんだ上で検討する必要がある。まず、各遺構の切合い状況を整理すると以下のようになる。(「→」は古→新 「―→」は埋没期の古→新、「=」は連結して機能した遺構、を各々示す。)



切合いで4
段階の時期
差

この切合い状況の最上段に記したSB4561からの列は当調査区の時的変遷を典型的に示している。つまり、建物は完全に溝に切られて溝底にしか残らない状態、或いは完全に溝が自然堆積で埋没した後に柱穴が掘り込まれたことを確認できたことから、この4段階は確実に時期差を示すと言える。「→」で示した最終埋没による前後関係は、当初掘削の前後関係は厳密には不明であるが、その後の一定の時期の間は連結・並行して機能していた類である。例えば、SB4560西側の雨落溝と考えられるSD4568は、建物の存続期間は南側の大溝SD4570に排水しており、建物の廃絶とともに埋没したままとするが、大溝SD4570の方は更に10世紀中頃あたりまで改修を重ね乍ら機能して最終埋没土はSD4570のものが覆っている状態を示している。なおSB4564とSK4575は切合いが無いのでこの表には現れない。以上の切合い状況と、SD4566～4568がSB4560の雨落ち及び排水路であると推定することの各条件に、各遺構出土遺物の年代観を絡めて各遺構の存続年代を纏めてみると以下のようになる。

遺構の開始時期で見ると大きく4つの段階、細かく見ると少なくとも6段階が考えられる。

4つの画期

大きな画期としては、まず、第一は当調査区最古段階建物のSB4561・4562が作られる8世紀第3四半期で、他に小土壌や南側の大溝が存在していた可能性があるという程度の時期である。第二の画期はSB4560が作られる8世紀第4四半期で、これに伴って東西区画溝SD4566

8C後半に
全体が崩壊

やSD4567・4568雨落溝、SK4574・4573の廃棄土壌が相次いで設けられるという、当調査区最盛期である。この状態は9世紀前半期頃までは確実に続き、9世紀後半には雨落溝を始めとする各溝の埋没から見て、中央建物SB4560自体も既に廃絶していた可能性が高い。第三の画期は、上記前代の遺構が埋没した後に掘られた南北溝2本(SD4569・3825)と、その間の

年代	遺構の推定存続期間	
8C中頃		SK4576
8C後半(第3回半期)	SB4561 SB4562	SD4570 SD4572
(第4回半期)	SB4560 SK4574	SD4566 SD4568 SD4567
8C末～9C初	SK4573	SD4571
9C前半		SD4569
9C後半	SB4563	SK4575
10C前半		SD3825
10C中頃(編友の乱)		?
10C後半～11C前半	SB3815	

Tab.12 第187次各遺構存続年代概略表

南北棟小規模建物(SB4563)の開始となる9世紀後半代である。最後の第四画期は、II期大宰府政庁を焼き払った藤原純友の乱後の10世紀後半～11世紀前半頃で、当調査区内のかつての遺構上面に薄い盛り土が施され、南北に長大なSB3815が建築される時点である。この建物が何時まで続いたのか明確でないが、柱が抜かれている事や、周辺の出土遺物から見てそれ程長くは続いていないと思われる。これ以降の11世紀中頃以降には、出土遺物・遺構も全く認められないことから、この地の官衙はこの第四の画期をもって終焉したと考えられる。

11C前半までに終焉

遺構の性格

ここでは主に出土遺物から見た遺跡の性格と構造について述べる。当調査区から最も多量に出土したのは土師器杯・皿類と瓦類である。瓦は縄目一枚作り平瓦と縄目擦消し丸瓦を合わせると瓦全体の86%を占めており、時期的に上記の当調査区第1～2画期(8世紀後半～9世紀後半)に瓦葺建物があったと考えたい。これは、SK4575のような小土塼から多量の瓦が出土する瓦溜遺構が存在することからも傍証できる。時期的に該当するのはSB4561・4562・4560の3棟である。ただし、SB4561・4562の各柱穴からは縄目一枚作り平瓦片が偶然にも1点も出土しておらず、縄目模倣平瓦のみが少量出土しているだけであり、SB4560だけが瓦葺きであった可能性が高い。ただ、礎石建物は全く無く、しかも軒瓦が丸・平、新旧各種合わせても計32片しか出土しておらず、道具瓦も鬼瓦らしい小塊が1点あるのみという状態である。以上の事から、当調査区の瓦葺建物は、縄目一枚作り平瓦段階の丸・平瓦を主体として、恐らく軒瓦を用いず、棟も高くせず丸瓦を並べた程度の切妻建物と想像される。円筒模倣平瓦段階の斜格子叩きの瓦は、大半が細かい斜格子で古段階のものであることから、上記第1～2画期段階の建物の補修に用いられたものと解釈することができる。なお、無文長方形磚も25点出土しているが、いずれも軒丸瓦敷点と同様に大溝護岸の石積に転用されたり、建物柱穴の根固めに用いられたりして、専ら土木工事材料としての用途が認められる。

1棟だけが瓦葺建物か

軒瓦を用いない建物

大量の土師器を主体とした生活土器の出土は、8世紀後半～10世紀代の活発な活動を彷彿

II 調査の内容

とさせるに充分である。特に官衙的な性格を裏付けるものに硯がある。今回は計8面(円面硯4面、風字硯4面。風字硯のうち1点が黒色土器B類で他はいずれも須恵質)が出土し、時期の分かる遺構出土のものは少ないが、それから見る限り新しくても8世紀後半には認められる。須恵器杯蓋等を利用した転用硯も8世紀代を中心として6点以上出土している。その他に墨書土器、9世紀前半代の「細工」銘の刻字土器杯等の出土から見ても刀筆の吏の存在は明確である。特に定形硯(円面硯・風字硯・方形硯)の政庁全域からの出土総数が約30点であることから見ると、この狭い第187次調査区での8点もの出土は特筆すべきものがある。また、大宰府初出土の銅鈔帯1点や、石帯2点の出土も官衙域に相応しい。

刀筆の吏の
存在

ガラス、色鮮やかな香爐蓋等の各種緑釉陶器、東海地方産の灰釉、唐代の白磁・越州窯系青磁、長沙窯黄釉褐彩貼花文水注等の各種多量の華やかな珍貴招来品は、今回調査の最大の収穫物である。これらは観世音寺近辺の調査で得られた唐三彩を始めとする品々に肩を並べ得る質と量を誇る。そういう意味からは、却って、不丁官衙域の南端のはずれの官衙出土品というイメージには全く相応しく無い。むしろ、観世音寺等の大寺や政庁正殿の儀器、鴻臚館での賓客接待用品、帥等の高級官人邸の威信財的なものと考えの方が自然であろう。中でもガラス片は、成分が鴻臚館出土のうちの1点と類似し、薄手のローマングラス系小壺で、西アジアのシリアあたりと推定される地で生産された後、中国を経て、或いは中に貴重な香料・薬品類を入れて渡来した可能性がある。大宰府で受け入れて鴻臚館に配備された状況を示すものであろう。また、長沙窯黄釉褐彩水注のメダイオン片は、100m北方の19年前の第98次調査出土品と奇しくも接合したものであるが、同一個体各部分が今回調査区内から5片出土していることから、本来こちらに在って、SK4574に廃棄されたものの一部が拾われて、100m北まで移動したものと考えられる。

華やかな外
来高級品

次に生産関係遺物であるが、土製鋳型等の鋳造関係遺物及び銅片・銅屑等が出土し、8世紀後半～9世紀後半の間に操業が近辺で行われた事が知られる。また鍛冶関係の操業も8世紀後半～10世紀中頃の間に行了われたことも報告したが、出土量から見ていずれも高次的、或いは臨時的操業と考えられ、来木地区で見られるような大規模な本格的操業ではない。ただ、土師器底部の刻字「細工」の明確な意味は現段階では提示し難いものの、これら小規模生産操業の痕跡を認める時、「細工所」的な施設の存在もあながち排除できないものと思われる。

「細工」刻
字が示す意味

最後に祭祀遺物とされる土師質焼成土馬3体分の出土は、九州における大和形土馬の確認として重要である。うち頭部を含む2点は出土遺構(SD4566)から8世紀後半～9世紀後半の年代が与えられる。大宰府では政庁北西官衙地区の第102次調査で須恵質の大ぶりの埋納土馬が出土したが、これは7世紀後半の在地的農耕馬の形態で、定型化した律令期下の延喜式等に集成される諸規則に基づく祭祀として定着する以前の様相を示すものと思われる。今回の大和形土馬は、朝廷直轄の大宰府として、養老職員令に見えるように「主神一人」や「陰陽師一人」が赴任していたことから、当然の出土ではある。今回のものが溝の自然埋没土・包含層出土品で、原位置を留めていないとは言え、3体分も1地点から出土したということは、大宰府のこれまでの調査結果から見て、単なる偶然とは考えられない。現段階では祭祀目的・対象も特定し難く何とも結論は出し得ないが、今後とも留意しておくべき事実である。

律令体制下
の祭祀

不丁地区官衙 (Fig.54)

前項までに出土遺物から見た第187次調査区の性格を検討してみた。その結果、まず最低、官衙としての条件は整っていると評価したい。ただその具体的な性格としては困惑せざるを得ない点も幾つかある。貴重な外来品の多さは、様々な解釈が出来ようが、前述した建物の検討の結果から見ても、現状では神等の高級官舎の存在は考え難い。ひとつには所謂現通称朱雀門に当たる不丁官衙南端の門から入ってすぐ左手にあたる位置であることから、運ばれてきた諸物資の受け付け・仕分け的な場所であったのではないかと案も拵て難い。これはこの北東側30mの南北大溝SD2340から多くの付札(木簡)が出土していることから充分考えられる。

南端官衙の性格

建物について不丁官衙全体から概観してみよう。不丁地区官衙域は、東にSD2340、西にSD320の各南北大溝に区画された、幅87.3m(大宝大尺で約250尺)の間で、北は蔵司官衙域の南側の政庁前推定東西大路に接すると思われるが、南限はSD2015をもってする復元案が提示されている地域である。今回の東西棟SB4560(2×5間)は8世紀後半と推定したが、これと同時期の2×5間の東西棟としてはすぐ北東側のSB2460、不丁地区中央部のSB2380A、その西方のSB2415等があり、時期が若干前後するとその他にも北端部のSB2520、中央部のSB2405、SB2410、SB2380B等がみられ、官衙建物として規格的な建物であることがわかる。

規格的东西棟を各ブロックに配置

不丁官衙全体の時期変遷を見ると、中央部に8世紀前半(当初はSB2425・2435等でやや東に振った建物)〜中頃の諸建物がまず建てられ、これが8世紀後半になって一斉に南北全域に拡大する。9世紀にも幾らか建て直しや増棟 (SB2535・2520・2380B・2515・4048) がみられるが、10世紀になると、小規模な主軸を西に振る建物 (SB4046・4047等) となり散在状態となる。また今回調査のSB3815のような長大な南北棟も、8世紀後半を中心に、北端部・中央部の東端、北半部・中央部・南端部のもと西寄りの部位に各々配置されたことがよくわかる。これら東西の2×5間棟と南北長大棟は、あたかもセットの如く配置されているようにも思われる。ただ南端部においては東端寄りに南北棟が未調査である。

東西棟と南北長大棟はセット

以上のように、建物の規模・配置の計画性を不丁地区全体から見ると、今回調査分を含めたSD2015東西溝(8世紀後半掘削)以南の建物群についても、やはりこの不丁官衙に含め得るものと考えられる。従来、このSD2015をもって不丁官衙の南限としてきたが、これらのSB2460・4560・4561・4562・3815等を不丁官衙の南グループと位置付けて、今後更に官衙域の構造の解明に当たりたい。

不丁官衙域はもつと南まで

4 大宰府史跡第187次調査及び

鴻臚館跡から出土したガラス製品の材質調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

ガラスは弥生時代以降、大陸や半島などから日本に持ち込まれたとされているが、これまでの先学による調査研究により、その組成が幾つかのグループに分類できることが明らかにされ、その歴史の変遷や流通経路などの研究も進められている。大宰府史跡第187次調査で出土した、奈良時代末から平安時代初期に属すると考えられるガラス製品について、その位置づけを目的とした材質調査を行ったので、ここにその結果を記す。また、本資料と外見的に酷似し、比較的近い時期に属すると考えられる資料が、福岡市の鴻臚館跡から出土している。比較検討のため、こちらの資料についても調査を行ったので、その結果も併せて掲載する。

大宰府出土の資料（仮に資料D-1とする）は縦1.9cm、横2.6cm、厚さ2.8～0.8mm、重さ1.8gを計り、容器の破片と考えられている。透明度は高く、淡い青緑色を呈している。各所に1mm前後の気泡が見られ、製作技法を検討する場合には何らかの手がかりになると思われる。

分析手法

調査は蛍光X線分析法で行った。この方法は試料にX線を照射し、試料に含有する各元素から発生する二次X線（特性X線）を検出器でとらえ、X線エネルギー分布と強度をピークとして表すものである。ガラス試料の場合、局部的に強いX線を照射するとその部分が変色を来す現象が起きるため、同じ蛍光X線分析法でも、X線強度が小さくても測定のできるエネルギー分散型蛍光X線分析法が、資料に損傷を与えない方法として有効である。そこで今回は、福岡市埋蔵文化財センターの微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（エダックス社製：Eagle μ -plove）を使用し、以下の条件により分析を行った。

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：20及び40kV・180～500 μ A／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm ϕ ／測定時間300秒

非破壊定性分析

また本来詳細な調査を行うには、風化層を除去した上で標準資料を用いた校正により成分の定定量を求める必要があるが、今回は大まかな傾向を知るための非破壊的手法による定性分析とし、肉眼的に汚れ等の付着がないことを確認した上で、そのまま測定している。

分析の結果、ガラスの主成分である珪素(Si)の他、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)といった元素が検出された。この他、特に高い電圧で測定した際に、8KeV付近に微弱な高まりが現れている。この部分は銅(Cu)のK α 線に相当するが、この元素が含まれるか否かの判断は難しい。

今回は完全非破壊による定性分析のため、検出される蛍光X線ピークの特徴と相対強度を手掛かりとして判定することとなる。過去に行ってきた同様の手法による調査でも、この方法によりある程度の分類が可能なのは確認されている。古代のガラスには、これまでの調査研究でアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（ K_2O-SiO_2 系）と融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（ $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系）と、低いもの（ $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系）に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス（ $PbO-SiO_2$ 系）と鉛バリウムガラス（ $PbO-BaO-SiO_2$ 系）がある。

古代ガラスの分類

資料D-1の場合、ナトリウムが明瞭なピークと、カルシウムがカリウムのピークを上回っている特徴から、アルカリ珪酸塩系ガラスのソーダ石灰ガラスであることが推測される。マグネシウムもこれまでに類を見ないほど明瞭なピークとして現れているという特徴も指摘できる。この他マンガンが鉄のピークを上回るほど強く表れている。弥生時代から古墳時代に盛行する青紺色の玉類の中にも同様にマンガンが強く表れるものがあるが、これは着色要因であるコバルトに伴うと考えられている。本資料ではコバルトは確認されておらず、その成因は不明である。またアルミニウムについては定量値を算出していないため推測にすぎないが、これまでにやってきた他の資料との比較により、低アルミナタイプに属すると考えられる。

ソーダ石灰ガラス

低アルミナタイプ

続いて鴻臚館跡出土の資料であるが、今回対象としたのは3次調査の土層(SK-02)から出土した2点のガラス容器片で、いずれも口縁部分と考えられる破片である。1点は資料D-1と似通っていて透明な緑色を(資料K-1)、もう1点は無色透明を(資料K-2)、それぞれ呈している。遺構の時期は出土する陶磁器から9世紀後半とされている。

分析の結果、検出された元素の種類(ナトリウム、マグネシウム、アルミニウム、珪素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄)とその強度は2点ともD-1と非常に酷似している。いずれも低アルミナタイプに属すると考えられるソーダ石灰ガラスの特徴を示す結果となった。またK-1では、やはり銅(Cu)のK α 部分にピークが微弱ながら確認され、特に高電圧の測定ではより顕著に表れている。これに対してK-2ではこの状況は観察できない。

鴻臚館のもの極めて酷似

なお、鴻臚館出土の2点については、過去に日本電気硝子株式会社においてEPMA及び湿式法(内容は不明)による分析が行われ、今回とはほぼ同様の結果が得られており、その中にマグネシウムとカルシウムの含有量からイスラムガラスであるとの判断がコメントとして付されている。¹⁾

ソーダ石灰ガラスの内、アルミニウム含有量の少ないタイプは西アジアが起源とされている。即断はできないものの、特に鴻臚館ではイスラム陶器の共伴も見られることから、今回の分析結果は何らかの繋がりを想起させるものとなっている。いうまでもなく大宰府は古代九州における政治の中心であり、その外交を担っていた鴻臚館は、まさにアジアに開かれた玄関口であった。この2カ所で西アジアとの関連が想定されるガラスが出土することには、何の違和感もなく至極当然のことであろう。ただし、今回はあくまでも当該資料の表面的な定性分析からの推測に過ぎず、原料(ガラス素材)の産地と加工場所の問題や、これらの資料が仮に搬入品であったとしても、それが直接か間接かといった点については、別途検討が必要な課題である。それらも含め、今後は形態も含めた類例の調査や定量的な数値の比較といった裏付けが必要になるものと考えられる。

西アジア起源

註

1) 分析結果は公表されておらず、福岡市教育委員会に提出された分析結果をもとに作成されたレポートを、同前文化財部長柳田純孝氏より提示頂いた。

参考文献

- 肥塚隆保 1996 「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号 財団法人古代学協会
 肥塚隆保 1998 「主成分からみた古代ガラスとその歴史的發展」『保存科学研究集』1998 (発表要旨集)
 奈良国立文化財研究所

5 側溝工事立会調査 (観世音寺駐車場横)

(1) 概要

平成10年6月15日に太宰府市教育委員会から提出された史跡観世音寺および子院跡についての現状変更に対応した立会調査である。調査地は現参道の東側に設けられた南北方向の幅0.6m、深さ0.3mの溝である。この溝は東側に設けられた見学者のための駐車場の西側で、丁度参道と駐車場の境界部分にあたる。この溝は南門推定地より参道に沿って南北に約93m延び、前面の県道筑紫野—太宰府線の側溝へ接続する溝で、境内地の排水と駐車場の排水を行う重要な溝である。現状は素掘りの溝で、埋まっていたり必ずしも十分な機能を果たしていないこともあり、今回の現状変更の大きな理由となっている。

工事は出来るだけ地下遺構を損なわないように、幅・深さとも当初の溝の掘方に近い状況で新溝を構築するよう、計画時から指導を行っていた。まず、埋まった土を除去し、包含層の掘削を行った。

今回、報告の出土遺物は全て遺構上面に堆積する茶褐色および黒灰色の包含層からの出土である。当調査地の周辺地域については過去に4箇所(第16・109・111・130次)を実施しており、本調査地の遺構面等についてはある程度予測が可能であり、計画段階で十分な協議をしていたこともあり、立会調査は比較的スムーズに進んだ。出土遺物はそのほとんどが中世期に属する。

調査地の地番は太宰府市観世音寺3丁目440-3である。立会調査の期間は平成10年9月の約1ヶ月間である。



Fig.58 観世音寺側溝工事立会位置図 (1/2,000)

(2) 出土遺物

土器等 (Fig.59-1~5) 1は9世紀前半までの土師器皿。2は9世紀後半頃の土師器で、底外面に幅1cmの板口。3は龍泉窯系青磁碗1-2類。4は青緑色の厚い釉の明代青磁碗。5は滑石製石鍋片の下端に表裏両面から切り込みを入れて、ずれて切断された転用品。

瓦類 (Fig.59・60-6~20) 6は軒平瓦560Aで浅い段頸類。7は楕円形の大粒の珠文帯を持ち、中心が継がる巴文軒丸瓦。丸瓦部凸面には布目一枚作り段階の平瓦と同じ粗大な斜格子文が残る。9は叩打痕文字瓦902F(「佐」左文字、松倉瓦窯)や921(「天延三年七月七日」

老司1式軒平瓦

II 調査の内容

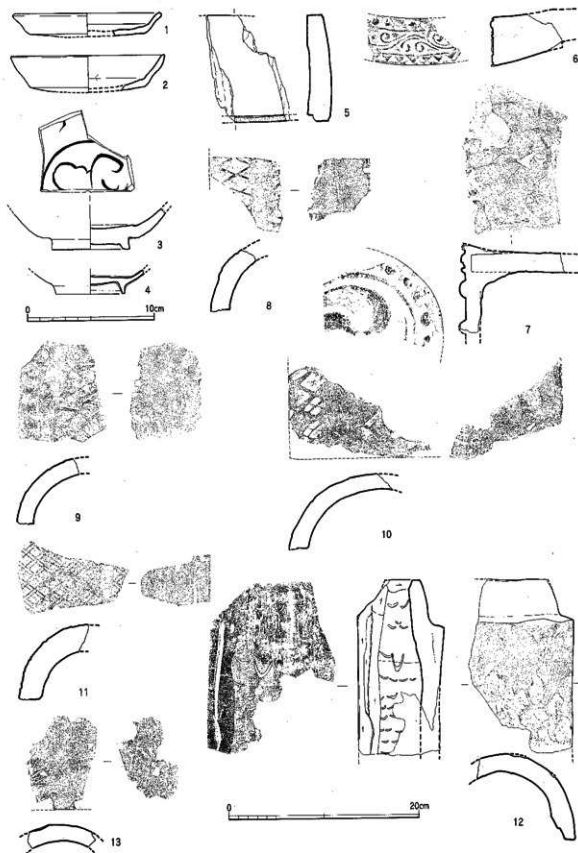


Fig.59 観世音寺側溝工事立会出土遺物実測図 (その1) (土器: 1/3, 瓦: 1/4)

左文字、975年、坂本瓦窯例に類似した叩き。10は軒平瓦604型式や原経塚(「天永元年(1,110年)銘経筒と共伴した平瓦3枚)例と同一叩き。11は2.5~2.8cm厚さの部厚い二重斜格子文丸瓦。12~14は凸面縄目捺り消し丸瓦類で、13にはへら沈線による放射状施文、12の凹面には1.2~2.5cm間隔で横位に10条以上の刺子状布縷じ紐圧痕(太さ1.5~3mm)がある。14の凹面も同類。15・16は大宰府域において12世紀第1四半期以降に再び現れた凸型台一枚作りの当初段階例で、観世音寺所用瓦。18は凸型で成形後に凹型で仕上げた一枚作りで、7の巴文軒瓦凸面の粗大な斜格子と同類。焼成前の整った孔がみられ、その位置からみて複数の孔を持つ軒平瓦、或いは幅の狭い甍斗瓦となるか。19・20は凸型成形後、凹型で仕上げた離れ砂使用の一枚作り平瓦。

凸型台一枚
作り平瓦

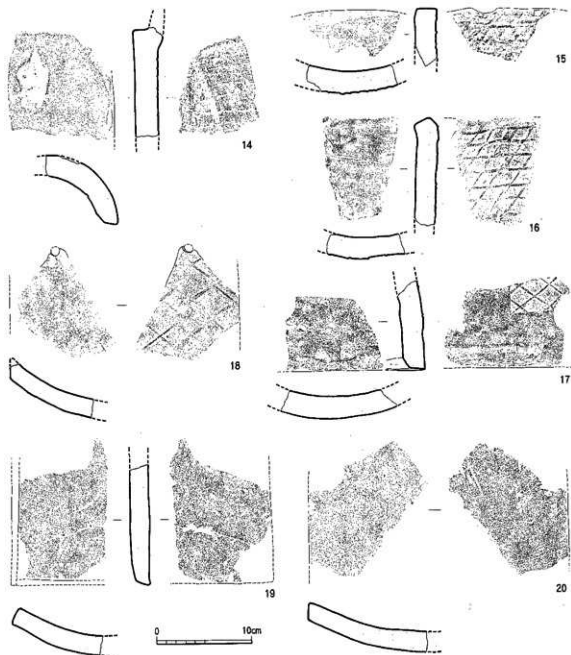


Fig.60 観世音寺朝溝工事立会出土遺物実測図(その2)(1/4)

II 調査の内容

観世音寺所
用瓦

以上の出土品のうち、6は観世音寺創建所用瓦、1・2は9世紀代、9が10世紀後半代の修復瓦の可能性はあるが、あとの8・10・11・17は12世紀前半代に近い、桶巻作り最終段階に近い類。15・16は既述の如く12世紀第1四半期を上限とする凸型一枚作りの観世音寺所用瓦。7・18は古式巴文軒丸瓦で、平瓦では既に一枚作りとなっており12～13世紀の幅の中で考えておこう。4・12～14・19・20は14～16世紀、瓦は若干降る可能性も残しておこう。以上のように時期を見てくると、当然乍ら観世音寺の変遷に沿った状況であることが理解できるが、特に平安時代中～後期の10・11世紀の遺物が希薄である傾向を指摘できる。

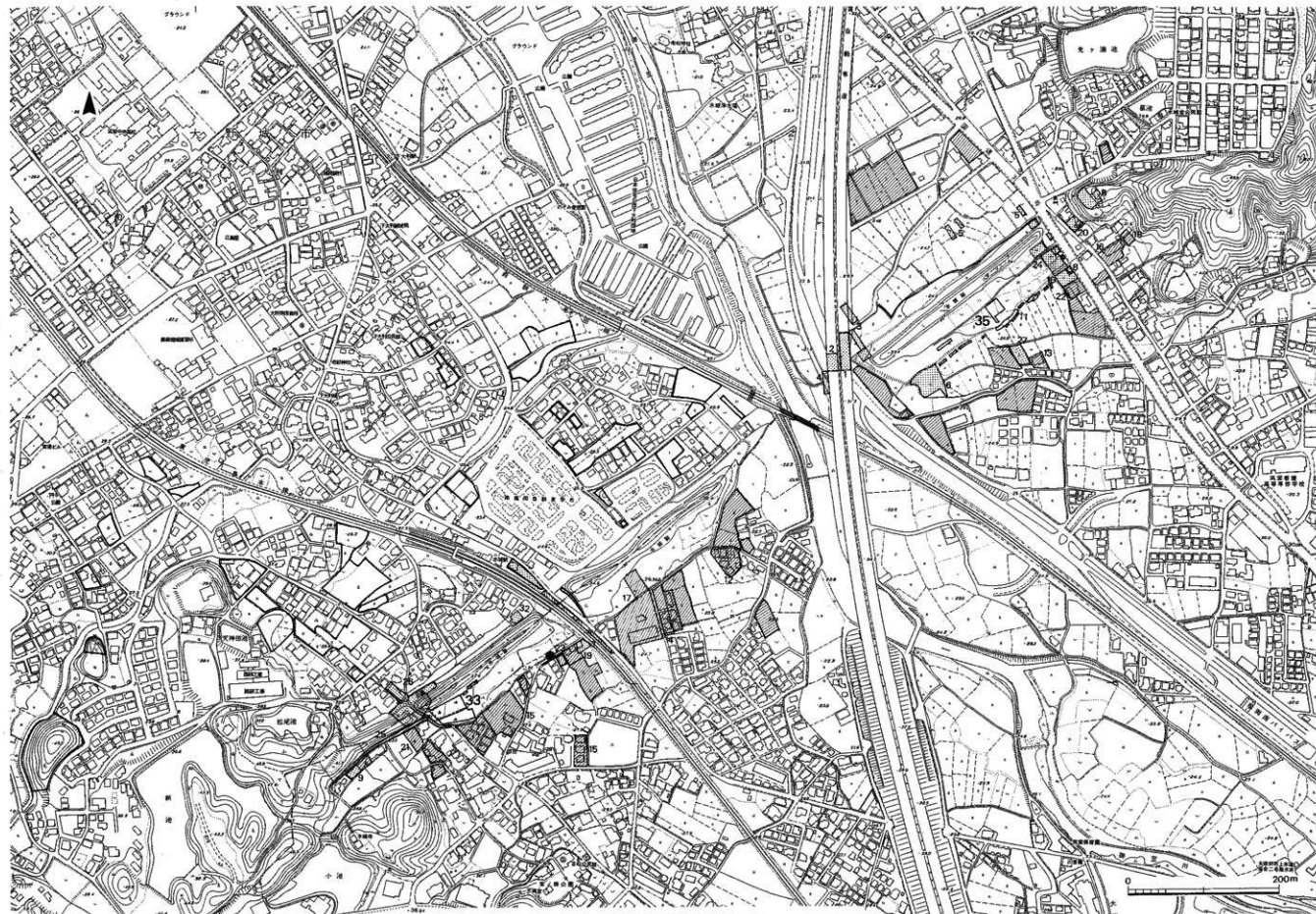


Fig. 61 水城跡発掘調査地域図 (1/5,000)

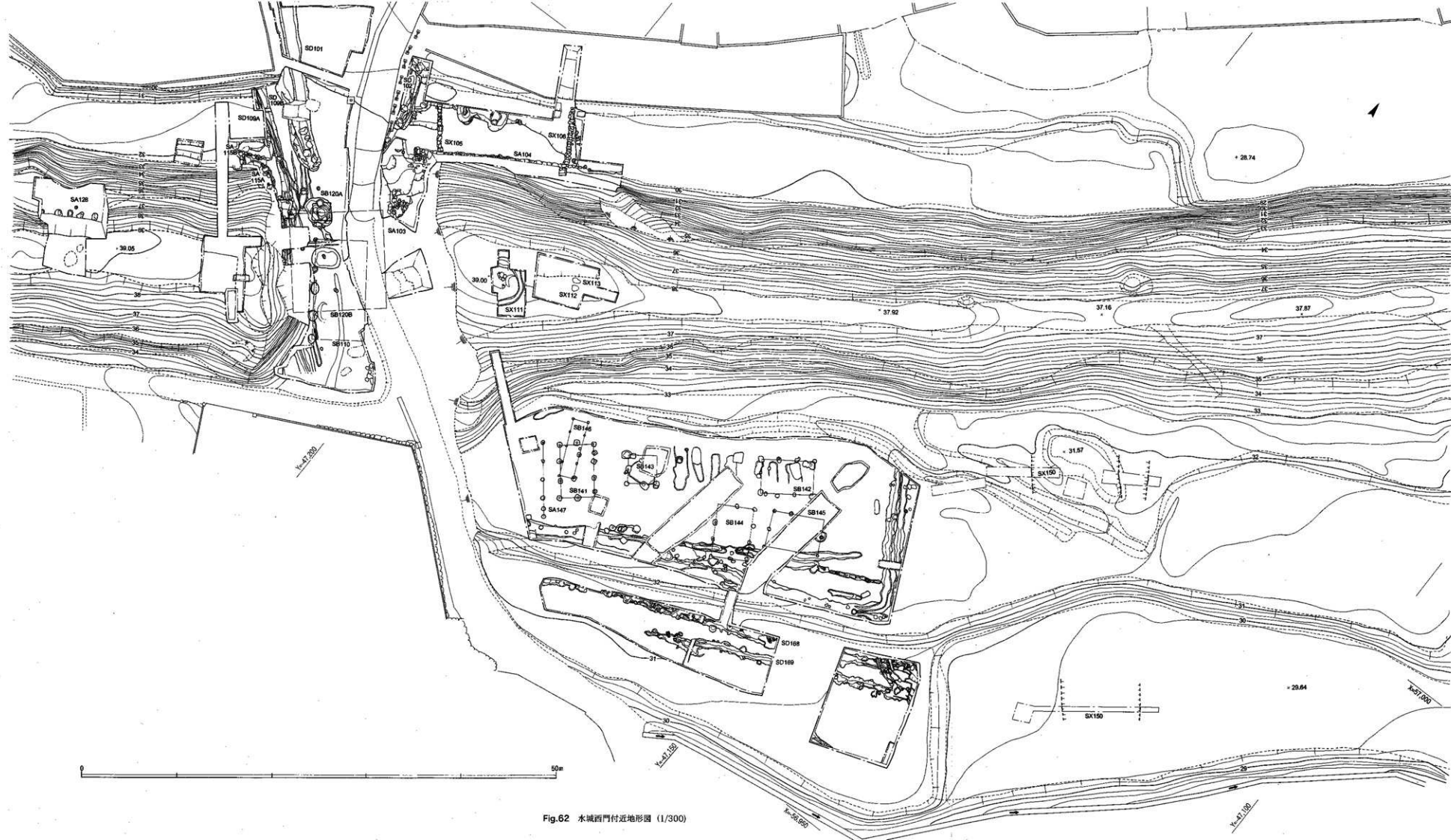


Fig.62 水城西門村近地形圖 (1/300)

6 水城跡第33次調査（西門南東側の調査）

(1) 概要

経過 特別史跡水城跡の西門地区の発掘調査は、水城跡第26次調査として平成6～7年度の間にⅡ・Ⅲ期の門遺構、北面側の石垣・基底部石列、北側の官道との関連、東側土塁頂部の経塚発見等、多大な調査結果を得た。平成8年度には、待望のⅠ期の掘立柱建物の発見とともに、西土塁北面中段テラス部（K区）での柱穴4個の検出にも成功した。これらの成果に基づいて、次に今回調査区の西門内側（南東側）テラス部分について、門を守り管理する施設の存在、土塁内側裾部における基底部石列の存在、門の南東側土塁が南へ拡がっている現況の理由確認等の目的によって、第33次調査を実施した。発掘調査は平成12年11月28日～平成13年6月25日で、調査面積は、775㎡。太宰府市吉松175、176、178番にあたる。

西門調査の
成果

当初、上下2段のテラス面の上段に6カ所、下段に3カ所の2×2mの手掘り試掘トレンチ（Tr.1～9）を設定して、遺構の残存状況を確認した。その結果、意外にも各時期の土器片を多く含む包含層や遺構を全トレンチで確認したので、その後は重機による全面表土剥ぎに切り替えた。また、発掘調査と並行して、特別史跡指定範囲内の土塁を中心とした平板測量による地形図作成を、西門東側土塁上から東へ向かって進めた。

試掘グリッ
ド

なお、調査期間中には東北学院大学佐川正敏氏、宮城県教育委員会須田良平・佐久間光平・山田晃弘・稲毛英則の各氏、韓国慶州文化財研究所金必淑・李惠京氏等の来訪を受けて貴重な意見交換を行うことができた。特に佐賀大学林重徳教授（土木工学）、九州考古学会会長渡辺正気先生には土塁構築技術などについての直接的な御教示を賜った。5月24日には大宰府史跡調査研究指導委員会の現地指導を受けた。また、現地説明会、大野城市教育委員会主催のボランティア講座の皆様その他にも連日多数の見学者が相次ぎ、3月には韓国KBS-TV「歴史スペシャル」番組の取材があり、隣国の人気番組での放映もあった。

(2) 基本層序

今回の調査はその性格や目的によって大きく3つに分けられる。第一は、上下2段に分かれるテラス面状の調査であるが、歴史時代の建物群を始めとする各種遺構の調査が主体となり、それに付随して上下段の溝等の関係から見るテラスの現況への形成過程の調査、更に歴史時代基盤層に食い込む縄文～旧石器時代遺跡の調査である。第二に、土塁そのものの南側及びその裾部について。第三には、当初予定していたものではなかったが、偶然トレンチにかかって確認するに至った水城における第4番目の木樋掘方の調査である。各々の調査での基本土層が異なるため、ここでは第一の調査としたテラス面での基本層序を示すこととし、他の2つの調査の基本層序は各々の遺構の箇所にて記述したい。

地 山 今回の最大の成果のひとつとして、赤褐色粘質土の所謂鳥栖ロームが上に覆った低丘陵の削り出しによって水城土塁の基底部から土塁のかなりの部分まで形成されていたという事がある。この元来の低丘陵は花崗岩風化土であり、その上に八女ロームの白色粘土・黄褐色土・赤茶色粘質土の順に乗る。上段テラス（P-1区）（Fig.64）においては、この赤茶色粘質土（鳥栖ローム）が縄文・奈良～室町期の遺構面になっている。一方、下段テラス（P-2・3区）

低丘陵を削り
出す



Fig. 63 水城寨33次調査主要部遺構全体図 (1/200)

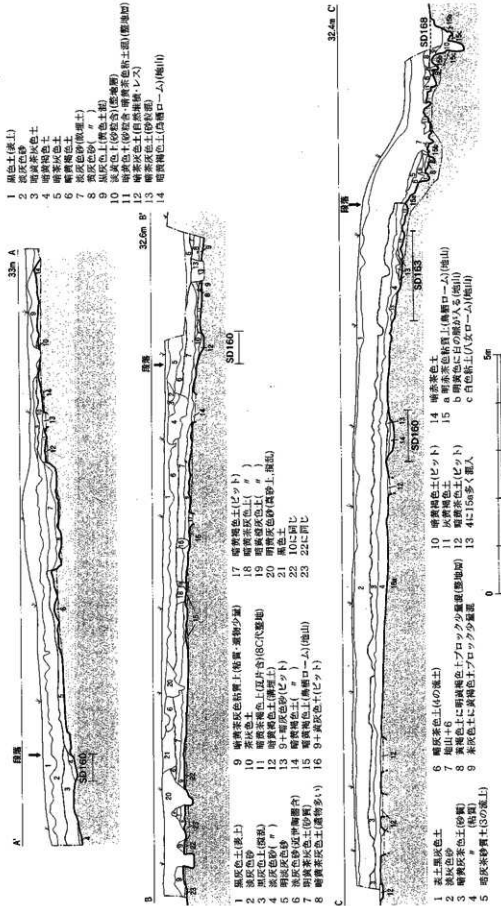


Fig.64 P-1区 (上段テラス) 南北方向土層断面図 (1/80)

II 調査の内容

ローム層が 遺構面

(Fig.65・66)においては、大部分が黄褐色土や部分的に白色粘土の八女ローム層が遺構面となっており、上段テラスの削り出しが浅く、下段テラスの削り出しは深かったことが判る。よって、本来の自然丘陵の状態では全体が緩やかな南斜面であったものが、後世下段テラス部分が大きくカットされて上下2段に分かれ、現況に至っていることになる。

7C後半代 の層

整地層 基本層序としての調査区全体に関わる明確な古い整地層は存在しない。部分的に確認されたものを古い順に示すと、まずP-3区(下段テラス東側調査区)の南半に覆る暗茶色土(Fig.66, P-3区西壁土層図の6)がある。これは自然堆積的な包含層だが、出土土器(Fig.84-3~12)が示す如く、7世紀後半代の遺物を多く含む唯一の層である。この南端部のみ残った古い層の存在は、水城初築期に、より北側の現在の上段テラス付近で用いられた生活土器の包含層が、その後の削平により他では残らず、南斜面付近のこの位置にのみ残ったものと解釈される。ただ、11の土師器小皿は11世紀後半~12世紀前葉のもので、層自体が新しいのか、取り上げ時の混入品なのか不明。孰れにしる調査範囲内でここだけに7世紀後半代の遺物が集中するという事は、土塁本体以南が初築当初の地形を残さず、大部分が改変されたことを示す処であろう。次に、上段テラス西端のSB141以西の整地層(Fig.64 A-A'土層の10・11)が掲げられる。これは暗黄茶色粘土を混ぜた黄色土系の横土で、厚いところでは20cmほどあるが3×5mほどの狭い範囲にしか残らず、詳細は明確にできない。出土土器(Fig.84-2)は内面に楕円形の青海波がみられ、7世紀末以降で8世紀前半までのもの。この整地層は土塁裾から

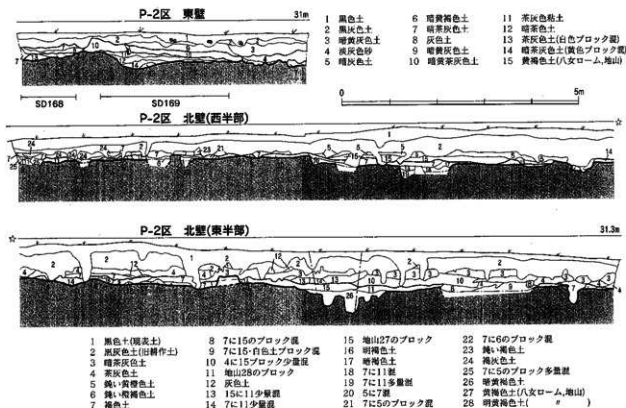


Fig.65 P-2区調査区東・北壁土層実測図 (1/80)

2.5m程離れた地点から始まって、南方へ厚めに、その上面が水平となるように盛られていることから、8世紀代に施された上段テラス利用を目的とした地築と考えられる。また、これと似た時期の整地層として、上段テラス中央部南端を東西に走る溝SD160が切る南側の層(Fig.64 B-B'土層の11)が掲げられる。これは瓦片を含む暗黄茶褐色土層で、上段テラス南辺の段落ち以南にのみ残った8世紀の緩斜面造成の整地層と考えられる。以上の各土層の他には上段テラスには整地層と思しきものは見られず、ほぼ全面で鳥栖ロームの地山面が歴史時代遺構面となっている。次に、下段テラス北半のSD168の上に被っている整地層(Fig.64 C-C'土層の8)がある。これは図中で「段落」と示した箇所では13世紀後半を下限とする包含層を切り落として、下段テラスを拡張造成してから、15世紀の溝SD168埋没後にならされた地築である。よってこの整地層自体は15世紀以降となるが、江戸期の盛土と考えられる淡灰色砂層

8C代の整地層

15C以降の整地層

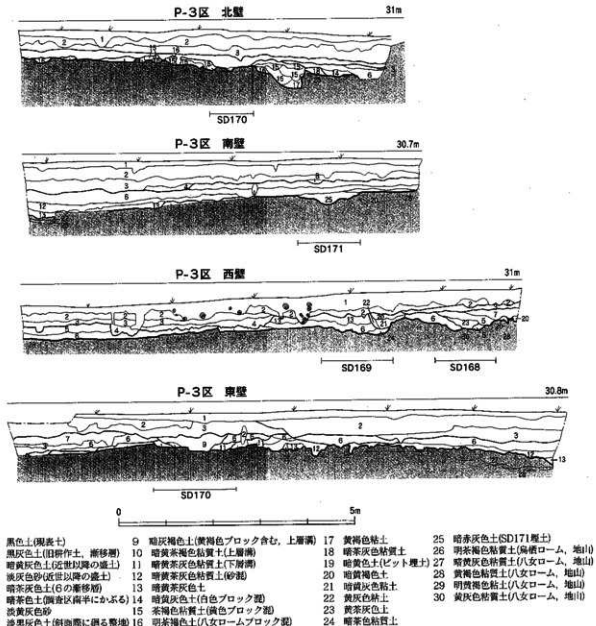


Fig.66 P-3区調査区各壁土層実測図 (1/80)

II 調査の内容

が上に厚く被っており、土自体もそう新しい感じがしないことから、15世紀から江戸期までの間の整地と推定できる。

包含層 上段テラス全体に厚さ30~40cm堆積している暗黄灰茶色土(Fig.64 B-B'の7~9層、C-C'の3・4層)が代表的なものである。地山の烏栖ローム層に直接載っており、うち上半は砂質で、下半は粘質である。この層の上面は、下の地山の傾斜に従って同じ厚さで傾斜を見せており、この面から切り込む穴は確かに見られるが、そのための整地層とは考えられない。遺物を多く包含しており(Fig.84-13~40)、7世紀後半代(13・15・26)から8世紀の土器を主体として、12世紀中頃前後(32)、13世紀後半(33)まで見られる。白磁(34・35)や瓦質や土師質の鉢類(36~40)もそれに対応している。また、Fig.85-7~9の鉄釘類の出土も見られ、他に、図示に耐えない小片の滑石製石鏡片が4点出土している。また、鉄滓4点(椀形滓1点含む)(計193g)が出土。なお、当遺跡全体では計7点(419g、椀形滓2点)が出土している。この包含層は、上述の如く下段への段落ち部でカットされており、下段テラスにおいては全く認められない。下段テラスにおいて最南端のSD171(8世紀代)以外には奈良~平安期の遺構が認められないことと、この暗黄灰茶色包含層がカットされていること等から、下段テラスが造成されて明確に上下2段のテラス状態になったのは13世紀後半以降と考えられる。

新期客土 調査区の全体の現表土直下に、淡灰色砂質土層が厚く盛られている。上段テラスのP-1区で30~50cm、下段テラスでは薄くて10~20cm、更に東方では推定木樋埋設部(SX150)のへこんだ窪みを埋めるが如く、厚さ40cmの客土が認められる。これらの土は花崗岩風化土の二次堆積したものを持ち込んだもので、砂質が強くやや汚れがひどいが、全体に均一な土質であることから、流水による二次堆積が広く厚く形成された場所から採取されたものと考えられる。出土遺物はFig.85-1・2の他に近世陶器片がある。地元の方々の記憶に無いこの盛土が何時行われたか、確定はできないが、近世~近代初期に主に上段テラスを水平にする目的で客土され、その後畑となり、一時期宅地や東側では墓地になったことがわかる。



水城西門跡付近(南から)

13C後半までの包含層

包含層をカットしてテラスを形成

近世以降の新客土

(3) 遺構と遺物

SB141 (Fig.67, PL.25)

上段テラス西端に位置する2×3間の南北棟掘立柱建物で、柱間心々距離は基本的に6尺等間（1尺=29.17cmの場合、5.5尺とすると1尺=31.8cm）だが、桁行の東西両側に各1ヶ所7尺の広い部分がある。柱痕はすべて残り直径15~20cmと細い。柱穴は直径50cm程の隅丸方形。主軸をN39°30'Wにとり、水城西門Ⅱ期のSB120Bとして復原された8世紀前半の門址と同じ方位となる。なお、図中南西隅に柱穴と重複して縦長の掘り込みが連続してみられるが、これは遺状遺構などではなく、近年の畑の耕作時の掘り込みであり、実際は柱穴の方が上面を削られているものである。また、この建物の西側に平行するように南北柱穴列が認められ（SA147）、建物に付属する堀或いは縁の可能性を検討したが、柱間距離に相違が認められ、南方へも延びる事から、一応欄列の項で報告することにした。時期を確定できる遺物は出土していない。

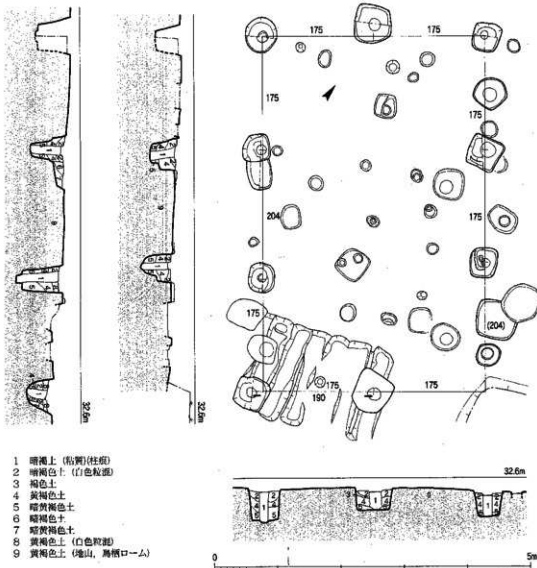
Ⅱ期門址と
同方位

Fig.67 SB141実測図 (1/60)

II 調査の内容

SB142 (Fig.68, PL.23)

上段テラス東寄りの土塁裾近くに位置する2×3間東西棟掘立柱建物である。桁行540cm、梁行360cmで、柱間は6尺等間(1尺=30cm)となるが、東側梁中間の柱穴は見あたらない。柱穴は直径50~30cmの隅丸方形気味のものが多い。柱は抜き取られており、直径20~15cmの柱と推定される。主軸をN35°30'Wにとり、土塁の軸線(このちよūd北辺りでN56°E)とはほぼ平行するが、それよりも西門Ⅲ期のSB110(8世紀中頃以降)の主軸方位と一致する。当建物柱穴からは時期を確定できる遺物は出土していないが、西側でSK156を切っており、この土層がSK152~158の一連の並行する両時期のものであるとするならば、SK153の示す8世紀後半より新しい建物ということになる。

西門Ⅲ期と
同方位

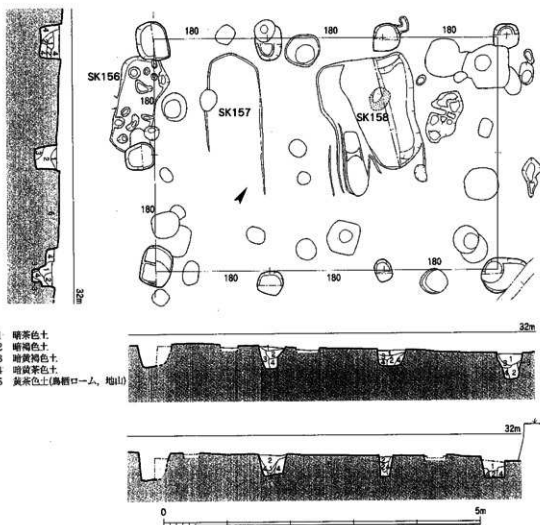


Fig.68 SB142実測図 (1/60)

SB143 (Fig.69, PL.34)

SB141の東隣に位置する2×2間の小型方形掘立柱建物である。5尺(1尺=30cm)等間で、小型倉庫様 絨柱となるかもしれない。柱穴は直径50~40cmの円形乃至隅丸方形で、柱は直径15cm程の細いものと思われる。北側は楠木の太木があり調査できなかった。縄文晩期の堅穴住居の

SI159を切る。主軸をN37°Wにとり、東西のSB141やSB142の主軸方位の中間値を示す。出土土遺物 (Fig.70-1~3)は8世紀中～後半のもので当建物の上限を示す。8C後半代を上限

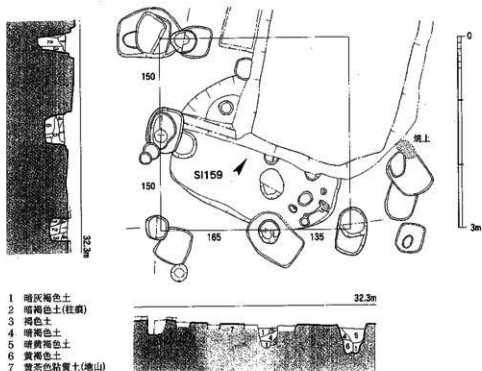


Fig.69 SB143実測図 (1/60)

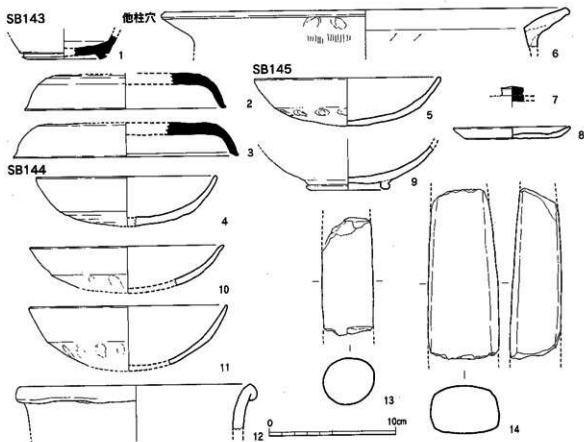


Fig.70 建物等出土土遺物実測図 (1/3)

II 調査の内容

SB144 (Fig.71)

黒色土の柱
穴

上段テラス中央南寄りに位置する2×3間の南北棟である。柱穴埋土がこれまでのSB141～143の暗黄・茶褐色粘質のものとは全く異り、暗褐色～黒褐色のより軟質な土で、これは東隣のSB145も同様であり、時期差を明確に示す。390×540cmの規模で、桁行柱間心々距離は6尺（1尺=30cm）を基本とし、梁行は6.5尺等間となる。柱穴は直径60～30cmの円形・楕円形で、深さは65cm程と深いが、柱径は20cm以下の細い類と推定される。主軸をN30°30'Wにとり、出土遺物（Fig.70-4）は11世紀末～12世紀前半。

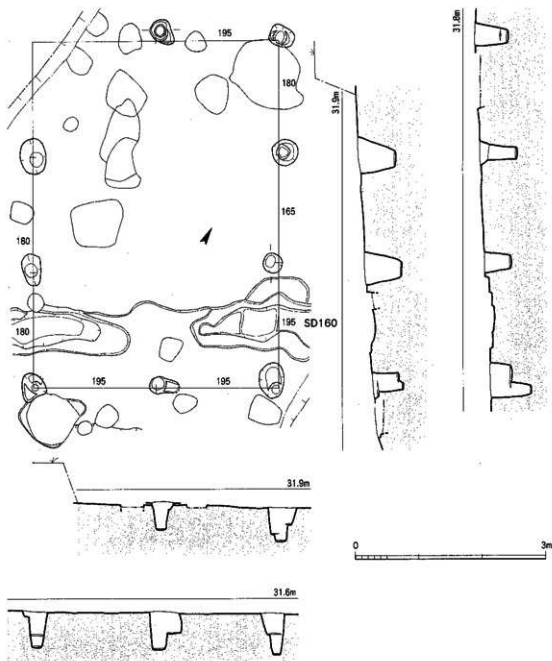


Fig.71 SB144実測図 (1/60)

SB145 (Fig.72)

上段テラス東寄りのSB144の東隣に位置する2×3間の東西棟掘立柱建物である。390×560cm規模のやや平行四辺形気味の平面形となる。梁行柱間が6尺を基本としていることは西隣のSB144と同様である。東南側でSD162に切られているが、この溝は11世紀中頃前後を上限とするSD161を切っており、当建物出土遺物(Fig.70-5)が11世紀末～12世紀前半を示すことと矛盾はしない。柱穴は直径40～20cmと小さい円形で、深さは65cmと深い。中央部分は西洋楓の並木があり調査できなかった。主軸方位をN28°30'にとり、北辺がSB144の北辺ラインと一致することや柱穴埋土、柱間寸法の同一性、出土土器等から見て、SB144と同時期の建物と考えられる。

並列する2
様の建物

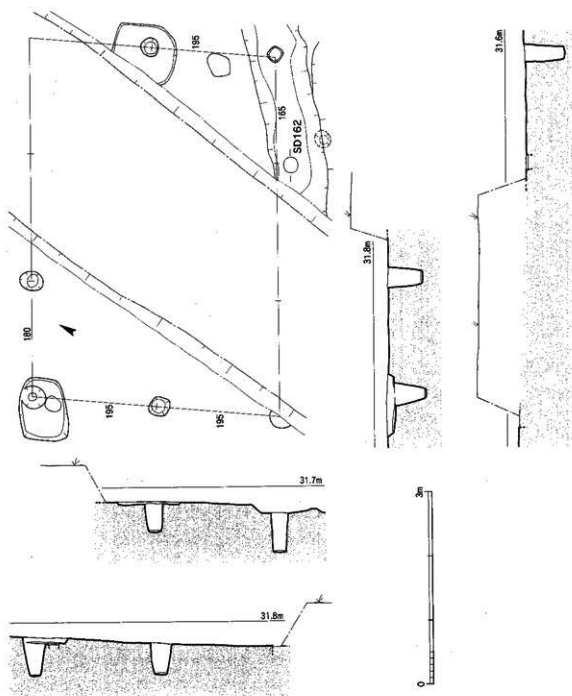


Fig.72 SB145実測図 (1/60)

II 調査の内容

SB146 (Fig.73)

上段テラス西端のSB141と重複する位置にある1×4間の掘立柱構造物で、615~606×160~144cmの規模。この辺りでは10cm弱と薄くなっている暗黄茶灰色土包含層上面から掘り込まれ、近世以降の客土である淡灰色砂の埋土である。直径20~15cm程の小穴で、各柱間距離は一定ではないが、全体を平均すると各柱間を5尺(1尺=30.3cm)と見ることができる。これらの状況から、近世を上限とする時期の物質的な小屋掛け、或いは棚状の構築物と推定できる。

SA147 (Fig.74)

SB141の西側に、梁行柱間距離と同じ間隔を置いて、南北に5個の柱穴が並ぶ。SB141よりも小さい直径40cm程の円形柱穴で、

各柱間距離はSB141のものよりも広い。N37°30'Wをとり、SB141と僅かに振れがみられる。時期を確定できる出土物は無いが、位置からみて、SB141の目隠し棚的なものと考えられよう。

その他の柱穴

以上の各掘立柱建物・棚列以外にも、全体図にみる如く、柱痕の明瞭なものを始め、多数の柱穴と考えられるものが確認されている。上段の西半では埋土からみて8世紀前後と判断できるものが多く、東南側ではSB144・145と同じ暗褐~黒褐色埋土の柱穴が多い。これらのことからみて、この地に奈良~平安後期までの建物が以上報告したもの以外にも複数存在したものと推定できる。これらの柱穴から出土した遺物 (Fig.70-6~14) は7世紀後半~12世紀前半を示す。うち10~14はSB145の北方の柱穴からの一括品で、13・14は土製精製品で高熱を受けており、鋳型中子の可能性も考えておきたい。11世紀末から12世紀前半の時期のわかる良好な資料である。西門調査(水城第26次)でも同様の柱状土製品が13個出土しており、時期も近いものである。8は11世紀後半のヘラ切・板目期。

SK151 (Fig.75, PL.26-1)

上段テラス中央の土壘層よりにて検出した六角形の土版である。暗褐~褐色土の埋土で、上層には炭片が混じる。直径120cm程、深さ28cmで、一面が焼けて亦変した花崗岩塊石が落ち込んでいる。SK155を切っており、出土遺物 (Fig.76-1) は8世紀前半までのものであるが、SK155がSK153と連続並行する同時期のものであるとすれば、このSK151は8世紀後半を上

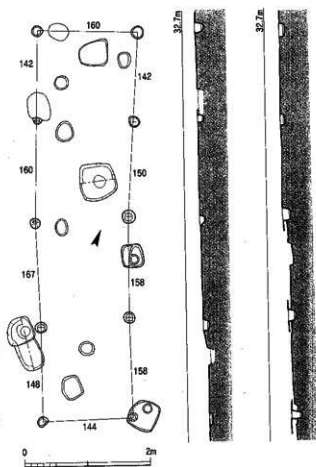


Fig.73 SB146実測図 (1/60)

SB141に伴う棚列

他にも建物があった

鋳型中子

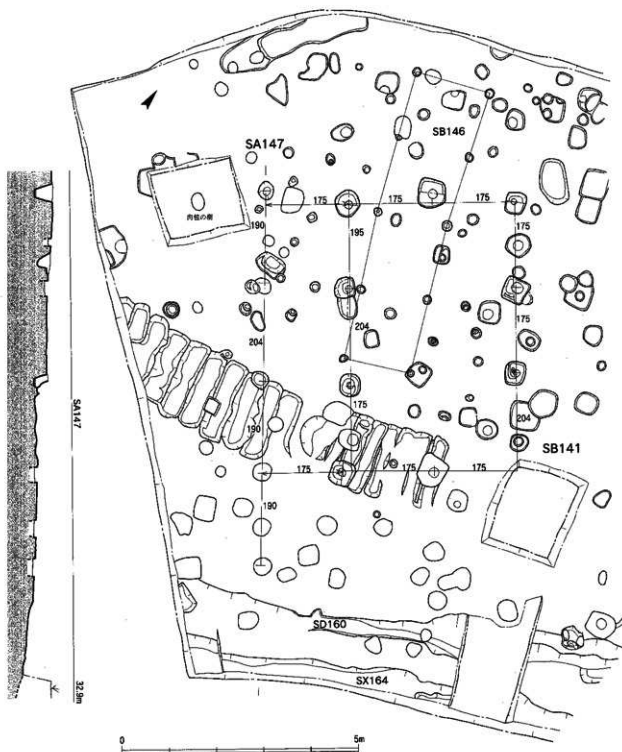


Fig.74 SB141とSA147との関係実測図 (1/80)

限とする時期が考えられる。

SK153 (Fig.75, PL.25-3)

長軸を土塁軸線と直交方向にとる楕円形土壇で、177×93cm、深さ10cmで、上面に土器・**廃棄土壇**瓦片が集中投棄された状態で検出された。下半の埋土は自然堆積の暗黄茶色土。須恵器甕の出土状態から見て、少なくともあと10cmは深かったものと推定される。出土遺物 (Fig.76-2~

II 調査の内容

17)のうち4～6は同一個体の可能性が高い。16・17も同一個体の可能性が高く、行基で16は狭端、17は広端部分で、凸面は間隔を置いて縄目を縦に擦り消す。8世紀後半の廃棄土層で、煮湯具や食器等の生活具のする遺物からみて、この地に滞在・生活した状況を示す。

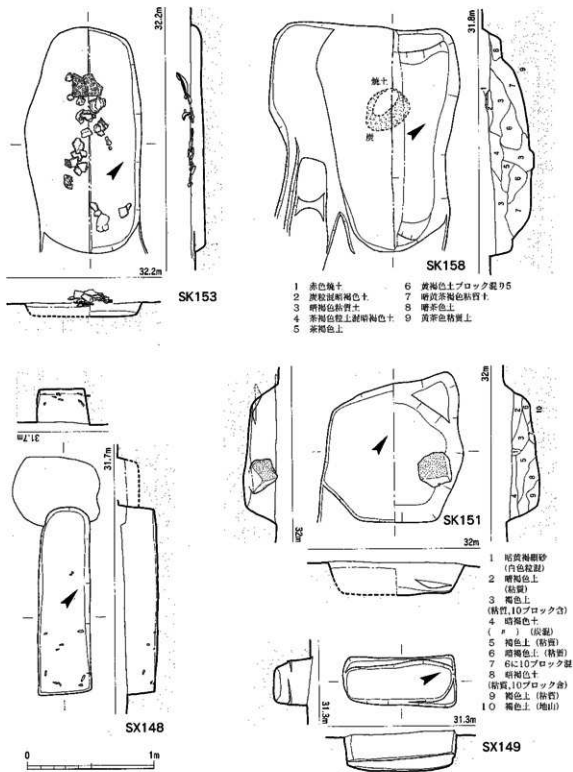


Fig.75 SK151～158, SX148・149実測図 (1/30)

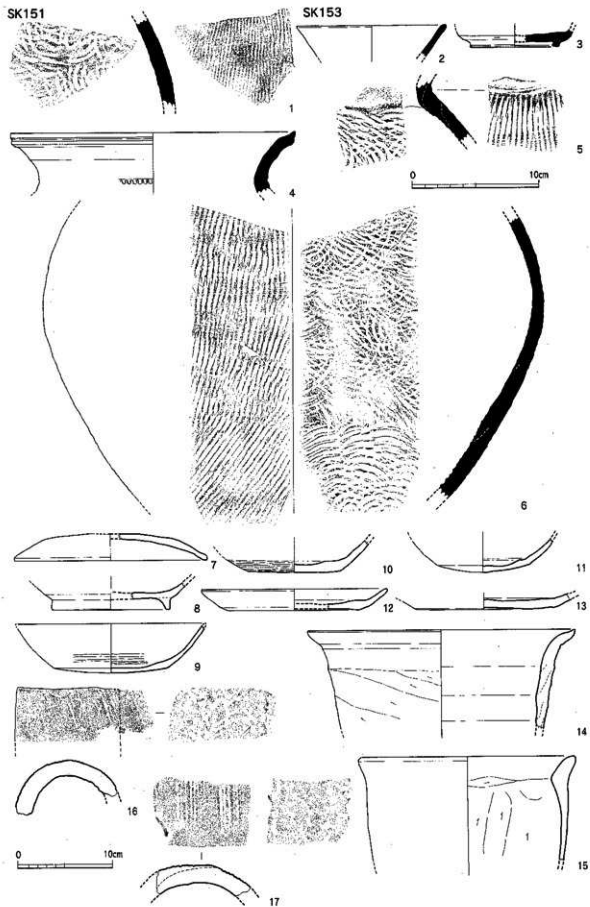


Fig.76 SK151・153出土遺物実測図 (1/3, 瓦: 1/4)

II 調査の内容

SK158 (Fig.75, PL.23)

上段テラスの東北半部に位置する不整楕円形土壌で、上面に焼土とその周縁に炭粒がみられる。175×114cmの平面規模で深さ42cm。炭粒混層以下の埋土は粘質土がブロック状に認められ、人為的に埋め込まれた状態で、最下部からは黒曜石裂石核 (Fig.91-38) が出土。炭・焼土の最上層は、実際は下の掘込みに伴うものではなく、南東方向に延びていたと思われる浅い落ち込みに伴うものと考えられる。よって、焼土・炭層は歴史時代、それ以下の掘込みはそれ以前の古いものとなろう。

旧石器石核

SK152~158並列土壌群 (Fig.77)

上段テラス中央の土屋裾に沿って、西南~東北へ7基の長楕円形の浅い落ち込みが並ぶ。うちSK153・158については上述したが、全体を一連のものとして改めて取り上げておきたい。各落ち込みの長さは最長のSK152で460cm、幅は120~64cm、深さは10cm以内で、南北両端で輪郭がつかめないものも多い。SK153の土器の出土状況からみて、少なくともあと10cmは深かったものと考えられる。当初、布掘り柱穴列等をも念頭に置いて精査したが、確認できなかった。各落ち込みの中軸線間の間隔は、160~80cmまでの間で極めて不均等であるが、200cm前後の間隔が平均的である。道路状遺構とも考えたが、これまで調査したその種の遺構とは、幅、間隔、埋土の状況等の点で全く趣きを異にし、否定的と考える。また、底面を丁寧に掘ってみたSK156では深さ2~7cm程の浅い窪みが多く認められ、底面が凹凸著しいことを知った。更に、これらの落ち込みがSK158よりも東側や、遺構の残存状況が良好なSK152以西に連続する形跡が無い事も特徴のひとつとして掲げることができる。以上の条件を勘案して想像すると、間隔と底面の凹凸状況から、馬の繋ぎ場説。或いは、焼土・炭の存在から、西門守備隊や水城修築作業に伴う大量の作業員のための、簡単に小屋掛けされた、中が縦長く区画された炊き出し場等も思い浮かぶ。倉庫棟と考えられるSB143の東側に並ぶというのもこの説

不可解な遺
跡土壌

馬の繋ぎ場
説

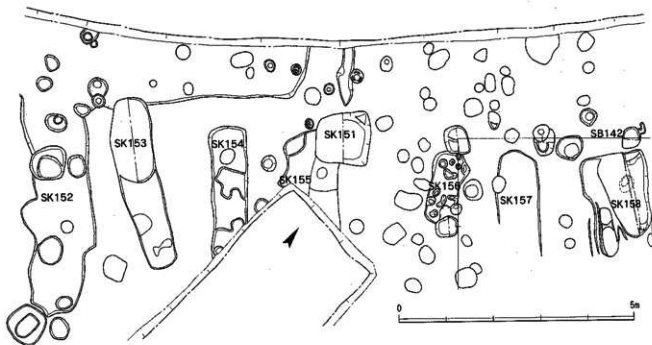


Fig.77 並列土壌群 (SK152~158) 実測図 (1/80)

には都合が良い。いずれにしろ、現状では、どれも所定できる案ではない。なお、これらの遺構の時期は、SB142やSK151に切られる事から、廃棄土壌化したSK153出土土器が示す8世紀後葉を含めてそれ以前の8世紀内で取まると考えている。

SX148 (Fig.75, PL.26-2)

上段テラスの東端近くに位置する釘使用木棺墓である。長軸をN41°Wにとり、土壘軸線に直交するように墓塚を設けている。長さ147cm、幅42cm、深さ30cmの墓塚内から計10本の鉄釘 (Fig.78-1~10) が出土したが、南半に集中して北端には見られない事から、木棺自体の長さは1m程と考えられる。釘は最長6cm程で太さ5mm以下の細く短い類で、板の厚さは1.7~1.2cm。副葬品・遺骨は無いが、混入した遺物として底面付近からササカイト製打製石鏃 (Fig.94-2)、土器片 (Fig.78-11~13) がある。土器はすべて糸切りで11・12には板目が残り、13世紀~14世紀前半を下限とするもので、この木棺墓の上限年代を示す。上段テラスで暗黄茶灰色包含層が形成される時期 (13世紀後半) には遺構が殆ど見られず、この包含層を切って掘られた溝SD165・166 (14世紀を上限) の横にこの墓が位置することから、このあたりが既に人気寂しい閑地となっており、そういう場所を利用して墓が営まれたと考えられる。それも未成人であり、通常の墓地ではない場所に単独で葬られた事は、何らかの理由があったのだろう。

釘使用木棺墓

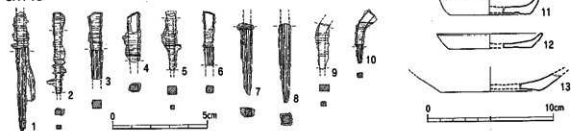
室町期には閑寂の地に

SX149 (Fig.75, PL.26-3)

上段テラス調査区の南東端近くに位置する小児土壘墓である。長軸がN25°Eという本遺跡では極めて特異な方位を示している。長さ90cm、幅40cm、深さ32cmで、底面は断面皿状になる。出土遺物は無いが、淡赤茶色粘質土の埋土からみて、縄文~弥生期のもので、主軸方位が異質なものも旧丘陵斜面に平行して設けられたという、自然地形に規制された類と解釈されよう。

弥生小児土壘墓か

SX148



SX150

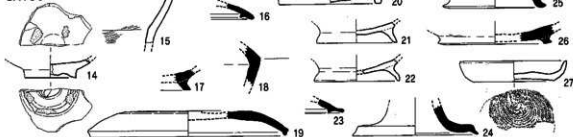
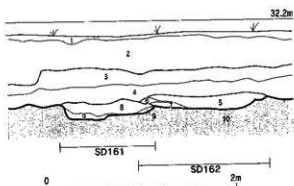


Fig.78 SX148・150出土遺物実測図 (釘: 1/2, 他: 1/3)

II 調査の内容

SD160・161 (Fig.63・79)

上段テラスの南辺を土塁に平行するように走る溝。土層A-A'、B-B' (Fig.64) に見るように、地山上に残る8世紀の土層・瓦片を含む整地層を切って掘り込まれている。東端部では2条に分かれ、切り合いがみられるが、南側のSD161が古くて、これがSD160に變なかるものと推定される。SD161の東半では幅が50cm程と、西半の半分程に狭くなっており、何度かの掘り直しが行われたことが判る。SD160の出土遺物は8世紀代のものを主とし、うち図



1	黒灰色土 (表土)	6	10のブロック
2	炭灰色砂 (近世か)	7	10と5の瓦土
3	暗黄茶灰色土 (砂質) 遺物多し	8	暗茶褐色土 (粘質)
4	#	9	8と10の瓦土
5	黄緑色砂質褐色土 (洞SD162埋土)	10	黄茶色土 (馬鞍ローム、地山)

※ SD162掘削時に南側が若干埋塞される (6層, 7層)

Fig.79 SD161・162土層断面実測図 (1/40)

示したもの (Fig.80-1・2) は8世紀中～9世紀初を示す。SD161の出土土器 (Fig.80-3～5) も同様であるが、3は11世紀中頃前後のものであり、SB145等の平安後期の生活遺構に伴うものが最終埋設期に入ったものであろう。これらの溝と後述するSD163・167とは2m強の間隔を置いて平行に走っており、同時期の道と考えるとよかろう。

8C代の道

SD162 (Fig.63・79, PL.27-1)

上段テラス東端でSD161埋設後に掘り込まれた溝で、SB145の柱穴をも切っている。よって、図示できる出土遺物は無いが、時期的には11世紀末～12世紀前半を上限とし、この上に堆積する暗黄茶灰色土上包含層形成が終わる13世紀後半を下限とする事が出来る。この溝は幅1m、深さ20cm程で、SD161よりは北に振って延びているが、西方ではSD160と続くように見える事から、SD160・161の掘り直しと考えられる。

SD163・167 (Fig.63)

SD163は上段テラス南辺の中央部では明確な溝状をなすが、東側や西側部分では段落ちのSX164に削られて残っていない。ただSD167とした東端部の溝がこの延長線上にあり、同一の溝と考えられる。北側でSD160・161との間が溝上段間で1.7～2.1m、溝心々間で2.1～3.6mとなり、西から東へ緩傾斜を持つ道と考えるとよい。出土遺物は多く (Fig.80-6～31・33)、7世紀末～8世紀いっぱいまでが大半を占め、21・22の白磁の12世紀まで含む。なお、20は越、23は内黒。30は顎面が斜めになる、互当面がとれた軒平瓦。31は9世紀。この他に鉄滓1点 (46g) が出土。以上の遺物の示す年代や埋設状況と、SD160・161の年代をも勘案して見るに、これらの溝は8世紀前半～中頃には既に掘削されており、何回かの掘り直しを経て、12世紀頃に埋設したものと考えられる。

SD165・166 (Fig.63, PL.23)

上段テラス発掘部の東端に接するか如く平行して走る2条の溝で、南端では西に直角に曲がりSX164の段落ち埋土を切って落ちて行く。いずれも13世紀後半形成の暗黄茶灰色包含層を切って、埋土はやや砂質の茶灰色土。出土遺物 (Fig.80-32) は7世紀後半代のものだが、図示はし

14Cを上層とする溝

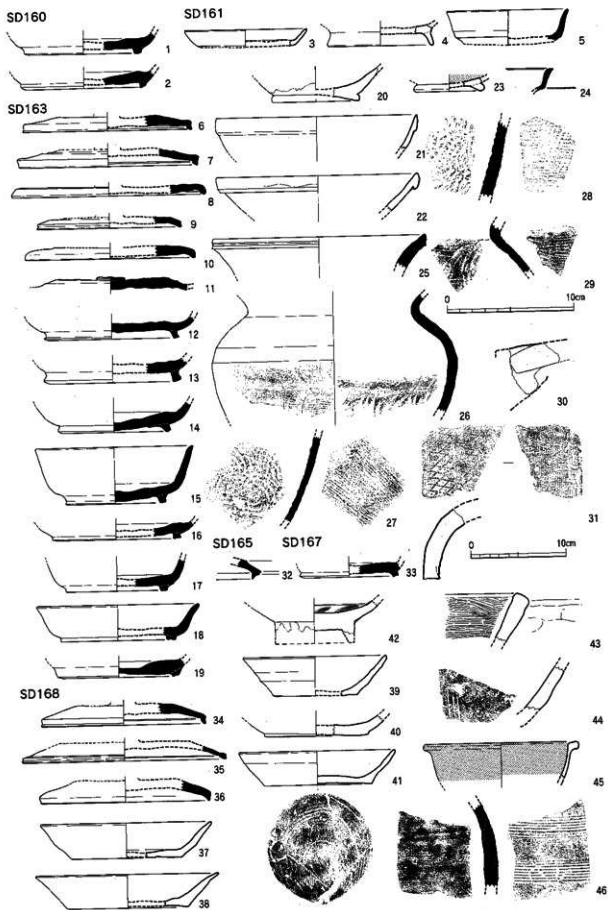


Fig.80 SD160~168出土遺物実測図 (30-31: 1/4, 他: 1/3)

II 調査の内容

なかったが、他に凸面縄目擦り消して凹型仕上げの一枚作り平瓦片（14世紀）や小径の土師小皿b片が出土しており、溝の時期は14世紀を上限と考えておきたい。

SD168 (Fig.63, PL.27-3・28-1)

上段テラス直下の下段テラス北端を段に沿って走る溝で、黄褐色の八女ロームに掘り込まれ、埋土はやや軟質の暗黄灰色系の土が多い。砂等の水成層は見られない。幅1m程で深さは40cm前後。東端近くでSD170に切られ、東端は完掘していないが東へ落ちて行くと思われる。出土遺物 (Fig.80-34~46) は土師器が13世紀前半~後半までの幅を示し、39は杯b的で15世紀の可能性が高い。42は白磁、43~45は瓦質黒色燻し。この他に片面平坦な鉄律1点 (66g) が出土。先に、基本層序の包含層の項で記したとおり、Tr.12の部分で上段テラスの暗黄茶灰色包含層 (13世紀後半最終形成) が切られて段落ちがつくれ、その後このSD168が掘られたと考えるため、当初掘削時期は13世紀後半頃を上限とするが、土師器39が溝下部出土品であることや45の完全瓦質品から見て、15世紀頃まで下がるだろう。

15C頃の溝

SD169 (Fig.63, PL.27-3・28-1・28-2)

下段テラスのSD168の南側に平行して走る溝で、P-2区の西半部では削平されて残らない。溝底は東へ傾斜し、溝の南側層は北側よりも20cm程低くなっており、畑開削の際の北端の溝だという解釈はこれに因る。出土遺物 (Fig.81-1~12) は奈良期のものも含むが、4~9の土師杯はすべて糸切りで12世紀後半~13世紀後半までのもので、5はもっと下がるかもしれない。10は瓦質、11は断面倒卵形の丁寧な作りの柱状土製品、12は淡小豆色粘板岩製磁片の3側面を切り取って再使用したもの。以上の遺物は13世紀代が中心であるが、北側のSD168と1.5~2mの間隔を置いて平行に走ること、両溝の土層上の前後関係を明確にできない事等から、やはり両者は道の側溝の可能性が高い。

下段テラスの道路

SD170 (Fig.63, PL.27-2)

下段テラス東端でSD168・169を切って北西から南東へ下がる溝で、幅90cm、深さ20cm。底面中央が更に一段下がって二段掘り状の断面をなし、P-3区北部全体にかぶる淡黄灰色砂質土で埋まっている。出土遺物 (Fig.81-13・14) は9世紀と13世紀中頃前後を示すが、切り合いから見て、15世紀以降江戸期のものとなる。

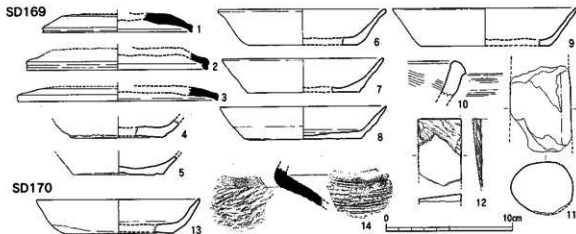


Fig.81 SD169・170出土遺物実測図 (1/3)

SD171 (Fig.63)

下段テラスのP-3区南端にかかった東西溝で、幅60~40cm、深さ25cmの細い乍らわりと面に繋り込むしっかりしたもの。埋土は暗赤灰色土で、この土が入った小ピットがP-2区西半に数個みられ、古い感じがしたが時期を確定するに至らなかった。遺物は図示はできないが、鏡目瓦片、須恵器片等があり、8世紀を下るものではない。土塁南側の南半が旧丘陵の縁相を残した緩斜面であった水城西門II期に、丘陵縁上に掘られた区画溝か。

8C代の区画溝

水城土塁断割り調査 (Tr.10) (Fig.82, PL.33)

上段テラスの最西端のP-1区発掘区西北隅から土塁本体に向かって1×7mの断割りトレンチを入れた。目的は、① 土塁南半の盛土状況観察による構築法の解明、② 西門北東側土塁裾に検出された横石列(SA104)と同種のもが土塁の反対側の裾にも存在するか否かの確認、③ 土塁が西門に接する位置で南北に幅広くくむ意味の解明、の3点であった。

断割りの目的

図示した大区分横土層序は以下のとおりである。

O層：水城土塁に対する地山（基盤層）で、旧表土下にソフトロームが広がり、更に下に厚く自然堆積の旧表土があり、以下の黄茶色烏柄ロームが基盤となっている。この烏柄ロームの傾斜から見て、旧丘陵頂部は土塁中心あたりになりそうだ。黒曜石剥片・弥生土器片・須恵器片が出土し、水城以前の遺跡の存在が推定される。

I層：厚さ73~40cmの間がすべて厚さ3cmの版築であるが、図は中分類で止めている。7・5・9層の粘土を主体として丁寧に突き固め、堅く締まる。各層境界面に酸化鉄沈着が顕著に認められ、各版築は下方湾曲も多く見られる。全体に9度の緩傾斜をもつ、土塁の堅固な基礎横土。

堅固な版築の基礎部

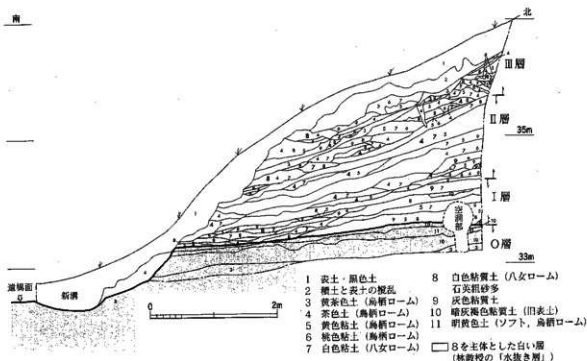


Fig.82 土塁南半 (トレンチ10) 横土状況実測図 (1/60)

II 調査の内容

Ⅱ層：茶色土主体で各種粘土がブロック状に入る。1層と全く異なる粗い積みで、同じ学大ブロックが多いため最小単位が判り辛い。この層の奥壁から85cm手前から土塁中心への高まりを築いてゆく盛土が始まる。これはⅡ層の中でも灰色粘質土を多用した密な方の積み方である。これによりⅡ層の上半では17度の傾斜を持つようになる。また、この層の裾南端では端部を押さえる水平乃至カルアラの盛り上げ積土もみられる。

Ⅲ層：Ⅱ層の上面に粗石英砂を多く含む白色粘土帯が連続し、その上に使用土はⅡ層と全く同じで粗い積みのⅢ層が載るが、斜面下から上方へ階段状に水平積みを繰り返すという特徴的技法を用いている。この層の奥壁際と外端最上部ではカルアラ盛土も行う。

以上の土塁南半断面観察により、まず裾部積石列は抜き跡等を含め、その痕跡は認められなかった。ただ、土塁裾端と上段テラス遺構面との間に幅1m強の、こみ溜めと化した近年の溝が走り混乱されているため、厳密には存否不明と言わざるを得ないが、急傾斜と堅固さを保たねばならない土塁前面と比べ、緩傾斜で土塁内への浸透水は後背側へ流すという佐賀大学林重徳教授の指摘からしても、土塁背面裾を列石で固める必要性は低いと考えられる。次に、P-1区の建物等の遺構面と土塁との関係についても、前述の如くその間に新期溝があり土層が継がなければならないことから、遺構面形成が土塁のどの段階で行われたのか確認することは出来なかった。

後背側列石は無い

80cmの削り出し

8C代に削り出し

ただ、土塁端部の水域以前の旧表上面とP-1区遺構面との高低差が80cmあり、少なくともこれだけの高さ旧地形を削り出したことは判る。現存するこの遺構面形成の時期は、7世紀後半代の遺物が今回調査の上段テラスでは希薄で、P-3区南半の旧丘陵斜面のあたりに自然堆積してかなり見られることから、やはり8世紀段階の修築に伴って、更に土塁寄りの地山が幾分か削り込まれて整地されたものではないかと考えられる。また、西門際の上面観からの土塁南側のふくらみ増築説に対する築造上からの確証は今回得られなかった。西門北西側では土塁前面中段のテラスを埋め込んで門際の土塁上面を拡張した状況が確認されたが、今回のTr.10ではふくらみ部に居座る榎の木の影響を受けないぎりぎりの位置で完全にふくらみ部に入っている場所を断ち割ったにも関わらず、増築等の痕跡は認められなかった。強いて言えば1層とⅡ層の積土の極端な相違が可能性としては残るが、この境界面がかなり緩やかな面のまま土塁中心へ向かっていることから、もしⅡ・Ⅲ層が再築追加されたものとするならば、上端平坦面の位置からみて土塁中心の上成土塁の後背傾斜度は前面よりも急な直に近いものとなることになり、これまでの研究成果と相容れない。よって、現状ではこの西門際の土塁

張り出しは増築ではない

「水抜き層」

のふくらみ（張り出し）は、土塁自体が旧丘陵の地山削り出しを伴う築造であることから、当初からのものと考えておきたい。或いは、水域築築時には旧丘陵の緩斜面として現況よりもっと南側へ張り出していたものを、8世紀段階の今回調査の遺構面整地に伴って、緩斜面を削り込んで張り出し状に整備した可能性も選択肢としては残る。最後に、土塁の築造技術について補足しておきたい。図示しなかったが写真（PL.33-3）に見るとおり、トレンチ奥壁、即ち土塁軸線に平行方向の土層は、すべて水平層であり、東西方向への傾斜は見られない。さらに、調査最中に佐賀大学林重徳教授に見ていただき、全体の土層が後背側へ傾斜していること、Ⅱ・Ⅲ層が粘土ではあるが石のように固化したブロックで粗く積まれ、浸透性が良好であること、石英粗砂を多く含む白色シルト層（図中のⅠ・Ⅱ層の2段のドット層）が「水抜き層」の役目を果たしていること等の重要な指摘を賜った。土塁前面の堅固さを保つために、つまり前

面側への浸透水流出による前面の崩壊を防ぐために、後背方向へすべての積土に傾斜を持たせて雨水処理を図るという優れた技術が今回はつきりと確認された意義は多大であるとの所見を頂いた。心から感謝したい。

なお、出土遺物のうち地山最上層(四中10層上面)出土の須恵器片(Fig.84-1)は、水城初築乃至直前のもので重要である。鏝小片で外面は縦条条席状叩き、内面は通常の青海波で、自然軸的灰被りが見られる。古墳時代後半以降のものだが、少なくとも7世紀末以降のものではなく、日本書紀の水城築造記事(664)の年代に矛盾するものではない。

水城初築に
関る出土品

木樋推定部の調査(SX150)(Fig.83, PL.29-3, 30~32)

これまで水城大堤では3ヶ所の木樋埋設部が確認されている。即ち、東門のすぐ西側(SX050)、西土塁のJR線東側(17SX001)、JR線西側(SX135)で、この他に小水城の大土居土塁で木樋本体が検出されている。今回、この木樋埋設部と確信し得る、その掘方上半部を検出することができた。この契機は、P-1区の上段テラス面に水城築造時の積土・整地層そのものが明瞭に確認できず、建物等の遺構と水城築造との層位的関係の把握に苦慮していたことに因る。これは、遺構面がすべて黄茶色粘土のローム層であったためである。従来東土塁での南側テラス部自体もすべて積土構築されたものとの知見に基づいて今回の調査に入ったが、完全にこれまでの水城築造法の基本概念を修正せざるを得なくなった訳である。そうは言っても、遺構と積土の関係を保む必要はあり、P-1区の東方ヘトレンチを延ばして行った。調査当初試掘トレンチであるTr.8では積土・地山が見えず途中で掘り下げを止めていたが、調査後半で再び精査して、人為的埋込土の厚い層を確認した。これを挟んだTr.13と14では、東西の肩柄ロームから急激に落ち込む部分を把握出来、この段階で木樋掘方であると推定した。更に下段テラスにTr.15を設定し遺構上面輪郭のみを確認した。これらの発掘作業と並行して水城本体の地形現況測量を継続していたが、これにより、土塁頂部の凹部(西門際土塁頂部から184cm低く、すぐ東側の頂部よりも71cm低い)の存在、土塁北斜面のへこみ、南斜面の大きな抉れ状部、Tr.8と土塁裾間の当初近年の水溜めかと考えていた長径10m程の窪地、上段テラスと下段テラスの間の段落ち部が大きく土塁側へへこむ上面観をなす事等(Fig.62)の諸観察に基づいて、ここに木樋埋設を推定した次第である。

木樋掘方の
検出

現地地形から
も裏付け

掘方上端幅は、Tr.13~14間で9.2m、南東下段のTr.15で8.1m、深さは底まで掘っていないので不明だが、Tr.8で現地表から3.2m以上。また、この掘方幅はJR線東側の木樋(17SX001)の8.7mと近似する。上層をまとめておくと、まず現表土の下にこの掘方の窪みを埋めならすように、今回調査区全体に盛られる客土の淡灰色砂層がみられ、その下にP-1区の暗黄茶灰色包含層に対応する暗褐色土包含層が掘方中心部から東方へ堆積している。ここまでの2~4層の状況から、この掘方の西側からP-1区への間は幾らか削平されてしまっていることがわかる。なお、東側のTr.14では、表上直下から近世~近代墓が掘り込まれており、5基分(すべて円形)が一部重複して検出された。次に、これらの下の掘方上面中央には黒褐色の旧表土が溜まっている。この旧表土下には小ピット等若干の遺構がみられる(7層)。その下からがこの推定木樋掘方の人為的埋込土となるが、Tr.8西壁での8~11層では暗褐色土等のより上位の土が混ざっており、安定していない。以下の22~24が版築による堅固な埋込土と

掘方規模は
他例と同じ

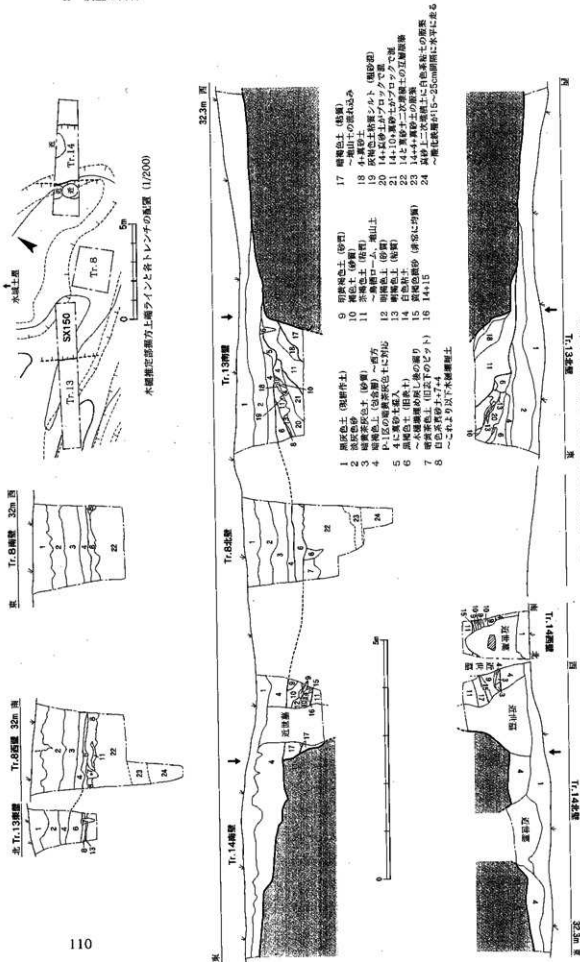


Fig.83 水堀推定部 (SX150) 上層表層図 (1/80)

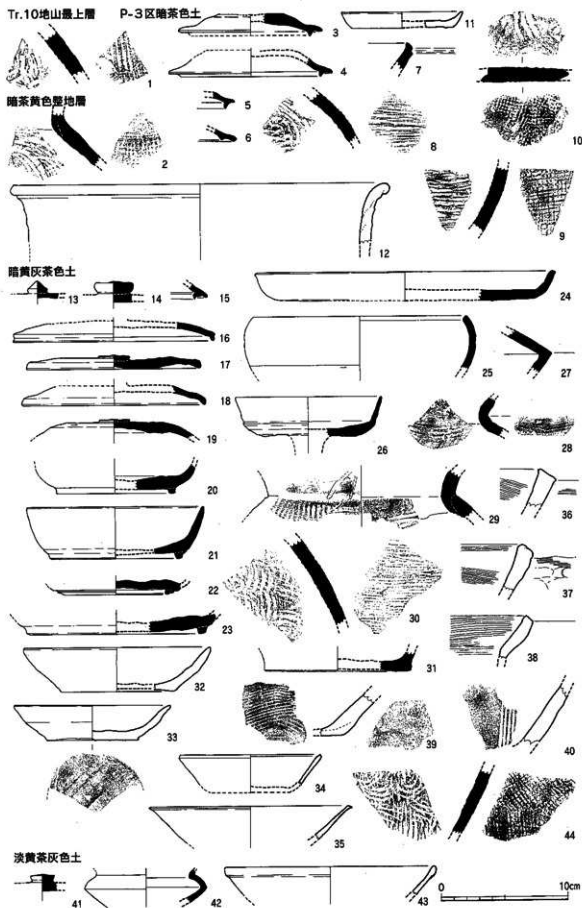


Fig.84 各壁地層出土土器実測圖 (1/3)

II 調査の内容

下方湾曲の版築

なる。これらは、基本的に白色粘土と花崗岩風化土の二次堆積土を互層として、幅12cm前後の突き固めによる下方湾曲（PL.31）が顕著に観察される。最下の24層では15~25cm間隔に水平に酸化鉄硬化面が走る。23・24層の境は明瞭で、両者はかなり異質であり、版築理土の作業工程の違いを見せているのかもしれない。掘方の層部分の地山はすべて鳥栖ロームで、旧丘陵がまだ東方へ延びていることが判る。

木桶は抜き取られているか

木桶掘方内各層出土の土器（Fig.78-14~27）について報告するが、残念乍ら一番下の22~24層からは何ら出土していない。14は現表土出土の濃灰色全面施釉の朝鮮時代青磁。15は2層の全面盛土層中出土の土師質土鍋。16~20は3層出土品で、うち20はTr.8の3層出土品と、30m南方のP-3区SD168出土品が接合した越州窯系青磁で、疊付部のみ露胎。21と22は6層の旧表土層出土。また、Fig.87-15もこの旧表土出土の縄目一枚作り平瓦片。23~27は8層出土品で、27は内底に油煙がこびりつき、13世紀代。以上のように、16~18・23~26のように7世紀後半~末のものもあるが、27のような鎌倉期のものも埋土上層には見られ、この木桶が当初のまま残存しておらず抜かれている懸念も完全には払拭出来ない。

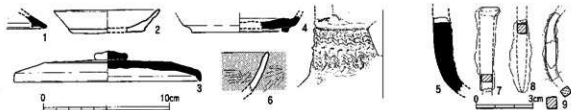


Fig.85 表土等出土遺物実測図（1/3、鉄器：1/2）

瓦埴類（Fig.86・87, PL.55, Tab.13）

西門に置かれた瓦

今回調査分の総破片数は1,249点で、出土地点は上段テラスの西半部に集中しており、その殆どが西門に置かれたものと判断される。凸面叩きは縄目・縄目擦り消しと思われるものが90%を占め、斜格子が9%、正格子が0.8%となる。平瓦のうちには横骨構型と思われるものが、正格子叩きと縄目叩き数点の少量認められるが、圧倒的に縄目一枚作りが大多数を占め、円筒筒製は8%にすぎない。この傾向はこれまでの西門地区調査状況（『大宰府史跡』平成8年度発掘調査概報 九州歴史資料館 第11表）と類似するが、斜格子目出土率がこれまで17%であるのに対し、今回は少ない。これは今回の調査遺構が8世紀と11世紀末~12世紀前半に集中することと関係するのかもしれない。

水城瓦窯産軒丸瓦

軒丸瓦の1は型式分類の276と思われ、瓦当面極めて磨滅著しく、焼成不良で暗黄灰色、砂粒を多量含む。2片ともに表土出土。瓦当裏に丸瓦を置いた直後に粘土紐で外周を巻いた一次支持土が見られ、丸瓦部内側の充填土も2cm程と厚い。水城瓦窯採集品と同範。2は2片ともにTr.12段落ち下層出土品で、型式分類090。14弁弁類で、濃灰色不純物を多量含む。焼成軟質で灰白色。3は珠文帯外区片で軒丸瓦型式分類の145bであろう。4は軒丸瓦223系（鴻臚館式系）で凹面側は丸瓦凸面の接合面。5は凸面縄目擦り消し、側面は分割界線がみられ、断面・破面を残す。6~8も縄目擦り消しで断面・破面を残し、7の凹面には横方向に被布縄目がみられる。8は粘土板接合部が明瞭で乙型。10は小さい斜格子に桐葉様文を施す類で、水城第26次調査でも6点出土。11はP-3区北東段落出土の縦長二重格子類。側面凹面側

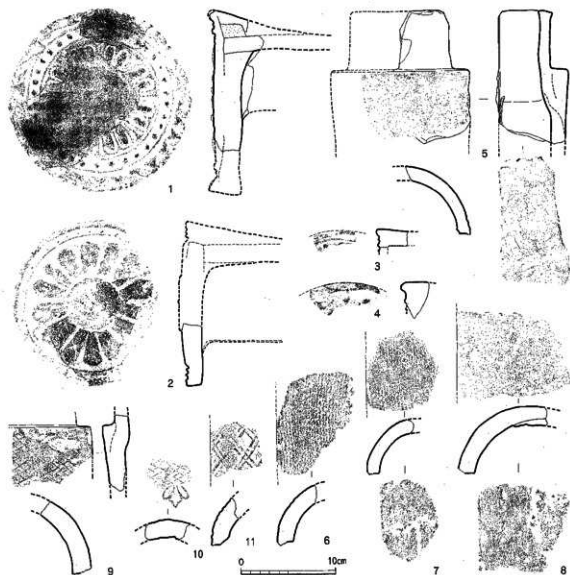


Fig.86 水城跡第33次出土軒丸・丸瓦実測図 (1/4)

		縄目	正格子	斜格子	擦消し	不明	計
丸瓦	軒丸					6	6
	玉縁	26	1	7(うち文字瓦1, 二重格子1)	27	77	138
	行基	1					1
平瓦	軒平					2	2
	平瓦	346	3	32	19	432	832
不明		15		6		249	270
計		395	4	45	46	759	1,249片

Tab.13 水城跡第33次調査出土瓦一覧

II 調査の内容

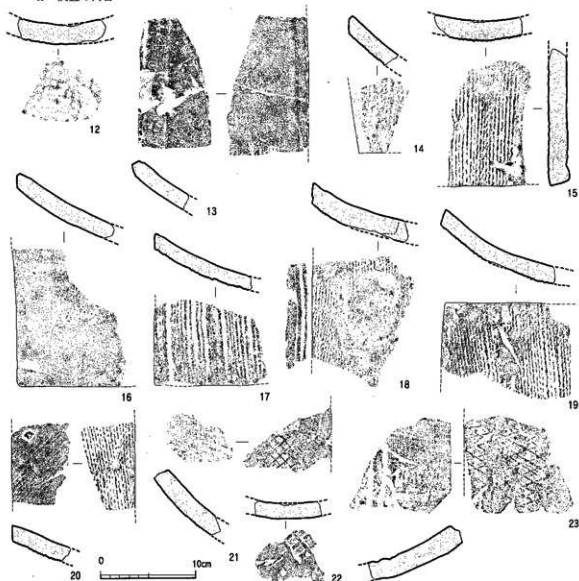


Fig.87 水城跡第33次出土平瓦実測図 (1/4)

は広めの面取り。平瓦では、12が正格子叩き。13は横骨桶製の可能性が高く、凸面はきれいにナデ消し。縦線は分割界線と凸面側の面取りがあり、作りが丁寧。14～20は粘土板一枚作り縦目平瓦片。21～23は小さい斜格子目叩き類で、側面は破面と断面を残し、円筒桶製であろう。

旧石器時代の調査

(Fig.88～91, PL.34)

水城西門地区が本来の旧地形である舌状丘陵の一部を削平、あるいは埋めたことによって築造された事実は、第26次調査で注意されていた。また、その基層となる堆積物は約8万年前以降に起こったAso-4火砕流による八女・鳥栖ロームであり、そ

旧石器包含層を予想

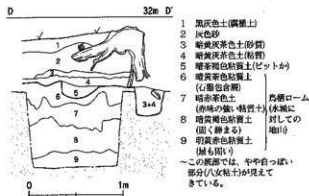
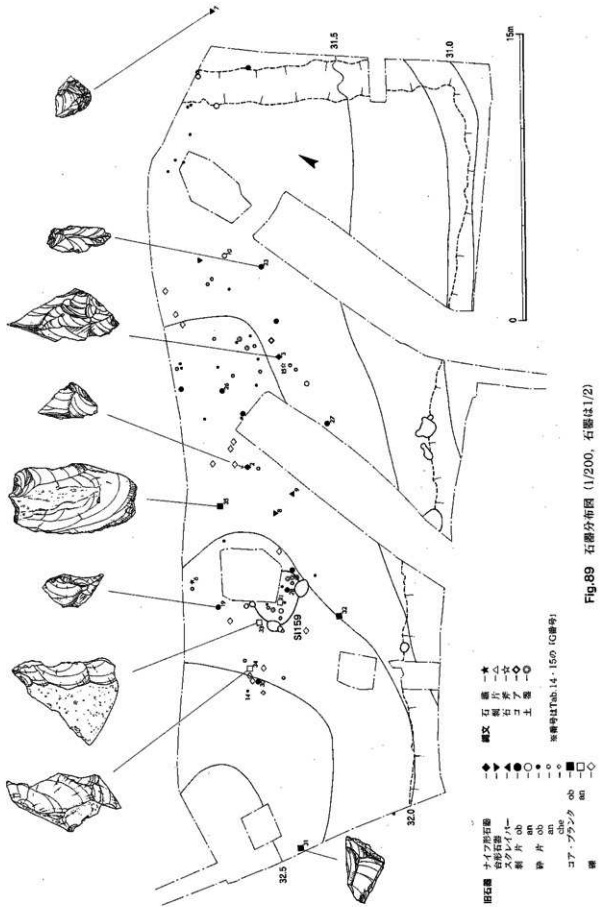


Fig.88 深掘り部土層実測図 (1/40)



II 調査の内容

の上層に旧石器包含層であるレス層が堆積することも確認していた。そのため、西門地区切り通しの東側は本来の旧地形が良好に残っていることは調査前より予想できた。

西門地区東側基底土層の調査では、掘立柱建物や槽などの諸施設の確認を目的としていたが、遺構確認作業の際、土層上に一部レスが残存していたため、そこから石器群が出土することが明らかとなった。そして石器群の分布は、水城築造の際に大きな削平の及ばなかった旧地形の低部であると考えられた。そのため、遺構確認作業の際、併せて出土状況を記録することとし、座標に併せて設定した地区杭を利用して遺物の取り上げを行った。

石器群の出土状況 (Fig.89, PL.34) 調査区である土塁基底には、表土下位に近世以降の耕作上、中世の盛土整地、水城築造時の積土などが堆積している。その下位に旧石器包含層となるレス層が堆積している。そのため出土層上面は不平整であり、場所によって包含層は既に削平されている。また、その下位には烏栖ローム、八女ロームの順に堆積層を確認することができる。石器群は、調査区中央北側付近から南東に向けて地形が落ちていく付近に分布している。そこから先で分布が途切れるのは、包含層が遺存しなかったことや削平によるためと考えられる。石器群は、特に中央部でブロック状にまとまりを持っている。出土レベルも約20cmの範囲であり、大きなレベル差はない。ただし、削平を逃れた鞍部に堆積したためか、検出資料は混在し、一時期の様相を示すものではない。今回、接合作業などによる石器群の分離作業について、十分行えなかった。ただし、縄文時代の資料を除けば、確実な細石刃文化期の遺物が含まれないことは注意される。このことは、ナイフ形石器文化後半期の遺跡立地や人類活動を復元する上で基礎資料となり得ることを示している。ここでは、グリッド調査、後世の遺構などで出土した資料を一括して報告する(Fig.90・91, PL.56・57)。番号下位に()で付した番号はグリッド調査で出土した遺物であり、分布図に対応する。

ナイフ形石器 (1~4) 1は国府系ナイフ形石器である。盤状剥片石核より剥がされた翼状剥片を素材としている。下端には自然面を残す。打面部を除去する形で二次加工を行うが、先端部付近はそれ以前に剥片底面から成形剥離を行っている。角錐状石器の稜上調整に近い。2・3は今峠型ナイフ形石器である。どちらもノ字状剥片を素材とし、打面部から作業面側へ加撃し、二次加工を行っている。4は大半を欠損しているが、素材が横長剥片であることや錐状に近い成形加工や腹面への平坦剥離などからナイフ形石器とした。ただし、左右の二次加工加撃面の違いから台形石器の可能性もある。

台形石器 (5~8) 5は枝去木型台形石器。横長剥片素材で、下端に自然面を残す。先端には剥離痕が多数ある。6は百花台型に近い台形石器で、調整は下半にまで及ぶ。7は求心状剥離による寸詰まり剥片の打面部から側縁を中心に加工している。端部は背腹両面から二次加工を行っている。8は両端部折断による成形加工を行っている。サヌカイト製。

スクレイパー (9・10) 9は両端に刃部加工を行っている。凝灰岩製。10は厚手の横長剥片打面部に加工を行っている。

剥片・破片類 (11~30) 11は厚手横長剥片の背面に二次加工を行っている。12~16は横長剥片。12は翼状剥片の打面部を除去する形で二次加工を行っている。13・15は盤状石核より剥離されており、翼状剥片に形態に近い。おそらく1と同一母岩である。16も板状素材石核より剥離されている。17・18はサヌカイト製。17の左側縁には二次加工がある。18は板状

中央でブロック状分布

細石刃無し

翼状剥片を素材

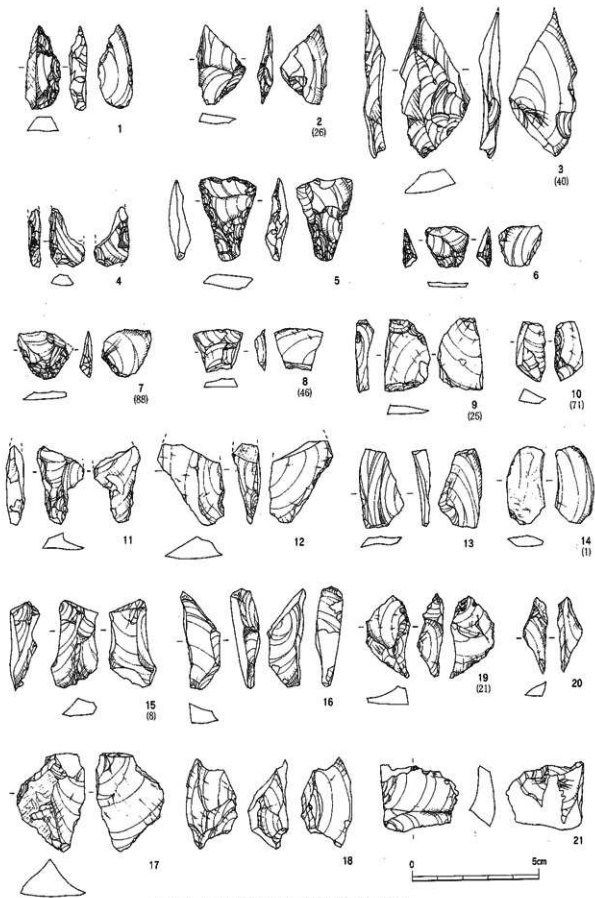
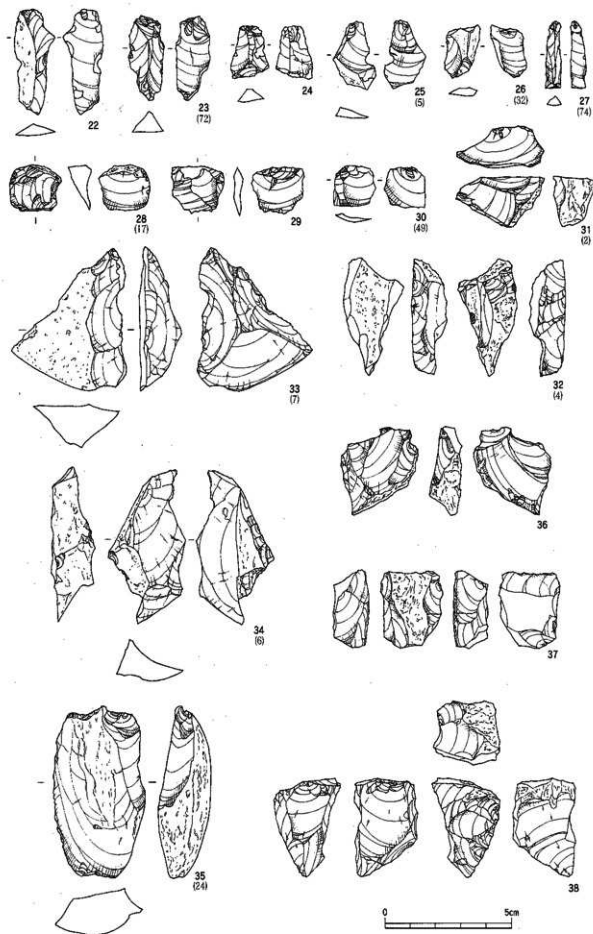


Fig.90 旧石器時代の石器実測図 (その1) (2/3)



剥片石核より剥離されているが背面(作業面)の加撃軸はズレる。19・20は、底面を持つ剥片で、おそらく3と同一母岩であろう。21はボジ面を取り込んだ剥片で打面を90度転移し、剥離される。22~24は石核ボジ面を取り入れた縦長剥片でいずれも黒曜石製。25はボジ面を取り入れているが、稜を加撃して剥片剥離が行われている。27は板状に近い石核の小口より剥離された剥片。28~30は黒曜石製の調整剥片。28は円礫素材である。

ブランク(31・32)31は、黒曜石素材を分割剥離している。細石刃核のブランクの可能性がある。32は良質でない板状の黒曜石原石の一部に剥離面がある。

石核(33~38)33・34はサヌカイト製縦長剥片石核で近接して出土した。33は、2面に作業面を設定している。図中央にある作業面は平坦面調整の後、稜を加撃し底面を持つ剥片を剥離している。その反対の作業面の一部には僅かに二次加工が認められる。34は、板状素材で平坦な自然面を打面としている。また打面部に刃部加工を行いスクレイパーに転用している。35は、円礫を分割し、端部より縦長剥片剥離をおこなっている。また、打面付近を錐状に加工している。36・37は板状剥片素材の石核の小口より縦長剥片剥離を行っている。同一母岩である。素材としては、22~24の剥片類が素材として対応するであろう。38は角礫を素材とする縦長剥片石核である。分割によって作出された平坦面や打面調整を行い、剥片剥離を行っている。風化が激しい。

縦長剥片石核

縦長剥片石核

小 結 33次調査では、旧地形を留めた水城土塁基底部より旧石器を確認することが出来た。この事実は、これまで土塁の土層観察などで指摘してきた西門地区の築堤が旧地形である独立丘陵を利用したとされる意見を補強することとなった。特に、西門地区の切り通し東側で旧地形が残る事実は、西門や官道の築造が旧地形の全てを改変したのではなく、本来の浅い谷地などを利用し削削されたとする考えを追認したことになる。今後、発掘調査成果と併せ、ボーリング調査などを有効に行えば、旧地形とそれを改変し築造された水城とを立体的に復元することも可能となろう。出土した旧石器時代の石器群は、概ねナイフ形石器文化後半期に属する。主な器種には、1の国府系や2・3の今峠型のナイフ形石器、台形石器では、5の枝木木型や6の百花台型に近いものなどがある。剥片剥離技術については、1の国府系ナイフや12・13・15の剥片、33・34の石核にみられる縦長剥片剥離技術、2・3の今峠型ナイフや17・18などのノ字状剥片剥離技術、22~24のボジ面を取り入れた縦長剥片や35~37のような剥片素材石核の小口より行う縦長剥片剥離技術、作出された平坦打面より行う縦長剥片剥離技術などがある。1の国府系ナイフ形石器に代表される縦長剥片剥離技術は、山形打面調整の簡素化や平坦調整の介入などから、佐賀県船塚遺跡(八尋編1984)に見られる瀬戸内技法の典型例ではない。むしろ、衰退形態と見ることができ。また、盤状剥片を素材とする縦長剥片石核(33・34)についても、打面調整の簡素化や素材底面の確保が十分になされていない。一方、2・3の今峠型ナイフ形石器の素材剥離技術は瀬戸内技法の影響によるものと理解できる(吉留1998)。このことから両技術は時期的にも近接し、一時期共存する可能性も考えられる。ただし、本遺跡では母岩や接合などによる共時関係を確認することはできなかった。さらに、剥片素材石核の小口よりボジ面を持つ縦長剥片剥離を行う技術は筑紫野市諸田坂塚遺跡、朝倉町原の東遺跡などでまとまって出土している(杉原2001他)。これらは、終末期に近い時期を考えることができ、国府系、今峠型ナイフ形石器より後出する。以上のことから本遺跡出土石

ナイフ形石器後半期

瀬戸内技法の影響

II 調査の内容

2時期に大別 器群は大きくは2時期に分かれ、ナイフ形石器文化後半期の中頃～終末に比定されよう。

[参考文献]

加藤隆也・吉留秀敏 1998「旧石器時代の調査」『麦野B遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第568集

菅波正人・小畑弘己 1995「第41次調査の記録」『那珂14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第399集

杉原敏之 2001「細石刃文化成立期の様相—福岡地域におけるナイフ形石器文化から細石刃文化への動向—」『筑紫野市史資料編』

八尋実編 1984『船塚遺跡』神埼町教育委員会

吉留秀敏 2001「筑紫野地域における瀬戸内技法関連資料の評価」『筑紫野市史資料編』

縄文整穴住居SI159 (Fig.92, PL.34)

調査区西側で検出した。樹木保全のため、約2/3の検出に留めた。長軸約2.7m、短軸約2.1mで、僅かに隅丸の長楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは約0.2mで、床面から壁

楕円状断面

面への立ち上がりは楕円状に近い。ピットの配置に規則性は無く支柱穴は不明である。中央南側付近で検出したピットは径0.45m、深さ0.28m程度である。埋土は粘性が強かった。また、住居内にレンズ状に落ち込む堆積土状況から住居の上部が削平を受けていることが分かる。住

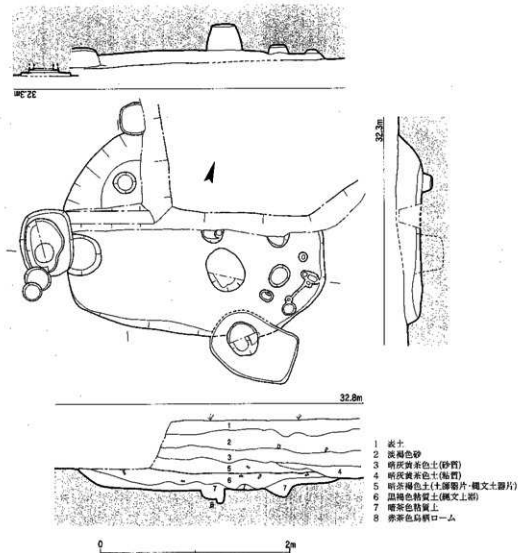


Fig.92 縄文期整穴住居跡(SI159)実測図 (1/40)

居内出土の土器群は埋土(6層)からの出土である。出土遺物から後期末～晩期初頭頃と考えられる。出土遺物 (Fig.93, PL.57) は浅鉢(1~5)のうち1~3は同一個体と考えられる精製浅鉢。胴部は鋭い稜をなして屈折し、内湾気味の頸部を経て口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部文様帯には2条の沈線が巡る。口縁部内面にも沈線が1条巡る。内外面横位のヘラミガキ。4は、頸部下の屈折部の資料であろう。1条沈線が巡る。内面横位のヘラナデ。5は胴部下位付近であろう。器面の摩滅著しい。内外面黄茶褐色。深鉢(6~22)のうち6はおそらく胴部で一旦屈曲し、頸部から緩やかに外反する深鉢内外面共に丁寧なナデ調整。復元口径33.4cm。内外面共に暗茶褐色。7の口縁端部は直線的に立ち上がる。内外面共に丁寧なナデ調整。8は胴部から口縁部へかけてやや内湾して至る。口縁部はやや肥厚する。9も口縁部へはやや内湾して至る。口縁端部は僅かに内側に折れるように肥厚する。器厚は違いますが8と同一個体の可能性が高い。10は口縁部へ直線的に外反し、端部が強いナデによりさらに外反する。器厚は非常に厚い。内外面共にナデ。11はおそらく胴部下位付近。砲弾形の鉢になるであろうか。内外面共にナデ。12~20は貝殻条痕調整による資料。いずれも横位の調整。12は断面観察から外縁接合であることが分る。14は内面の一部は条痕後ナデ。15は内面ナデ調整。18の外面は条痕後ナデ。21の復元底径は9.0cm。内外面共にナデ。22の復元底径11.6cm。外面は丁寧なナデ。また、浅鉢(25)の外表面には丹塗が観察できる。内面には沈線状のナデ。摩滅著しく、端部には指頭圧痕が観察できる。23は打欠きによる土製円盤。外面に僅かに貝殻条痕が観察できる。SK158より出土。

厚手無文土器

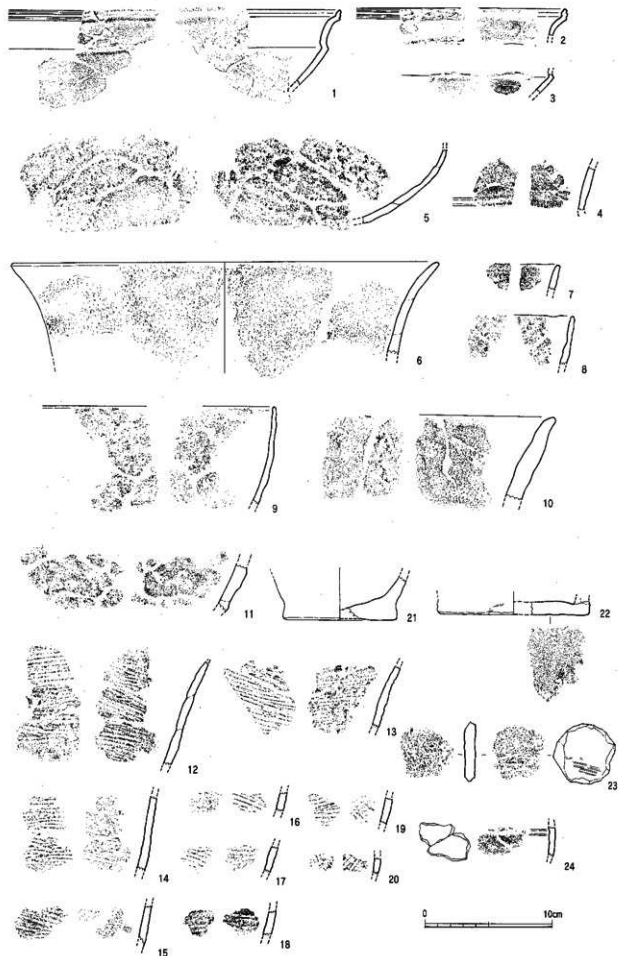
丹塗浅鉢

縄文時代以降の石器 (Fig.94, PL.58-1)

石鏃(1~6)のうち1・2は、直線的に延びる側縁から平坦な基部へ至る。1は裏面と左側縁に素材面を残す。未製品の可能性が高い。2は先端と基部を欠損する。木棺墓中より出土。3は剥片素材面を残し、直線的な側縁から僅かに突出する基部へ至る。3は下端を欠損。丁寧な押圧剥離で側縁は直線的である。4とは接合しない。4は丁寧な押圧剥離によって仕上げられ、両基部は僅かに突出する。5は両面に素材面を残しながら、基部を中心に周縁を押圧剥離によって仕上げる。断面はやや厚い凸レンズ状となる。スクレイパー(7~9)のうち7は不定形の剥片を素材とし、両端欠損後側縁に鋸状の刃部加工を行っている。8は不定形剥片の端部に刃部加工を行っている。9は縦長剥片腹面の側縁に施される刃部加工は、切合いの判断が難しいが端部折断後であろう。石匙(10)は縦長剥片を素材とし、背面に自然面を残す。下半を欠損している。石核(11~13)のうち11は、素材剥片剥離後、刃部加工を行いスクレイパーに転用している。12は、求心状剥離を行っている。やや風化が新しい。13は背面に礫面を残し求心状剥離を行っている。腹面右側縁は刃部として使用されている。石斧(14~16)のうち14は欠損資料で側縁から端部を残す局部磨製石斧。表裏に研磨痕がある。片岩製。15は、両端を欠損した局部磨製石斧。いわゆる「神子柴型」である。摩滅が激しいが、表面右上の面や裏面中央の面は稜が無く磨かれている。おそらく手持ち砥石によるものであろう。16は、玄武岩製の丸ノミ状石斧である。摩滅著しい。槍先形尖頭器(17)は表裏両面を磨いた局部磨製尖頭器。上半を欠損する。凝灰岩製。砥石(18)は砂岩製で砥面は4面ある。重さ88.5gを測る。

局部磨製石斧

丸ノミ状石斧



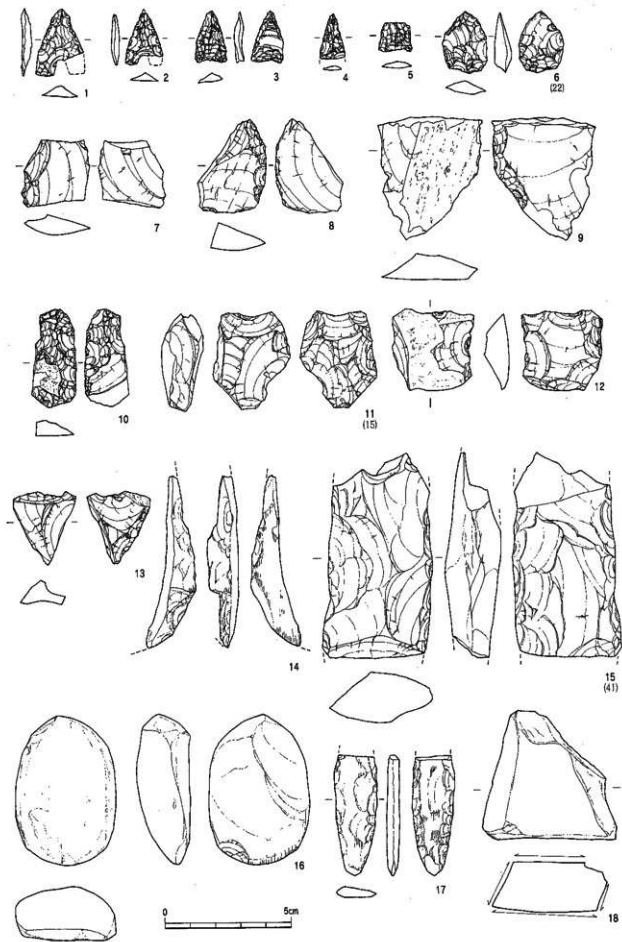


Fig.94 縄文時代以降の石器実測図 (2/3)

II 調査の内容

No.	名称	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	G番号	出土地区	出土遺構・地
1	ナイフ形石剣	ob-1	(3.35)	1.25	0.70	2.9	磁粉系		P1区	表段
2	*	ob-2	3.10	1.90	0.60	2.5	今野型	26		
3	*	ob-3	5.80	2.75	0.65	9.7	*	40		
4	*	ob-1	(2.30)	1.40	0.50	1.4	上半欠		P1区	SD160
5	竹形台番	ob-4	3.30	2.20	0.95	4.7	柱状不型		P1区H7	S85
6	*	ob-4	1.00	1.60	0.65	1.3			D-B4	暗茶褐色土
7	*	ob-4	1.80	2.0	0.60	1.2			88	
8	*	an-1	1.70	1.90	0.65	1.4			46	
9	スタレイバー	tuf	8.50	1.90	0.70	3.4			25	
10	*	an-1	2.40	1.10	0.75	1.9			71	
11	製片・砕片	ob-1	3.00	1.90	0.70	2.9			P1区B5	暗黄茶褐色土
12	*	an-2	3.20	2.55	1.10	5.2				暗黄茶褐色土
13	*	ob-1	3.05	2.75	0.70	2.1	1と同一母岩		P1区D4-5	
14	*	ob-1	3.05	1.55	0.55	2.6			1	
15	*	ob-1	3.40	1.90	1.20	5.2	1と同一母岩	8		
16	*	ob-1	3.40	1.60	1.15	4.4			P1区D4-5	SD163
17	*	an-1	3.70	2.70	1.45	3.4			PS	暗黄茶褐色土
18	*	an-2	2.0	3.00	1.55	1.2				SK158
19	*	ob-2	3.25	1.80	1.00	11.3	2と同一母岩	21		
20	*	ob-3	3.00	1.00	0.70	7.3	3と同一母岩		Tr.10	灰色土(地山)
21	*	ob-4	2.60	3.05	1.20	8.5			P1区B5	暗黄茶褐色土
22	*	ob-4	3.10	1.60	0.70	3.5			P1区B6	暗黄茶褐色土
23	*	ob-5	3.30	1.40	0.90	3.3			72	
24	*	ob-5	(0.23)	1.40	0.70	1.5			P1区D4-5	SD163
25	*	ob-4	2.70	1.90	0.55	1.9			5	
26	*	ob-4	2.90	1.50	0.55	1.1			32	
27	*	ob-4	2.70	0.60	0.40	0.7			74	
28	*	ob-6	1.80	2.05	0.90	2.1			17	
29	*	ob-4	1.80	2.00	0.60	1.5			P1区B5	暗黄茶褐色粘土
30	*	ob-4	(1.60)	1.10	0.40	0.7			49	
31	ブランク	ob-1	2.00	3.40	1.65	8.6			2	
32	*	ob-5	4.80	1.40	1.40	10.4	角礫状原石	4		
33	石剣	an-2	5.60	4.20	1.65	28.2			7	
34	*	an-2	6.00	3.00	1.80	19.6			6	
35	*	ob-6	6.75	3.60	2.15	48.9			24	
36	*	ob-5	3.40	3.00	1.30	9.7	37と同一母岩		Tr.10	灰色土
37	*	ob-5	3.00	2.40	1.40	11.5	36と同一母岩		P1区T5	暗黄茶褐色土
38	*	ob-5	3.90	2.45	2.45		風化著しい			SK158

Tab.14 旧石器時代の石器観察表

No.	名称	石質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	G番号	出土地区	出土遺構・地
1	行障	an-4	2.65	1.90	0.45	1.5	右邊端欠			SI20
2	*	an-4	2.10	1.45	0.35	0.8	右邊端欠			SK148
3	*	ob-7	2.00	1.25	0.45	0.7	素材面残す		P1区	SD163
4	*	ob-7	(1.75)	(1.00)	0.25	0.4	下半欠			SI37
5	*	ob-7	1.15	1.25	0.45	0.5	上半欠			Z
6	*	an-4	2.40	1.80	0.70	2.4	製片残す	22		
7	スタレイバー	an-4	2.60	2.65	0.90	8.5			H8	暗黄茶褐色土
8	*	an-4	3.60	2.70	1.10	9.0			P1区	土層
9	*	an-4	(4.80)	4.10	1.10	23.0			D7	暗黄茶褐色土
10	石匙	ob-7	(3.80)	1.80	0.65	4.7	刃部再加工		F10	暗黄茶褐色土
11	石匙	an-4	3.80	3.10	1.65	17.9			16	
12	*	an-4	3.20	3.20	1.20	12.4				暗黄茶褐色土
13	*	an-4	2.85	2.85	1.90	4.5	刃部加工あり		P1区D7	
14	石斧	tuf	(6.70)	(2.00)	(1.25)	9.2			F7	暗黄茶褐色土
15	*	tuf	(8.10)	4.30	2.25	84.9			41	
16	*	ba	6.60	4.00	2.00	67.7				SK153
17	磨先形頭蓋	tuf	(4.70)	1.65	0.45	5.3			P1区B4	暗黄茶褐色土
18	砥石	sa	5.10	5.20	3.10	88.5			Tr.8	暗黄茶褐色土下層

Tab.15 縄文時代以降の石器観察表

石材重量(未掲載分)

石質	重量 [g]
ob-1	4.2
ob-2	1.7
ob-3	6.2
ob-4	4.2
ob-5	3
ob-6	—
ob-7	31.9
an-1	5.2
an-2	33.8
an-3	15.3
an-4	31.2
an-	0.7
sil	4.4

石材観察用説明

- ob-1: 半透明で不透明少ない黒輝石。表面は「円礫」
- ob-2: 漆黒で砥状の磨理が出来る黒輝石。風化が顕著な表面はざらつく
- ob-3: 砥状の磨理が走り、不透明少なく良質の黒輝石。風化がすすむ。
- ob-4: 漆黒で不透明が少なく良質の黒輝石。「角礫」(磨治系)
- ob-5: 漆黒で砥状の磨理が入る黒輝石。不透明が多い。角礫(磨治系)
- ob-6: 漆黒で砥状、不透明すくない黒輝石。表面は「円礫」
- ob-7: 漆黒で風化度まない黒輝石。風化以降。
- an-1: 砥状の磨理が入るが砥物の少ないオースカイト。黄褐色に風化。
- an-2: 砥状の磨理が入るオースカイト。表面はオースカイトに風化。
- an-3: 黄褐色に風化。表面はアルシド。風化以降。
- an-4: 不透明を帯びた含むが良質。風化は進まない。風化以降。
- tuf: 凝灰岩
- ch: チャート
- sil: 珪石
- ba: 玄武岩
- sa: 砂岩

(4) 小 結

建物等遺構の変遷

今回の水城第33次調査では、水城調査では数少ない建物群の発見が大きな成果であった。これらの歴史時代遺構について、年代推定の根拠等は既に本文中で詳しく検討したので、ここではそれらを取りまとめておきたい。なおⅠ～Ⅲ期是水城西門の変遷に従う。

Ⅰ期（7世紀後半） 土塁（Tr.10）

Ⅱ期（8世紀前半） SB141, SA147, SB143, SK152～158, SD160・161・163・167（最終埋没は12世紀）

Ⅲ期（8世紀中頃以降）（ここでは8世紀後半を中心） SB142, SD171

Ⅳ期（11世紀末～12世紀前半） SB144, SB145

Ⅴ期（12～13世紀後半） SD162, 暗黄茶灰色土包含層

Ⅵ期（13世紀後半～15世紀） SD165・166, SD168・169, SX148, 下段テラスの削り出し形成以上のように大別できるが、この中では平安前半～中頃の時期が抜けていることが判る。この

時期の互の存在等から西門自体は修復を受けながら存在していたことは推定されるが、土器類の生活痕跡を示す遺物が稀薄で、既に門守衛等の常駐が無くなった事を示すものであろうか。また、最も西端で西門と直接関わる位置に在るSB141は、西門Ⅱ期の門遺構であるSB120Bと主軸方位を同じくすることから、同時期と考えたが、水城第24次調査の東門西側で検出されたSB100（『大宰府史跡』平成5年度発掘調査概報 九州歴史資料館）と比較して規模が小さい。即ち、SB100（2×6間）は8世紀後半には存在していたとされるが、桁行柱間寸法が8.5尺（1尺=29.1cm）、梁行柱間が9.5尺で、柱穴径も1m程とSB141よりも数段大きい。規模の違いからみて両者が同じ役割とは考え難い。次に、ここでは建物や土塁、後世の木棺墓、溝等のすべての遺構がその方位を水城土塁軸線を基準にして平行・直交させている事実を指摘できる。これは従来から指摘されている如く、水城周辺及び以北の条里方向がこの土塁線に基づく事と共通する。次に13世紀後半という年代が、この土塁内側のテラス面（基底部上面）の様相を大きく変えている可能性が看取される。この時期で思い出すのは文永11年（1274）文永の役、弘安4年（1281）弘安の役であり、北条時宗が水城を修築させたとの文献もある（大橋綱庵『元寇紀略』）。ただし、この元寇に備える為の修築で、この土塁後背まで下段テラスを削り出す等のかなり大規模な工事までしたのかは断定できない。元寇と水城を直接結び付ける明らかな考古学的成果は未だ不詳と言わざるを得ない。

土塁内側テラス面の利用

水城土塁内側が幅50mと広い一段高い平坦面をなしている意味について、単なる土木工学的な土塁本体の基底部としてだけでなく、築造当初からのこの広いテラス面の利用を目的として計画造成されたものとする。東門近くのこの面の調査では、木樋(SX050)から20m西側に2×6間のSB100掘立柱建物があり、8世紀後半には存在していたと考えられている。この建物は規模から見て官衙の建物とするに充分であるが、東門と直接関わる役割を持つとは未だ決定し難い。というのも東門推定位置の東側（東門東側尾根の南側）の丘陵裾が鉤の手状になったあたりでの掘立柱穴群の存在の方が、より門に直接関わる施設に相応しいと考えるからである。SB100はテラス部の中央に南北に建ち、あたかもこれから西側への侵入を遮るような占

平安前～中
期が稀薄

13C後半に
高層

SB100の
役割

II 調査の内容

地を見せる事から、水城そのものの管理を統括する、或いはテラス面に展開する守備的施設や組織の統括の役割を考えた方がよさそうである。

テラス中央の道

今回の第33次調査区のテラス面の利用状況を振り返ってみると、まず、8世紀代の建物等が土塁堀に沿って東西に並ぶ。これらの南を区切るかのように溝(SD160・161)が東西に走るが、これは南側に平行して走る溝(SD163・167)と組み合わせると2m幅を持った道路遺構と考えられる。この道の北辺ラインは土塁中軸線から25～27mあり、テラス外端(基底部南縁)までの距離の丁度半分の位置にあたる。この道と土塁に挟まれた間が、即ち公の施設が占める場所であり、この道は明らかに区画の意味を持っている。この道に関連して思い浮かぶのは、水城東土塁(御堂川以東)で後背テラス面の中央に土塁線に平行して現農道が走ることである。この農道の設置がいつのものなのかこれまで調査された事は無いが、土塁中軸線との位置関係は今回調査分と同じである。今後の調査にもよるが、この道路が水城全体に東西に走っていたとすれば、この内側テラスの造成目的のひとつが水城の東西を結ぶ連絡用・軍専用・運搬用等の目的の通路であったことも考えられよう。時代は下がるが、下段テラスのSD168とSD169に挟まれた部分も道路と考えてよく、13世紀後半以降にテラスの中位部が削り出されて上下2段に造成された後にその段の直下(南側)に東西に走る道が設けられたことになる。この道路も、8世紀以来の上段南縁に走っていた道の記憶があったことにより、改めて設けられたという事であろうか。或いは、逆にこの下段テラスの道を造るためにははっきりと上下2段テラスの削り出しが行われた可能性も考えられる。

通路としてのテラス

もうひとつ考えられるこのテラスの使用目的は、今回調査区内で認められた生活痕跡の多さから考えられる常駐的生活空間である。出土土器等がこれまでの水城各地点の調査よりも多く、煮沸用容器・食器・糞等の貯蔵容器等の各種に及び、発掘区内の各所(5ヶ所)に炭片散布を伴う焼土層位がみられ、小規模な建物等と併せて、生活の場であった様相が知れる。ただ、堅穴住居等は検出されない事から通常の集落でないのは明らかで、本文中(102頁)でも検討したとおり、8世紀各段階の水城修築に関わる現場事務所的クラスの施設群の可能性も考えてよい。

常駐的空間としてのテラス

土塁の構造 (Fig.82・95)

今回の調査で、発掘区内の殆どすべての遺構面が赤茶色ローム面であるという予想だにできなかった状況に直面し、水城土塁築造がこの地区については、小丘陵を利用して、それを削り出すという地山整形法を基本としていた事を初めて知るに至った。この小丘陵痕跡(赤茶色ローム層)は西門西側では極めて低くなっており、丁度この西門で切れていたことがわかり、官道・西門もこの丘が切れた部分を利用したものと考えられる。今回調査した東端のTr.14でもまだローム面が表土直下にあり、基底部横土は認められず、更に東方まで旧丘陵が延びていることが想定される。西門から180m前後東へ行った第32次調査地点(木樋抜取跡)では既に沖積層が基盤層になっていた事から、このかつての小丘陵は東西150m前後、南北70m強、高さ10m程の独立丘陵を呈していたことがわかる。このような水城築造に関わる自然丘陵の利用は、他の地点にも見出せる。即ち、東土塁北側部の水路改修工事に伴う立会調査(平成12年12月～13年1月)で、外濠側へ張り出した高まり部が、水城築造以前の沖積微高地であり、このあたりの土塁本体部分もこの高まりを利用している可能性が考えられた。また、西土塁の北側のJR水城駅西側に丘陵の残地状部分が高さ1.5～2m程残っており、この高まりの南縁ライン

丘が切れた所に西門

独立丘陵を取込む

が水城外濠北岸推定ラインと一致する事は従来から指摘されてきた。これが外濠幅の規制に関係したことは想像に難くない。更に、西門から西へ100mの地点で明確な丘陵尾根部に至るが、その北側コーナーは明らかに直角に削り出されており、この尾根が更に西門方向へ延びていたことを示唆する。この事は東門東側でも同様であり、平野部へ突き出た派生尾根や、その先に点在した独立丘陵や沖積微高地を効率良く取り込みながら、水城築造が削り出しと盛土工という両方の工法でバランス良く行われたことがわかる。

削り出しと盛土工

次に今回Tr.10の土塁南側断ち削り調査の成果と、これまでの西門周辺の調査成果を合わせて、土塁築造技術について検討してみたい。Tr.10では水城築造時の基盤が、旧丘陵の旧表土層を残したままの面であり、土塁本体部位ではオリジナルな旧地形の最頂部をそのまま利用している。その上の積土は、本文中で詳述した如く、大別した3段階(Ⅰ～Ⅲ層)の工程の中で各々の層に応じた細かい技術差が認められた。即ち、下部(Ⅰ層)では下方湾曲のみられる突き固めによる緻密な版築で基礎を固め、中位(Ⅱ層)では水抜きと中央部盛り上げの作業、上部(Ⅲ層)では急斜面形成とその崩壊防止技術、更に土塁頂上部築き上げのためのカルデラ形成等である。このような上中下の積土技術の変化は、土塁北の前面側積土では見られないようである。第26次調査時の西門北西側の土塁前面部断ち削り調査では、土塁頂部から下まですべて細かい版築を基本とし、極めて強固に土塁前面を固めた意志が感じられる。加えて、すべての層が北側が高く南側へ傾斜(0~15度)するように横んでいる。この傾斜はわりとゆるいものであるが、これが西門西側土塁頂部にくと、30~33度の強い角度をもって南側へ急傾斜している。この傾斜は今回調査の10Tr.のⅢ層と相通ずるものであり、明確に意図的な工法であると言える。以上の如く、水城土塁の積土部分はすべて南側へ傾斜させて積むが、北側前面は強固に版築し、南側後背部は上下の各部位で異なった目的毎に技術を変えて、粗く積む部位も作り、林重徳教授の御指摘のように、後背側へ水を抜くという、雨水処理を強く意図した築造法を採用しているという事を確認するに至った。

上~下で異なる工法

北側前面は強固に版築

南半盛土の方が強い傾斜

なお、背面側の土塁裾には前面側に見られたような石積(SA104)に対応する石積は認められなかった。更に、西門東側土塁南端の土塁のふくらみ(張り出し)は、修築等による追加積み上げによるものではなくて、張り出し周縁が地山削り出しによる事から、当初、或いは後に削り出しにより成形されている事が想定された。ただ、その目的・用途については明確に出来なかった。

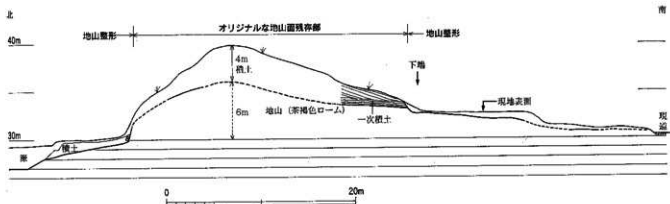


Fig.95 水城土塁における地山と積土の関係(西門跡東側の場合)(1/400)

II 調査の内容

推定木樋埋設地 (Fig.83・96)

今回水城大堤の木樋埋設地として4箇所を検出することが出来たが、これまでの3例のように木樋本体やその残材等を確認した訳ではないので、まずは「推定」を冠しておこう。木樋埋設掘方とした根拠は、掘方幅が9.2mと既調査例と同規模であること、下段テラス部分でもその延長線上で掘方ラインが確認され、さらにその延長上の土壘頂部・前面・背面の挟れ・凹部の確認によること、掘方内埋土が版築による突き固めて既調査例と同様であること等である。検出当時、東方の第32次調査で確認した木樋と距離が近すぎるのではないかと意見もあったが、後述するように100m強隔っており、取えて疑問視する根拠にはならないだろう。

御笠川以西の西土壘でこれまで3箇所の木樋が確認されたことになるが、その選地の理由について検討する。第17次木樋から第32次木樋までが取水口推定地点間で160mあり、第32次木樋から今回の第33次木樋までは、後者が取水・吐水口双方とも位置が決定できないので図上復元した位置で計測したが、104~108mの範囲となる。この距離は先程の第17次木樋~第32次木樋の方が1.5倍となる数字であり、所謂1町と1.5町という比率になり、企画性が明らかである。また、第33次推定木樋~西門が80mで3/4町、西門~西端の土壘取りつき部が約100mで1町となる。また、御笠川以东の東土壘では、本書で報告(水城第35次調査)する如く木樋検出を企図したが果たせず、今のところ東門際の1箇所(SX050)のみである。然るに西土壘では3箇所も割と狭いスパンで検出されている。その理由としては外濠の状況、取水量の条件等が考えられるが、いずれも現状では確定し難いので、吐水口側の土壘直下の犬走り状平坦面の高低差で見てみる。まず西門から北西へ延びる官道から西側は濠が無いと推定されているので、この部分は除外して、西門北東前面列石側が標高30m前後、第32次木樋吐水部側で26mと、この間で4mの高低差がある。これに比べて、第17次木樋吐水側の地山面を推定復元すると標高25~24mとなり、西隣の第32次木樋部との差は僅か1~2mである。この高低差が、第32次木樋と西門との間にもう1つ木樋を設ける必要性を生じさせたものと考えられる。

今回の推定木樋埋設地点の検出に関して若干の不安があるとすれば、1995年10月に九州大学牛島忠輔教授による電気探査結果である。第17次調査木樋と第32次調査木樋地点ではいずれも明瞭な異常が指摘されて、実際その場所に遺構が確認されている訳であるが、今回の第33次部分については異常を指摘されていない。その理由については考古学の方からは追えないが、或いは第33次部分の木樋が抜き取られておらず、しっかりした地山の中に、地山と変わらない程に締まった安定した埋土がそのまま残っている為かと、希望的解釈もしたくなる。いずれにしろ、木樋本体の残りが良ければ、近年の調査で解明し得ていない吐水口付近の構造に対する調査が今後期待できるのだが。

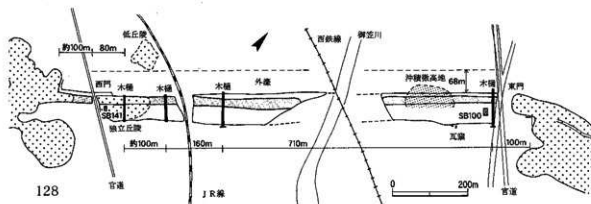


Fig.96 水城全体概念図 (1/10,000)

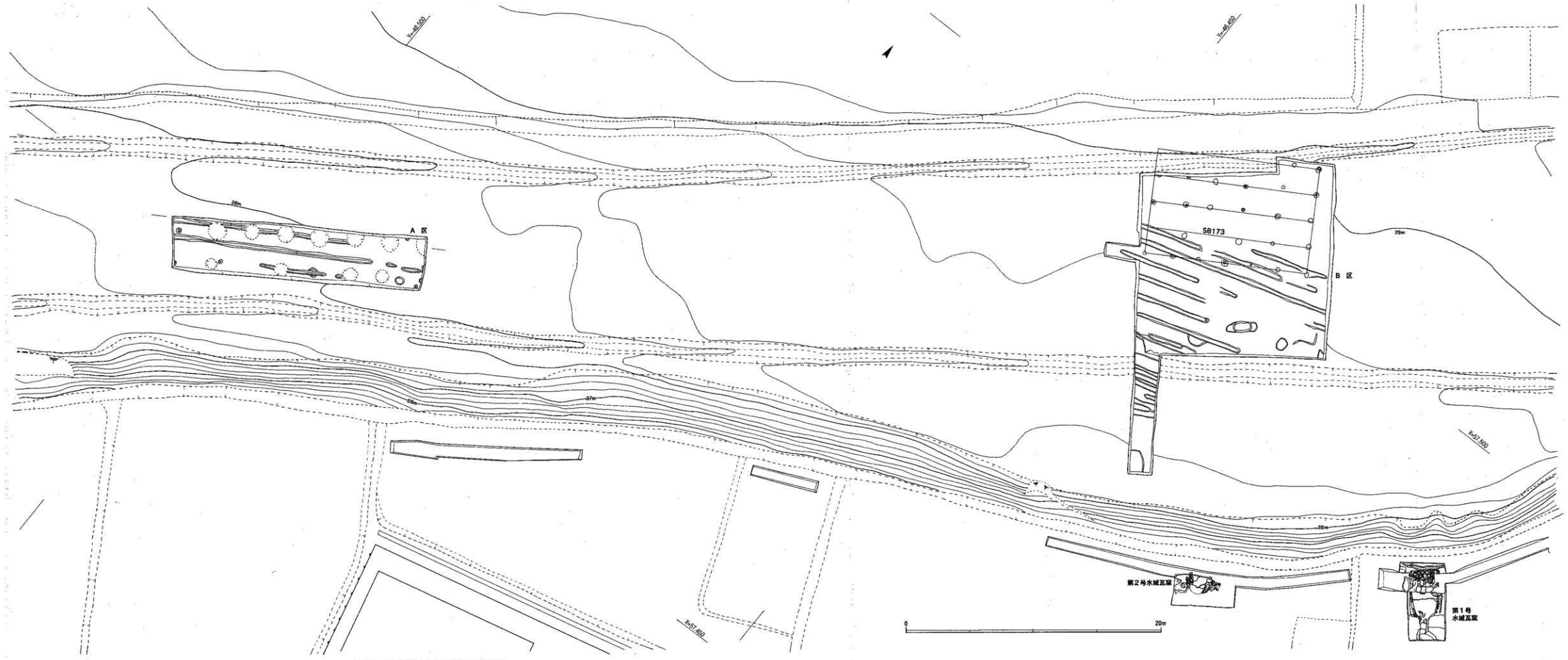


Fig.97 水城跡第35次調査区地形図 (1/200)

7 水城跡第35次調査(東土塁基底面の調査)

(1) 概要

経過 特別史跡水城跡の東土塁基底面の発掘調査は、水城跡第5次調査として昭和50年に外濠の存否の確認と木樋の構造解明を目的として行われた。その結果、外濠は土塁の北側に存在し、幅約60m、深さ約5mの規模を有することが判明した。また、土砂の堆積状況から流水と滲水とを繰り返していた水濠と考えられた。しかし、外濠の幅が一定かつ土塁全体にわたり掘削されているのかなどの疑問点が残された。また、木樋は追調査の結果、側板は各1枚、底板は2枚を納めて繋ぎ、鏝で固定していた。天井板は腐朽していたが、内法で幅116cm、高さ約78cmで、材質はヒノキであった。さらに、樋内には灰色微砂と粗砂が互層に堆積しており、これは流水の痕跡を示すもので、「木樋湿気抜き」説(長沼1932)を覆す結果となった。

その後、平成5年に実施した水城跡第24次調査は、第5次調査の西側隣接地にあたり、調査の結果、8世紀後半代の掘立柱建物SB080・100の2棟を検出した。また、基底部の断割り調査では、現地表面から約3m下層の地山直上において樹木の枝葉を敷いた「敷粗梁」を確認した。なお、発掘調査と併せてボーリング調査、土質試験、電気探査、樹種同定などの自然科学分野における調査が行われ、それぞれ大きな成果を上げている。

今回の調査は、平成6年に九州大学工学部の牛島恵輔教授等により行われた電気探査の結果、木樋埋設の可能性が指摘されていた箇所-A区、及び平成11年に太宰府市教育委員会によって瓦窯3基が調査された場所の北側-B区において実施し、A区においては木樋埋設の有無を確認すること、B区においては瓦窯及びそれに関連する施設の検出を目的とした。

発掘調査は水城跡第33次調査の遅延により7月19日から作業に取りかかった。A区は当初から人力で掘り下げたが、B区の表土除去には重機を用いた。A区では木樋の掘方を面的、土層的に確認しながら掘り下げたが、一向に木樋掘方は姿を見せず、地表面から2m下位において敷粗梁層を検出した。結果的には、木樋の埋設は否定されたが、11面にも及ぶ粗梁層を確認し、新たな知見を加えることとなった。B区においても瓦窯は構築されていなかったが、竪柱の掘立柱建物1棟を検出した。この掘立柱建物は瓦窯との位置関係、建物規模・形態などから瓦制作に関わる施設-瓦工房と推測された。

なお、調査の中盤は猛暑との戦いでもあったが、調査は事故もなく順調に進行し、11月4日から埋め戻しに入り、途中、中断があったものの、翌年の2月5日までに芝の養生を含めて埋め戻しを完了した。地番は太宰府市国分1丁目247-1番で、調査面積はA区が80㎡で、B区が240㎡である。

(2) 基本層序

断割りを行ったA区で土塁横土の状況を観察すると(Fig.99)、上層から表土(厚さ5cm程)、整備盛上(厚さ30~40cm)、旧表土(暗褐色土、厚さ10~30cm)で、旧表土までを除去すると水城土塁基底面の横土が現れる。横土は大きく上層と下層に分けられ、上層は黄灰色土と暗灰色砂を主体に積んでおり、黄色っぽい印象を受けるが、下層は褐色砂と黒灰色砂を交互に積んでおり、灰色っぽい印象を受ける。なお、横土面の標高は27.8mを測る。

II 調査の概要

横土を掘り下げていくと現地地表から2m下位、横土面からは1.4~1.5m下位で数粗朶層に達する。数粗朶層は1.5m程の厚さで、さらに掘り下げると溜まり状の黒褐色土(厚さ30cm)、灰色粗砂(厚さ15cm)で、その下が暗灰色粘上の地山に達する。地山層は地表面から4m下位であり、標高は24.3mを測る。

(3) 遺構と遺物

A 区

木樋の埋設を確認するために土塁に平行して4×20mのトレンチを設定した。この箇所は電気探査によって低比抵抗異常部(C1異常部)と確認された場所で、東土塁西端部から東門側に82m行った場所にあたる。なお、トレンチを設定するにあたり、再度、牛島先生に電気探査を行っていただき、トレンチの場所がC1異常部であることを確かめた上で、調査を行った。

旧地表を除去すると、新期の溝、榎木穴が検出されたのみであった。前述したごとく、面的・土層的に注意しながら木樋掘方の検出に努めたが、結果的に木樋はこの箇所には埋設していないことが判明した。しかし、土塁現地表面から約2.0~3.4m下位の横土中において11面の粗朶層を検出しており、ここでは粗朶層について述べる。

数粗朶SX172 (Fig.99, 巻頭図版4-2, PL.37・38)

土塁現地表面から約2.0~3.4m下位の横土中において検出した粗朶層である。粗朶は枝を主体に土塁と直交する形で薄く敷き並べられており、枝を面的に敷き並べては10cmほどの横土を盛り、また枝を敷いては土を盛ることを相互に繰り返し、粗朶が入っている層全体としては1.5m程の厚さがあり、数粗朶層としては11面数える。

また、粗朶層の最下面から地山の暗灰色粘土層までは、上層に黒褐色土(腐植土、厚さ30cm)、下層に灰色砂(厚さ14cm)が堆積しており、この付近においては築堤以前に自然流路が存在し

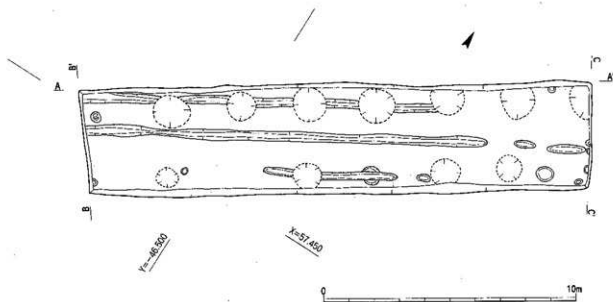
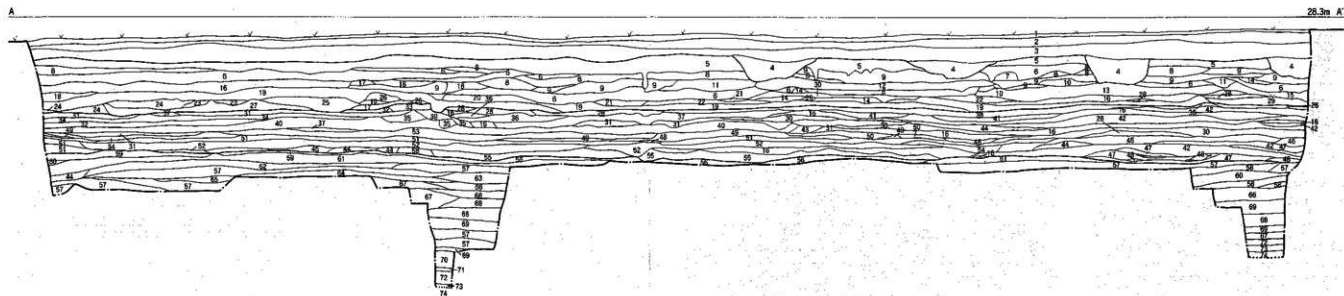
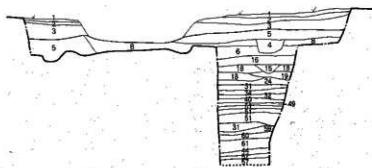


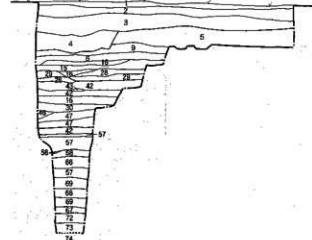
Fig.98 A区遺構配置図 (1/150)



B 28.3m B'

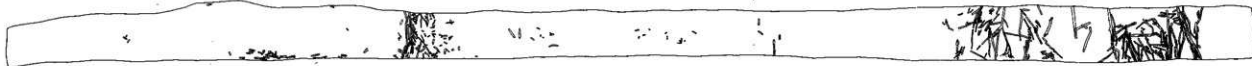


C 28.3m C'



- | | | | |
|----------------------|------------|-----------------|---------------------|
| 1 表土 (暗灰色砂) —— 農圃の底上 | 21 暗黄灰色土 | 41 黄褐色砂 | 61 黒灰色粘土 (#) |
| 2 黄砂土 (黄褐色砂) —— # | 22 暗灰褐色砂 | 42 暗褐色砂 | 62 57+44 |
| 3 黄砂土 (暗黄褐色砂) —— # | 23 褐色土+17 | 43 黄灰色砂 | 63 57+灰褐色粘土 |
| 4 5に黄褐色土塊混 (樹木穴) | 24 16-17 | 44 褐色砂 | 64 暗黄灰砂 |
| 5 暗褐色土 —— 旧灰土 | 25 褐色砂+17 | 45 16+褐色粘土 | 65 黄灰色土 |
| 6 暗灰色砂 (餅りあり) | 26 暗黄灰色砂 | 46 灰色砂+褐色粘土 | 66 暗灰色細砂 |
| 7 白色砂 | 27 褐色粘土+17 | 47 暗赤褐色砂 | 67 57に灰白色砂多し |
| 8 黄灰色土 | 28 暗褐色土 | 48 黒灰色砂 | 68 黒灰色細砂 |
| 9 黄褐色土 (よく餅り 粘性あり) | 29 暗褐色砂+28 | 49 暗褐色土 (粗砂多し) | 69 57に灰化物混 |
| 10 9+暗褐色砂 | 30 明褐色砂 | 50 白色砂 (灰分沈着) | 70 黒色細砂 —— 瀝り埋土 |
| 11 9+暗灰色土 | 31 黄褐色砂 | 51 明黄灰色砂 | 71 暗褐色砂 —— # |
| 12 暗褐色粘土 | 32 黒褐色砂 | 52 暗褐色土 (粗砂多し) | 72 黒褐色土 (粗砂多し) —— # |
| 13 黄灰色砂+褐色粘土塊混 | 33 暗赤褐色土 | 53 灰白色砂 | 73 灰白色土 —— # |
| 14 暗褐色粘土 | 34 暗黄褐色砂 | 54 暗褐色砂 | 74 暗灰色粘土 (地山) |
| 15 暗灰色土+暗褐色砂 | 35 黄褐色土 | 55 52+17 | |
| 16 暗褐色砂 | 36 黄灰褐色土 | 56 黄褐色粘土 | |
| 17 暗灰色粘土 | 37 明黄褐色砂 | 57 暗灰色砂 | |
| 18 9+17 | 38 暗灰砂 | 58 暗褐色粘土 | |
| 19 8+暗灰色粘土塊 | 39 明褐色粘土 | 59 明褐色粘土 (餅り強い) | |
| 20 暗灰色粘土 | 40 黒褐色土 | 60 暗灰色粘土 (#) | |

敷瓦染11層範囲



0 5m

Fig.99 A区北壁土層図・敷瓦染出土状況実測図 (1/60)

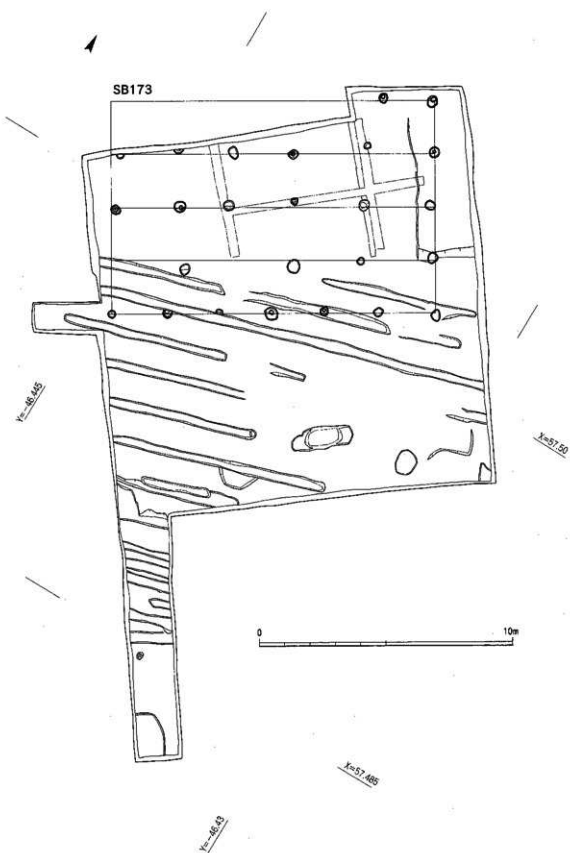


Fig.100 B区遺構配置図 (1/150)

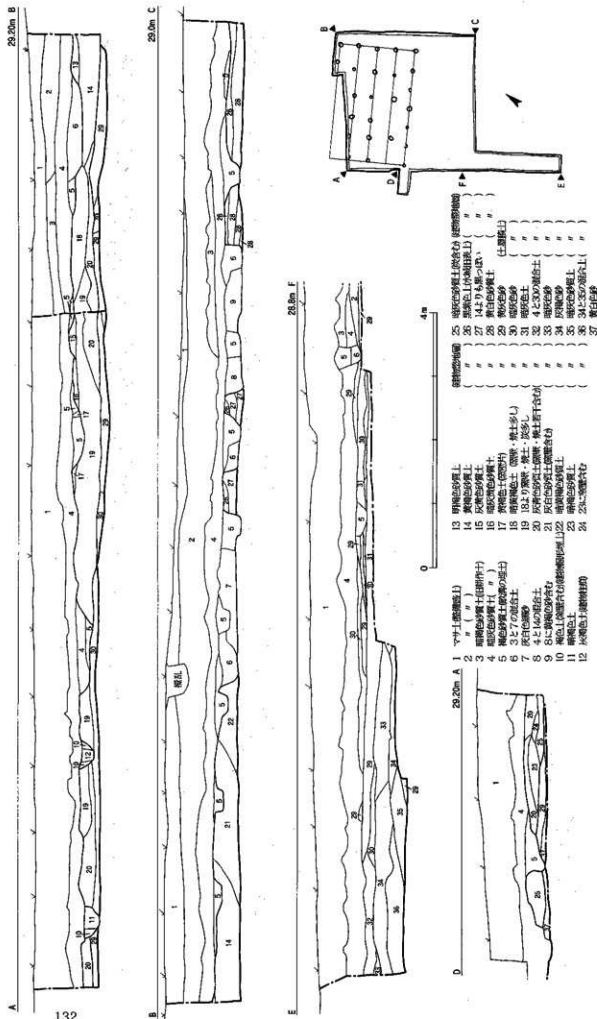


Fig.101 B区土層図 (1/60)

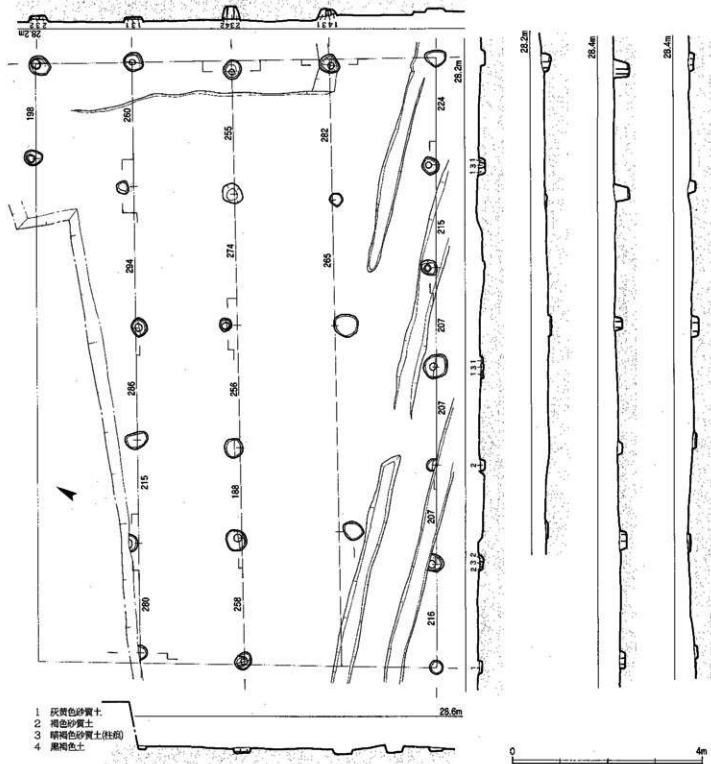


Fig.102 SB173実測図 (1/80)

ていたことが判明した。なお、粗朶に関しては樹種同定及び年代測定を実施しており、その分析結果を掲載しているので参照願いたい。

出土遺物 (Fig.103, PL.58-2)

A区からは、積土上層から弥生土器が出土したのみであり、水城築堤には直接関係ない遺物である。Fig.103-1は壺の頸部破片で、内外面ともナデ調整。Fig.103-2・3は甕の口縁部破片で、2は口唇部にキザミ目を施す。3の口縁部は「く」字形を呈する。

B 区

B区の法面から裾部にかけての箇所は、平成11年度に実施された太宰府市教育委員会の発掘調査により瓦窯3基が確認されていた。また、電気探査により異常が認められた地点（C2異常部）にあたり、B区においては瓦窯の有無の確認とその周辺部の状況について知見を得ることを調査の目標とした。また、この部分は基底部が最も張り出している箇所であり、この張り出が何に起因するものなのか、併せて発掘調査による解明を行った。

検出した遺物は、掘立柱建物1棟とそれに伴う整地層である。なお、調査区を東西に走る溝は整備する以前の堀の畝溝で、新时期のものである。

SB173 (Fig.102, PL.40, 41-1)

調査区の北端で検出した。総柱の掘立柱建物で、梁行は4間（8.42m）、桁行は5間（12.76m）で、南端柱列のみ6間となっている。総柱であるが、桁側の柱間は1.88m～2.94mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径0.24m～0.48m、柱痕は径16cm程で貧弱な印象を受ける。また、建物が建っている範囲のみ焼土(窯壁片)・炭が混じった暗黄褐色土で整地しており (Fig.101の土層図参照)、それを切り込んで建物が建てられている。建物自体は土壘本体からするとやや東側に振っており、梁行方位はN32°Eを測る。

なお、当建物は、1号瓦窯跡までの距離が25mの至近距離に位置し、大規模ではあるが簡素なつくりの建物であること、建物の範囲のみ整地を行い地上げを行っている点などから瓦窯に伴う工房と考えている。

出土遺物 (Fig.103, PL.58-2)

B区からは縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・丸瓦・石器・鉄器・石硯及び焼土塊などが出土しているが、須恵器（8～13）は整備盛土からの出土であり、直接掘立柱建物の時期を示すものではない。

縄文土器（7）曾畑式土器の深鉢胴部片で、篋先で5～6本を単位とした斜線文を施文している。胎土に滑石を含み、器面はなめらか。

弥生土器（4～6）4・5は壺の口縁部破片で、4は広口壺で、端部は肥厚する。5の口縁部は逆L形に開く。6は「く」字形口縁の甕小片。

須恵器（8～13）8～11は蓋で、8・10・11は身受けのかえりを有する。8の外天井部には篋記号を施している。12は短頸壺の口～胴部破片で、外面はカキ目調整。13は有石台の坏で、高台は靴形を呈する。7世紀後半の資料であるが、整備盛土、旧表土中の出土。

土師器（14～16）14は坏の底部小片で、高台は体部端に貼付している。15は小形の鉢で、16は高坏の脚柱部破片。

II 調査の内容

丸瓦 (17) 狭端面側の破片で、凸面は縄目をナデ消しており、凹面には布目がつく。

鉄器 (18・19) 18は先端が丸く、先細りとなっているが、刃部ではない。用途不明品。
19は釘の破片で、断面は方形を呈する。

石硯 (20) 凝灰岩製の石硯で、海部に近い付近の破片。

石器 (21) 短冊形を呈する石器で、右側縁は剝離調整を施しているが、左側面は自然面を留める。石材はサヌカイト製。長さ7.7cm、幅3.8cm。

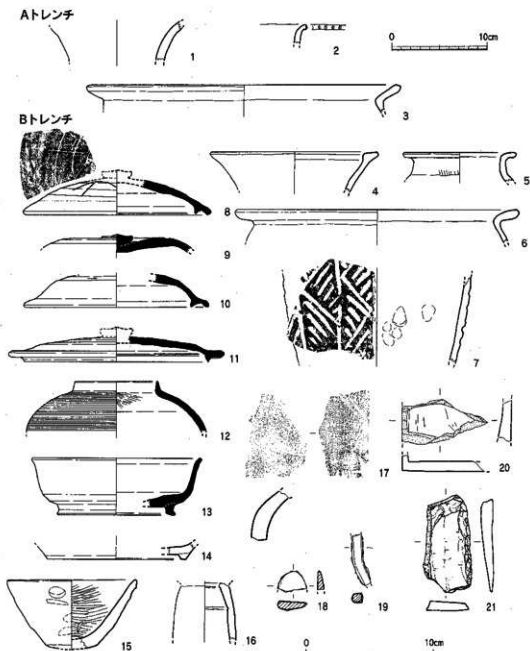


Fig.103 水城跡第35次調査出土土器他実測図 (1~6・17は1/4, 他は1/3)

(4) 小 結

今回の調査では、当初の検出目標である木樋は発見されなかった。しかし、敷祖築層を11層にわたって敷き並べていることが確認された。また、B区においては瓦窯は検出されなかつ

たが、瓦工房と考えられる掘立柱建物を1棟検出した。ここでは、敷粗朶と掘立柱建物を取り上げてまとめたい。

敷粗朶

前回の水城跡第24次調査では、土塁本体寄りの最下層から3層の敷粗朶層を検出してゐる。粗朶は土塁に対して平行するように敷かれていたが、今回は土塁と直交する形で敷かれており、それも多層にわたって施していた点が大きく異なる。前回調査の最下層は、鉄分が厚く沈着した堅い層であったが、今回の地点は溜まり状の地形の上に積土を施しており、軟弱地盤の強化・改良のために粗朶を多層に施したものと解釈される。

樹種同定の結果は、前回とほぼ同じ内容であったが、敷粗朶として使用している樹種がある程度限定されていることから、「樹木の伐採にあたっては、樹木についての知識を有する人物のもとで伐採が行われたのでは」とする井上先生の意見を頂戴している。また、年代測定の結果は、GL-2mの中央値がAD660年、坪掘1中層第2層の中央値がAD430年、坪掘2第2層の中央値がAD240年であった。GL-2mの試料は敷粗朶最上層であり、664年の水城築堤記事に最も近い。他の2点は築堤記事から200~400年も遡った数値であり、にわかには信じ難い。この2点は、粗朶層を部分的に掘り下げた坪掘りからの抽出試料であり、A区付近が溜まり地形の上に積土を施している点を考慮すると古い時代の流木が積土中に混入した可能性も考えられよう。

溜まり状の
旧地形

SB173

今回検出した建物の特徴をあげると、先ず総柱の掘立柱建物であること。長さ12.76m、幅8.42mと大規模な建物の割には柱自体が径16cmと貧弱であること。建物の範囲のみ整地を行っている等の特徴がある。

瓦工房の例としては、豊前国分寺に瓦を供給した福岡県築城町堂がへり遺跡、平京城に瓦を供給した京都府木津町上人ヶ平遺跡などがある。堂がへり建物は4間(11.5m)×10間(29.5m)総柱、面積340㎡の規模で、2棟並列している。上人ヶ平建物は4間(11.64m)×9間(26.15m)総柱、面積304㎡の規模で4棟並列し、付属施設として粘土溜、工人の住居、井戸などがある。規模の点からは比べるまでもないが、総柱の掘立柱建物である点は共通している。次に規模の点からみてゆくと観世音寺の造瓦屋が参考になる。『観世音寺資料帳』大衆物章には、造瓦屋として「長五丈(15m)、広三丈(9m)、身屋高七尺(2.1m)」の記述があり、当建物と比較すると長さが1間分長いだけで、両者の近似性が窺える。

造瓦屋

建物の年代に関しては、共存する遺物がないため明らかではないが、1号瓦窯内からは8世紀中頃の土器が出土していること、瓦窯の構造は平窯であることを考慮し、この建物が瓦工房であるとすれば瓦窯と同じ8世紀中頃の年代が与えられる。

平窯

また、問題となっている張り出しは、B区南端を南側に延長し、積土を掘り下げたところ、築堤当初の積土がそのまま延びていることを確認しており、張り出しが後世の継ぎ足しによるものではなく、周囲が掘削された結果、この付近が突出しているように見えるだけであったことが判明した。

今回の調査成果は、当初の目的とするものではなかったが、新たな知見を得ることができた。また、築堤当初は、大宰府の防衛という目的で築かれた水城であったが、社会情勢の変容とともに水城の性格も変化していったことが窺い知れ、この点は思わぬ調査成果であった。

II 調査の内容

8 水城跡第35次調査 (特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体)

九州大学大学院農学研究院助教授 井上 晋

(1) 調査の目的と方法

2001年7月19日から翌年2002年2月5日にわたって実施された第35次調査のA区トレンチから発掘・出土した数粗朶の樹種同定を行った。植物遺体は、2001年10月25日に採取されたもので、トレンチの深さ別のバット内に淡水が満たされ、その中に葉と枝が保管された状態で、19資料に分別されていた。調査方法は、各資料ごとに肉眼とルーペ、及び遺体の触診等を併用しながら同定作業を実施した。なお、本調査は2002年9月11日から同月15日に行った。

(2) 調査結果と考察

A) 種名と部位(量)等について

19資料別に見い出された植物の種名は下記のとおりである。

①資料1 (GL-2.0m)

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* Scot.) -ブナ科…葉 (多量)

スタジイ (*Castanopsis sieboldii* Hatus.ex Yamaz.et Mash.) -ブナ科…葉 (多量)

カゴノキ (*Litsea orientalis* Chang) -クスノキ科…葉 (少量)

ナラガシワ (*Quercus aliena* Blume) -ブナ科…葉 (少量)

シリブカガシ (*Litocarpus edulis* Rehd.) -ブナ科…葉 (少量)

ホソバタバ (別称アオガシ) (*Macbilus japonica* Sieb.et Zucc.) -クスノキ科…葉 (少量)

②資料2 (GL-2.4m)

枝籜 (少量) のみで、葉はない。枝の形状と樹皮よりツブラジイかスタジイの可能性。

③資料3 (GL-2.4m)

資料2と同様。樹種も同様の可能性。

④資料4 (GL-2.6m)

ジャヤナギ (*Salix pierotii* Mig.) -ヤナギ科…葉 (少量)

ヤマガキ (*Diospyros kaki* Thunb. var. *sylvestris* Mak.) -カキノキ科…葉 (少量)

エノキ (*Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai) …葉 (少量)

⑤資料5 (GL-2.6m)

ツブラジイかスタジイ…葉は小片に破損 (少量)

⑥資料6 (GL-2.1m)

タバ (*Macbilus thunbergii* Sieb.et Zucc.) -クスノキ科かホソバタバ…葉は小片に破損 (多量)、枝籜 (少量) を含有。

⑦資料7 (GL-2.3m)

イチイガシ (*Quercus gilta* Blume) -ブナ科…葉 (少量)

コナラ (*Quercus serrata* Thunb.) -ブナ科…葉 (少量)

クスノキ (*Cinnamomum camphora* Presl) -クスノキ科…葉 (少量)

- シロダモ (*Neolitsea sericea* Koidz.) - クスノキ科…葉 (少量)
- ⑧資料8 (GL-2.1m)
シロダモ…葉 (少量)
ホソバタブ (新葉) …葉 (少量)
- ⑨資料9 (GL-2.2m)
ツブラジイ…葉 (多量)
スタジイ…葉 (少量)
- ⑩資料10 (GL-2.1m)
ホソバタブかシロダモの可能性が高いが⁵, 葉が小片に破損(多量)し, 疑問点が残る。
- ⑪資料11 (GL-2.6m)
ツブラジイ…葉 (少量)
ウラジロガシ (*Quercus salicina* Blume) - ブナ科…葉 (少量)
シラカシ (*Quercus myrsinaefolia* Blume) - ブナ科…葉 (少量)
- ⑫資料12 (GL-2.0m)
種不明…樹皮のない枝籜 (多量) で, 葉はない。
- ⑬資料13 (GL-不明)
種不明…資料12と同様。
- ⑭資料14 (GL-2.0m)
セキショウ (*Acorus gramineus* Sonland.) - サトイモ科…葉 (少量)
種不明…枝籜 (少量) のみで, 葉はない。
- ⑮資料15 (GL-2.0m)
コナラ (新葉) …葉は小片に破損 (多量)
ホソバタブ…葉は小片に破損 (少量), 未成熟果実 (少量)
カゴノキ…葉は小片に破損 (少量), 未成熟果実 (果皮のみ少量)
- ⑯資料16 (GL-2.4m)
種不明…枝籜 (少量) のみで, 葉はない。
- ⑰資料17 (GL-不明)
ジャヤナギの可能性…葉 (少量)
- ⑱資料18 (GL-2.1m)
ヤブニッケイ (*Cinnamomum japonicum* Sieb. et Zucc.) - クスノキ科…葉は小片に破損 (多量)
ホソバタブ…葉は小片に破損 (多量)
ウラジロガシ…葉は小片に破損 (多量)
ヤマヤナギ (*Salix sieboldiana* Blume)
ヤナギ科…葉は小片に破損 (多量)
- ⑳資料19 (GL-2.4m)
種不明…枝籜 (少量) のみで, 葉はない。

II 調査の内容

以上、資料1～19に同定された植物は、種不明のものと可能性を有するもの等を除くと、木本(樹木)18種、草本1種(セキショウのみ)、計19種である。科別に多く出土したものを順にあげると、ブナ科8種、クスノキ科6種、ヤナギ科2種、ニレ科1種、カキノキ科1種、サトイモ科1種となった。また葉の常・落葉性を見ると、常緑性が13種、落葉性は6種となり、常緑性の多い結果がでた。

今回の調査結果を1993年に行われた第24次調査の結果と比べたところでは、ほとんど重複した樹種構成であったが、今回新たに加わったものはスタジイ、ナラガシワ、ウラジロガシ、シラカシ、エノキ、ヤマヤナギなどの二次林の主要樹種に加えて極相林の代表樹種のイチイガシが存在したことは、二次林ばかりでなく、極相林からも枝篠が集められたと見ることもできる。ここで現在の二次林で最も普遍的に多く出現するヤブツバキやアラカシ、アカマツ、タケ類が今回および第24次調査においても全く出土しなかったことは、大いに興味が持たれる点である。これらの樹種が敷粗朶工法に適しない樹種なのか、それとも他の目的等のために使用されていないのか(例えばヤブツバキの種子からは精油を採取、アラカシの堅果(ドングリ)やタケ類の筍は食糧にされるので、伐らずに保護した可能性もある。)、今後の検討事項となろう。次に部位については、葉付きの枝篠を敷き詰めており、枝の切り口直径が最大では3cm程度、それ以上の大きさの枝篠は見られなかった。また落葉樹でも必ず葉が着いた時期のものを用いている。唯一の草本種セキショウは第24次でも出土したもので、この植物の葉は常緑性でしかも引っ張り応力に対して強靱な性質を持つことから、敷き粗朶に適したと考えられる。

B) 植物遺体の季節性について

これについては第24次調査結果でも触れたが、今回もホソバタブとコナラの新葉(若葉)が出土したことに加え、若い未成熟な果実もホソバタブとカゴノキに存在したことから、晩春から夏にかけての時期(4月下旬～6月下旬頃)に敷き込まれたことが裏付けられたと考えてよい。

C) 出土植物の生育環境等の生態について

同定された植物19種は、いずれも本調査地近傍の丘陵低地から山地にかけて分布する暖温帯性常緑広葉樹林(照葉樹林)の二次林構成種の一般的なものが主体を占めている。ただしイチイガシのみは低地適潤地の極相樹種であることから、山地ではなくどこか近傍の平地から採られたものであろう。また、草本種のセキショウについては、平地から山地の小河川低流域に普通に見られるものである。要するに現代と同様な人為的攪乱を受けて成立した薪炭林(雑木林)などを含む常緑広葉樹二次林において一般的に見られる普通種を用いており、水域造成当時は、このような森林植生が大宰府周辺に汎く分布していたことが想像できる。すなわち大宰府に生きる人々の生活を支えていた森林から採取された樹木の葉と枝篠といつてよいだろう。

引用文献

井上晋:特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体の同定について 『大宰府史跡平成7年度発掘調査概報』 p144～146 1995

9 水城跡第35次調査 (出土粗朶 年代測定)

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水城跡は、白村江の戦いで敗れた翌年(664年)に、大宰府政庁の北西に築かれた。これまでの発掘調査により、土塁、木柱、溝、竪立柱建物跡、井戸等の遺構が検出されている。第35次調査区では、土塁と直交するように枝を敷き並べた粗朶層が11面検出されている。

今回の分析調査では、これらの粗朶層から採取された木材の年代測定を行い、土塁の構築年代に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて実施し、周辺の古植生や木材利用に関する資料を得る。

(1) 試料

試料は、粗朶層から採取された木材10点である。坪掘2第3層(青灰粘)と坪掘2粗朶4層の2試料は各1点であったが、その他の試料は3~7点の木材が含まれており、合計32点が認められた。複数の木材が認められた試料は、それぞれ試料毎に枝番号を付した。年代測定は、発掘調査結果や試料の状況から、GL-2.0m粗朶層、坪掘1中層第2層(暗灰粘)、坪掘2第2層の木材を選択した。それぞれ3~5点の木材があるが、外観で樹種が異なる可能性があったため、1本のみを使用することとした。樹種同定は全点について行う。

(2) 方法

1) 放射性炭素年代測定

測定は、 β 線計数法で行い、放射性炭素の半減期は、LIBBYの5570年を使用する。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所が行った。

2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果をTab.16に示す。年代測定値は、 $1420 \pm 110BP$ ~ $1850 \pm 100BP$ で、補正年代では $1380 \pm 110BP$ ~ $1800 \pm 100BP$ であった。また、これらの木材の樹種は、全て広葉樹で、12種類(コナラ属アカガシ亜属 ツブラジイ・スタジイ・シキミ・ヤブツバキ・サカキ・ヒサカキ・サクラ属・アワブキ属・シャシャンボ・ガマズミ属・タニウツギ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中層~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複

II 調査の内容

合放射組織とがある。

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、孔圍部は3~4列、孔圍外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のもの集合~複合放射組織とがある。

スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、孔圍部は3~4列、孔圍外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔であるが、小道管には1~6段前後の階段穿孔が現れることがある。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形、単独または2~4個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性II~I型、1~2細胞幅、1~20細胞高。

ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形~角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性II~I型、1~2細胞幅、1~20細胞高で、時に上下に連結する。放射組織には結晶細胞が認められる。

サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2~3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性III~II型、1~4細胞幅、1~40細胞高。

サクラ属 (*Prunus*)バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が複合し、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~3細胞幅、1~30細胞高。

アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2~6個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5前後で少ない。壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で、異性II型、1~3細胞幅、1~50細胞高。

シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在し、道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性II型、単列で8細胞高前後のもの5~7細胞幅、30~60細胞高のものがある。放射組織には精細胞が認められる。

ガマズミ属 (*Viburnum*) スイカズラ科

散孔材で、道管はほぼ単独、時に2個が接線方向または放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は異性II型、1~4細胞幅、1~40細胞高。

タニウツギ属 (*Weigela*) スイカズラ科

散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在し、晩材部に向かってやや径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性I型、1~2細胞幅、1~20細胞高。

出土位置・層位	点数	番号	樹種	年代	$\delta 13C$	補正年代	Code No.
ATr 青灰色粘土	4	1	アブクイ				
		2	ササ				
		3	スズクイ				
		4	ササ				
ATr CL-2.4m 粗朶層	7	1	アブクイ				
		2	アブクイ				
		3	コナツグミがたつ朶属				
		4	ヒササ				
		5	ササ				
		6	ササ				
		7	ササ				
ATr CL-2.0m 粗朶層	5	1	コナツグミがたつ朶属				
		2	アブクイ				
		3	シロツグミ				
		4	コナツグミがたつ朶属	1420±110BP	-27.2	1380±110BP	IAA-203
		5	アブクイ				
ATr 坪層1 中層 (噴灰粘)	3	1	ヒササ				
		2	ガマズミ属				
		3	ガマズミ属				
ATr 坪層1 中層第2層 (噴灰粘)	3	1	ササ				
		2	スズクイ	1700±100BP	-31.1	1600±100BP	IAA-204
		3	ヒササ				
	1	スズクイ属					
ATr 坪層2 第3層	3	1	ヒササ	1850±100BP	-27.8	1800±100BP	IAA-205
		2	シロツグミ				
		3	アブクイ				
ATr 坪層2 中層 (青灰粘)	3	1	スズクイ				
		2	アブクイ				
		3	ササ				
ATr 坪層2 粗朶サンプル	1		ササ				
ATr 坪層2 粗朶4層	3	1	アブクイ				
		2	ササ				
		3	スズクイ				

1)年代測定は、 β 線計測法による。

2)年代測定は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta 13C$ の値を基に同位体効果による年代誤差の補正を行った値。

3)放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

Tab.16 放射性炭素年代測定及び樹種同定表

II 調査の内容

(4) 考察

1) 粗朶層の年代

粗朶層は、GL-2.0m~3.6mの間に合計11層認められ、それぞれが粗朶を敷いて粘土を10~20cm程入れたものが交互に繰り返されている。木材は、太いものでも3~4cm程度で、ほとんどは径1cm程の小径の枝である。

各粗朶層から出土した木材の年代は、GL-2.0mで1420BP（補正年代1380BP）、坪掘1中層第2層で1700BP（補正年代1600BP）、坪掘2第2層で1850BP（補正年代1800BP）であった。これらの年代測定値の補正年代を用いて、Stuiver et al. (1998)による暦年較正曲線で暦年代を求めた。その結果、GL-2.0m（補正年代1380BP）は、中央値がAD660で誤差範囲を含めるとAD600~770となる。坪掘1中層第2層（補正年代1600BP）は、中央値がAD430で誤差範囲を含めるとAD345~595となる。坪掘2第2層（補正年代1800BP）は、中央値がAD240で、誤差範囲を含めるとAD85~380であった。

記録では、水城が構築されたのがAD664である。GL-2.0mの暦年代は、構築年代とほぼ一致する。このことから、最上位の粗朶層が水城構築とほぼ同時期であることが推定される。土累の直下から検出されていることを考慮すると、水城構築直前に使用された可能性がある。一方、坪掘1中層第2層と坪掘2第2層は、水城構築年代よりも300~400年程古い年代を示している。このことから、水城構築以前の300年~400年間に粗朶層が作られていたことが推定される。しかし、各1点の測定であるため、今後さらに各層の年代に関する資料を増やし、相互に比較を行うことで、各層の年代を検討したい。

2) 粗朶層の木材利用

出土した木材は、いずれも小枝状であり、周辺に生育していた樹木の枝や流水等が利用されたと考えられる。これらの木材には、合計12種類の木材が認められた。結果を見る限りでは、層による種類構成の違いは認められない。

確認された種類のうち、常緑広葉樹のアカガシ亜属、ツブラジイ、スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主構成種である。また、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ、シャシャンボもアカガシ亜属等と共に生育する。種類の詳細は不明であるが、サクラ属、アワビキ属、ガマズミ属、タニウツギ属にも暖温帯常緑広葉樹林やその二次林に生育する種類が含まれる。この結果から、水城周辺には、アカガシ亜属、ツブラジイ、スダジイ等の常緑広葉樹を主とする植生が見られたと考えられる。

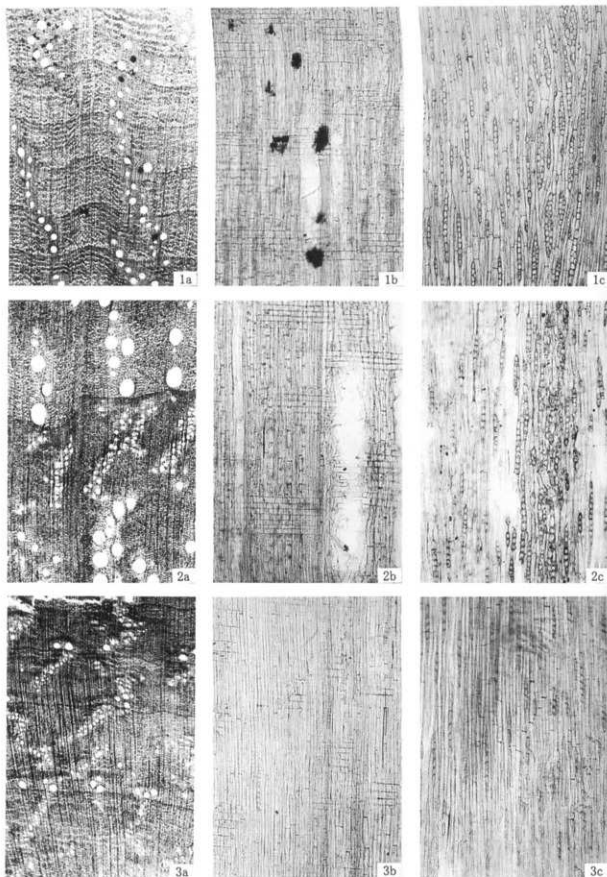
井上(1996)は、水城基底部から得られた、暖温帯常緑広葉樹林の二次林構成種を主とする植物遺体群集を報告している。また、比較的近い大宰府史跡では、今回よりもやや新しい8世紀~9世紀の花粉分析結果が得られており、アカガシ亜属やシイノキ属を主とした組成が確認されている（ハリノ・サーヴェイ株式会社, 1997）。今回の結果は、これらの調査例とも一致している。これらの結果から、周囲では主として常緑広葉樹の木材の入手が容易な環境にあり、粗朶層の種類構成もこれらの植生環境を反映したことが推定される。

今後、粗朶層の粘土や粗朶層下部の青灰色シルト層の花粉分析等も行い、粗朶層構築以前から構築後の周辺植生やその変化についても検討したい。

引用文献

- 井上 晋 (1996) 特別史跡「水城」基底部より発掘された植物遺体の同定について「大宰府史跡平成7年度発掘調査概報」, p.144-146, 九州歴史資料館
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1997) 大宰府史跡第170次調査の自然科学分析「太宰府の文化財第36集 大宰府史跡 学業院中学校整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.121-126, 太宰府市教育委員会.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon*, 40, p.1041-1083.

II 調査の内容



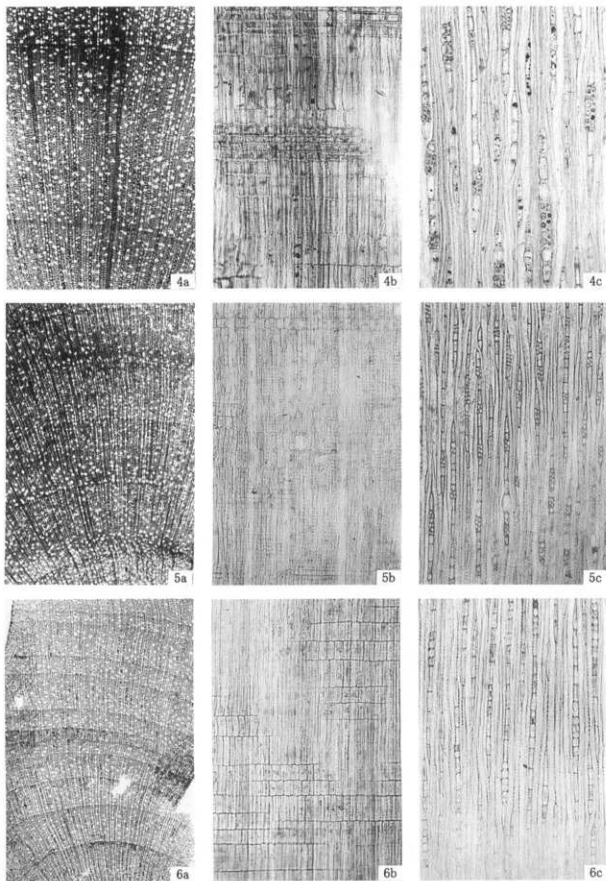
144

1. コナラ属アカガシ亜属 (GL-2.4mソダ層 No.3)
 2. ツブラジイ (GL-2.4mソダ層 No.2)
 3. スダジイ (青灰色粘土 No.3)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200μm: a
200μm: b, c

Fig.104 木材 (I)

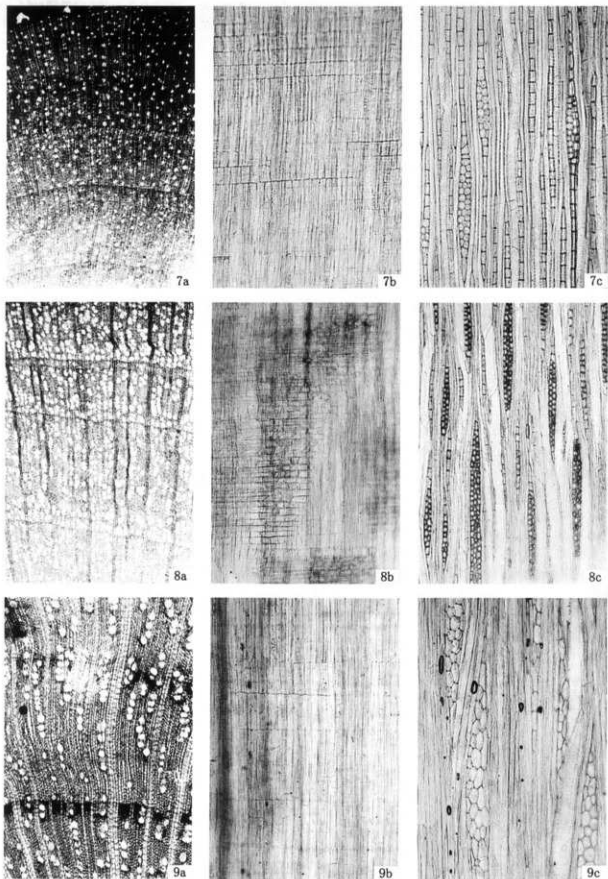
9. 出土粗朶年代測定



4. シキミ (青灰色粘土 No.2)
 5. ヤブツバキ (坪堀2 第2層 No.3)
 6. サカキ (青灰色粘土 No.4)
 a: 木口, b: 板目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c 145

Fig.105 木材 (2)



146

7. ヒサカキ (GL-2.4mソダ層 No.4)

8. サクラ属 (GL-2.4mソダ層 No.1)

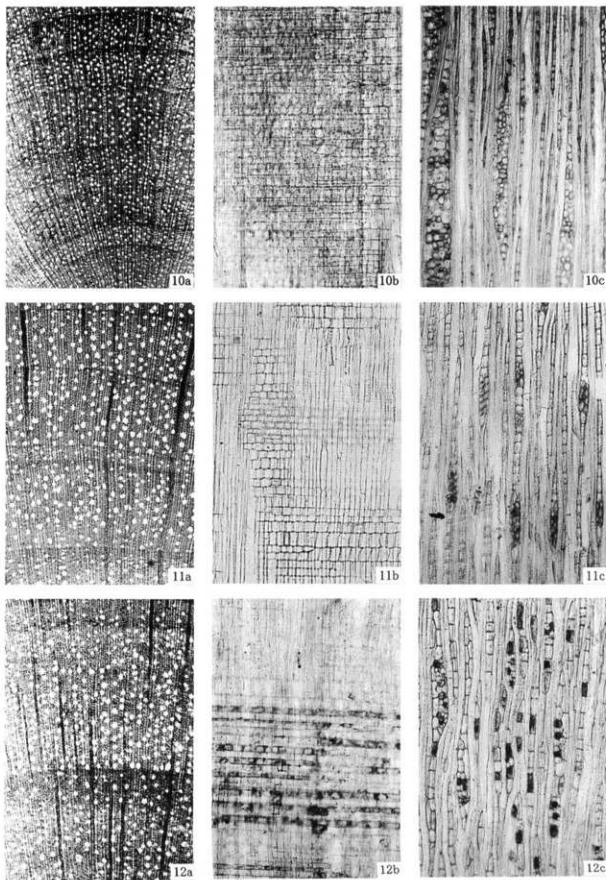
9. アワブキ属 (GL-2mソダ層 No.2)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200μm : a

200μm : b, c

Fig.106 木材 (3)



10. シャシャンボ (GL-2mソダ層 No.3)

11. ガズミ属 (坪廻1 中層 No.2)

12. タニウツギ属 (坪廻2 第3層)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200μm: a
200μm: b, c 147

Fig.107 木材 (4)

10 水城跡第35次調査（電気探査）

九州大学大学院地球資源システム工学部門 牛島恵輔・水永秀樹

(1) 緒言

福岡県太宰府市の水城跡は、その一部が国の特別史跡にも指定されている、全長1,200m、幅80m、高さ13mの巨大な土塁で、天智3年（西暦664年）に大宰府政庁を守る防塁として築造されたと考えられている。この水城跡の内部には、土塁の内側と外側をつなぐ木樋と呼ばれる導水管（ひのき製）が適当な間隔で数箇所埋設されていたと推定されている。これまでの発掘作業により、東門跡（旧国道3号線側）付近と西門跡（JR鹿児島本線側）付近で木樋が確認されているが、これらの他にも未発見の木樋が数箇所埋設されていることが期待されている。Fig.108に、水城跡の平面図および推定断面図を示す。

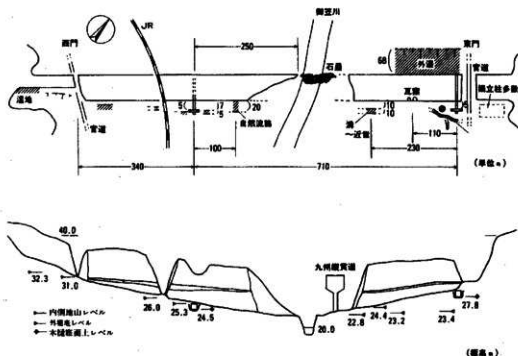


Fig.108 水城跡の平面図（上図）及び推定断面図（下図）

九州大学の物理探査学研究室では、福岡県立九州歴史資料館の依頼により、水城跡の地下に埋設された木樋の探査を目的とした遺跡調査を数次にわたり実施した。本報告書では、平成7年と平成13年に実施した遺跡探査の結果について述べる。

(2) 第1回目の調査（平成7年）

平成7年度は、第一次（8月8日）、第二次（8月10日）、第三次（10月11日）の合計3回にわたって電気探査による調査を実施した（牛島1995）。本報告書では、東門跡を含む測線上の調査（第一次と第二次）の概要を述べる。Fig.109に、本調査を実施した水城跡の調査地域の写真を示す。

第一次調査では、先ず木樋の存在が既に確認されている東門跡付近において種々の電極間隔によるウェンナー法による水平探査を試験的に実施した。その結果、本地域においては探査対

象（木樋）を検出するためのウェンナー配置の最速電極間隔は2mであるとの結論に達した。そこで、東門側の水城跡に沿って、電極間隔を2mに固定し、移動ピッチを1mとしてウェンナー配置による水平探査を測線長280mにわたって実施した。その結果、木樋存在の必要条件である低比抵抗体の存在を示唆する比抵抗異常部が4箇所の地点で検出された。



Fig.109 水城跡の調査地域

Fig.110に、この調査で得られた見掛比抵抗プロファイルの一部を示す。これらの異常部の中で既存の発掘調査などの資料等も検討して、見掛比抵抗曲線の形状及び分布状況から2つの異常部に着目した。これらの異常部について総合的に解釈した結果、距離程82mの低比抵抗異常部（C1異常部）が木樋存在の可能性が最も高く、距離程153mの中高比抵抗異常部（C2異常部）については過去に発掘された瓦窯跡の位置と一致しているため、局所的な瓦窯跡が比抵抗異常体として捉えられた可能性が高いと判断した。

第二次調査では、木樋の存在が推定されるC1異常部を中心として、異常部の深度方向の比抵抗分布を得る目的で、シュランベルジャー法による垂直探査を実施した。探査データを2次元逆解析した結果、水平探査で検出された異常部の3～5m深度に低比抵抗異常体が存在することがわかった。

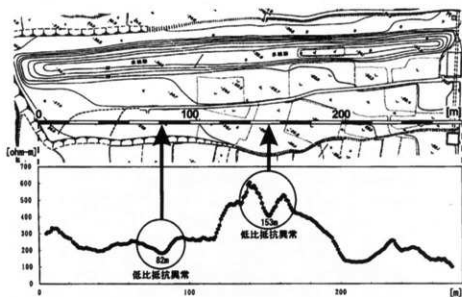


Fig.110 東門付近の水平探査曲線（ウェンナー法：a=2m）

II 調査の内容

(3) 第2回目の調査（平成13年）

福岡県は、平成13年の7月下旬から上記の比抵抗異常部について、発掘調査を実施することを決定した。九州大学の物理探査学研究室では、発掘調査の中心となる九州歴史資料館からの依頼により、地中レーダ探査と電気探査による第2回目の調査（7月18日）を発掘作業に先立ち実施した。調査地域は、第1回目の調査で検出された木樋と推定されたC1異常部と瓦窯跡と推定されたC2異常部付近である。今回のフィールド調査は、以下の手順で実施した。

まず最初に、木樋の存在が推定されているC1異常部で周波数200MHzのアンテナを用いた地中レーダ探査を実施した。その結果、前日の大雨の影響で土壌の含水率が大きく、比抵抗値が小さいため可探深度が2 m程度となり、木樋の存在を示す顕著な反射面を検出できなかった。Fig.111に今回の調査に使用した地中レーダの測定装置を、Fig.112に地中レーダ探査の調査風景を示す。



Fig.111 地中レーダの測定装置



Fig.112 地中レーダ探査の調査風景

次に可探深度が大きい100MHzのアンテナを用いて、再度同じ測線で地中レーダ探査を実施した。その結果、Fig.113に示すような調査範囲の距離程4 m～12 m付近の深度1.5 m～2.5 m付近で、明瞭な反射面の異常部が検出された。このような明瞭な反射面は、地下の土質の変化または構造物の存在を示唆するものであり、この範囲に何らかの異常体（木樋？）の存在が推定される。

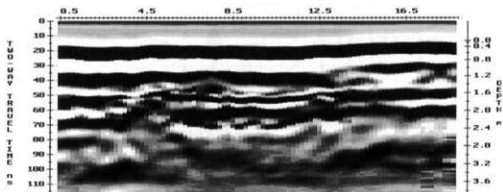


Fig.113 C1異常部の地中レーダプロフィール

また、瓦窯跡の可能性が推定されているC2異常部でも同様に、100MHzのアンテナを用いた地中レーダー探査を実施した。その結果、Fig.114に示すように、調査地域の中央部の距離程8.5m付近の深度2m～2.5m付近に、小規模ではあるが強い反射面が検出された。したがって、瓦窯跡はこの地点に存在するものと推定される。

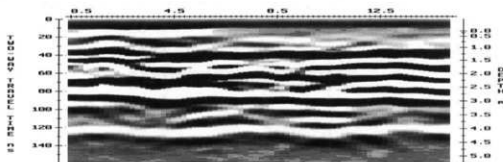


Fig.114 C2異常部の地中レーダープロフィール

さらに、前述のC1異常部の木樋の3次元分布を把握するため、電極間隔を1m～5mと種々に変化させながらウェンナー法による水平探査を実施した。その結果、Fig.115に示すように木樋が埋設されていると推定される中心部は、周辺地層と比較して大規模な低比抵抗帯を示すことがわかった。また、この低比抵抗異常帯は平成7年度に実施したシュランベルジャー法の垂直探査の2次元逆解析(牛島1995)で得られた低比抵抗異常部の位置ともほぼ一致している。

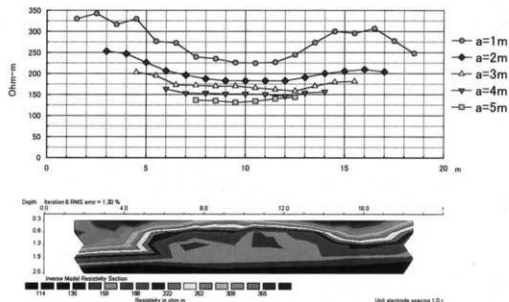


Fig.115 C1異常部付近のウェンナー法による見掛比抵抗曲線(上図)と2次元インバージョンにより計算した比抵抗断面図(下図)

II 調査の内容

(4) トレンチ調査後の探査結果の検証

地中レーダ探査と電気探査によって木樋の可能性が高いと診断したC1異常部を中心として、トレンチ調査が行われた。しかし、遺跡探査後に実施されたトレンチ調査の結果、地中レーダや電気探査で明瞭な異常域が検出されたにも関わらず、木樋は確認できなかった。しかしながら、これらの物理探査により検出されたC1異常部では、古代の土木技術である敷粗朶工法跡が地下深部まで分布していることが確認された。Fig.116に、発掘された敷粗朶工法跡の写真を示す。また、瓦溜跡と推定したC2異常部では、掘立柱建物跡が見つかり、瓦工房跡ではないかと推定されている。Fig.117に、瓦工房跡の発掘現場の写真を示す。



Fig.116 敷粗朶工法跡（粗朶の一部が炭化）



Fig.117 瓦工房跡の発掘現場

(5) 結言

福岡県太宰府市所在の水城跡における平成7年度と平成13年度の2回の遺跡探査により、以下のことがわかった。平成7年度に検出された木樋と推定される比抵抗異常部は、今回(平成13年度)の電気探査においても再確認することができた。また、今回新たに実施した地中レーダ探査の結果、電気探査の低比抵抗異常域と対応する地点の深度1.5m～2.5mで明瞭な反射面の異常が検出された。しかしながら、地中レーダ探査後に実施されたトレンチ調査では、推定深度の範囲では木樋の存在は確認できなかった。このように、今回のトレンチによる発掘調査では木樋の存在は確認できなかったが、電気探査および地中レーダ探査により地下深部の異常体を検出することには成功した。したがって、今後は遺跡発掘前に電気探査や地中レーダ等の物理探査を用いれば、遺跡や遺構が存在しない地点の発掘調査を未然に防止でき、効率的な発掘調査が可能となるため、非破壊検査法である物理探査の利用価値は高いと考えられる。

本年度は、昨年調査した測線に平行となるような複数の測線を設け、地中レーダ探査法や電気探査法を併用して3次元調査を実施したいと考えている。

謝辞

水城跡での遺跡調査の機会を与えて頂いた、九州歴史資料館調査課の横田賢次郎課長をはじめ関係各位に感謝する。

参考文献

牛島忠輔 (1995) : 水城土塁中の木樋の電気探査 大宰府史跡平成7年度発掘調査概報 147-160.

PLATES

(1) 第186次調査区北半全
景 (東から)



(2) 第186次調査区北半全
景 (南から)



(3) 第186次調査区南半全
景 (東から)





(1) 第186次調査区南半全
景 (北から)



(2) SB4550~4552
(南から)

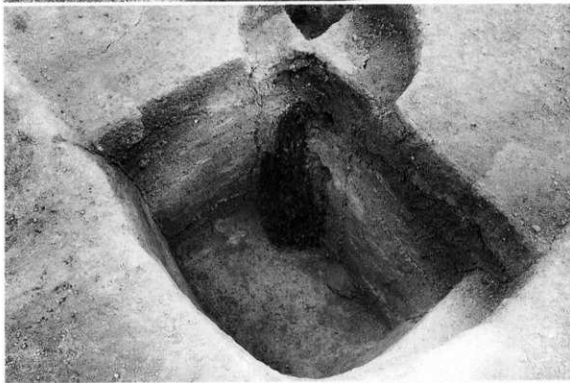


(3) SB4550~4552断割後
(南から)

(1) SB4550A・B柱穴切
合状況 (南東から)



(2) SB4550B柱根
(北西から)

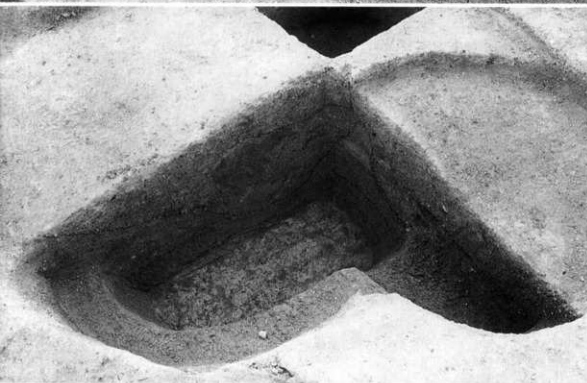


(3) SB4550B柱根 (西から)





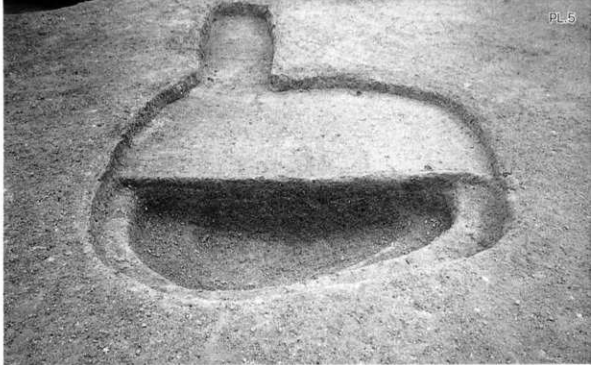
(1) SB4551柱穴
(北東から)



(2) SB4551・4552切合
状況 (北東から)



(3) SB4551・4552
切合状況 (東から)



(1) SB4555柱穴 (西から)



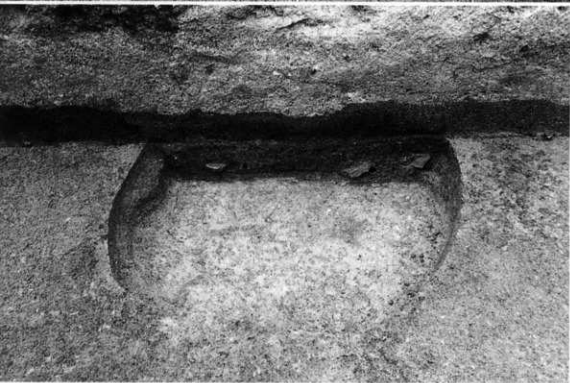
(2) SB4553・SK4547付近
(北から)



(3) SB4553・SD4542付近
(西から)



(1) SK4545
(西南から)



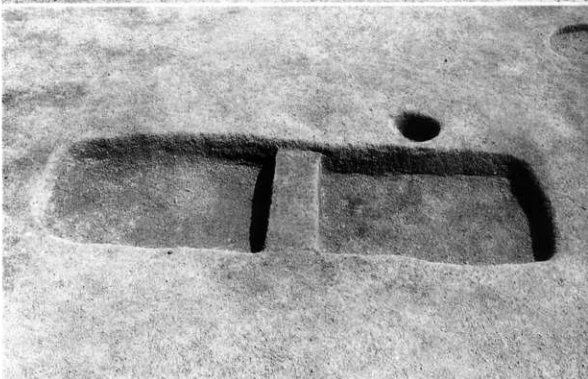
(2) SK4545完
掘後
(南から)



(3) SK4546
(南から)



(1) SK4546完掘後
(東から)



(2) SX4548
(西から)



(3) SX4549
(西から)



(1) SD4542 (東から)



(2) SD4542東端断面
(西から)



(3) SD4542中央断面
(西から)



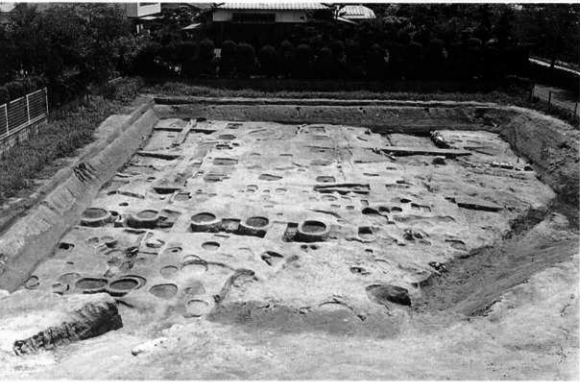
第187次
調査区全景
(南上空から)



第187次
東半部全景
(空中写真)



(1) 第187次西半部
全景 (東から)



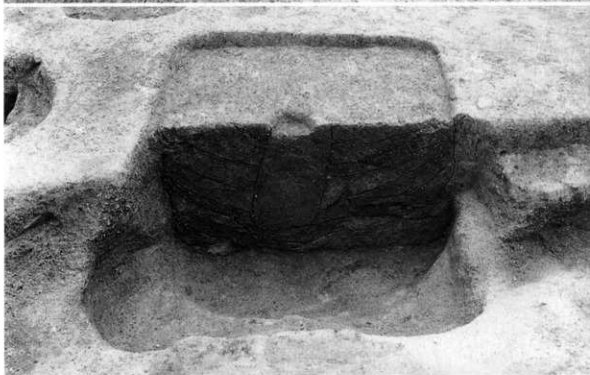
(2) 第187次東半部
全景 (西から)



(3) SB4560
(西から)



(1) SB4561柱穴
(北から)



(2) SB4561柱穴
(北から)



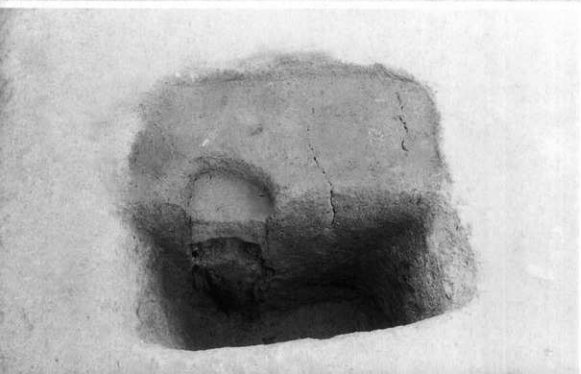
(3) SB4561柱穴
(北から)



(1) SB4560柱穴上層
器杯出土状況
(南から)

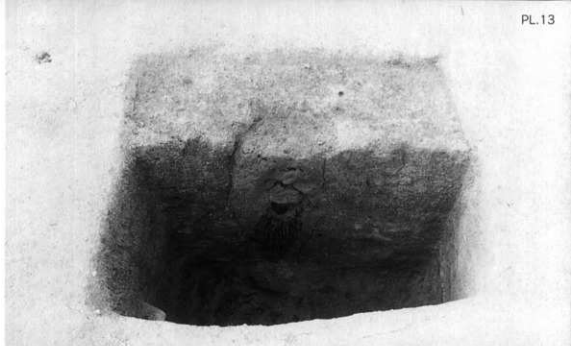


(2) 同上完掘後
(南から)

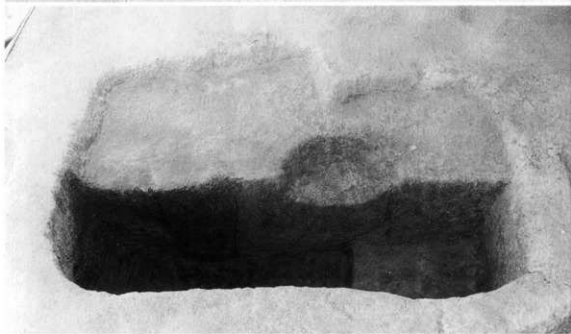


(3) SB4560柱穴
(南から)

(1) SB4560柱穴
(南から)



(2) SB4560・4562
切合状況(北から)



(3) SB3815・4563
(東から)





(1) SB3815
(南から)



(2) SB3815柱穴
(東から)



(3) SB3815柱穴
(東から)

(1) SB3815柱根
検出状況 (東から)



(2) SB3815柱穴
(東から)



(3) SB4561柱穴
(北から)





(1) SB4563柱穴
(東から)



(2) SB4563柱穴
(東から)



(3) SK4573・4574
(東から)

(1) SK4573
(南西から)



(2) SD4570・4571
SB4564 (南から)



(3) SD4570東半部
(西から)





(1) SD4570南岸石橋
(北から)



(2) SD4570北岸石橋
(南から)

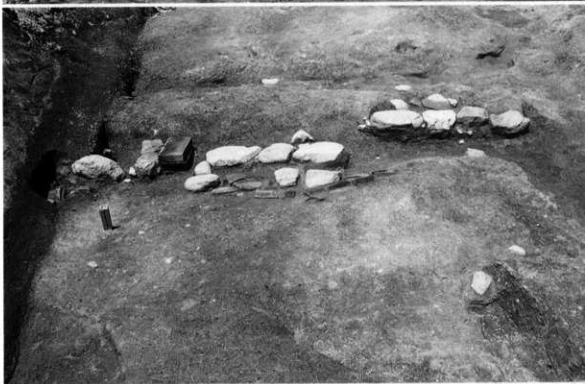


(3) SD4570東端
断面 (西から)

(1) SD4571・4572
(南から)



(2) SD4571・4572
(東から)



(3) SD4566西端
(東から)





(1) SD4566中央部
断面 (西から)



(2) SD4569南半断
面 (南から)



(3) SD4569北半断
面 (北から)

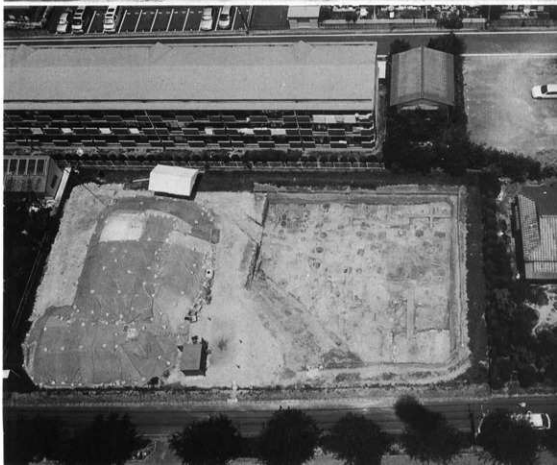
(1) SD4566西端部
(南から)



(2) SX4565 (南から)



(3) 第187次調査区
全景 (空中写真)





(1) 水城第33次調査区
全景 (東から)



(2) 水城第33次P-1区
西端部 (西から)



(3) 水城第33次P-1区
西端部 (南西から)

(1) 水城第33次P-1区
中央部 (北から)



(2) 水城第33次P-1区
東端部 (北から)



(3) 水城第33次P-2区
(西から)





(1) 水城第33次P-2区
(東から)



(2) 水城第33次P-3区
(北から)



(3) 水城第33次P-3区
(南から)



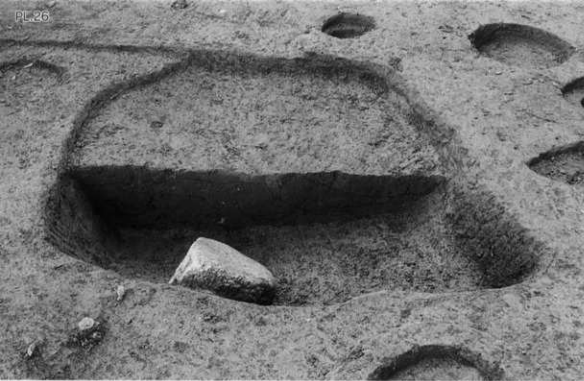
(1) SB141 (北から)



(2) SB141 (西から)



(3) SK153 (南から)



(1) SK151
(東から)



(2) SX148
(西から)



(3) SX149
(北から)

(1) SD161・162
切合状況
(東から)



(2) SD170
(南から)

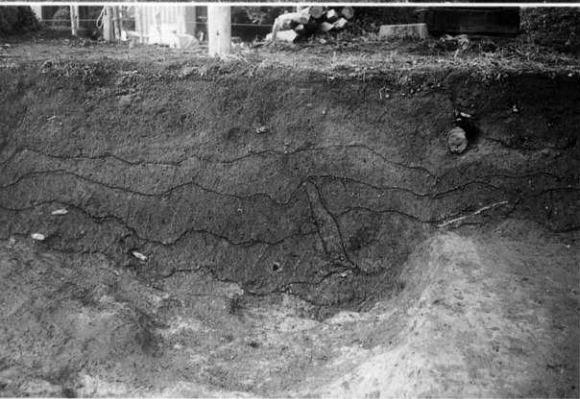


(3) SD168・169
P-2区東端
(西から)





(1) SD168・169
P-3区西端
(東から)



(2) SD169断面
(東から)



(3) SX164段落
P-1区西南隅
(東から)

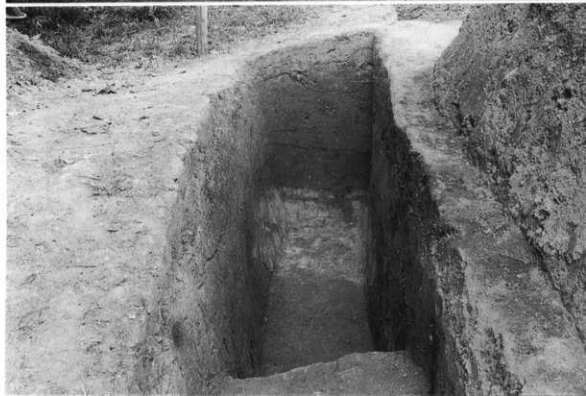
(1) SD160断面
(西から)

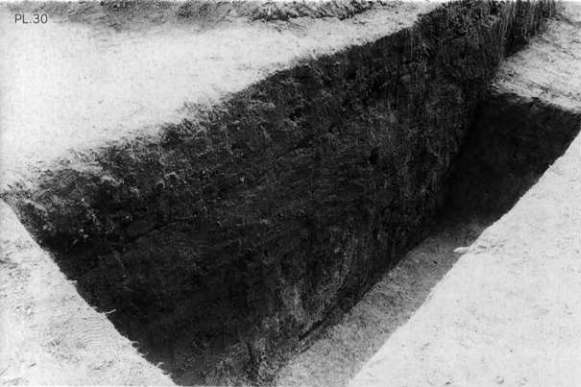


(2) Tr.12東壁
段落状況
(北西から)

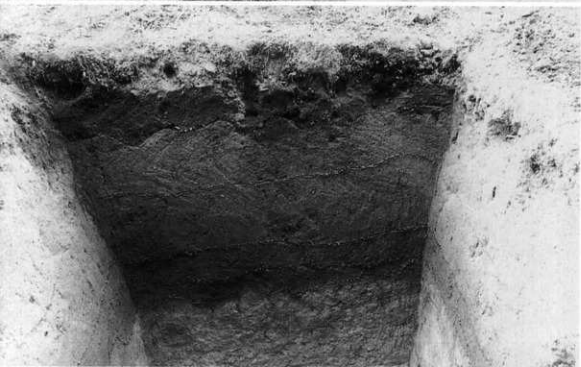


(3) 木樋掘方
Tr.13
(西から)





(1) 木槨掘方
Tr.13 (北から)



(2) 木槨掘方
Tr.8南壁
(北から)



(3) 木槨掘方
Tr.8西壁
(東から)

(1) 木樋掘方
Tr.8西壁埋土
(東から)



(2) 木樋掘方
Tr.8西壁埋土
(東から)



(3) 木樋掘方
Tr.14南壁
(北から)





(1) 木樋掘方 Tr.14 (西から)



(2) 木樋掘方 Tr.15 (白線間が埋方埋土) (北東から)

(1) 土塁南半断面
Tr. 10
(南東から)

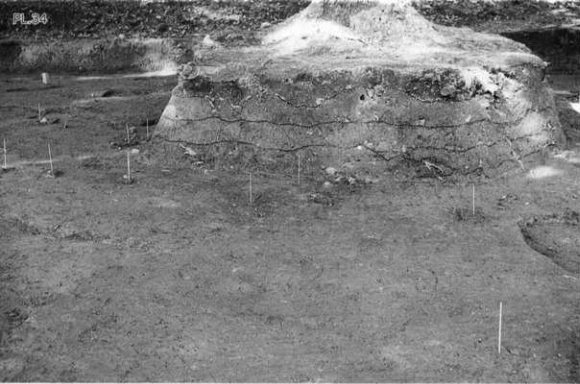


(2) 土塁盛土
Tr. 10西壁
(東から)



(3) 土塁盛土
Tr. 10東壁
(南東から)





(1) 石器・縄文土器
出土状況
(SI159上面)
(南から)



(2) 縄文竪穴住居跡
(SI159) (南から)



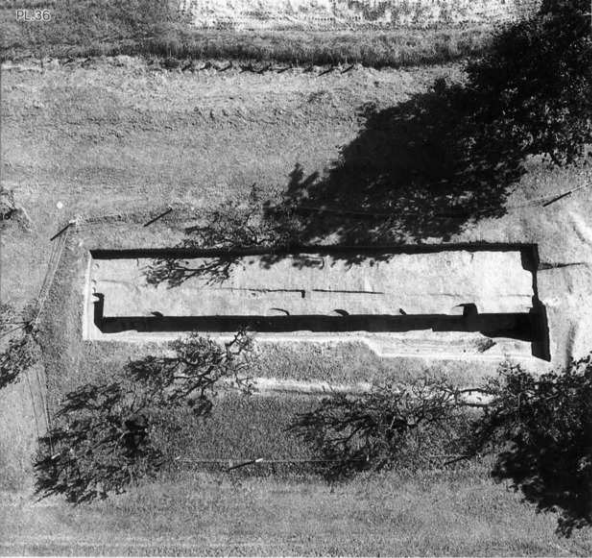
(3) ローム層深掘り
状況 (西から)



(1) 水城第35次
調査区全景
(空中写真)
(北東から)



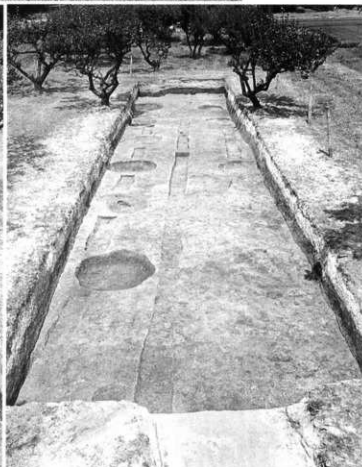
(2) 同上
(空中写真)
(南から)



(1) A区全景
(北東上空から)



(2) A区全景 (北東から)

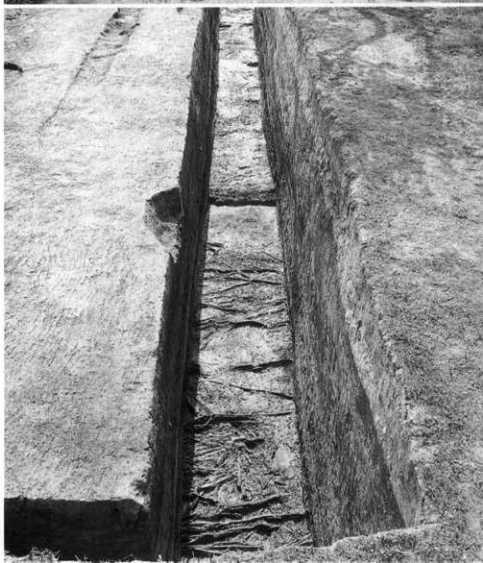


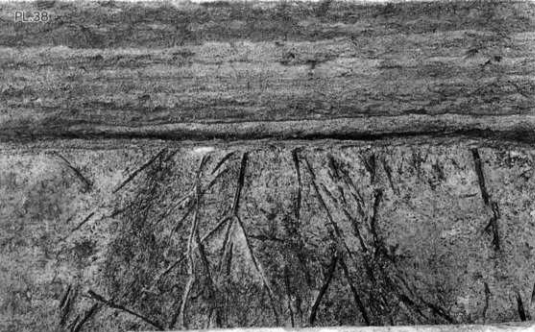
(3) A区全景 (南西から)

(1) A区翻下げ状況
(南西から)



(2) 敷根菜検出状況
(北東から)





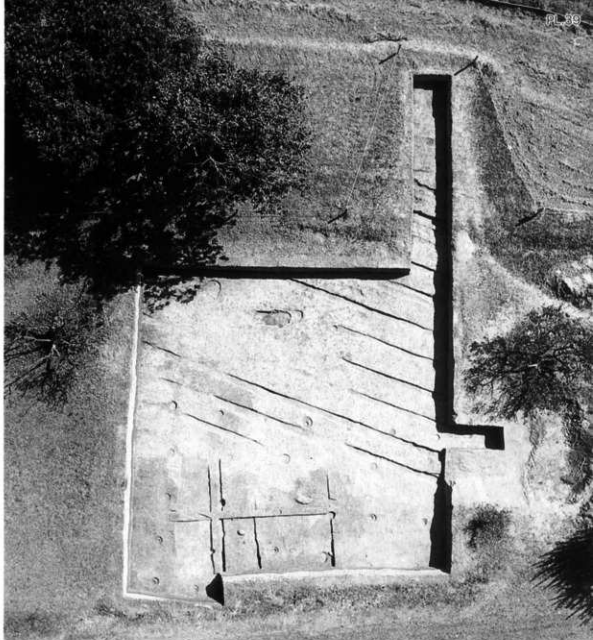
(1) 敷粗栄検出状況近景
(南東から)



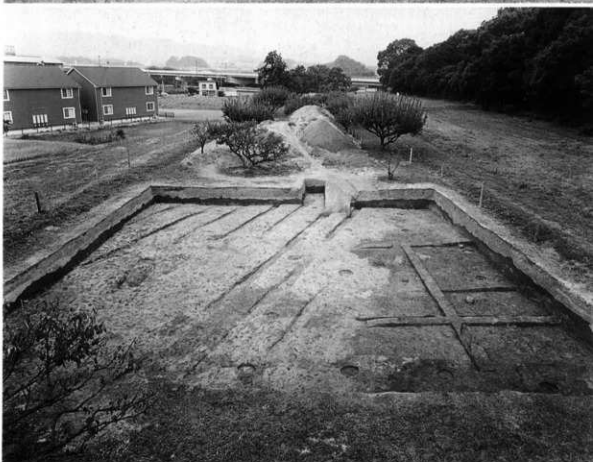
(2) 同上



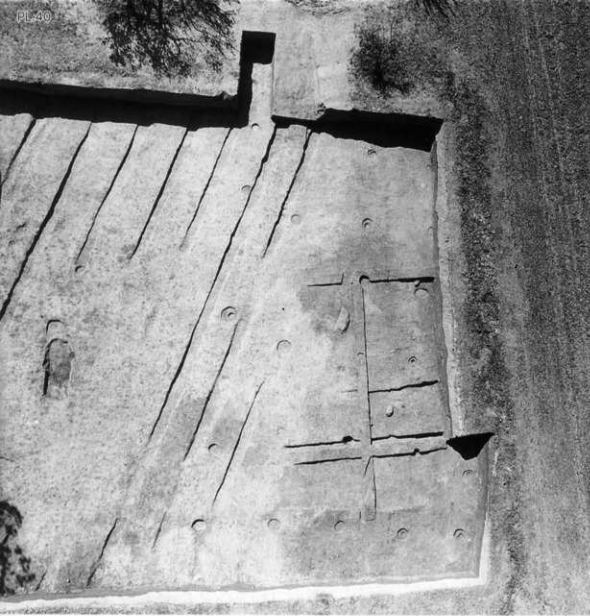
(3) 同上



(1) B区全景
(空中写真)
(北東上空から)



(2) B区全景
(南東から)



(1) SB173全景
(空中写真)
(北東から)



(2) SB173全景
(南西から)



(1) SB173全景
(南西から)



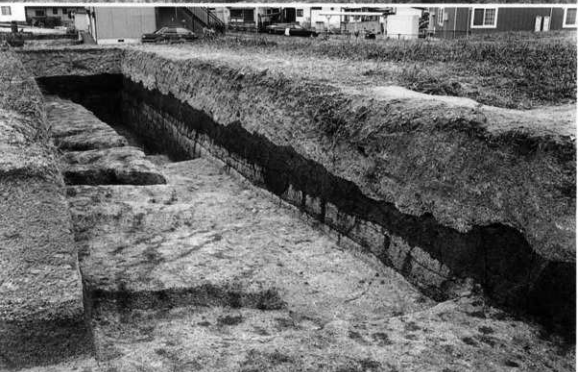
(2) B区北壁土層
(南西から)



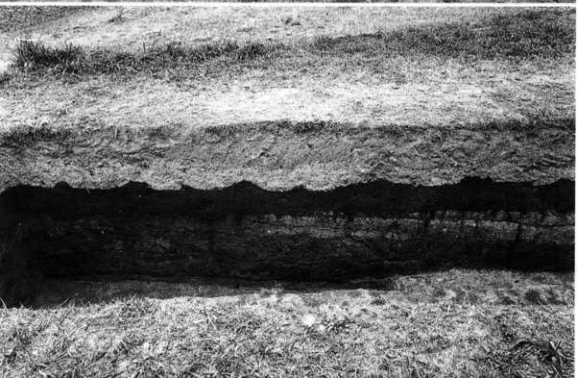
(3) B区北壁土層
細部 (南西から)



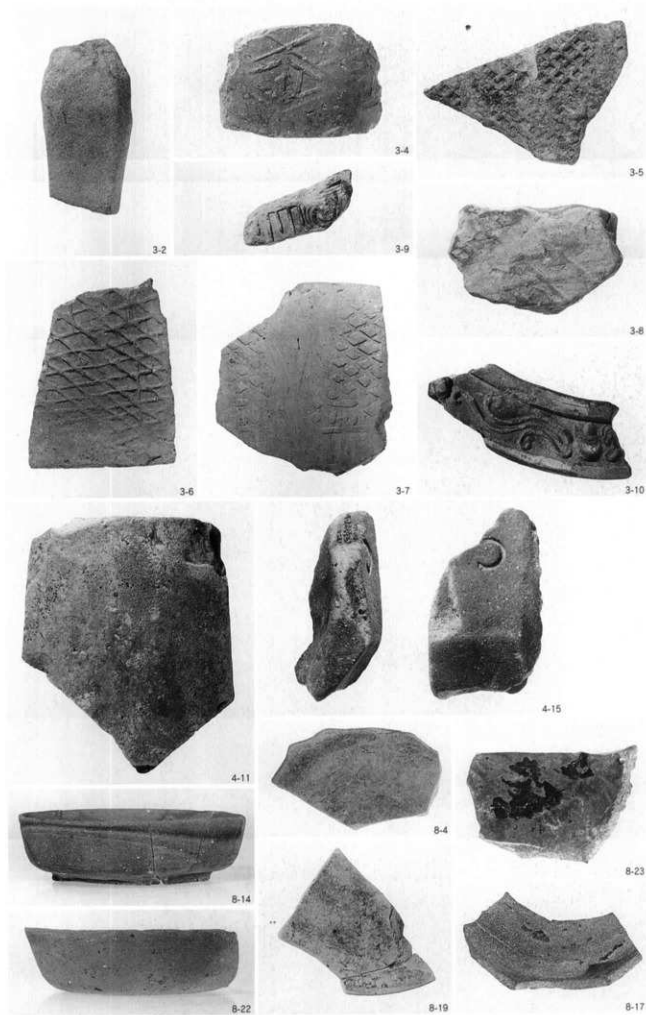
(1) B区北壁土層
(南東から)

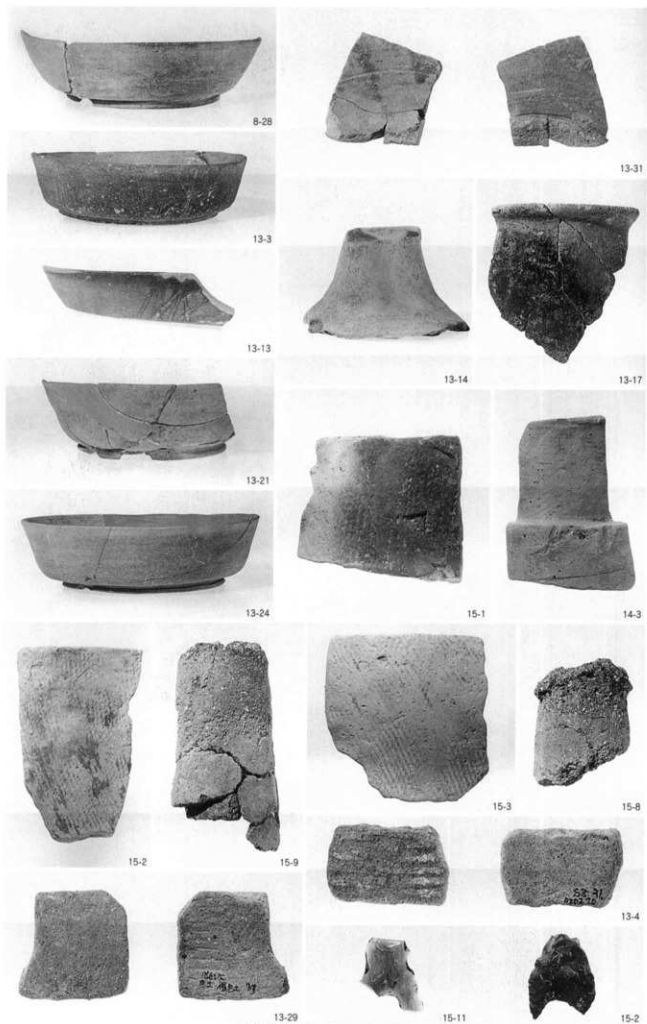


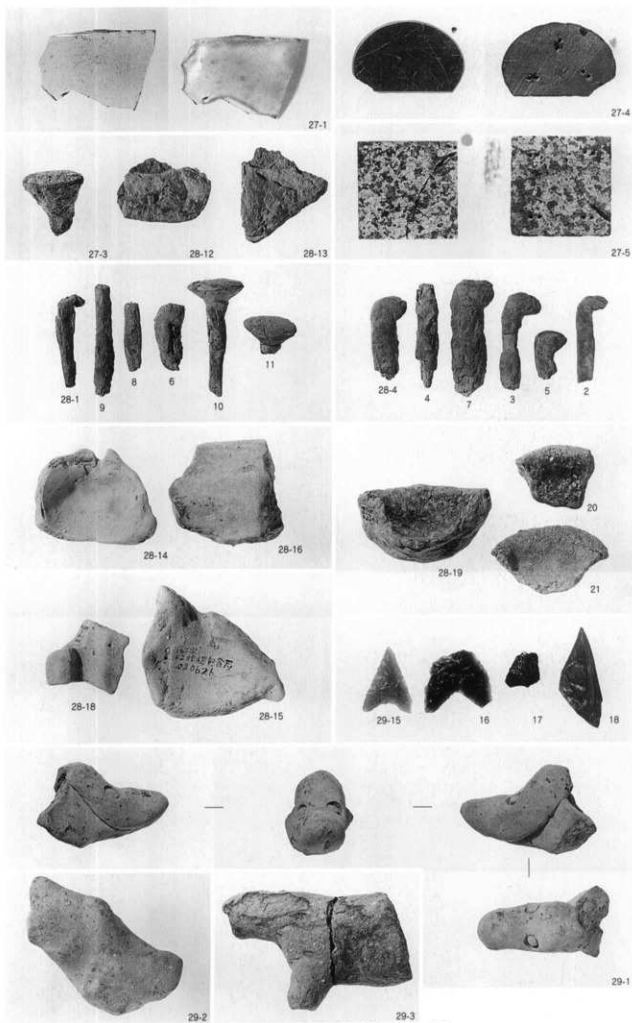
(2) B区拡張トレンチ
土層 (北東から)

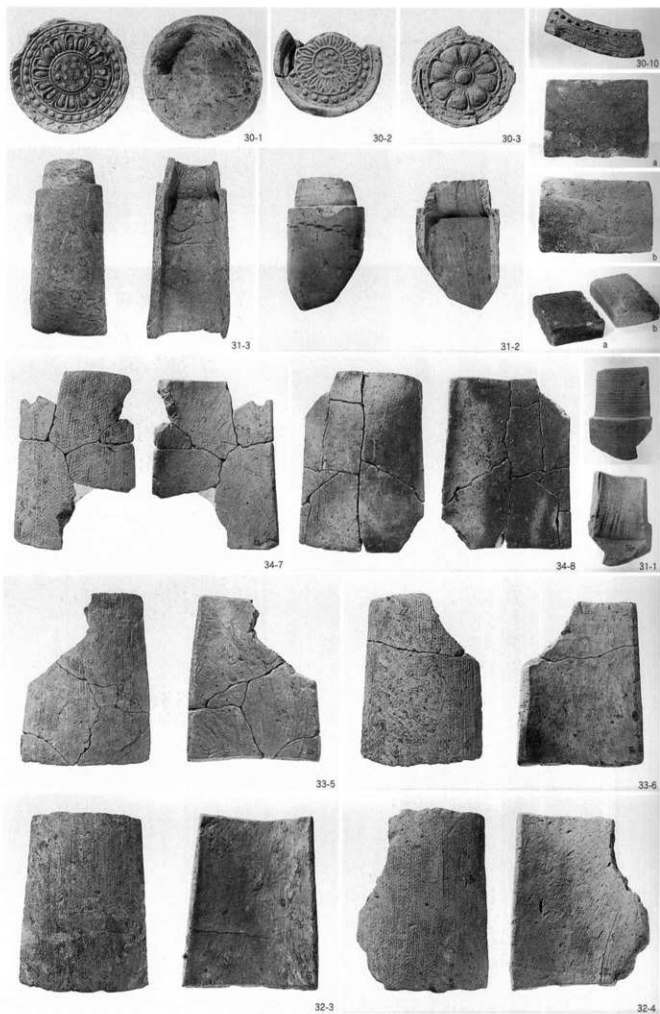


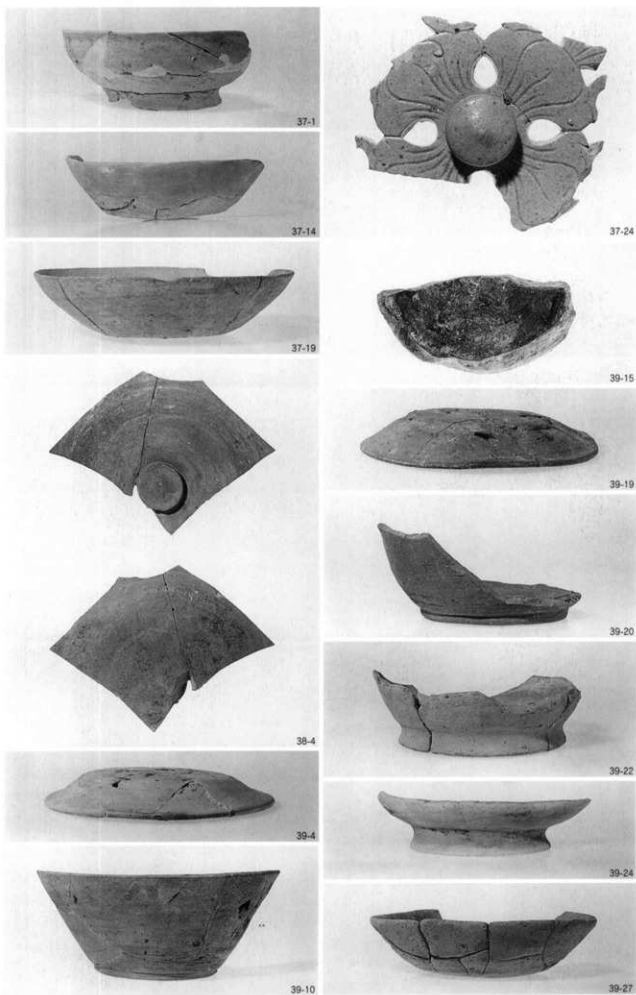
(3) B区拡張トレンチ
土層 (北東から)



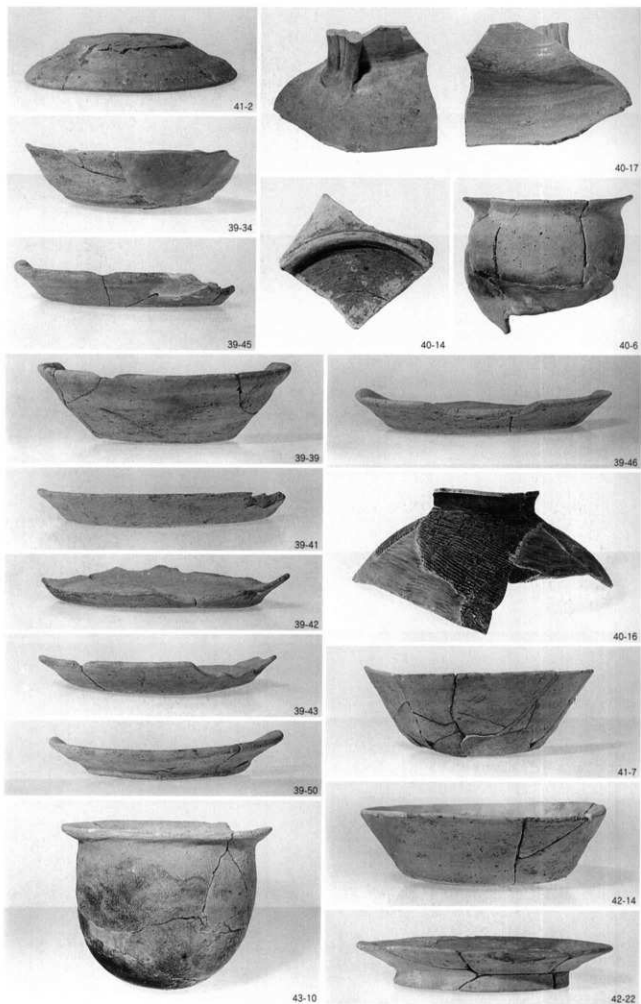




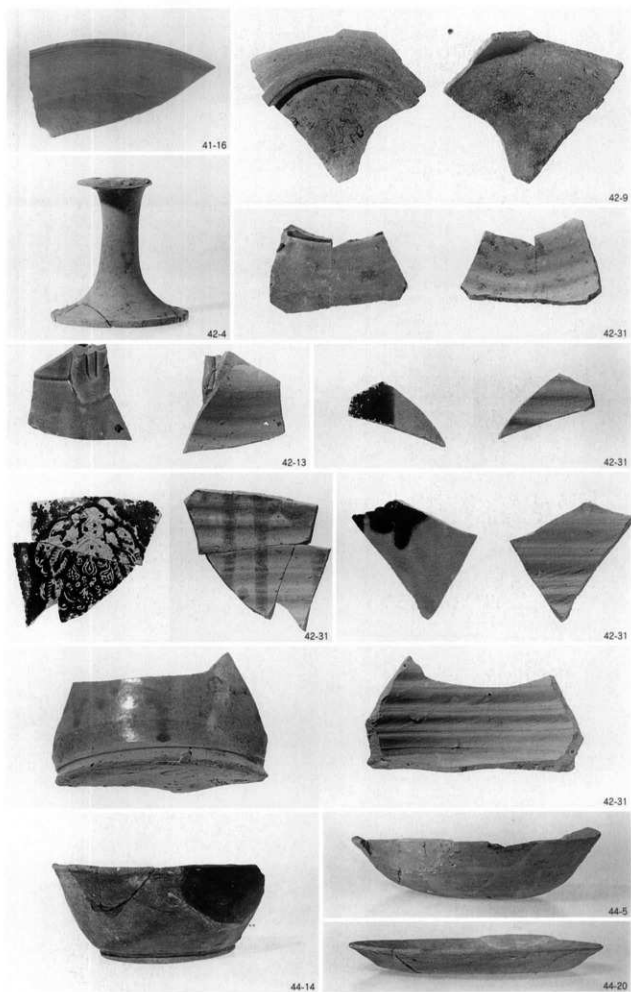




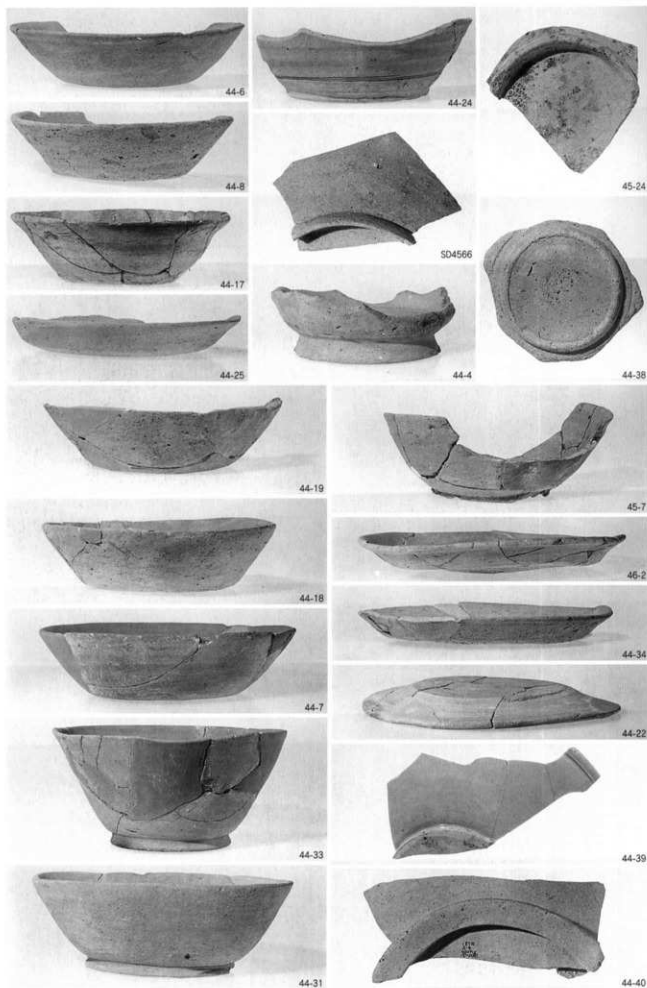
第187次調査SB3815・4560・4563, SK4573出土土器・緑釉香爐蓋



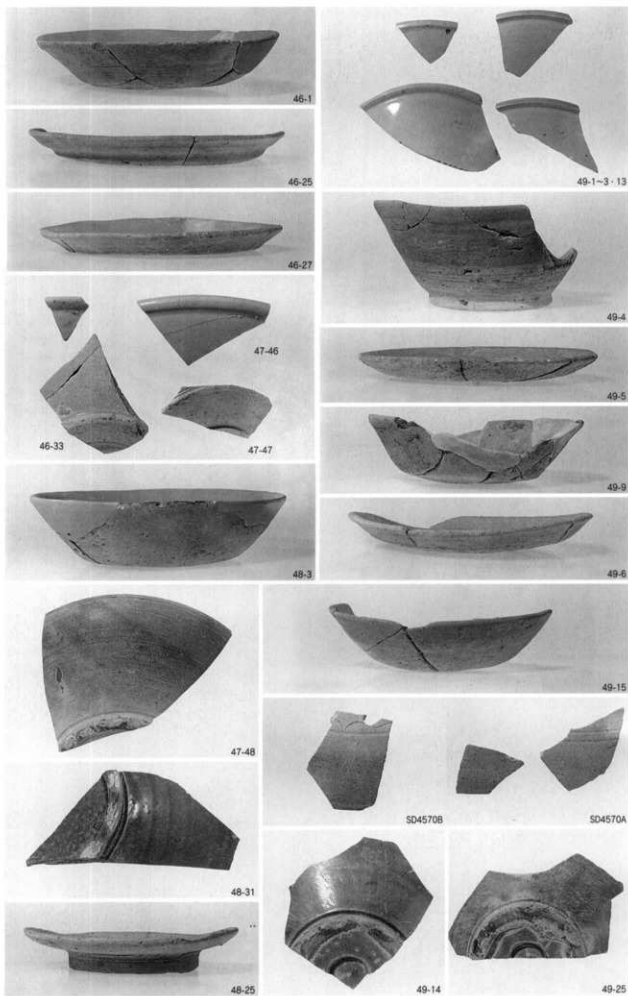
第187次調査SK4573・4574・4576出土土器・緑釉・黄釉褐彩水注



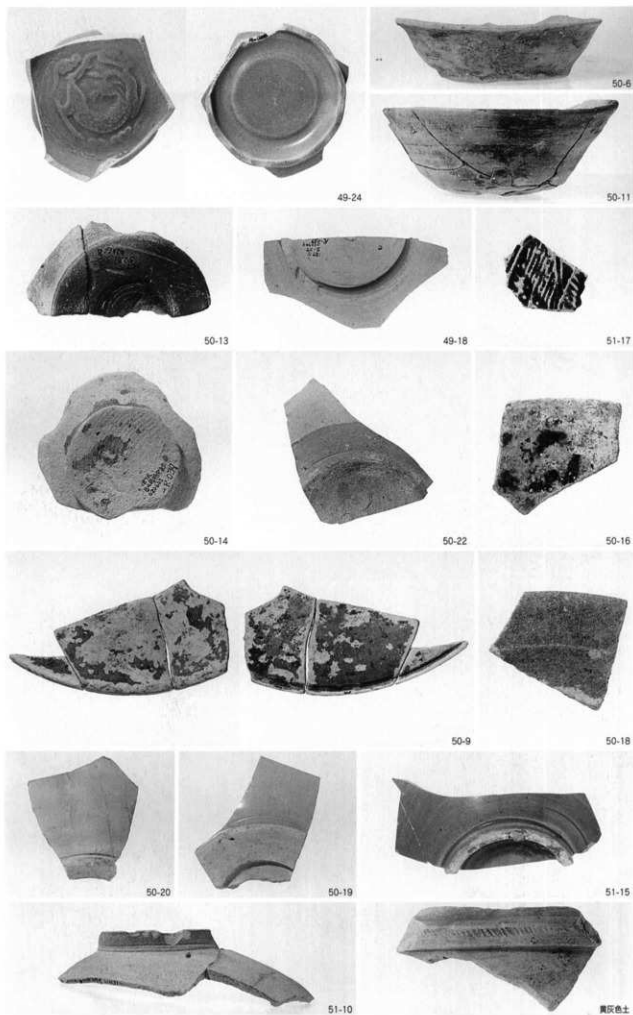
第187次調査SK4573・4574・SD4566出土土器・白磁・長沙窯黃釉褐彩水注



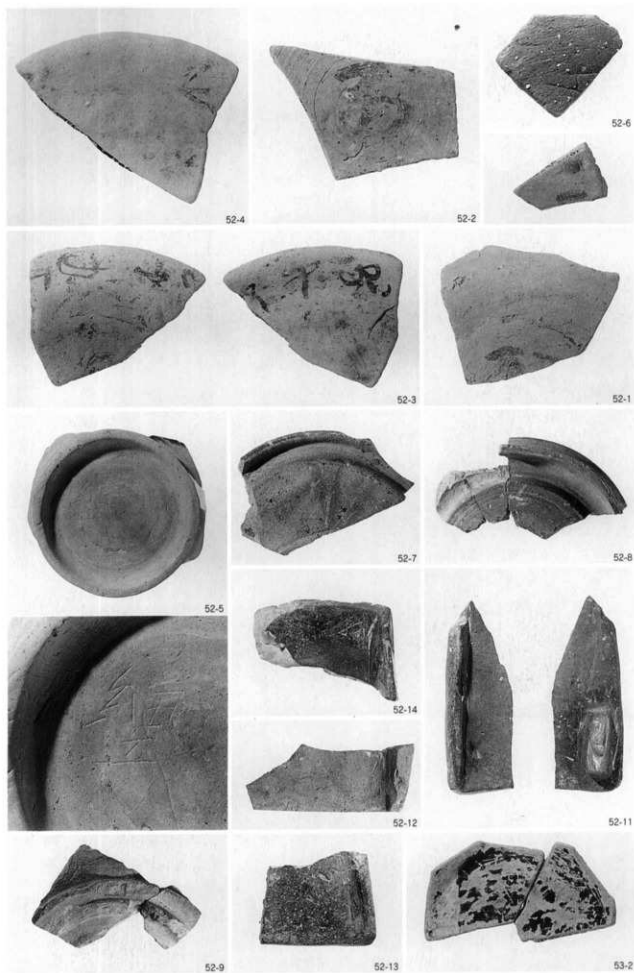
第187次調査SD4566・4567・4569・4570出土土器・灰軸・白磁



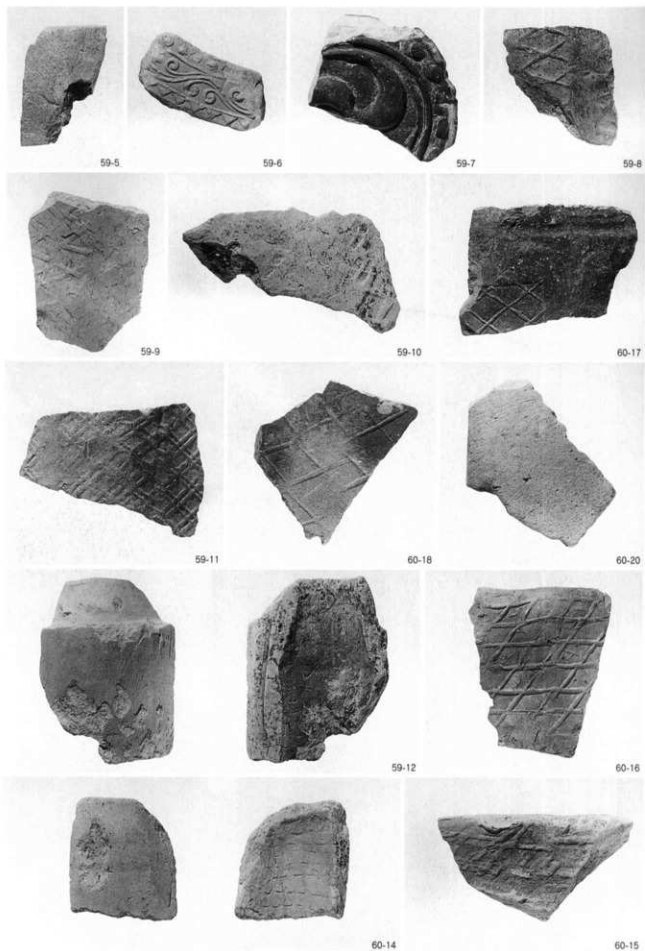
第187次調査SD4570~4572・3825出土土器・青磁・白磁・緑釉香爐蓋



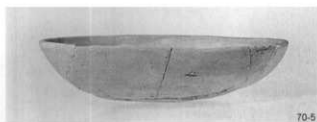
第187次調査SD3825・その他の遺構・包含層出土土器・青磁・緑釉・灰軸



第187次調査出土墨書土器・刻字土器・凹面甕・鳳字甕・漆付着土器



● 観世音寺駐車場側溝工事立会出土滑石製品・瓦



70-5



80-15



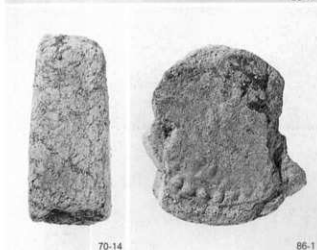
80-41



87-19

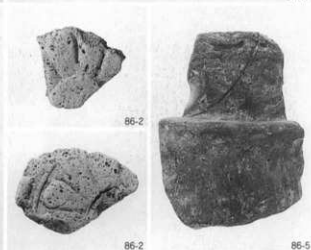


87-17



70-14

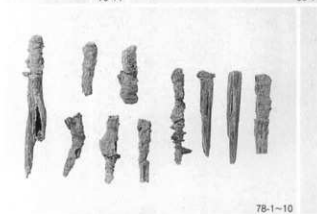
86-1



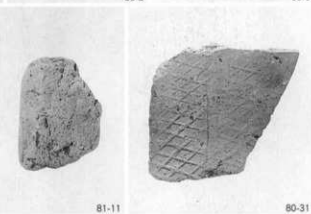
86-2

86-2

86-5



78-1~10



81-11

80-31

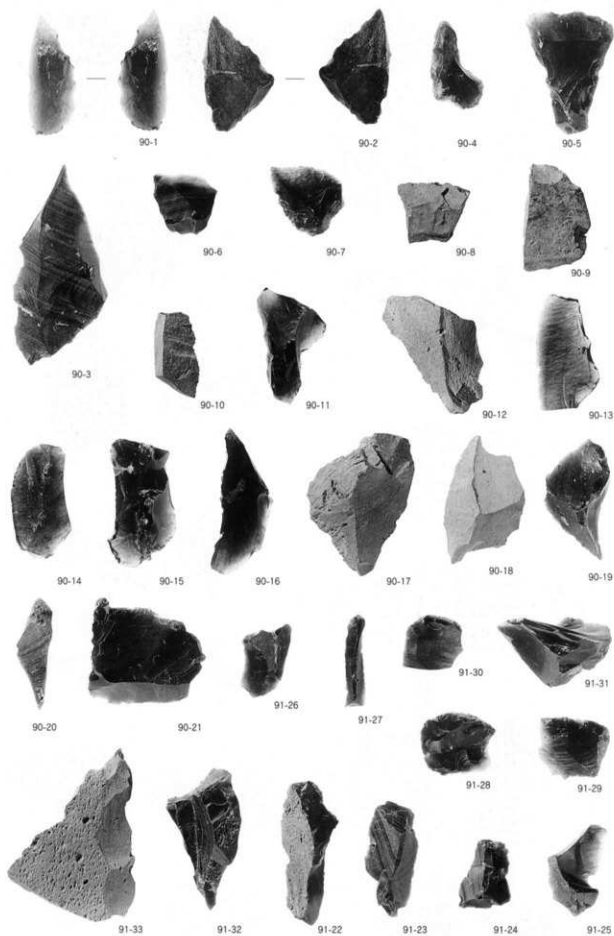


76-16

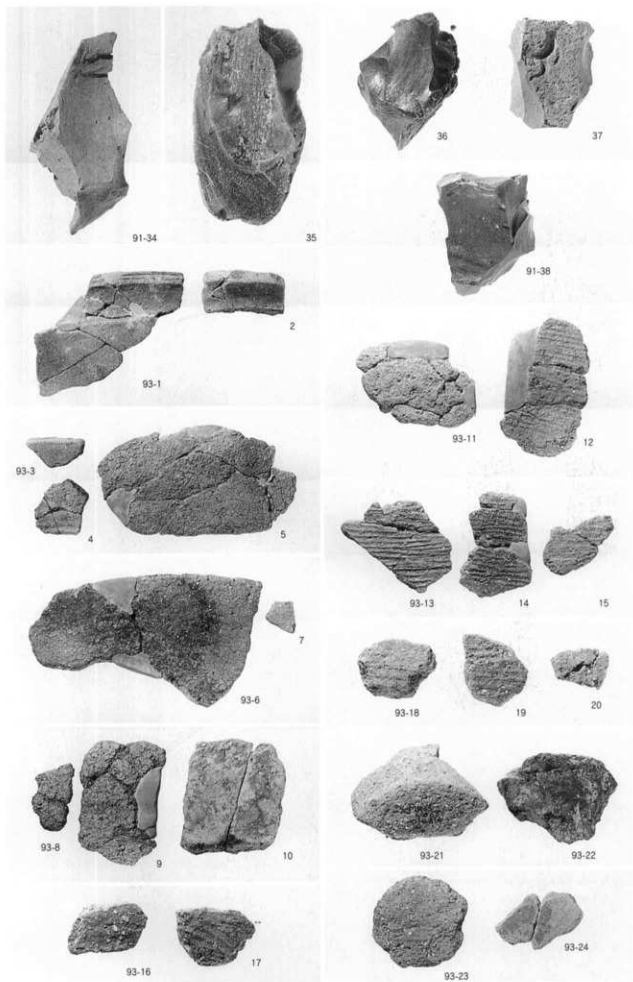


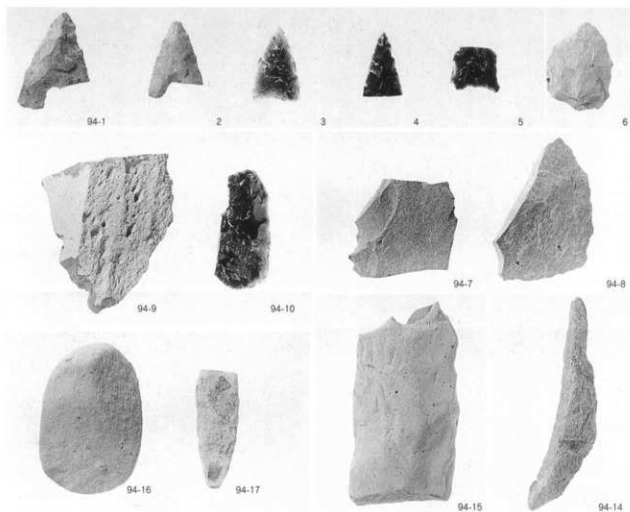
86-11

86-10

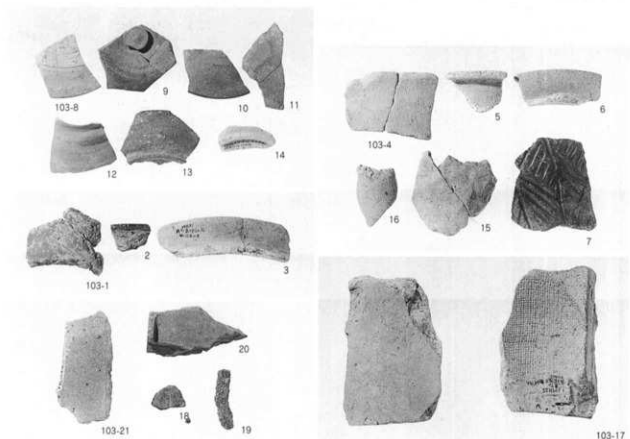


水城第33次調査出土ナイフ形石器・台形石器等の旧石器





(1) 水城第33次調査出土縄文時代以降石器



(2) 水城第35次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	大宰府史跡発掘調査報告書II							
副書名	平成13・14年度							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	横田賢次郎・高橋章・中間研志(編集)・小田和利(編集)・杉原敏之・比佐陽一郎・井上晋・牛島恵輔・水永秀樹							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-1 TEL092-923-0404							
発行年月日	2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第185次調査	太宰府市観世音寺4-806-5	40221				010620 -010703	100㎡	災害復旧
大宰府史跡 第186次調査	太宰府市観世音寺2-216	40221				020205 ~020326	400㎡	計画調査
大宰府史跡 第187次調査	太宰府市観世音寺2-7	40221				020520 ~020930	520㎡	計画調査
側溝工事立会	太宰府市観世音寺3-440-3	40221				980901 ~980930		水路改修
水城跡第33次 調査	太宰府市吉松175他	40221				001128 ~010625	775㎡	計画調査
水城跡第35次 調査	太宰府市国分1-247-1	40221				010719 ~020205	320㎡	計画調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府史跡 第185次調査	寺院	室町時代			須恵器・瓦類・磁石			
大宰府史跡 第186次調査	官衙	奈良時代	掘立柱建物 土塼 溝	7棟 2列 4基 3条	須恵器・麻布・越州 窯系青磁・白磁・瓦 類・鉄滓		工房を統括する役 所か	
大宰府史跡 第187次調査	官衙	奈良時代 平安時代	掘立柱建物 土塼 溝	6棟 4基 8条	ガラス小壺・銅鈴帯 鋳造・鍛冶関連遺物 須恵器・土師器・陶 磁器・土島・瓦類・ 硯・製塩土器		官衙域が南側に拡 大	
側溝工事立会			包含層		土師器・瓦類			
水城跡第33次 調査	土塁	旧石器時代 縄文時代 奈良時代 5 室町時代	掘立柱建物 土塼 木棺墓 土塼墓 溝	6棟 1列 3基 1基 1基 11条	土器・瓦類・旧石器 縄文土器		テラスで建物・木礎 掘方を検出	
水城跡第35次 調査	土塁	奈良時代	掘立柱建物 敷土	1棟	須恵器		11層の敷土染層及 び瓦工跡	

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 14	登録番号 0003

大宰府史跡発掘調査報告書 II

平成13・14年度

平成15年3月31日

発行 九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号
印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4